女子文壇


第三巻第拾二號

明治四十年九月一日發行（毎月一回一日）
明治卅七年十二月十九日第三種郵便物認可



泰錦堂印刷

旅行の用意



重松せい子筆



郵便はがき

CARTE POSTALE

宛名指出人宿所氏名記載欄

通信ヲ記載欄

毎號　皇太子妃殿下賜上覽

女子文壇

第三卷第拾二號　目次

○乙種一等賞絹張洋傘當選者（和歌）……杉山艷子

改正内外圖書目録

無代進呈

（御入用の方は郵券二錢御送被下度候）

宮中御歌所寄人　中郁秋香先生著　増訂六版

文鑑 千草の錦

菊判和裝
定價六拾錢
郵税拾錢

此書は中郁秋香先生が三十餘年間讀書の餘暇、古學復興以來諸名家の文中金玉の響あるものを抄錄せられしが積んで數十卷と成りしを、中に就て男女學生の模範となるべき美文、記事、紀行、論説、消息、物語體等無慮數百篇を選出せられ、之に加ふるに當代諸名流の文を以てせられ、特に上欄には要語數萬を載せ作習の模範と應用とに供せられしは、他に其比を見ざる最良の文鑑なり、

新編書簡文法式

（男子用）總クロース金字入
定價五十錢
郵税六錢

新編女子書簡文法式

洋裝美本
定價六十錢
郵税六錢

書簡文の法式男女に別ちて大成せるものは古來未だ嘗て有らず蓋し書簡に法式のなからざるは猶人に禮儀なく書簡に法式なからんか其人如何に貴しと雖又如何に富めりと雖一日も交際場裡に立つこと能はざるべし、中郁秋香先生深くこゝに感ぜられ即ち男女に就て各書簡文法式の撰著ありて之を世に公にせらる

此法式は元來封建制度の代に於ける尊卑上下に就きて種々の段階を分つが如き煩を避け今日の現狀に依り舊新を對照して以て時の宜に從ひ適當の式を設けられしものなり故に人間處世には一日も缺くべからざるは勿論苟も筆を書簡に把る者は瞬時も座右を放つべからざる要書なり

宮中御歌所寄人　中郁秋香先生作
學習院女子部教授　小野鵞堂先生書

新編手紙

（男子用）
木版半紙摺
無類の美本
男女各一册
定價四拾錢
郵税四錢

女子消息文の手ほどき

本書は中郁秋香先生の新作にして書簡文獨習者の爲に通俗平易なる實用の文題百餘種を總振かな付にせられたるは他に其比を見ざる處、特に小野鵞堂先生が大字に書かれたれば習字の手本として此上もなき良書なり

新編書簡文例

（男子用）
木版半紙摺
頗高尚優美
男女各一册
定價六拾錢
郵税六錢

新編女子書簡文例

本書の文例は現代の文豪中郁秋香先生の腦漿より迸出せしものなれば、一言一句津々たる趣味あり、繁に流れず簡に失せず、擬古に陥らず流俗に同せずして眞に今日書簡文の好模範たり、加ふるに書は筆硯界の巨擘小野鵞堂先生の手腕に成りしものなれば又習字の龜鑑として上乘の書なり、特に上欄類語數千句を揭げ書簡文を作習せんと欲する人をして自由自在に意を遂せしむるの便に供せられたるものなれば、新編書簡文法式と相待て斯道の完璧と稱すべきなり

發兌元　東京市京橋區中橋廣小路六番　振替貯金口座四千百〇九番　前川文榮閣

女子文壇の廣告により御注文の節は其旨御書添を乞ふ

女子文科大學講義錄

今回文界知名諸家の首唱にて時勢の必要に應じ**文科大學**の制度に據り内外諸般の文藝を講述して婦女子の好尚知識を高め兼ねて女流作家を養成する目的を以て開講せられたる閨秀文學會の講義を筆記し『**女子文科大學講義錄**』を發行す。滿二箇年を以て卒業とし左の課目を掲載す。

◉教授課目△歐州近代小說及戯曲（講師馬場孤蝶、戸川秋骨）△西詩研究（文學士上田敏）△源氏物語（講師與謝野晶子）△小說論（文學士森田米松）△詩學（文學士生田長江）△日本文學史（文學士滿井信太郎）△美學（文學士生田長江）△萬葉集（講師與謝野寛）△獨逸文學（文學士川下江村）△大鏡（講師與謝野晶子）△美術史（講師和田英作、三宅克己）△英文學（文學士森田米松）△長詩作法（講師馬場孤蝶、與謝野寛）△戯曲論（文學士川下江村）△短詩作法（講師與謝野寛、與謝野晶子）△元祿文學（講師未定）

◉科外講演△日本文學△外國文學△繪畫史一斑△音樂史一斑△彫塑一斑△演劇談△創作經驗談△文藝時評◉女學界彙報◉女子裝飾流行彙報

◉毎月壹回十日發行 **初號**九月十日發行 **入會金**壹圓但し九月中申込者には入會金を要せず◉壹冊定價金貳拾五錢郵稅貳錢六冊郵稅共金壹圓卅錢拾貳冊金貳圓四拾錢◉美裝紙數菊版貳百頁

申込所

東京市京橋區五郎兵衛町二十二番地

金尾文淵堂

振替郵便貯金口座番號叁八壹七

女子文壇の廣告により御注文の節は其旨御書添を乞ふ

善良なる主婦となるべき女學生にして未だ本誌を讀まざる人ありや

體裁優美

婦人世界

記事親切

九月一日發行 毎月一回 二卷 十號 一冊拾五錢 郵稅一錢五厘 六冊郵稅共九十錢 十二冊同一圓七十五錢

△本號には誰にも出來る新案の大懸賞募集あり

◎辨當料理談（弦齋夫人）

◎私の感心せる奧樣（山脇房子）

◎我等は如何なる妻を望むか（在米日本人會）

◎娘を嫁にやりし實驗談（原れい子）

◎女中より成功せし呉服店の主婦

◎私の感心せる女學生（上野女學校長）

…△何人も聽かんと欲して聽く能はず言はんと欲して言ふ能はざりし大敎訓

◎男女戀愛論……村井弦齋

…△娘も母も男子も亦此大敎訓を讀まざれば百年の悔あるべし

◎小兒に果物を與ふる注意（加藤醫學博士）

◎強情な子供の癖を矯正せし實驗

◎不姙症全治者の實例（榊醫學博士）

◎大困難と戰ひたる棚橋絢子刀自

◎男の子は如何にして產まるるか（伊庭學士）

◎少女欄 小説より面白く倫理より有益也

△口繪◎侯爵西郷寅太郎氏令夫人◎名流令嬢寫眞◎櫻井中尉新婚寫眞◎朝の女學生◎きぬた（花蹊）◎秋の花（安信）◎蟲（珠子）其他數葉◎

發行所 東京南京橋紺屋町二十番地 實業之日本社（郵便振替貯金口座參貳六番） 賣捌 全國書店

數年難治の慢性胃病を根治し
消化機能を強壯健全になす靈藥

胃病根治劑

従來世に胃病藥頗る多しと雖ども皆一時の苦痛を凌ぐ制酸劑（即ち重曹、マグネシヤ、苦味劑の如き一時おさゑムチスカシ的舊式賣藥）のみにして未だ嘗て根治的に其病の基因を斷つ良藥あるを見ず、本劑は獨乙國高名大醫ノーデル氏處方に基き本邦胃病患者に適切なる嶄新有効藥を配合し百方實驗其奏効顯著なるを確認發賣せし最も進歩せる完全なる新藥にして數年難治の頑固な**慢性胃病**にても根本より**誓って根治**し胃腸を健全にし消化機能を強壯ならしめ食慾を催進し便通を快くし氣力を壯にし精神を爽快活潑にする空前の完全最新藥なれば從來種々雜多の胃病藥を用ひて効なく多年病苦に呻吟せる患者は一日も早く本劑を服し病根を斷絶し無病强健の大幸を得られよ輕症は壹劑重症は貳劑慢性症は參劑にて根治確證す

（藥價）壹劑四拾貳錢　貳劑八拾錢　參劑壹圓拾錢　郵券代用貳割増し

新輸入
肉體美容料

色白新劑

本劑は近時倫敦パリス貴紳淑女の間に最新流行し發明藥にして如何程色黑き男女にても特別製式劑を用ゆれば忽ち肉體**純白色に變化**し艷美の容貌となるを確證す世上種々雜多の色白藥を用ひて奏効なき人は速に本劑を試み見よ眼前に峻烈なる特効を發ゆ眞に奇効顯著の確證新劑價は並製金壹圓貳拾錢特別製分壹圓八拾錢

以上貳藥 **專賣元** 東京市神田五軒町十九番地 **日新館藥房**（電話下谷五四六番）

月やくおろし

本劑は胃腸を痛めず子宮を害せず如何程長き月經閉止も必ず忽ち**快通流下**する特効あり本劑參劑分を用ゆれば二三ヶ月間滯りたる月經にてもキレーに流下す又特別製分を用ゆれば半年以上の月經閉止及び**血塊**にても必ず立處ろに流經す且つ月經不通月經不順より起る子宮病血の道を全治し多年滯りの古血及**惡血毒血**を一掃することを確證す但し本劑は其奏効極めて**峻烈顯著**なるも毫も衛生無害なり婦人諸君安心して試藥あれ價は壹劑分七拾錢貳劑分壹圓廿錢參劑分壹圓七拾錢特別製分貳圓參拾錢



（注意）本劑の**大盛**を羨み近時續々怪しき無効な**類似僞藥**顯はる用藥者は深く注意ありて「專賣元日新館藥房」の名義に注目し購求あらんことを乞ふ

わきが 腋臭

根治確證 新發見藥

醫療醫藥百方手を盡せし如何程頑固劇烈の慢性わきがにても**誓て根治**し決して再發或は他病に變ずる憂なき廿世紀的改良根治新藥なり速に試み苦惱を脱せよ價は輕症根治分六拾錢重症根治分壹圓廿錢頑固劇烈の慢性症根治分貳圓卅錢着金即刻送藥す郵券代用必ず二割增の事

以上貳藥 **專賣元** 東京市神田五軒町十九番地 **日新館藥房**（電話下谷五四六番）

女子文壇の廣告により御注文の節は其旨御書添を乞ふ

少年之友

毎月一日發行　一冊金五錢　東京神田文光堂

大評判少年雜誌 第二卷第九號（九月）

少年文壇　○普通文○日記文○はがき文○四行詩○和歌○俳句○○お笑草○新考物○友達會○○筆蹟スケッチ……

無比廉價　一冊金五錢○郵税五厘 六冊郵税共金廿七錢○十二冊金五拾四錢（郵券代用一割增）

發兌元　東京神田區旅籠町一丁目　文光堂（振替口座壹九五五番）

賣捌　東京堂 北隆館 東海堂 良明堂 上田屋 外書店

水彩美景葉書

三宅克己先生筆　▲無類廉價……特價二割引▶

上等舶來紙 高尚優美 石版十色密刷 目下出版三枚一組

既刊目次
△第一輯（富士山。利根川の水車。夏の色。甲州の市場。）
△第三輯（上野の原。河のほとり。秋の甲州。溪流。）
△第五輯（雪の野。海邊の原。しぐれ。春日。溪の流。）
△第七輯（新緑。花見時。春の川。）
△第二輯（關宿の渡舟。元箱根。湖畔。箱根の朝。）
△第四輯（秋の山。冬の夕暮。晩秋。）
△第六輯（梅林の里。日暮の村。春の朝。野道。）

金拾貳錢 送料要せず

最新 東宮妃殿下御影 同 九條

畫齋好適 一枚金五錢

出版元 東京神田區旅籠町一丁目 文光堂（振替口座一九五五番）

秋近し



三宅克己先生筆

（乙の二）

世界唯一痳病消渇の根治新藥

痳滅

痳滅は最も進歩したる最新の痳病消渇即治模範藥なり、本劑はありふれたる普通の賣藥と異なり殺菌學上効力頗る峻烈なる一新藥を主劑とし是を内服して痳病消渇の病原たる「ゴノコッケン」を忽ち滅殺する處方に基き製劑せし新藥に付輕症は壹劑重症は特別製分にて必ず醫て根底より根治するを確證す但し彼の舊式洗滌劑の如き迂遠無効有害の姑息藥と異なり奏効確實峻烈なるだけそれだけ藥價不廉なり用藥者豫め之を諒せよ

藥價壹劑壹圓拾錢特別製貳圓拾錢郵劵代用貳割増しの事

專賣元 東京神田區五軒町拾九番地 日新館藥房

色白特効 ペーアス石鹸

此石鹸世界第一等の良品にして化粧品の大王たることは苟も泰西の事情に通ずる者の熟知する所なれば今更喋々贅辯を要せず啻だ單に其主眼たる特効の一二を掲げん皮膚を潤澤軟密にし色を白くし、粗糙質を治するは此石鹸特有の神効なり且つ此石鹸は香氣頗る佳良にして使用後五時間は芳香馥郁として身體に附着し薫るは館主の實驗保證する所なり、乞ふ昨今世上に續々顯出し誇大の廣告を以て世人を瞞着する内國製の粗惡品と玉石混同視すること勿れ(昨年輸入の五萬個は夙に賣切れ久しく品切中の處今回拾萬個荷着せり速に御注文を望む)

壹個代價送料共八拾五錢△三個函入同上貳圓參拾錢

輸入一手專賣元 東京神田區五軒町拾九番地 日新館藥房

痳病根治新劑

痳病は不治の病にあらず又血統病にあらず一種の痳病桿狀菌の媒介による傳染症たることを發見せり、本劑は此確乎不拔の最新發見學理を基礎とし幾多の研究を重ね數千患者の實驗に徴し苦辛經營の末今回始て完成發明したる最新藥にして其効力の峻烈顯著百發百中悉く全治すること到底他類似藥の比にあらず、患者よ彼の十九世紀的遺物たる推量的不合理に調製せし粗雜極まる無効舊式賣藥に誤らるゝことなく又古來より傳へられたる血統病或は不治症等の愚説に迷ふことなく速に本劑を試み其病菌を撲滅して病根を斷絶し生涯永久の榮華を完ふせよ、輕症は壹劑重症は特別製分以上にて治癒の目的を達す、藥價送料共壹劑五圓拾錢特別製分拾圓拾錢着金即刻小包密封送る

梅毒根治新劑

本劑(藥名ドクトル)は幾多の研究實驗を重ね多年辛苦經營の結果成功したる最新最良の藥物なれば現世紀に於る唯一ばい毒根治特効の新藥なり故に黴毒及黴毒に關聯して續發する諸症(即ちばいどく。ぴゑ。かさ。しつ毒。かんそう。よこね。ようばいそう。たいどく。瘡毒。ろいれき。骨がらみ。べんどく。ふしぶしのいたみ等ゝならば如何なる頑固難症にても特別製分にて誓って根治することを確證す從來醫療賣藥等百方手を盡すも全治の効なくして困難せる患者は速に本劑を試服し其病毒を根底より驅逐斷絶し天賦の生命健康を保全せよ。藥價壹劑分壹圓拾錢貳劑分壹圓九拾錢特別製分參圓六拾錢着金次第送藥す郵便切手代用貳割増しの事

●以上貳藥專賣元 東京神田區五軒町拾九番地 日新館藥房

眞正極秘 粹珍書案内

望の人郵劵四錢送れ直に送呈すべし披閲忽ち愉絶快絶眞に粹士必讀の珍書案内

申込所 東京市下谷區西黒門町廿番地 東雲堂書店

女子文壇の廣告により御注文の節は其旨御書添を乞ふ

女子文壇の廣告により御注文の節は其旨御書添を乞ふ

大日本淑女學會

第五回新學期開始

此際入會者に限り入會金全免すべし

▲御自分のお宅に居つて高等女學校の課程を講習しやうとする方は、本會におはいりなさい

▲本會は文部省令に據り正則完全なる女學講義録を發行します。講義の親切丁寧なことは云ふまでもありませぬ。新式の教授法によつて獨習に最も便利な方法をとります

▲卒業は二ヶ年で會費も低廉であります

▲會員には講義録の外『姫百合』と云ふ美しい體裁の、利益になる女學雜誌を毎號無料で進呈いたします

本會の講義録

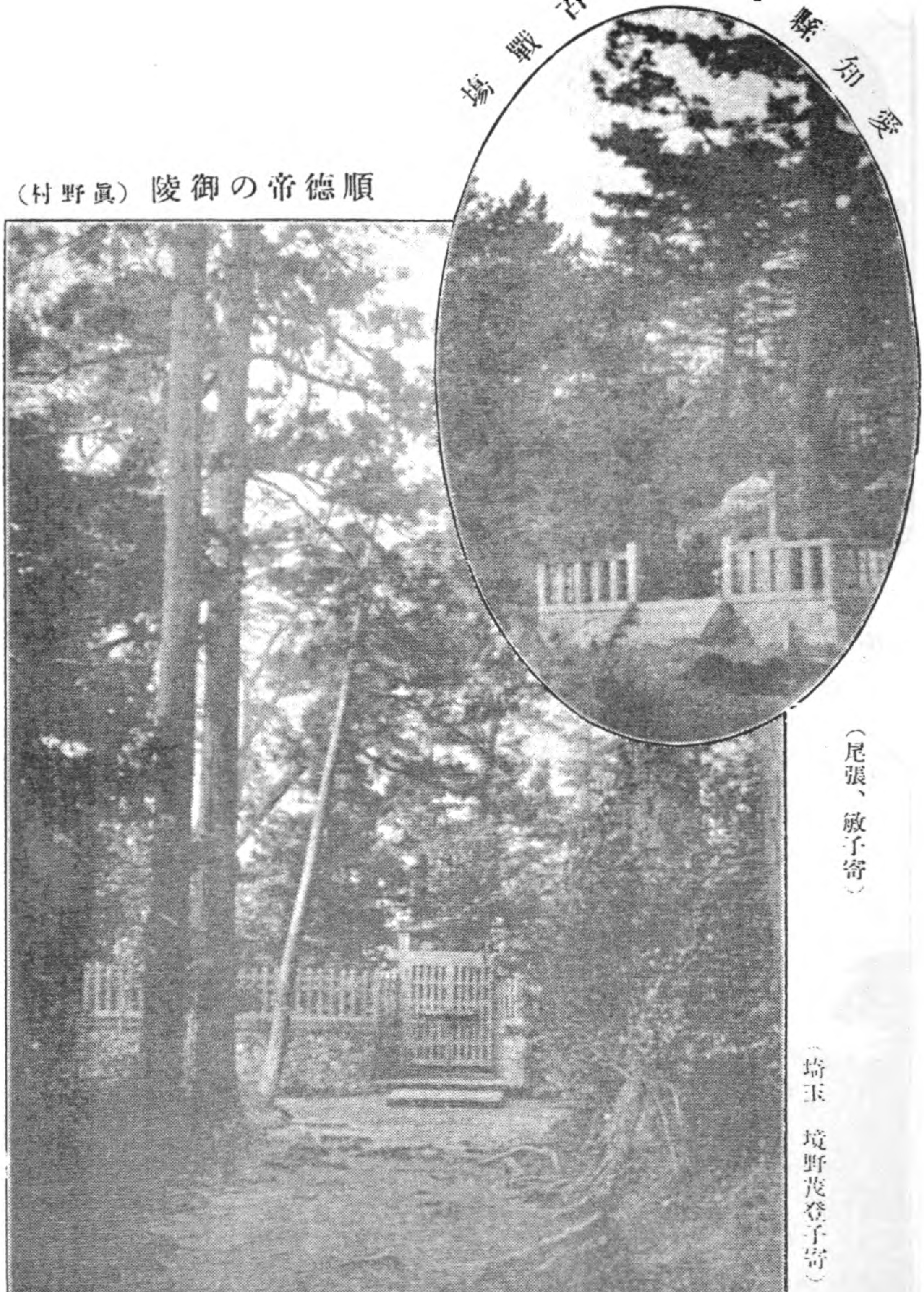
▲大版三百頁優麗なる冊子
▲講義平易にして興味多し
▲各科講義の程度一定せり
▲各科皆聯絡し組織的なり
▲講師は專門女子教育家也
▲科外講師は博士學士卅家
▲毎號科外講話を附錄とす
▲純潔高雅の家庭小說あり
▲會員の質問は直に解答す
▲學期毎に修業證書を與ふ
▲講義錄は貳ヶ年完結とす

◉詳しい規則書は申越次第差上げます

◉東京神田駿河臺（電話本局三千四番）

大日本淑女學會

愛知縣長久手古戰場

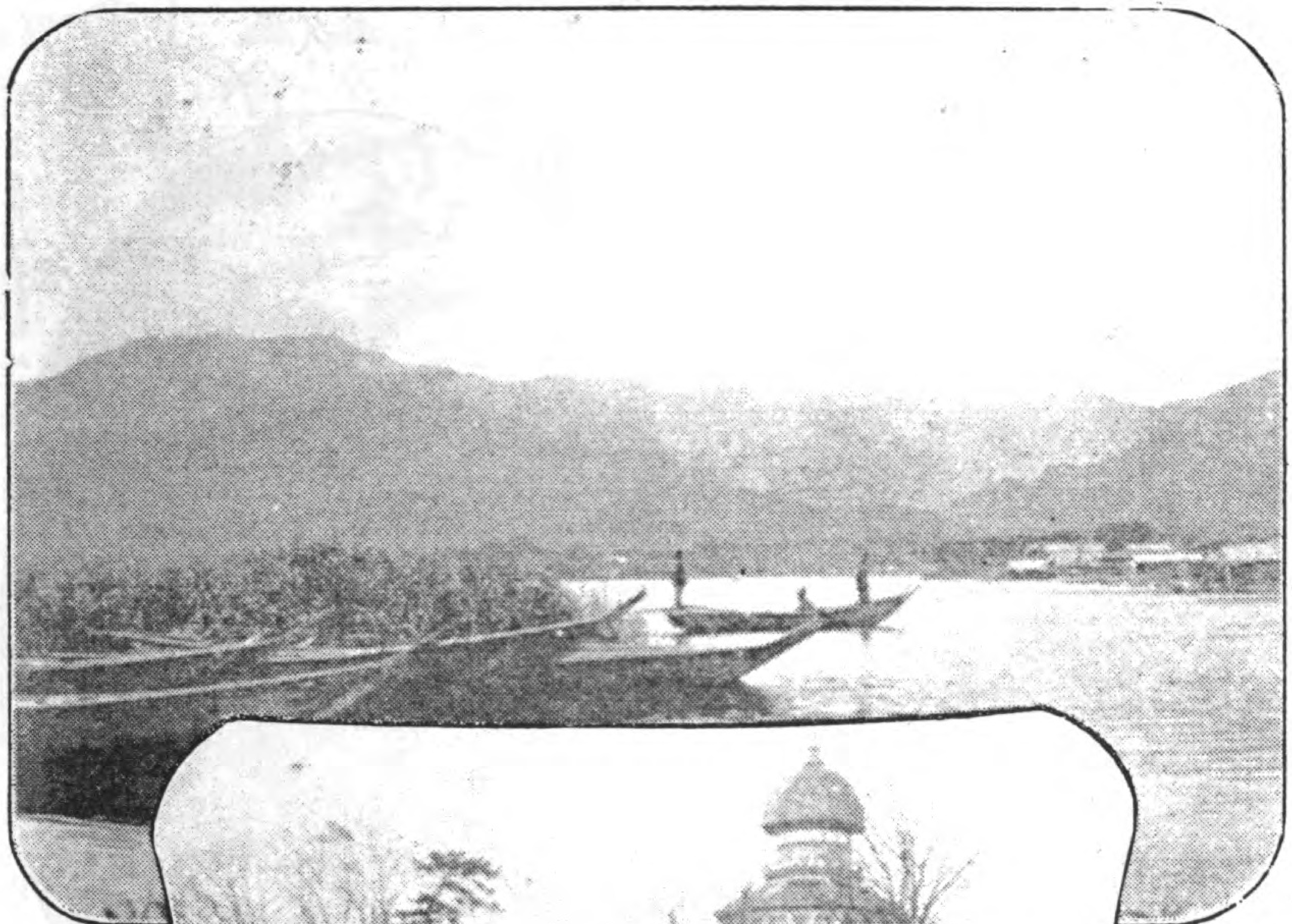


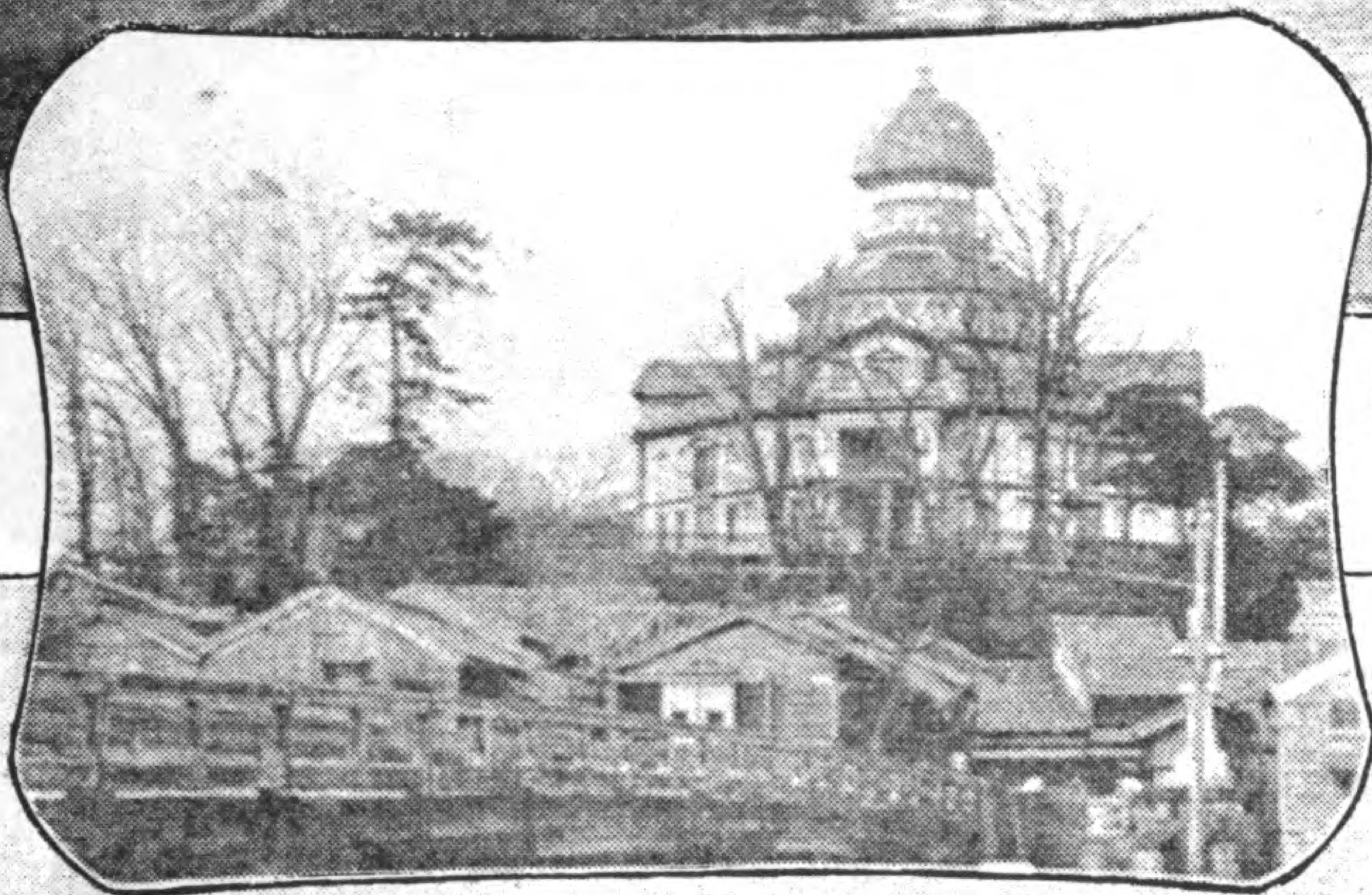
（尾張、敏子寄）

順德帝の御陵（眞野村）

（埼玉　境野茂登子寄）

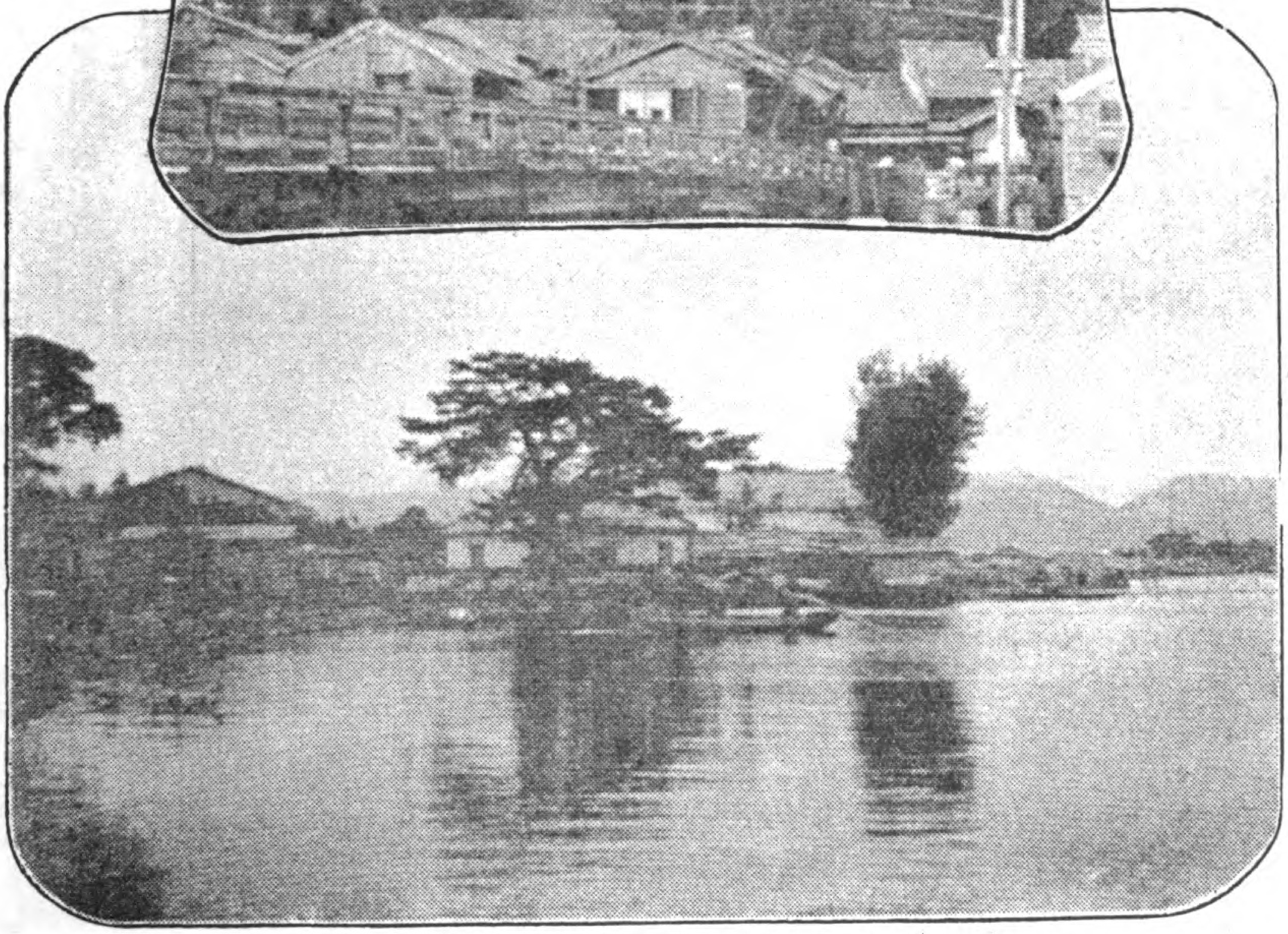
加茂湖畔より金北山を望む





福井縣[illegible]國高等小學校

（新保勝子寄）



加茂湖畔より基督教會堂を望む（境野茂登子寄）

誌友おもかげ





(臺灣臺北)峽よし子
其母堂と妹



(廣島)
波多靜子
吉松信子

(佐賀)
坂井たか子
山田なみ子
石井のぶ子

(青梅)
野村はつ子
小川ふさ子
並木ふさ子

(廣島)
今西初野子と弟妹





記者申す(續々お寫眞の寄送を願升
順次掲出してお返しします)

誌友おもかげ



（東京）北澤清子
（福島）大川初野子



（福島）葉山華子
（埼玉）近藤登久子





（岡山）玉水
（越後）目黒紀枝子



（越後）堀芳野子
（京都）村岡英香子





（鹿兒島）有馬榮子
（埼玉）白井ふさ子



（埼玉）戸張小夜子
（上總）森婦美子



【記者申す、續々寄贈ありたし、着順に掲載してお返しします】

女子文壇の廣告により御注文の節は其旨御書添を乞ふ

皇后陛下
東宮妃殿下御料

御料
御園白粉（みそのおしろい）
無鉛

長谷部仲彦氏發明
完全無鉛白粉（のりよくのびよきなまりなしおしろい）

ねり製 御園白粉（ねりおしろい） 壜入金廿五錢。金三十五錢。金七十五錢 特製金五十錢。金一圓。金三圓 樂屋用團樂製金五十錢

水製 御園白粉（おしろい） 壜入金二十五錢

こな製 御園白粉（おしろい） 紙包金十錢 壜入金五十錢

洋風化粧クレーム 御園の蕾（つぼみ） 特製金二十錢。濃化粧專用鍋入金十錢 金五十錢

高等化粧水 御園とき水（みづ） 壜入金十五錢 大壜金五十錢

洗顔あらいこ粉 御園なでしこ 紙包金十錢

濃厚化粧水 御園四季の花（しきのはな） 壜入金廿錢 大壜金五十錢

高等頭髪油 御園香油（かうゆ） 壜入金五十錢

高等衛生香水 御園香水（かうすい） 壜入金一圓 別器入金五圓

高等はみがき 御園歯磨（はみがき） 紙包金廿錢 硝子器入金五十錢

製造元 東京芝 胡蝶園

發賣元 東京日本橋區橋町四丁目 丸見屋 電話浪花四四八番

女子文壇の廣告によりて御注文の節は其旨御書添を乞ふ

女子文壇 增刊 第三

▲七月一日發刊の第九號 發行翌日本社は賣切の盛況

八月十五日發兌

まくら萩

◀價拾錢送壹錢▶

內容豐富

殘部僅少　增刊の第二も殘本少々あり

東京京橋
女子文壇社發行

最寄書店に無くば本社へ注文を乞ふ

▲八月一日發刊の第拾號 是又發行旬日を出てず賣切たり

▲竹柏會は佐々木信綱氏指導のもとに清新なる和歌を研究せむとする會なり

▲竹柏會は師友に乏しき人の爲に和歌の添削質疑に應ず

▲竹柏會は會員の機關として每月一回文藝雜誌『心の花』を發行す

▲竹柏會に入會せられむとする人は郵劵貳錢を送られなば規則書を送附すべし

東京市神田小川町一
電話本局一一一四番

竹柏會

陰萎特効新劑（獨逸新輸入藥）

內服 **ヨヒンビン**

拾錠入壹瓶 藥價送料共 壹圓九拾錢 郵券貳割增

本劑は獨逸國伯林大學教授スヒーゲル氏の發見に係る男女生殖機不能即ち**陰萎病**（**陽物無力**）腎虛**神經衰弱**遺精、夢精、元氣衰弱、老衰無力生殖器弱手淫早漏、過房、に起因する諸症早老者に天下無比**可驚奇効**ある新發見藥也**精力**を**增進**し生殖器を强健に**勃興**せしめ人生の最大**快樂**を得んと望む者は早く試よ峻烈偉大なる特効眞に**電光の如し**世にありふれたる賣藥と同一視することなかれ本劑の卓効は高名なる醫師に就て承合せば明白なり

專賣元 東京市神田五軒町拾九番地
日新館藥房（電話下谷五四六番）

世界無比 最新發明藥

あざ

入墨は廿日 **ほくろ、そばかす、なまづ、いぼ**は**拾日**目に必らず美麗に除去すること**保險附**

新發明藥にして患部の大小輕重を問はず容易に根治し假令顏面たりとも毫も**痕跡**を殘さず無痛に除去し得ることと確證す故に之を用ゆべき患ひある人は速に用ひて天然の**美質**を完ふせよ來館者へは山の如き全治者の**感謝狀**及び除去したるあざ、ほくろ、そばかす、いぼ等の實物を示すべし實に**世界唯一**の新藥也但し本劑は其製劑を二種に區別し一はあざ、入墨、ほくろを除去し一はそばかす、なまづ、いぼを除去するものとす故に注文者は各自除去せんと望む所の病名及患部の模樣を詳細明記して申込あれ左ずれば其症に適應する藥を送付すべし價は各一劑分壹圓拾錢參劑半分參圓拾錢六劑分五圓拾錢拾貳劑分拾圓（患部の面積大なる人は大劑を求むるを德用とす）郵券代用貳割增し着金即刻小包郵送す

專賣元 東京市神田五軒町拾九番地
日新館藥房（電話下谷五四六番）

九月より賣價改正

投書家並に愛讀諸君は必ず此社告を御覧下さい

懸賞募集課目

選評大家（文學士沼波瓊音先生、鷹津紳浪先生、河井醉茗先生、佐々木信綱先生、鹽谷小波先生、山中古洞先生）

甲種
◎敍事文 ◎抒情文 ◎書簡文 ◎評論文
（各半紙廿四字詰三十行以内楷書にて認めらるべし）
◎短篇小説（半紙綴かな付廿四字六十行内） ◎新體詩（半紙かな付十句以内）

乙種
◎和歌（半紙半分一首宛） ◎俳句（全上） ◎新歌謡（全上）
◎短文（半紙かな付廿四字五行） ◎新笑話（半紙半分十六字詰） ◎圖畫（一寸の三寸風俗景色（但日本紙の瀞きもの））

別種
◎文藝遊戯（半紙十六字詰）
◎誌友倶樂部（半紙二十一字詰に認めらるべし）

「此賞品は甲乙種以外のものを呈す」

△都て各項とも課題は闘金△
△同封にて送付差支なし

→（毎月十五日投稿〆切）←

奬學懸賞品

甲種
第一等 貴金屬品類……價格金拾圓
第二等 呉服物類……價格金參圓
第三等 小間物類……價格金八拾錢
第四等 便利の圖書切符……金五拾錢
第五等 同……金三拾錢

乙種
第一等 絹蝙蝠傘……價格金五圓
第二等 帶止、半襟類……價格金壹圓
第三等 文房具類……價格金五拾錢
第四等 便利の圖書切符……金貳拾錢
第五等 同……金拾錢

○賞品は毎號翌月五日に支障なき當選者へ發送すべし、尚當選者は賞品に差支へざる様前以て住所氏名を明細に通知ありたし

△嚴守すべき投書規定　必ず一讀を要す

○投書は題の下に必ず住所姓名を記し假名は平假名を用ひ明瞭なるを要す○投書は各欄とも决して政治的時事論に渉るべからず○封筒は『原稿在中』の文字を記し中には他の用事の文句を記すべからず○投書に圏點は一切施すを禁ず○投書は他人の作物を剽竊すること禁ず之を犯したる當選文は無効たるべし○投書は一切返附せず○投書は不足、未納税は一切受取らざるべし

定價

女子文壇（毎月一回（一日發行）定期増刊年四回 二月、五月、八月、十一月の十五日發行）

部數	定價	郵税共
一册（大判百頁以上）	金拾錢	前金拾壹錢
八册（半年分増刊共）	前金七拾六錢	同 前金八拾四錢
十二册（一年分増刊除く）	前金壹圓八錢	同 前金壹圓廿錢
十六册（一年分増刊共）	前金壹圓四拾四錢	同 前金壹圓六十錢

爲替又は振替貯金に依ること

輕便の送金法

女子文壇社の郵便振替貯金口座は第壹七貳九番です
○爲換料、通信料、書留料其他一文も入らず安全の送金法
此の「拂込用紙」は何處の郵便局でも申出あれば何度でも無代で呉れます

明治四十年八月廿九日印刷
明治四十年九月一日發行

（定價金拾錢）

不許複載

編輯兼發行者　東京市京橋區大鋸町十一番地　野口竹次郎
印刷者　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　石川金太郎
印刷所　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　合資會社秀英舍
發行所　東京市京橋區大鋸町十、十一番地　電話（本局）六〇七番　女子文壇社
特約賣捌元　○東京堂、東海堂、北隆館、上田屋、至誠堂、良明堂

廣告料金

特等	上等	普通
一頁三十圓	一頁廿五圓	一頁廿三圓
半頁……	半頁十三圓	半頁十二圓
一行……	一行……	一行四拾錢

〆切 毎號十五日前

女子文壇



第三巻　第十二號
（明治四十年九月一日發行）

入學は容易なり

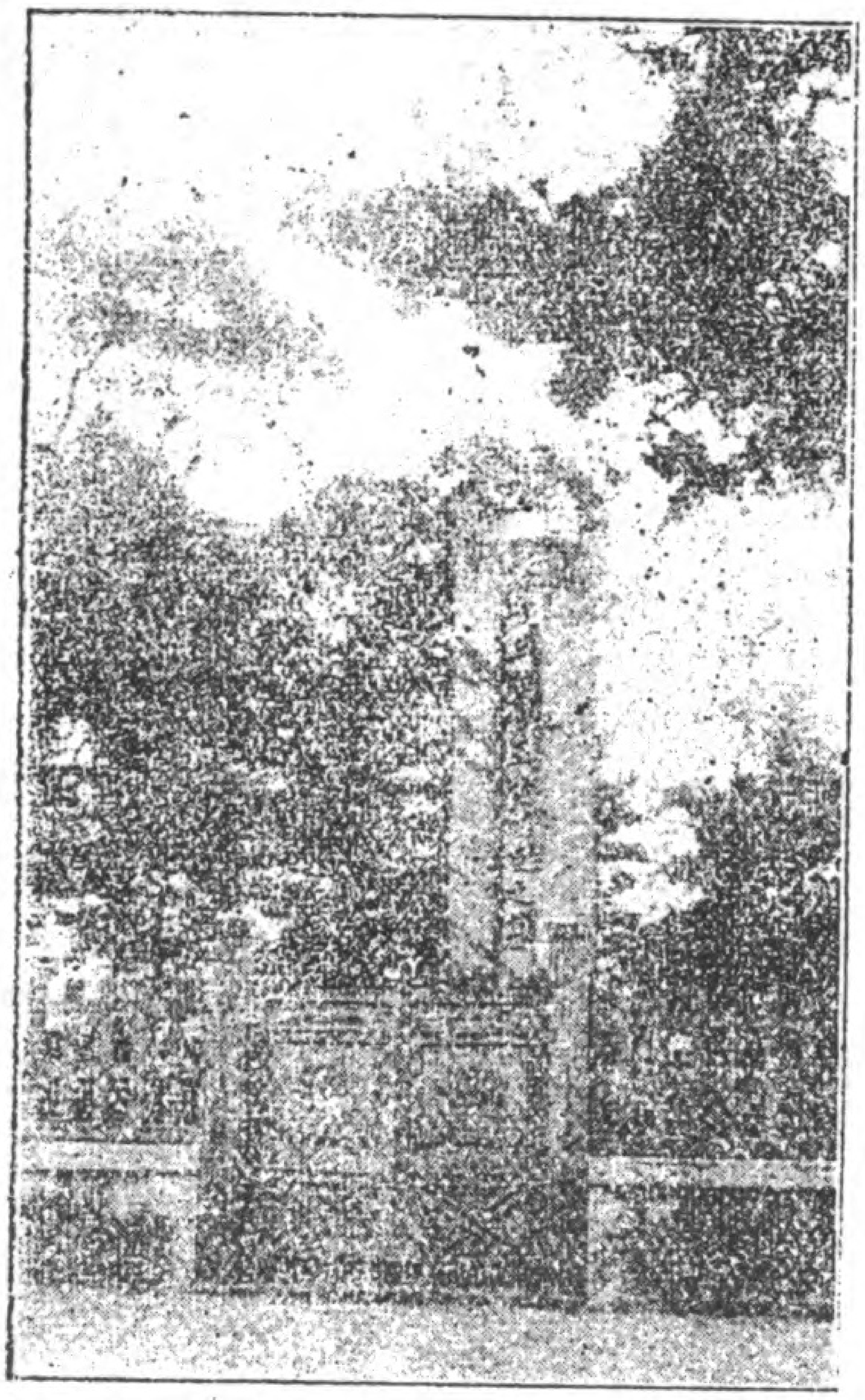
男子の學校であると、例へば高等學校の如き大多數の入學希望者があつて、入學を許される數には制限があり、自然と試驗の結果、優勝劣敗で入學出來ないものも澤山にありますけれど、女子の學校で未だそれ程入學希望者の澤山ある學校もなく、隨つて試驗の競爭もさまで激烈ではありません。然るに地方の遊學希望者の女子の中などで、學校には入りたいけれど、入學試驗がむづかしからうからと、心配して居る人もあるやうです、迚も高等小學卒業位では彼の學校に入れないだらうとか、自分は國語の力が乏しいから彼の學校の試驗には及第出來なからうとか、いろいろ心配して一年二年と過して了う人があるやうです。此れは甚だ損な話で、入學試驗を恐れて、修學を怠る位つまらない咄はありません、今の女學校は表面の規則書に依ると隨分入學はむつかしいやうですが、實際は極く容易いのです、入學試驗だつてほんの形式的にやるのが多いのですから、若し用意してかゝつても、二三ヶ月も暇があれば澤山です。甚しい鈍根の者でない限り、大抵の學校へは入學出來ます、又年齡の事なども隨分案じる人があつて、此んなに齡を取つてから、學校に通ふのは變だと思ふ人もありますが、此れも入學試驗同樣、入つてみると心配はありません。要するに學校に入りたいと思へば、直ぐ入る支度にかゝる事です、入らうと思へば何の學校だつて、然まで困難なく入學れるのは實際の話です。

生活問題と戀愛問題

羽仁吉一

今の若き人々の心を支配してゐるものは何であるかと問はるゝならば、私は躊躇せずして生活問題と戀愛問題であると答へたい（孰れもやゝ廣き意味に於て）。而して此のふたつの著しい思想が共に個人の解放といふことより來て居ることは最も注意すべき點であると思ひます。即ち封建時代の終結は我々を階級制度の桎梏より救ひ出して自由の新天地に置いた。我々は自己の力量才幹によつて如何なる地位をも望むことが出來るやうになつた。併しながら自由のある所には又必らず責任の伴ふのである。我々は自己の才幹及び努力によつてのみ其生活を打建て且つ之を維持する外には他に何物をも恃むことが出來なくなつたのであります。昔は武士の子は武士、商人の子は商人、農夫の子は農夫と、生れながらに其職業が定まつて居たので、忠實にそれをやつて居りさへすれば、生活の憂といふものは殆どなかつたのであるが、今はさうでない。其人の力量次第で、如何なる地位、如何なる富をも得ることが出來るといふことは、人をして動もすれば天分に過ぎたる慾望を抱かしむることを免れないために、新しい時代の姿は激しき生活の戰ひに堪え得る所の充分なる資格をもつて居るドチラかといへば少數の力量ある人人にとりては殆ど世界が新になつたといつてもよいほどの愉快なるありさまであるけれども、さうでない寧ろ多數の人々にとりては却て不幸の結果をもち來すやうな傾向のあるのは固より已むを得ないことでありませう。世間に出て一廉の働きをすることの出來る立派な青年を百姓の子は百姓をしなければならぬといつて平凡な勞作の間に空しく朽ち果てさしてしまふのは勿論よいこととてはないけれども、鍬をもつて働いてさへ居れば、質素なれども平和なる且つ天分相應の働き甲斐のある生涯を送ることの出來る人が、柄にもない大望を抱いて都會に飛び出し、幻のやうな影を追ひ求め

て歩くうちに頭は疲れ身體は弱くなり、今更田舍に歸つて百姓も出來ず、貴い生涯を我れと我が手で滅茶滅茶にしてしまふが如きほど悲慘なことはありますまい。今の青年が生活問題に苦んで居るといふ裏面には慥にかういふ意味もあると思ひます。固より分を知れとか足ることを知れとかいふやうな消極的の道德を以て希望に充ち活氣に滿ちて居る今の若いものを律しやうとするのは間違つて居るけれども、自己の天分の如何なるものであるかを察して之に滿足しつゝ一方に於て秩序ある進歩を期するといふことはいつの時代に於ても決して我我を不幸に陷らしめぬ最も賢き方法であります。殊に年若き婦人にありては、すべての階級といふものが全く取り去られたゝめに、三十圓四十圓の其日暮しの月給取の娘に、貴族の娘や金持の娘の眞似をしてはならぬ、分を知らなければならぬと敎へた所で、昔ほどにキヽメがなくなつた。自分もあのやうな着物がほしい、馬車がほしい、嫁に行くなら貴族か金持かでなければイヤだといふやうな考への起るのは、又やがて今の婦人を驅つて生活問題の渦中に投ぜしむる所以でありませう。婦人が其長き間の束縛より解放せられるため、自ら眞面目に生活問題を考へるやうになるのは寧ろ望ましきことであつて、家庭の幸福はひとり生活の苦を知り其苦みの中より眞の樂を見出すことの出來る婦人によつてのみ造り出さるゝのでありますが、以上のような虚榮の心より起る所の慾望は厭ふべく賤むべきものであつて、今の年若き婦人を過まらしむる所の一大誘惑であります。要するに我々の生活に對する束縛のなくなつたといふことは、一面に於て我々自ら其生活に對する



河内國四條畷神社其一（糸若御野寄）

責任をもたなければならぬやうになつたので、といふことを深く考へなければなりません。又階級制度の下に養はれて來た舊き思想が一朝にして權威を失ふたことは、我々に生活の自由をもち來したと同樣に、思想の上にも大なる自由を與ふることゝなりました。而して自由なる生活が時として多くの人々を不幸に導くが如く、自由なる思想も又往々にして思慮尙ほ定まらざる男女を悲むべき境遇に置くことを免れぬのは遺憾の次第であります。今の青年が廣き意味に於ての戀愛問題に惱まされて居るといふのは即ちそれに外ならぬのである。固より階級制度の下にも戀愛はあつた。併しながらそれは極めて狹き意味に於ての戀愛である。くさ草紙に見ゆるやうな薄つぺらな戀愛である。即ち一たび露現すれば不義者として扱はるゝ所の戀愛である。今の眞面目なる青年の胸にある戀愛問題は其樣なものではあるまい。少くとも現代の青年男女に於てのみ見ることの出來るといふ戀愛の苦惱はモット厚みのあるものに違ひない（昔のくさ草紙にあるやうな戀愛が今の青年に絶えて無いといふのではない、或は昔よりモット激しいかも知れぬ、唯眞面目な青年の苦んでゐる戀愛問題は其樣なものでないといふ意味）。昔の道德習慣は其思想の自由と共に一切の戀愛を非認して居つた。少くとも顏を赤むることなくしては戀愛を語ることが出來なかつた。然るに今は其思想の解放と共に、戀愛も又解放された。少くとも眞面目なる意味に於ての戀愛ならば相互の良心を傷くることなくして接近することが出來るやうになつた。今の年若き人々が戀愛に對する見解の眞面目になつたのも此爲め、而して戀愛問題のために少からず惱まされてゐるのも此爲め。若し男女にして機會さへあれば人目を忍んでも接近しやうとする動物的本能の外に何物をも持たないならば別に胸を痛めるほどの苦惱も無い譯であつて見れば、今の青年の戀愛に對する煩悶の中には固より多くの同情すべき點があると云はなければならぬ。私は今の青年が戀愛問題に頭を惱まして居るの故を以て昔の青年よりも墮落して居るとは信ずることが出來ません。併

しながら考へねばならぬことは戀愛の人生に於ける價値は絶對的でないこと、即ち我々の境遇若くは思想の進歩によつて戀愛其物の内容及び價値も變化して行くこと、今こそ何にも換へ難き寳のやうに思つて握つて居ても若干の時を經たる後に開けて見ると何物もなかつたといふやうな事の多いこと、又一方に於て我々の思想及び行爲の自由を得て獨立を得るといふことは決して無代價でないこと、即ちそのいよ〳〵自由なればなるだけ獨立なればなるだけ、自ら重んぜなければ義務のあること、詳しくいへば、我々の眞面目なる戀愛が正當なる感情若くは行爲として世間から認められるだけそれだけ最も愼重にせねばならぬこと、與へられたる自由を濫用するものは早晩必ず再び其特權を奪はるゝに至るべきことであります。私は今の戀愛問題に惱まされて居るといふ年若き人々に問ひたい。アナタの戀愛はいつまで經つても變らないものであるか、アナタの戀愛はそのためにアナタの有する他のすべてのものを犧牲にして惜からざるほどの價値あるものであるか、若しさうでないならば少しく冷かにおなりなさい、熱くなつて居る感情をおさましなさい、さうして靜かにお考へなさい。又アナタはアナタの有する自由を濫用しては居りませんか、アナタの戀愛は自ら考へて眞に已むに已まれぬ中心の要求だと確信することが出來ますかと。なほ今の青年に最も缺けて居るのは感情の訓練といふことであります。之は全く舊思想舊道徳のため長い間一切の感情を無視せられ壓迫せられて來た結果であつて、一たび其縛を解かるゝにあへば、埒もなく飛び出して止まる所を知らない。即ち戀愛問題の苦惱といふ中にも、今の青年が其感情を御することが出來ないために起つたやうな點もあると思ひます。殊に婦人にありては、其解放せられたること、男子に比して日猶ほ淺く、例へば箱入娘が俄かに世間に引き出されたやうなものでありますから、男性に對する心持、戀愛に處する覺悟の上にも、餘程大事をとる所がないと、飛んだ間違が出來るばかりでなく、折角年若き人々の上に與へられた思ふことの自由、考へるこ

との自由を之が爲めに却て無くするやうな事がないとも限りません。

私は世の青年男女が以上ふたつの大なる問題を解くに當つて謙遜に、正直に、又どこまでも愼重ならんことを望むのであります。

朝顏（對話）

文學士　中村枯林

△四月には植物合せをいたしましたが、今日はこの朝顏の花に就て皆樣に色々御たづねしてみたいと存じます皆さん朝顏は昔からどう云ふ風に人々から見られたてせうか。

◎歌は人の心の種から生ひいてたもので御座います故どういふ風に人々から見られたかと申すことは歌によつてわかること〻存じます古歌に

　はかなさを先づ目の前に知らするは
　籬の上の朝顏の花

と御座いまする通り、昔からはかないものにたとへられて居ります。

△外に御存じですか。

×俊成卿の歌に

　朝日さすほどをも待たぬ朝顏は
　　たゞ面影の花にぞありける

と御座います、面影の花と申しまするど何となくはかなさが身に泌みわたる樣に存ぜられます。

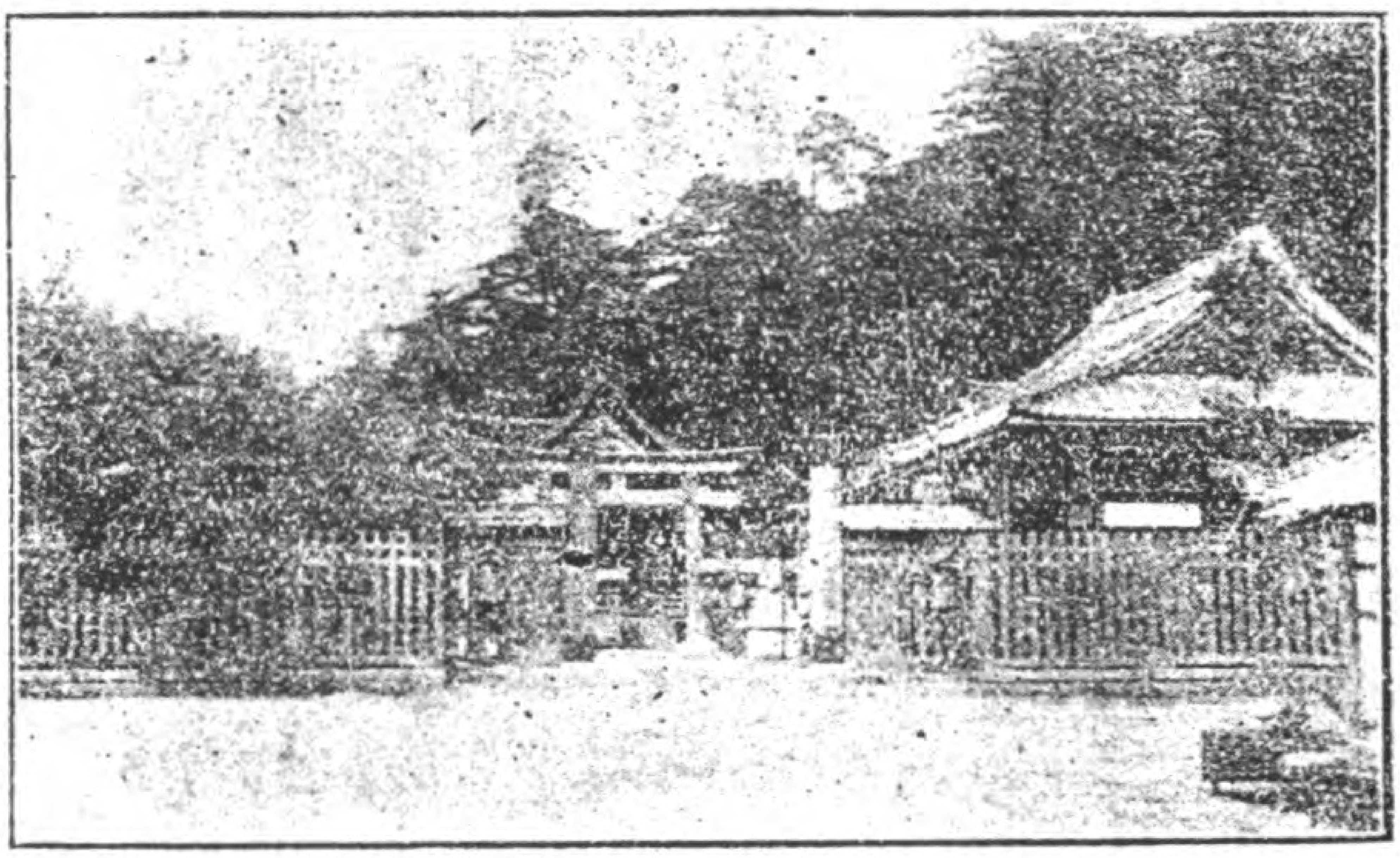
△朝日さす程も待たないものは朝顏の外にも御座いますか。

◎御座います露などもその一と存じますそれ故この露と朝顏とを一處にしてはかない事を申した歌が御座います。

　朝顏の花に宿かる白露は
　　はかなき事を云ひやあはする

△この花はまことにはかないもので御座いますが昔から人々はこの花を見まして皆はかないとあはれな感じばかり起しましたてせうか。

×いえさう許りても御座いませむ
新らしき色もありけりあし垣の
古りにし里の朝がほの花
とその清い新らしい色をめでた歌も
御座いますし又
垣もせに咲く朝顔のひと盛り
はかなき尋も忘れてぞみる
と大さうその美しさにうたれ、はか
なさをも忘れ樂んだ歌も御座います
△まだ外に御存じの歌が御座いますか
×外に私の存じて居りまする歌は朝顔
を見ましむ樂しことは少し違ひます
があの鳥羽院の御歌に
十かへりの花さく松も朽ちにけり
朝顔のみやはかなかるべき
とありますこれは千年の松も朽つる
時節があります故朝顔ばかりはかないのではないと
申す樣に世の無常と申すことを達觀せられまして一
種の慰安をほのめかされためでたい御歌と存じます
△外に御存じの歌がありますか。
×歌は今一寸おもひいだしませんが「朝顔に釣瓶とら
れてもらひ水」と申す俳句が御座い
ます、これは朝、水をくまうと井戸
端へゆきますと一夜のうちに朝顔の
つるが釣瓶にからんでしまひました
ので引切るのは氣の毒であるといふ
やさしい心から水を他所から貰つて
來るといふやさしい心で御座います



河内國四條畷神社（其二）

◎私は一つおもひだしました
葉がくれを未明けぬ夜と思ふらん
咲かんともせぬ朝がほの花
これは香川景樹の歌で御座いますが
はかないたのしいといふ感情以外に
實際をうつした面白い歌とおもひ
ます。
△いろ／＼御歌を承りましたがこの朝顔と申す名は

昔から御座いましたのですか。

○朝顔と申す詞は隨分昔から御座いました萬葉集に

　萩の花尾花葛花撫子の花
　　女郎花又藤袴朝顔の花

これは山上憶良とおぼえて居りますがこの朝顔は今の朝顔とは違ひまして桔梗のことゝ存じます「あさがほ」とは朝の程といふ意味ではかないと申す意に用ひられましたものとみえましてこの外朝だけ咲いてしぼむ「ハチス」や朝に生れ夕に死ぬかげろふの事をもあさがほと云つた事も御座います今ではこの花のみの專用となりました。

△今の憶良の歌は短歌とも違ひます樣に存じましたがいかゞでせう。

◎これは五七七、五七七と申す形式で御座いまして旋頭歌と申します。

△いろ〳〵有益な事共を伺ひまして學問をいたしました承ればこの朝顔は、はかないものゝ代名詞にさへ用ひられはかないものとして多く歌はれて來ました樣存ぜられますが誠にうつくしい清い花で御座います私共は今この學校でいろ〳〵の教をうけ立派なものに共々なりたいと存じてゐるのですゆゑ、この花のはかない點は後鳥羽院の御歌の樣に悟りまして徒らに悲しまずその新しい清い色をめでゝこの花の毎日清く咲きいづる樣に毎日々々新しい清い心もちを保つてゆきたいと存じます。

(合唱)……「露の玉のこして」の譜

一、心地よきあしたに　咲きいでてし朝がほ
　つゆ帶びし姿は　とり〳〵にうるはし
　　いざやめでん新しきその花
　　いざめでん清らなるおもかげ

二、はかなしとなげきそ　うつくしきその花
　ながめつゝ世のうさ　のこりなくわすれぬ
　　げにもめでた新しきその花
　　げにもめでた清らなるおもかげ

三、なつかしき朝顔　われらまた日毎に
　あたらしき心を　たもちつゝ學ばむ

げにもめてた新しきその花
げにもめてた清らなるおもかげ

作文その折々（續き）

高須梅溪

三　文章の調子

總じて一篇の文章を組立つる場合には、搆想、段取、取捨撰擇等、それ〴〵細心の注意をせねばなりませぬが、其中にも案外、輕く見ることの出來ぬのは、文章の調子てす。人に依ると、文章の價値は、內容の上にあるので、形式に關する事は、如何でもよいとの說もありますが、それは相當に上手になつてから後の事て、初めより形式を無視することは穩當を欠いて居るのみならず、少しも練習の功果がありませぬ。

形式即ち調子のいゝ文章は、何となく讀者に快感を與へるやうてす。紅葉氏の『多情多恨』が傑作として推奬せらるゝ譯は、其の着想、結構よりも、主として調子のいゝのに基づくのだと言はるゝ位てす。マコーレー先生の『英國史』『ミルトン論』等が名高いのは、其のいゝ調子のために大した人氣を集め得たからてす。文章の調子の肝心な事は、これ丈ても明白てせう。

然るにある人の說に依りますと、文章の調子などは如何でもよい。それよりも裡に磅礴する所の思想に重きを置かねばならぬと言はれます。勿論、思想の點については、一層注意せねばなりませぬが、唯、之に偏することは、思想過重派の人も、穩當とは思はれぬてせう。如何に立派な思想も、之に纏はせる着物が整はぬときは、何となく畸形の感じを與へます。言ひ換ゆれば、全き快感を惹起させる丈の力がありませぬ。議論は此位にして直ちに實際の方面に移りませう。

文章の調子を能くするには、如何したらよいてせうかとは、古來、多くの人々が研究し來つた問題てす。修辭學なる一科目が起つたのも、必竟、此に根ざして居るのてす。即ち調子を能くする原則原理を說いて、指導を與へて居ります。しかし此原則に通じたものが

一番に文章上の巧妙なる形式を編み出すとは限りませぬ。或意味から言へば、修辭上の原則に通ずるよりも、實地の習練が肝要てありませう。

實地の注意二三

實際の上から文章の調子を能くする方法が種々說かれて居るやうてすが、餘りむつかしい事を言つては、適切を欠きますから、眞に實用的の事を御話し致しませう。

　其の方法は、各自が或一篇の文章を作り上げてから幾遍となく讀み返へすことてす。勿論、文章の成上つた當座は、相應に苦心を費しての事てすから、菊石すら靨に見えるのが常てす、乃て少くとも二三日を經過してから、冷靜な判斷力を働かしつゝ、讀みかへしかへしすると、此邊がゴツ／＼して居るとか、彼處が冗漫だとか、種々、不滿足な處に氣が付くてせう。それを削正して倦まなければ、相當に調子のいゝ文章が出來上ると思ひます。

しかし自分の判斷丈で覺束ないとならば、御友達や、先輩の人々に相談して、欠點を指摘して貰ふのも、惡くありません。總じて他人は自分よりは公平な判斷を下しますから意外の處に大きい欠點の存することを發見するてせう。何時如何なる場合にも、かくして調子の惡いところを改める事が大切てす。

　若し今一歩進んて心理上の原則に基づくときは、文章の調子は、必竟、心の調子て、心の昂まつた時は、調子も昂まり、心の靜まつた時は、調子も亦低いのてす。即ち各自が或強き／＼感興を呼び起した時には、筆も亦其の心の高低（調子の上にて）に伴うて、自ら一種の調子が成立つてせう。此呼吸を呑み込んて置くてとも亦總べての場合に於て有益てす。

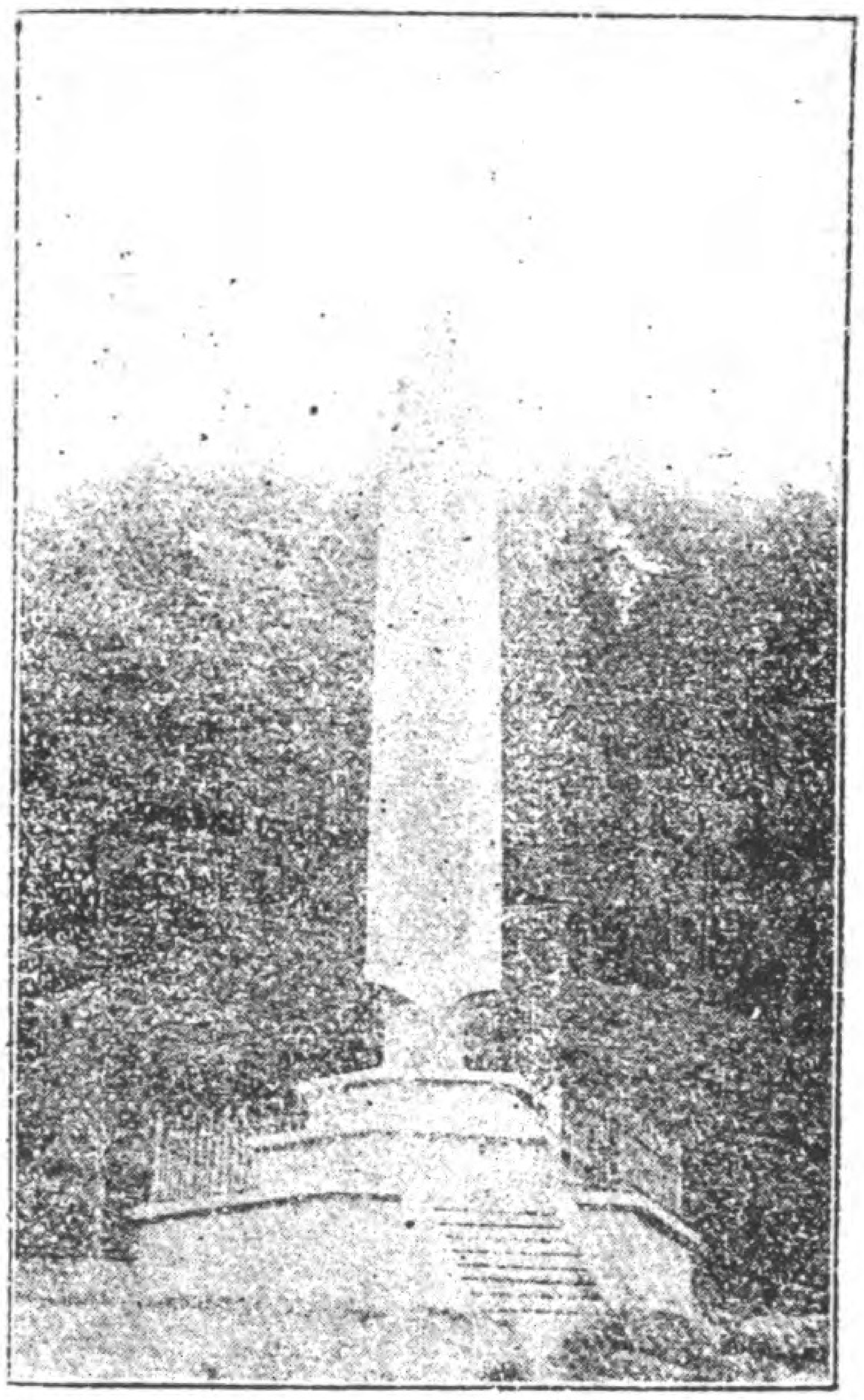
兒の一日

ミセス、ノグチ

午前七時――「鴨は朝飯を食べたの」と云つて醒める、

（毎午前中に一度は植物園へ連れて行くのを例とする、兒は園內の鴨を見て喜んで其前に立つて動かぬそうだ、醒めると直ぐ其鴨の事を思つて居ると見ゆ）、寢衣一枚で飛んで行て夫の部屋の障子を開けて覗いて見て『パヽ太陽が出た』と大聲を出して直ぐ夫の蒲團の上に乘りかゝて果ては夫の形ばかりの髭を摑むで見て『起きよ〳〵』と搖り起す、自分が『テーキ、パス、ベビー』と言つて浴室へ連れて行くと寢衣を取るや否や直に湯舟の中に飛び込んでチャプ〳〵させる、少い瀨戸物の魚等を浮べてギャ〳〵云つて身躰を洗つても出そうに無いので自分が摑み出すとノー〳〵と大聲を出して泣く、『朝飯は此處では食へ無いぢやないか』と云ふと此處で食ふと無理を云ふ、『魚ばかりだ一日中水の中に居るのは』と云ふと『マヽ、魚に成りたい』と云ふ、泣くのを構はず連れ出してヤット着物を着せる、着せると誰知らぬ間に裸足で庭に已に降りて居る、『パヽ、蜥蜴は何處に居る』と大聲で尋ねる、（昨日蜥蜴の水洗鉢の側に居たのを見せたからである）、『蜥蜴は朝飯を食べて居る』と答へると『ベビーもハングリーだ』と云つて泥べた〳〵の足で上ろうとするので女中が飛んで來て足を洗ふのである。

河內國四條畷神社（其三）



八時――兒位食事の時面倒を云ふものは少いだろうと思つてホト〳〵愛相が盡るとが屢屢である、これも忌やだ此も忌やとて駄々を捏る、仕舞にはスプーンや皿をカチ〳〵音させたり食物を投げ散すとさへする、今日も食卓にヲーツミールが無いのを不平だとてドタンと身躰を投げて泣くので『そんな眞似するのは犬ばかりだ犬は此の周圍に置くとは出來ぬからサッサと出ていけ』と云ふと自分から少い身躰を食

卓の下へ匐ひ込ませる、『出て來て、サア良い兒だから飯をお食べ』と自分が聲を優しくして云ふと『犬だから出無い』と云つて更に聲を大にして泣く、段々泣き疲れてア、と口を大くして出ぬ聲を張り出して付け上る、暫時すると『マ、、朝飯食べたい』と馬鹿に大人しく成つて甘へて自分の方へ匐つて來る、『御飯をあげるから』と自分が云つて女中に命じて大きな茶碗に米飯を入れて遣ると牛乳と砂糖を掛けて甘まそうに小供としては馬食する、いくら食べても充分だと云はぬからモウ澤山だ〳〵と云つて無理に食卓を放れさせて『手を洗ふのだ』と云ふとノー〳〵と云ひ乍ら双手を高く擧げて浴室へ行く、金盥に湯を入れて女中が持つて來ると手はソッチ退けにして足を入れようとする、果ては金盥の中に座り込まんとする。

九時——飴屋がドンコ〳〵と大皷を敲いて來るのを聞き付けて『ドンコ〳〵』と云つて女中を尋ね廻はる、『ドンコ〳〵』とは兒に對しては女中の脊に負ばれるといふ言葉に成つて居るのである、女中も『サア、ドンコドンコ』と云つて脊を向けると優く負ばれて出て行く、飴屋から紙の旗を買つて來て『マ、、萬歳々々』と云つて部屋中を驅け廻はる、隣家に鯉の吹き流しが風に吹かれて居るのを見出して『魚、萬歳々々』と大聲を出す、『パ、、下町へ行つて魚買つて來て』と云つて夫の部屋へ行く、『ベビー獨り行つて買つて來い』と云ふと獨りで出掛けるとて大なき庭下駄を穿けもしないのに穿かふとする、果ては裸足で出掛けようとする、『ベビー車へ乘つて行つては如何』と云ふと、『車、來い〳〵』と大聲を出して車は來たかとて見廻はす。

十時——一青年が自分に英語を習ひに來るので女中に連れ出させて植物園へでも遊ばせに遣る、家に居ると人が自分と談話するのを非常に不平に思つて面倒ばかり掛けるからである、十一時頃歸つて來るのを見ると足は例に依つて泥べた〳〵である途中で人の家で鳥を飼つて居るのを見付けて是非共一羽與へよと云つて承知せぬので其家の人が籠に入れて一羽の鳥を與へたので喜んで家へ持つて來たはよいが家へ着くや否や籠の

戸を開けたり閉めたりして居ると中の鳥は最初は出たり入つたりして居たが仕舞には飛び上つて樹上へ行つた、『マヽ、鳥が飛んで行つた』とて大騒動を初める、自分で木へ駆け登ろうとするが中々登れ無いので閉口する、女中にモウ一羽貰つて來いとて無理を云ふので自分が『ベビー、菓子』といふと鳥の事はスッカリ忘れて菓子を食い初める『モウ澤山だドレ腹を見せてご覽』と云つて腹をさすつて『こんな大いからモウ食べるな』と云ふと一寸腹を覗くような眞似をして菓子を食ふのを中止する、兒は腹の大なるのが中々の自慢であつて『ベスト、イン、ウォールド』と云つて笑ふのである『何がベビーのブレッド、バスケット（麪包の籠とて腹のことを云ふ）は大いのだ』と質問すると『菓子や本が入つて居る』と答へるので、古昔支那で腹中の本を土用干したものがあつたといふ話を思ひ出して思はず大笑したのである、何處から本などが腹の中にあるなどゝいふを考へ付いたかは疑問である、時々妙な事を云つて人を驚かすことがある、『本に何が書いてある』と問ふと『狸の話』と答へる、自分が自分でお伽話を作つて話す中で狸の話が一番氣に入つて居るからである。

十一時——又ソロ晝食時には面倒である、子供は睡く成ると泣き出すので兒は睡いのである、常の優い時には女と間違へられる位であるけれど泣き出して駄々を揑ね初めると眼の色が血走つて頬がイヤに赤く成つて顔全躰が腫れ上つて來る、時には食卓の上にさへ上つて大聲を出して大不平であるとさへある、今日も稍々其大不平に近いのであらう其れに加ふるに睡いのであるから泣き出して止まぬ、自分は『こんな面倒な子供は無用だから他へ行つて他の子供を貰つて來る』と云ふと眼を暫時ジット据へて自分の顔を見て居たが『ベビーも他へ行つて他のマヽを見付けて來る』との大氣焔である、そうこうする内泣き止んだかと思ふとすやすやと眠つて居るのである、寐床を敷いて寐らせようとして兒の身躰を動かし初めると眼を大く開けて『ベビーのブー（牛乳の事）』と云ひだす、牛乳一杯飲ませ

ると滿足して又もや眠り初める。

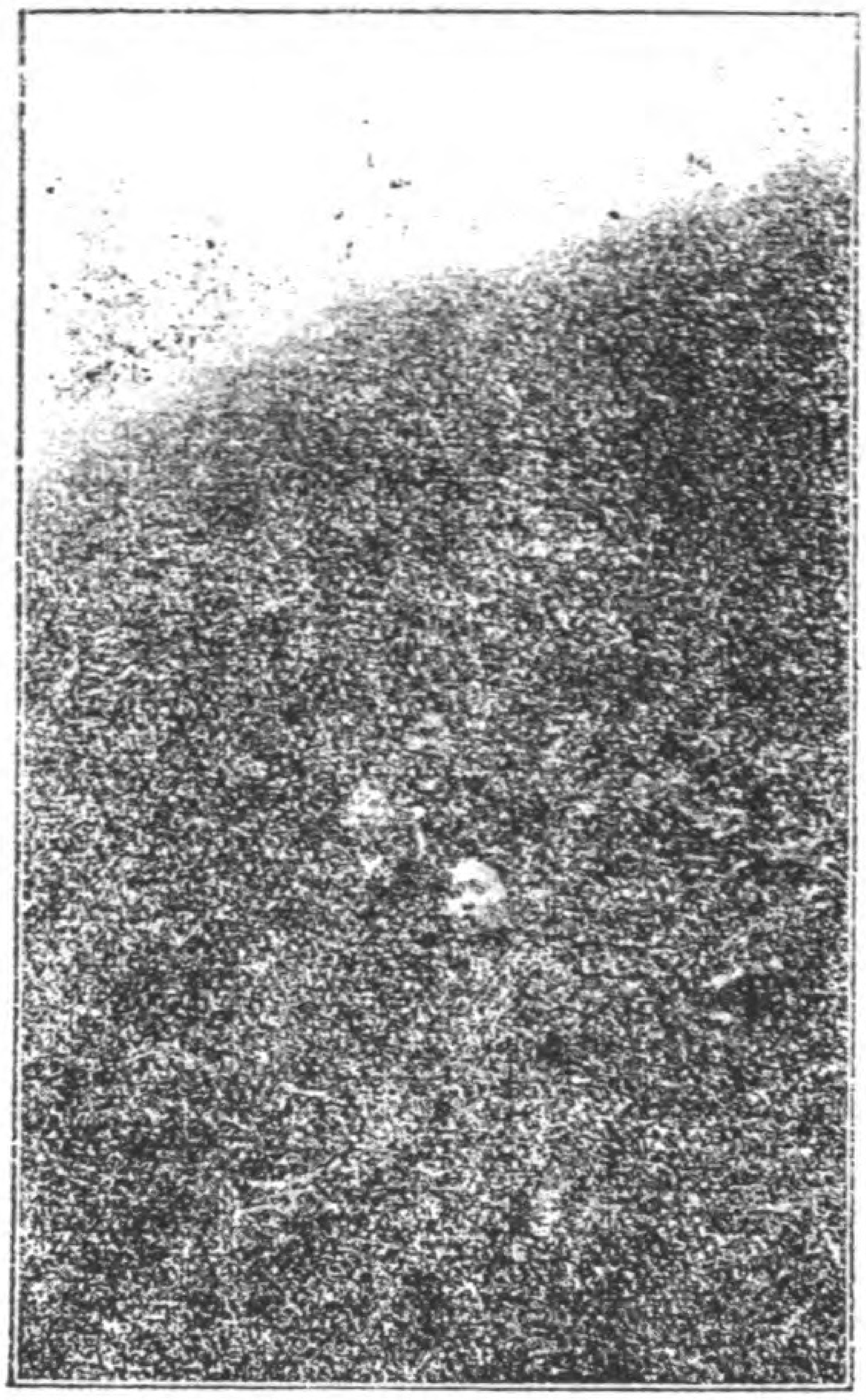
午後一時——寐言の中に『ベビーの帽子を冠せて呉れ』と云ふかと思ふと『ベビーは鴨は大好きだァ、』などゝ云ふ、子供は子供乍らに色々のことを思つて居て寐言の中にさへ云ふものと見へる、飴屋が大鼓を敲いて來る音を聞き付けて轡の音に眼を醒す日本の武士の如くに起き上つて『ドンコ〳〵』と云つて女中を尋ね廻はる、飴屋の大鼓のような幼稚な音が單純な子供の頭腦などに如何に大なる感興を與へるかは豫想の外であるのを思ふ、兒の興味を感ずるものは飴屋の大鼓を外にしては電車のチリン〳〵と夫が女中共に用事があつて打つ掌の音である、夫が掌を打つと女中を眞似て『ハイハイ』と云つて飛んで行くのも興である、『ベビー、ハイ〳〵』と云ふと掌を打つて音を出す眞似をする、兒の知つて居る日本語は『ゴハン(御飯)』と『左樣なら』と『お早う』と『芋』の外數種に過ぎぬ、食物は大概の日本の食物は食べる、中にも味噌汁を好んで食べる。

二時——十五六の書生で廣信といふのが學校から歸つて來たのを見て『ヒロ〳〵』と呼ぶ、彼は常にベビーを乳母車に乘せて引いて遊ばせるので今日も車が推してもらひたいのである、廣信は書物を投げ出して兒を車に入て引き出した、折しも家の前を過る小供等がベビーさん〳〵と云つて兒の車を取りまくのを兒は得意氣な顏をして皆の小供に日本語は出來ぬが愛相をする積りて頭を下げてお辭宜する樣子をする、五六人の子供を從へて外へ出かけた、半時間も經つと兒は病人の樣な有樣て歸つて來たので廣信から聞くと、途中で兒は自分の最も好む犬を見て乳母車から飛び下りたので石て顏を打つて傷付いたとの事である、昨日も街上の犬を追つて下水へ落ち今日は傷付いた、明日はまた何んな事に出遇ふてあろうか、下水へ落ちようが傷付こうが兒は强壯て生長するのを神に謝するのである、子を持つて知る親の恩て、中々子供一人を養育するのは非常の事だ、ミラー先生は子を持つた母親を見ると帽を取つて禮をするといつて居たが、母たるものゝ苦勞は一方ならぬ。

三時――兒は伯母から玩具の汽車と玩具の旗を貰つた『日本の旗』と云つて日本の旗なるや否を問ふ、『其れは支那の旗だ』と云ふとノー〳〵といつて承知せぬ、日本の旗だといふと『萬歳々々』と呼んで庭を飛び廻はる、仕舞には其旗を庭に立てる、抜いては立て、見る『マヽ、萬歳々々』と云つて笑ふ、旗に厭いて今度は汽車を椽端で走らせる、汽車が庭へ落ちると萬歳々々と云つて手を打つ、汽車にも厭きて其汽車を何うするかと見て居ると『マヽ、汽車は睡いだろ』とて毛布の中に入れて妙な片言の歌をうたつて眠らせようとする、玄關の戸が開いたので飛んで行つて叔父が來たのを見て一生懸命に長いお辭宜をして居る『誰だ』と問ふと日本語で『ヲジサン』と答へる。

四時――近所の子供が穿いて居る下駄を穿きたいと云ふので少い日和下駄を買つて與へた、齒の無い下駄では不承知で是非共日和下駄で音がせぬと承知せぬ、下駄に紐を付けてプク〳〵肥へた足へ結び付けるのである、今も其下駄を足へ結び付けて庭を歩いて居たかと思ふと垣根の方へ行つて隣家の女中や子供に自分の下駄を見せて居る、向ふては日本語で話すから自分では分らず自分の英語は先方へ分らぬけれども何にか盛に遣つて居る、子供と女中や子供との關係上には言語等は餘り必用で無いのであろう、分らぬ乍らも不思議とも思はず至極滿足の躰で一生懸命に愛嬌を播いて居るのである、仕舞には三日前に買つて遣つた金魚を手摑にして持ら出して隣家の子供に與へようとする『ハチ無い』と大聲で叱つて此の菓子を上げよといふと、其菓子の大小と比較して見て大なる方を自分で取つて少いのを隣家の子供

河内國四條畷神社（其四）



に與へようとするのである、人間は子供の中から自分の滿足を得て初めて他人を利せしめんとするの觀念を與へられて居ると見へる。『大いのを與へよ』と命ずると不承知ながら命令て大なる方を與へた。

五時——自分が勝手で料理し初める音を聞き付けて勝手へ座り込んで動かぬ、セロ〱と呼んで兒を乳母車に乘せて外へ出して遣つた、間も無く屏の外で『マ、デナトは出來ぬか』と大聲で叫んで居るのを聞いた、『ベビーさん〱』と大に流行兒と成つて車の中から愛嬌を播いて居るのであろうと思つて思はず微笑せざるを得無かつた。

六時——不思議にも夜食の時に大人しいのは終日の運動に疲勞して腹が減つて居るからであろう。然し大人しいのは稀と云つてよい、今夕はスープを食べ魚を食べ肉さへ食べた『ベビーのブーだ』と云つて一滴の牛乳も他人に與へ無いので自分共は牛乳無しで茶を飲んだ、腹が一杯に成つて『マヽ、ゴー、ツー、スリーフ』と云ふので着物をぬがしてザット身躰を洗つて寢衣を換へしめて寢室に入れた、斯くて妾の兒は一日を送つた。

秋雜詠三首

文學博士　小杉榲邨

○

夕霞うかぶ川なみに
　おつる柴舟ふたつよつ
つく〱ひゞく鐘のおとは
　平等院か黄檗か

○

あきは心もすみ田川
　月にのりつゝ見わたせば
舟にしらぶるいとの音
　波にこがねをちらす音

○

いたづらぶしにながむれば
　月おもしろくさし出たり
まがきの虫もふり出たり
　つまごといざとれ笛ふかむ

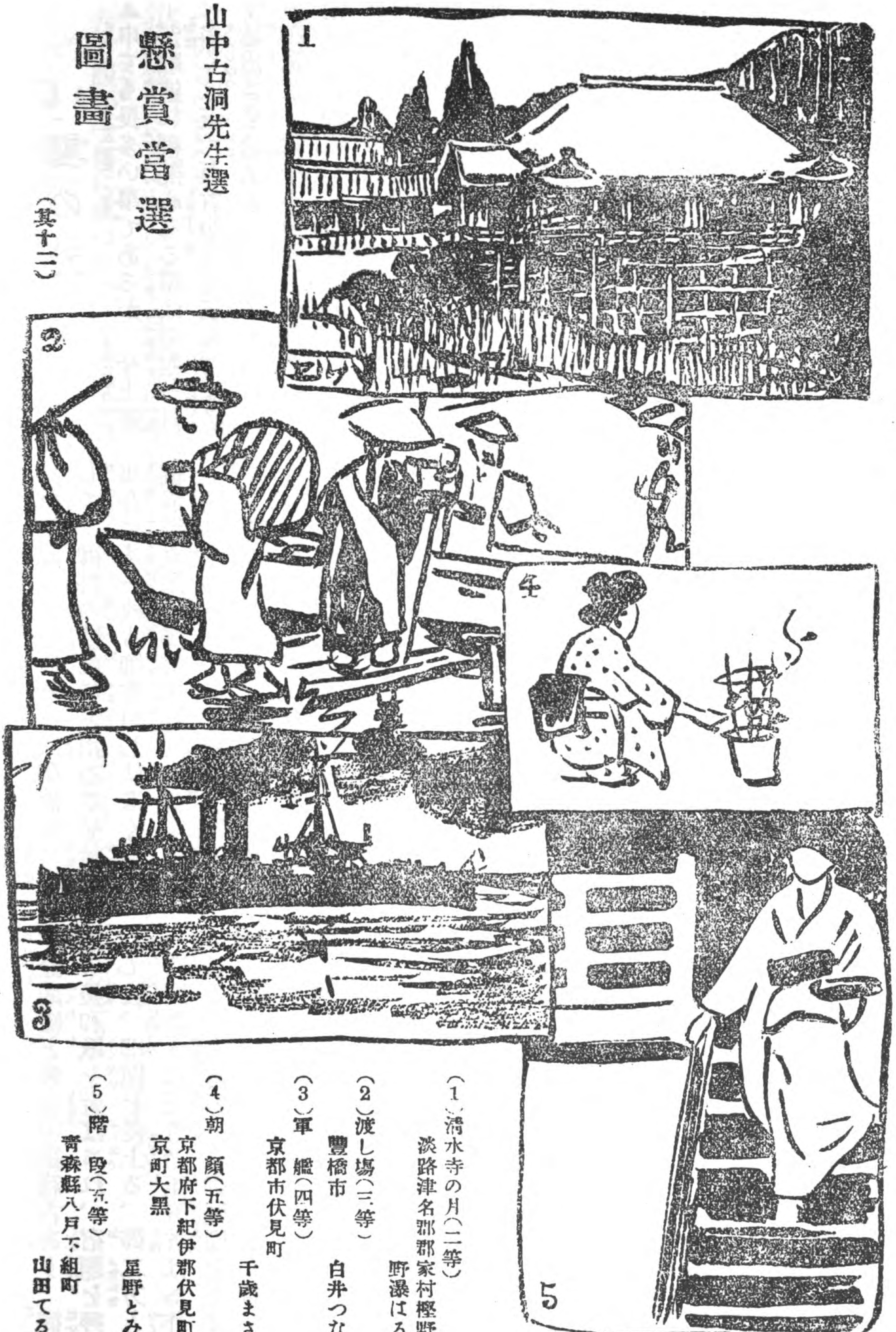
八雲の光

▲申すも畏多い事であるが今上陛下が歌道に御熱心なる事は平生一月に多くは五六百首少くも三百首は必ず詠出させ給ふと承るにも知られる御詠草は掌侍小池道子に拜寫仰せ附けられ勅使を高崎御歌所長の許に遣はされる例て、所長は五六日がかりて御詠草を拜見するとの事である▲平生の御詠草ても決して奉書などは用ゐさせられず内閣又は宮内省等から奏上したる文書袋の不用の分に御認め遊ばされて其れを小池掌侍に改寫仰附けらるゝとの御事で拜聽するだに畏多く御美德の程を感じ奉る▲皇后陛下は　陛下ほど多くは詠出させ給はぬとの御事であるが勿論歌道には御熱心にわたらせられ月々の御自作は短冊又は懷紙に御認め遊ばされ同じく御歌所長に下げられる▲又皇后陛下は御能筆に在して、御料の懷紙など用ゐさせ給ふ場合にも一枚も御書損じはなく樣式位置等立派に御書上遊ばさるゝには一同恐入る外はないと▲兩陛下が斯く歌道に大御心を寄せ給ふ結果、宮中の女官なども皆斯道に堪能で陛下より毎週一回御題を下され掌侍以下に詠草を召される、是等は淸書の上御歌所に廻し加筆採點の上更に淨書して叡覽に供する次第であるが大抵隔日か三日目に十五枚乃至三十枚の詠草を回附せらるゝさうである其中でも優秀の譽あるは柳原權典侍て小池道子、北島糸子、萬里小路良子、薗祥子、竹佐任子、生源寺伊雄子等も歌才の稱が高い▲麻布御殿なる富美宮、泰宮兩内親王殿下の御日課の中、和歌は如何と洩れ承るに、毎週火曜金曜の兩日、坂正臣氏を御用邸に召され、午後一時より四十分間ほど習字の御稽古あり、御少憩の後、和歌を遊ばされ、宿題を拜見して後、即題を差上る、御二方とも一時間許りに三首乃至五首はお作りになる、泰宮殿下は御庭園をそゞろ歩き遊ばしながら詠出たまふ事も屢屢なりと▲又御慰めとして毎週二題位宿題を出し匿名點取を行はせ給ふ事がある、此時には林御養育主任夫妻、三浦侍醫、或は表奧の役人、御附の侍女等より詠草を集め、兩殿下の御歌もそれに加へ參らせ、四五十首を一卷とし、名をかくして採點の上、天地人の三才などに區別するあとで名をあらはすと、兩殿下とも屢々三才の中になり給ひ、殊に妹宮殿下の如き能く天に拔かれ給ふ事もある▲泰宮殿下十歲の折に「夏の曉」と云ふ題にて詠ませ給ひし一首、さり深きこの山里の曉に時をもわかず鶯のなく。

山中古洞先生選

懸賞當選圖畫

（其十二）



（1）清水寺の月（二等）　淡路津名郡郡家村樫野方　野澡はるゑ

（2）渡し場（三等）　豐橋市　白井つな子

（3）軍　艦（四等）　京都市伏見町　千歳まさ子

（4）朝　顔（五等）　京都府下紀伊郡伏見町字京町大黒　星野とみ子

（5）階　段（五等）　青森縣八戸下組町　山田てる子

敍事文

文學士沼波瓊音先生選評

三等

○短夜

伊勢國阪町大字中町　三輪葉津惠

臺、羽蟻の群れ集うた破れかけの板廂から、青白い電が、玻璃窓を透してわが書齋へ射込む。途端、硯の水に反射する。筆立に挿したペンの尖も、水入の蛙の脊も、同時に青く光る。

今頃は規則のやうに、街を吹き流して行く按摩の笛も、飴湯うる爺さんの濁聲も、今夜に限つて何故か聞えぬ、と思うて居ると、甍打つ雨の音が、庭の闇におこつた。

また光つた。音のせぬだけに尚凄い。

「雨が降るからいけないつて云つたぢやないか早くお吊り」肝走つた隣のお新造の聲につれて「だつて〳〵」と健ちやんが拗ね乍ら表口へ走り出た樣子。つゞいて、納涼臺を家内へ運び入れるもの音、三五人、軒傳ひに不意討の雨を避けて走る、慌しい足音に左側の壁が、重い響を立てる。突然、雨垂れの音がおこつた。

半ば讀み終へた女子文壇を、閉ぢて立つ時、雨に濡れた植込の、針葉樹を照らして、また第三回の電が襲來した。餘りに凄い光に不思、疊へ顏を押しあてる。

雨はやう〳〵小降りになつて、雨垂れの音は、次第に遠かつて行く。と耳新しくランプの石油を請求する聲が冴える。泥濘を叩く草鞋の音が、勝手口の前に止つて「郵便」、表へ出ると、配達夫の角燈は、左手の露路へ入つて、また鞋の音が斷續する。壁一重を隣つて、例の御新造が、手内職の羽織紐を打つ音がする。炊事場に蟋蟀がなき出して、十時を報ずる時計の音が夢の樣に聞えた。

（評）器用に出來たり、雷を伴はぬ電一種の趣あり。

【四等】

○島ずまひ

豐後國姫島燈臺官舍　鈴木幸子

赤々とした夕陽が周防か長門かの低い山に沈むと。波に逐はれて汐路遥けく追れ來る涼風が蔓荊の上を掠めて小松原の間を潜り。打水の庭を一飛びに拭立の小椽を辷つて伊豫簾を跳上げ。六疊と四疊半の坐敷を駈抜けて裏の若竹を搖ぶり。はては遠く消えて行く。

『涼しいぢやないか。姫島は好い處だらう』夕餉の仕度をして坐敷へ搬んで行くと行水の浴衣の肱枕して雜誌を見て居た兄さんが斯う云ひながら起き上る『左うチ』と心の奥てはもう可笑しい。食卓を覗いて『御馳走だな』と嫣然。だが未だ例のがお留守な事に氣が附かないらしい。妾も嫣然。這回は飯櫃を引寄せて『御飯を裝ませう？』殊更平氣に云ふ。始めて氣が附き『オヤッS君は如何した』と容易ならん顏附。眼を圓くして妾を見る、其りやこそと噴き出したくなつたのを漸つと忍び『空ッ樽よ、Sさんは亡くなりました』澄まして云つて見たが不可『ハア豈夫頓死でもあるまいから其前に危篤とか何とか報知がありさうなものだが』胡坐の片膝を搖つて笑ながら妾の顏を見て居らる。臺所よりチトチとお燗の出來た音。夫れでも笑はじと噤むでゐると『兎に角夫れぢや檢死と出掛けるかな』立ちかゝるので慌てゝ盃を袖から出す『アッハ、到頭白状したか』二人の笑聲を合圖のやうに釜がストッと坐敷へ飛んで來る。

兄さんが灯をとりに妾は酒瓶を差換へて坐敷に戻ると盃を握つて待つて被入る。注ぎながら『これ限りッきやありませんよ』復しても餘計なことが云つて見度い『ドッコイ其手は。今ゴトリッと德利さんの新陳代謝の音がしたぜ』『マア敏いこと。德利さんに掛けちや油斷のない耳チ』故意と呆れたと云ふ顏をする『ウン畢竟武士が轡の音に眼を覺ますと一般さ』笑つて盃を上げる。御馳走には兄さんが釣つて來た鱸の刺身と吸物。手作の瓜揉。其れから妾が拾つて來た螺の酢作り。暫くはお得意の海鳥趣味を聽きながらお酌をして上げる。兄さんは美味さうによく呑み愉快氣によく談る。

灯は風のため時々搖れる。

夕の幕が漸々沖から迫つて紫に暮るゝ海鼠狀の祝島が。今さつと薄月を吐き出し。金波銀波の其邊に美しう漾うてゐる。妾は立つてバイオリンを出して來る。

兄さんが手酌て頻りに重ねらるゝ。

斯うして妾は此處に孤棲する兄さんを慰めながら。何

時迄も〱此儘居たいと思ふ。

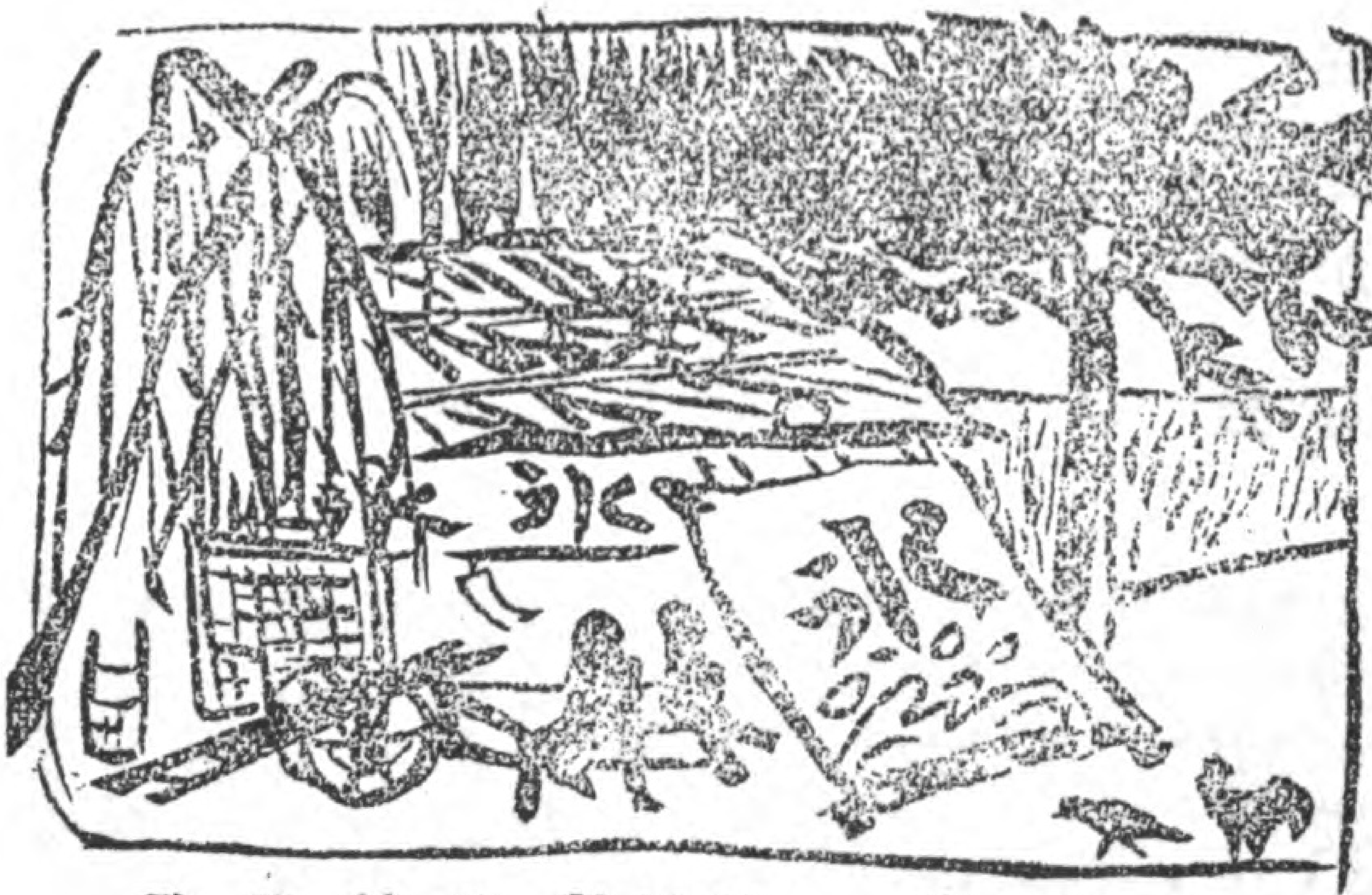
（評）羨ましき哉島の生活。

五等

○兄の旅行

小石川　末成女史

兄様が昨年の夏季休暇に、お友達となさつた旅行隨分可笑しいんですよ。お友達が又何といふ交情が好いのでせう。三人で毎日々々村の小學校の運動場へテニスに出かけるのです。朝暗い中から辨當を持つて、日中は控所で晝寢するのですつて、そして涼しくなると球が見えなくなるまでやつてるのです。歸りますのはいつも燈火頃、それが或日歸つてこなかつたのです。すると父は大層怒ります母は心配しますで私はお友達の所へ聞きに行きましたがお友達も居られませんゆゑ大抵他のお友達の所へ二人で宿つたのだらうと宅で安心して居りましたところが今度は他のお友達の所から見付けに參りましたので最寄近所の大騷ぎになりました。そして彼方此方の知己等き、合せましたがさつぱり分りません。すると一週間目の夕方ふらと三人が歸つて來ましたの。そして宅の父にさん〱叱言を申されまして、やつと旅行したことを話したんですよ。呑氣ぢやありませんか、テニスの場から僅かのお小遣をあてに、阿夫利山、丹澤山、を探險して秦野から足柄を越えて仙石へ出て箱根、小田原から平塚を回つて歸りましたのですつて、途中の宿屋は大抵友人の所です、只三泊だけ箱根の溫泉宿へ泊つたのですつて。そして『無錢にして箱根八里を踏み破る吾々も、亦偉なるかな』などと大氣焰を吐いてね、父にね、兄が眼の玉の飛ぶ程叱られまして、翌日三人して近所の禮廻りをさせられましてね、宅の一つ話になりましてね毎年休みの時は兄にからかふのですの。ホンに男子ほど呑氣なものはありませんのね。



田舍店　埼玉縣中村勝子

（評）すなほに飾らず寫したるが氣に入りたり。

秀逸

○留守居

群馬縣　坂上香花

兄さんは三日計り前に小田原の道了樣から高尾山樣へ

先達樣が先に立つて五六人の講中で参詣に入らつしやつてまだ歸らないし、お母さんは今日祇園祭りで弟や妹をつれてお里へお客に入らつしやつたので留守居役は私が一人、勿論、めつたにした事はないのだから快く受合つた、それに遲くも四時頃迄には歸ると仰しやるのですから。

私がたまに少し位家を明るとこんなに穢くして置くと歸つてからお母さんにお小言を食ふのも厭だと思つたから、如何せ遊んで居るならばお掃除して綺麗にして遊んで居ようと早速始める、奥から勝手元迄さして廣いのでないから三十分計りかゝつて綺麗に出來た、是れならばと胸こそなで下さないが漸く安心した、煙草はのまないのだが火鉢の傍へ倚る、茶箪笥や茶道具を拭き始める、火鉢と人間とは餘程はなれ難い關係が有るのだと見える、さもなければ人間に對して餘程の引力があるのだらう、冬は別物として此の暑い夏でさへも傍へ引き倚せられるのだもの……

なんてつまらない事が胸に浮ぶ、漸く拭き終へた、鐵瓶の湯が煮え立ち始めた、茶でも入れて呑まうかしらと思つて居る所へお隣の小母さんが兄さんの留守見舞だと云うて砂糖一袋持つて來てくだされた、兎角まだ田舍は德川時代のくせが失せないと思ひながら茶を入れて出す、茶菓子はと、そこらこゝら尋ねて見たが何もない、買ひに行かうかと思つたが何んだかおつこうだし又近所にないのだからよして、昨夜漬けた計りの胡瓜に醬油をかけて出した。

私一人で淋しくはなかつたが何となく人戀しく思つて居た所なのだから、成るだけいつ迄も話して居て貰ふ樣にと種々と話しかける、小母さんも乘氣に成つて種種と面白い昔話にさんざ私を笑せた、鐵瓶の湯も皿の胡瓜もつきたので小母さんは又くると仰しやつて歸つてしまつた、何んだか當にならないけれど、何んだか大風が凪いだ跡見たいな樣な氣持がして又人戀しく成つてきた、もう十一時だらう、時計は打たないが日差でそれと知れる、晝飯のお菜にと裏の畑から茄子を十二三切つてきた、時計を見れば十一時を過ぐる五分、直ぐに煮始める、新聞屋の小僧が威勢好く投げ込むで行つた、常ならば直ぐ見るのだが今日は晝飯の樂みにと我慢して居る、漸く煮えた、少し早い樣だが喰べ始める、盛つてくださいと出す妹もなければ早く／＼とせき立てる弟も居なくつて結句氣樂で好いとゆつくりと食べた、すぐに新聞も見始める、例によつて三面記事だけ一通り讀んだ、少しトロ／＼と好い心地に成つて來たので睡つてしまつては留守居の役に立たないと思つたから起き上つて外へ出た、常に見馴れて居る野や山計り目に入るのだから別に珍らしいとも何んとも

思はぬ、家へは入る、又新聞を見始める、今度は用もない銀行の決算報告迄も目を通す。

不圖、時計を仰ぐと三時を過ぎて居る、もう間もなく歸るだらうが仲々待遠しい者だ、留守中の出來事は先づこんなもの。

（評）近頃は大分留守居の叙事が流行りますな。

○待つま　兵庫縣　藤　紫女

今日はかねて御話のあつた會の相談の爲に、丁度私の家が適當だと云つてお友達が五人いらつしやるので、先づ御室の掃除をしませうと二階の六疊へかけ昇りました、机の上を飾らなければなりません、けれども先づ何から先にしませうと窓掛をしぼり乍ら……そうそ彼の大切な繪葉書を飾つてそれから此一輪ざしにも何か花を生けませうね、そう此筆立の筆も洗つて鉛筆も美しうけづつて置かなきや道樂者だつて御笑ひなさつてよ……何だか嬉しいので思はずボツチンとしてつゝ立つて居りましたが、ふつと氣がついて自分乍ら譯わからずに可笑しくなつて、早く實地をしなきや駄目よと云ひつゝ片附け始めました、室の片隅のオルガンの上には讃美歌一冊とオルガン教則本の二とを立て其上にオルゴルンじかけの置時計を一個おきました、そして本箱の内に藏ひ込んであつた繪葉書掛に秘藏の西洋草花の繪葉書をはさんで、常に掛けてある梨本の宮妃殿下の御肖像の直ぐ下の釘に引き懸けました又此方の床の柱には下田歌子女史染筆の短冊を懸けて見ました、それから文机の上にも古銅の一輪差に一寸庭へ下りてそうつと取つて來たハリ切れん許りに開いた白百合の美しいのを格好よく生け、硯や筆立や豆ランプや植木鉢を位置よく並べて、さて私は赤地メリンスの友禪の座ぶとんの上にきちんと座し机に向たまゝてクルリと廣くもない室内を見廻しました、が之で落なく調つて居りますから、まア安心それにしても御友達のおそい事ね、もう御出がないのか知ら、など氣を廻し空想にふけつて居りましたがふつと氣が附くと未だ座ぶとんも出すのを忘れてますし。半紙も筆記するのに入用でせうと思ひついて見ると中々に手落があるわ、アラ筆も洗つてないよ、まア鉛筆も折れたまゝ。

（評）ありの儘にて妙甚し終末も氣がきゝたり。

○梅雨晴　扇城　やま川

點滴の音も低く緩やかに空は次第に明くなつたので、椽の下に心地惡る相に長尾を曳いてゐた鷄は塵塚に出て搔き始めた。吁何と言ふよく降ることかと思案顔をして居た自分は空の白くなつたのを幸ひ、散歩せんと其所ともなく家を出たのである。

白雲斷續東へ／＼と流れて豐筑の連山はすぐ眼の前に

通り、山腰より上は雲が迷うて居る。塵を洗ひ流した道路は拭うた樣に、雲のきれ間からのぞく微かな日光と風とにはや少しづゝ、高い所は乾き始め、溝から上つたのであらう子蛭が澤山に飛び廻はつてどこともなく濕つだ土の香がする。田畑の畦道に出ると小麥の苅り殘されたのが一反二反、白手拭を姐樣かぶりにした女が露を拂ひながら苅り入れて居る。繭買ひであらう白の大袋を脊にした男二人木立の中から出て木立に消えた。麥の香の芬々と逼まる田畑から金堤に出れば、青草は雨に洗はれて新綠愈よ濃やかに、日光油の如くさして葉末の露は玉でも貫いたかのやう。川を見ると濁流滾々と漲つて、起つ小波にまばゆく日光を反射して居る。

自分は川中に突き出た堤のはなに俯して、鞺々とあたつては碎け、碎けては散る白沫にバッ／＼と虹のたつのを凝視て居ると、堰かれた水はつと左にそれて早瀨となり、堤の右にモク／＼と坊主頭のやうなのを捲き上げそれが崩れて、搗きたての餠を一寸指先きで突いたやうな小さな渦を、澤山作つて圓く廣がつて消ゆれば又、坊主頭が捲き上げて始のやうにくり返す。是を見つめて居ると、氣が何となく遠くなつたやうな心地がして鞺々の音も他所のやうにおぼえ、戀なく恨なく煩悶なく、自分の心は尊い所にでも徜徉ふ如く呆つとなること多時、夢から醒めた如く我に歸つて四方を見ると、雲が切れて川上遠く峠の松をかすめて怖ろしの白雲悠々と東へ流るゝ。

（評）描寫法に獨特の妙あり、假名遣に注意せられよ。

○朝の淺草公園

淺草　花園たか

觀音堂の鐘が、午前四時を報じてから、半時位經つてゐるらしい、夏とは云へ、曇つては池を渡り來る朝風のそゞろ涼しく、顏を撫でられるその冷たさ、思はず襟をかき合せた。

瓢簞池の邊りには五六人散歩して居る、櫻の樹の下の切株に腰掛けてゐる二人連れの老人は釣魚好きと見え。

『今日のやうなお天氣は釣魚には持つて來いですな』

『左樣、鯵なんどには極好うございませう』

などゝ語り合つてゐる。

自分は、鐵柵の傍に腰を下ろして、懷から携へて來た雜誌を出して讀み初めると、後ろの方で、

『今鳴る喇叭は八時半、――
あれ――に遲れりあ……』

と可愛い聲がするから、讀みさした眼を振り向ければ、之は抑も如何に、二人の乞食の少女が、柵の鎖に摑つ

てぶら〳〵揺りながら唄つて居つたのであつた。一人は襤褸の上へ大きな風呂敷を纏つて冷飯草履をはき、一人は裾の邊りの摩れ切れた綴れの單衣に細帯して、垢染みた手拭で頰被りをし、さも愉快さうに二人で遊んで居る。

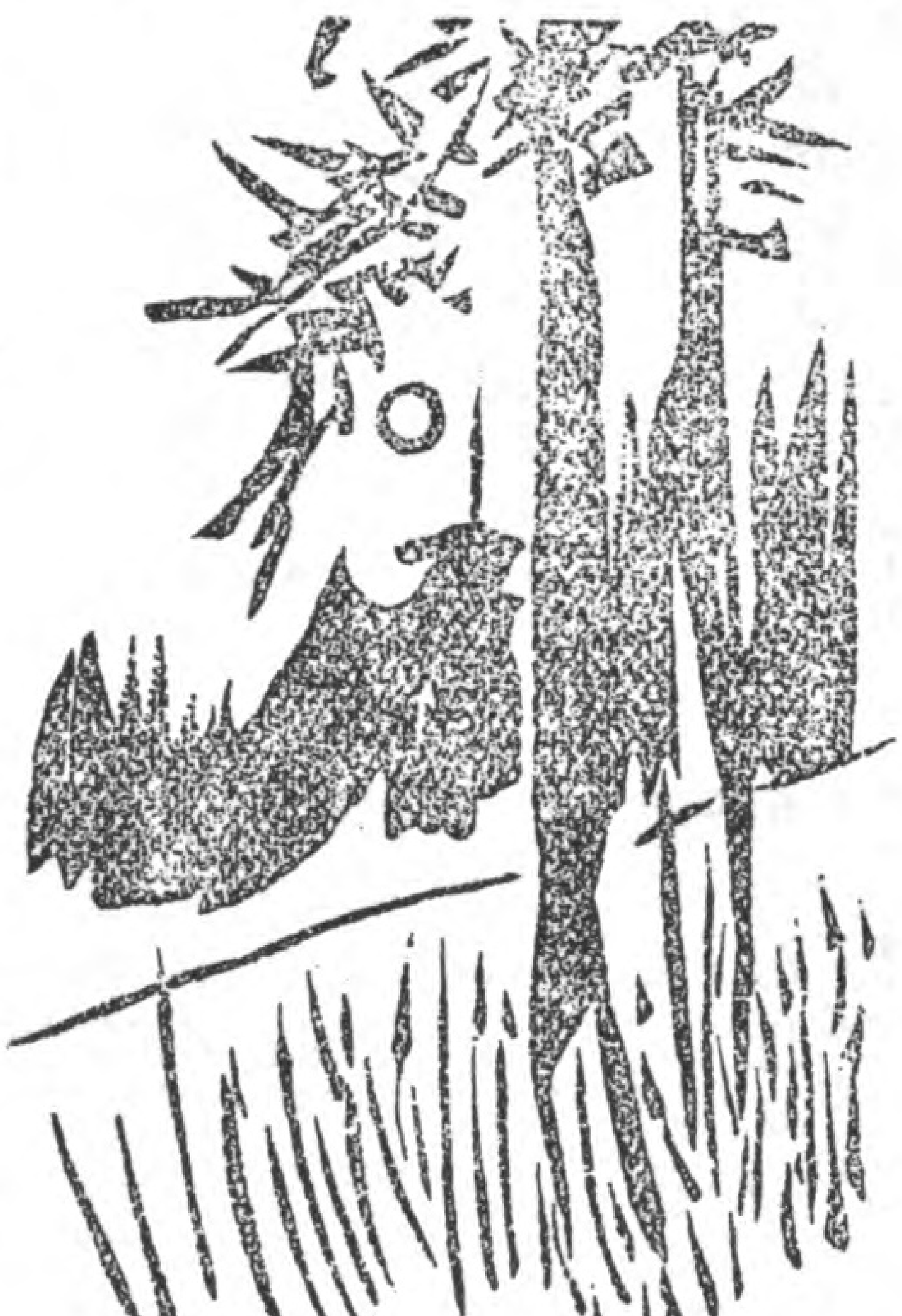
聽て、二人の青年が來た、向うの木陰の床机に腰を下し、袂から敷島を取り出して一本口に啣へれば、友の一人燐寸を出して擢り付けてやり、自分も一本吸ひ初める、何れ何處か遊びの歸りであらう、少し年の長けてゐるのは、パナマを目深かに被つて白足袋に雪駄をはき、他の一人は帽子なしで白縮緬の兵兒帶を後ろで結んでゐるのはよかつたが、煙草を吸ひ終つてから、餡ぱんを出して食べ初めたには聊か驚いた。

以前の乞食は何か耳打ちして、其方へ進んで行つたが、少し云ひ淀んで、互に肩と肩とで壓し合ひ、耻しさうに囁いて、躊躇しながら行き過ぎた。漸く七八歩行いて頰被の少女は、勇氣を皷したるもの丶如く、逡れの手を引き歩を返へして食を求めると、青年は更に餡ぱん一個を袂より取り出して與へた。少女は喜ばしさうに御辭義をして半分づゝ分けて、食べながら、まだ戸の閉めてある茶店の後ろに去つた。

『新聞は如何です、二六に萬朝、報知はいかゞです……』

といふ聲に驚いてふり返へると、釜帽被つた新聞賣子が自分の傍に立つて居つた。

（評）好スケツチ。



月夜　筑前　雀部登美子

○田草取り

筑前　安部富士子

福岡の午砲も追つけ聞える時分、草木はまるで死んだ樣、蟬の聲ばかりは烈しく鼓膜に徹つて今にも頭が割れさうなのに太陽の光は眞上から赫々と浴せかけるので堪つたものでない。

國道に沿うた田圃でお母さんと私と下婢と三人が、痛い腰、割れさうな頭、燒ける樣な太陽の光を我慢して田草を取つてゐるのです。

常には通行のはげしい國道も今日は學校の生徒と、一輛の自轉車とが西へ過ぎたばかり、その後は犬が一匹通るでもなければ、電線に雀が一羽止つてゐるでもな

い、白い砂が眩い樣に光つてゐる。
午砲が鳴つたので私が腰を伸して居る時丁度人力車が一輛東へと駈け拔けました、車上の人は絹張の洋傘に半身はわからぬけれど紫の袴と、見覺えのある後姿とによつて私は直ぐ點頭きました。けれど二三年前の私ではないから何の感じもいたしませんでした。
人力車が門構の中に這入つたので、私は麥飯の美味を賞すべく、歌をうたひながら茅屋へと足を向けました。

（評）　悟れる人の作品。

○町の夕　長野縣　山田夢殿守

隣の家のはた織る音が、パッタリやんだ午後の七時、一日の行脚につかれ、日は西山に入つてしまつた。
湯田坂の上から豆腐やが「とうふイー〱」と流しながら、急ぎ足で下つてくる、ガラ〱と大八車を引ながら、村の若い衆が山から歸つてくる。
大根うりがかつぎ荷の中から、只一束青い白い大根を出して、大根とも呼ばず嬉しさうに坂を登つて行くが、さだめし晩の一合を思出してのほゝゑみであらう。
坂を見上て吐息する旅人一人、脚袢わらじに身を固めて居るのを見れば、さだめし永の旅に勞れたてあらうが、さて宿屋ならぬ私の家には＝と思つて見て居ると、かたむきかけた菅笠に、夕の色の迫りくるのを驚く樣に、足を引ずりながら登つてゆく、此上に行けば桔梗やだの丸やだの有るのだからと＝一安心。
中學生の一群が、何か試驗の話をし乍ら、向ふの湯へそろつては入つた。いつ見ても活潑なのは中學生!!!
地の底から湧き出す樣な夕霧が、ボーッと耳に響てきて、夕蛾が一羽何に憧憬てか、私の目をかすめてとび去つた。＝
暑中休暇を利用して、登山でも試み樣とするらしき、帽子の章に「師」とした白服が三人、ヅックのカバンのふくらんだのをかけて、何か小聲の軍歌に足を合せ乍ら勇み足にやつてくる。＝と町並の家々からひとしく淡紫の烟が登つて、次第に町を埋めてくる、夕の鐘がゴーンとばかりに、町何千の人に夕をつげて、此烟の底に眠つて入てしまふ。あゝ此沈美につゝまれた町を破つて、汽笛の一聲が今叫んだのである。
郵便配達が急ぎ足にすぎて、女乞食の一群が、「きくや」と筆太にしるされた木賃宿の軒を潛つた頃家々に、赤い美しい灯がともされて、天には星も輝き出した。
嗚呼かくして一度どよめいた下諏訪町は、平和に靜に夜を待つて、たのしいねむりをむさぼらうとして居るのである。

（評）　器用なり。

○兄をまつ記

幸子

お照ちやんへきた繪端書に、十日夕刻六時の列車にて歸郷とあつてから、私は嬉しくつて、もどかしくつて。

その前お照ちやんがお便りするとて、「幸さんも何かいつてお上げなさいな」と仰しやつて下すつた時、どうぞどうぞご用がすんだら一刻も早く、歸つてきて頂戴と書き添へたいは山々で、ふるへる手に筆迄握つたけれど、流石さう露骨には打出しかねて、羞しさにぢつと耐へて居たのである。

同じやうに兄樣とよんでは居れど、お照ちやんと異つて私は本當の兄妹ではない從妹、殊に亡き母の氣質をうけて、齒痒いほど引込思案の私なので……、兄樣は高商の本科三年、いつもならばもう疾くに汽車に運ばれて、男らしい湯上り姿を築山の阿屋で青田の風に吹かれるのだのに、今年は卒業式やら謝恩會やらで、ものゝ半月も後れたのが、自分にも怪しい程待遠しかつたのである。

「夜具はあれの好きな折鶴模樣のにしましたらうな」と中庭を隔てた隱居所から、聲をかけられたのはおばあ樣である、今しも淸くふかれはかれた其人の齋に、お照ちやんは露ながら手折つた山ゆりの大りんなるを生けて居る、私は土藏から運んだ黄縞のふとんを、ほし終つて疊んだ處である。

「ハイさう致しました」、私が振むくとお照ちやんもふり返つた「オ、オ、」とお祖母樣は驚いたやうなお聲をなされて「大層ふたり共髪がよくできました、束髪も惡くはないが、是は又華やかで格別いゝ」としげしげと視られほめられて二人共きまりわるく俯向きました、乳母のすゝめに揃ふて島田に結ふて新わらを掛けたのである。

時におばあ樣は思ひ出した體で、「アノ好物のあら汁ね、あれはお前がよく加減を知つてるから、手を下ろしてやつとくれ、夫からお味噌は達郎が着いてからすり始めるやうにね、いゝ付けてお置き」と仰しやるから、ハイと立つて勝手へゆくと、玉のやうな水に跳ねん斗りの鰹がつけられて、傍にとぎすました庖丁がきらきら光つて居る、芳や芳と呼ばはるとハイお孃樣てちらでと向ふの板のまで、せつせとお膳椀を洗つて拭いて居る、折からお照ちやんのけたゝましう、幸さん幸さんと呼ぶ聲するに、何事にやとふり仰げば、梧桐の葉越しなる母屋の二階より急しく手招きする、なんなのととつかは引還して登りゆけば、あれ〳〵と遙かに指ざす新道の橋の上、前の腕車には柳行李らしい長方形の白いものをのせて、鍔廣帽子戴いたお顔をこち

らに向けながら、急がしてくるはたしかに兄樣、まあ思つたより早いとばかり、二人は顏見合はせてにつこり微笑んだ。

(評) 細かなり。

○藤葉採り

愛知縣　小島幸子

五月半ば頃山開と稱して、役塲より布令を出して、村有地に藤葉を採らしむ。農家の婦女童子は、未明より山に入りて、之を競ひ採り來り綠肥となす。柔かき新葉なれば養分に富む故、之を日に乾し置きて、茄子の移植の際、其の本に敷き又は玉蜀黍の種を播きて其上に之を被ふなり。

明日は山開なりとの布令は廻れり。吾れは弟と二人夙より起きて、人よりも多くを採り來らんものと、宵の中より色々の支度をなし置きて、常よりも早く臥床に入りぬ。

もう起きないかと、母の呼び給ふに起き出で顏を洗ふべく外に出づれば、時は三時頃と覺しく、殘月は白く冴えて私等の面を照せり。二人は食事を終へて輕裝し荷物は辨當、風呂敷、鎌、大籠等にて、夜の白々明けると共に家を出でぬ。

山は家より半里もあらんか、傾斜急なり、洞を流るゝ小川には奇岩起伏せり、其近傍藤葉いと多し、然れども、それに近づかんとせば、危險甚しく、十五才の吾と十三才の弟とには、恐ろしさ云はん方なけれど、眼前に肥たる藤葉を見ながら、採り得ず歸るは殘念なりと、險を冐し蔦にすがり岩につかまりて、危ふげに之を取る。自分等は成るべく多く採り歸りて、父母を嬉ばしまゐらせんものと採りたれば、背に負ひたる籠には早一ぱいとなりき。されば此所を去りて、野原に出てしに、うらゝかな日影は私等を射て、名も知れぬ小鳥の木々の梢を飛び交ひチヽと囀づる聲、自然の音樂かとも思はれていと心地よし。私等は野に咲く花や千草を蹈み／＼又先の如き谷間に至り葉を採り居る內、空腹を感じたれば、善き塲所を擇びて、持ち來れる辨當を食しぬ。

籠の葉は皆風呂敷にうつして、亦二人處々に採り歩きしは入物は悉く充滿せし故、漸く歸路に就く。家には母上の私等二人の戻るを待ち給ふらん。

(評) 面白き題目なり、今少し文を輕く自在に書かれたし。

○私の里

駿河　天野ふじ子

私の家は興津の停車塲から北へ半里、庵原と申す靜かな里です、戶數は四十戶大概はお百姓で菓子屋が一軒大工が一軒、鎭守の宮は日本武尊を祀つてあります、寺は大乘寺といつて小高い丘にあります、川は庵原川と申して朝夕甘露の水を里人に供し流れ／＼て末は淸

見潟に注ぎます、川は小さなものですがこの川あつて里は常に平和です。

私の家の前は一面の田圃で田植も最早了へて緑の早苗が見渡す限りチラ〳〵と何とも謂へぬ眺めです、この苗が秋の末、黄金白金の實となる迄の村人の勞と苦と寔に想像以上です、害蟲の心配洪水の患暴風の虞、是が農夫の三大敵です、がこゝにお百姓の一つ面白いお話があります、此頃は害蟲といふ事が非常に六ヶ敷なつて農事監督から常に驅除せよ驅除せよと命令するのです、其を億劫がつて取つては却つて惡いとか、捨てゝ置けば自然に死ぬなんぞと人事の樣に言つて驅除せぬのがお百姓の癖です、又監督から催促する、矢張取らない、又催促する、とう〳〵相談して名策を案じ田圃の眞中へ大きな足痕を一面附けて其を證據として若し檢査に來たら論より何よりこの足跡をお覽じろと凭ち濟まして居りました、二三日經つと監督が見分に來ましてこの足跡を見て有繫は職掌です是は取つた足跡ではない害蟲が一面だと喝破しました、何といふ無邪氣な話ではありませんか、がその代り巧言令色とかお世辭とか僞善とか虛榮とかいふものは恐らく藥にしたくもありません、作らず飾らず眞情を以て人に接し物に對する、眞に天眞爛漫の赤子であるのです、私はこの里に生まれたのは永遠の幸とおもひます。

今日も麗かないゝ日和です、お閑がありましたらお遊びに被入つしやい、何のお馳走もありませんが閑靜で涼しいのが……。

（評）お百姓を活寫せり。



愛讀書　新潟市　越思

○道ぐさ

愛知縣　永田舞鶴子

「定や、お前草とりにお行き」と、お母あ樣が云はれましたから、昨日仕上げた眞新の帶を格好よくしめて、妾は田舍娘ながらも色の黑くなるのを恐れて、數樣が凱旋の折りに土産として下すつた

手拭で顔を包んで、そして編笠を冠つて家を出ました。

毘沙門様の前の所まで行きますと、名殘松の絶頂て子鳥のやうなのが、親にでも別れたのか淋しさうにかァかァと啼きました。

なほ進んで行きますと、村で評判の元氣の好い叔父さんが、禿た頭に捻ぢ鉢巻で威勢よく畑を耕していらしやる。それも禿た頭に太陽があたつてるから屹度あついに違ひないわと思ひながら、妾は『御精が出ます事ねえ』と、言葉を掛けましたら叔父さんは、歯のない口を大きく開けて『はゝゝ』と笑つていらつしやる。眞當に元氣の好い叔父さんだ。恰度鹿乘川のほとりまで往つたころ、トヽトとらつば節とやら云ふ唄が聞えた。唄の主は慥叔父さんだらう。

（評）おもしろし。

○待つ間　新潟市　總　思

今日はまあ一躰私は如何したと言ふんだらう、朝から斯うしてそは〳〵と、自分ながらもちと變だわ、もう七時過ぎにもなるし、其に此地に來て居れば誰も來るやうな人はなし、火のいる筈もないのに此樣に澤山おこして、お湯をわかしたり、お茶道具を引き出して、如何しようと言ふんだらう。ホヽヽさうだわ。今日は中島様が暑中休暇で東京からお歸りになるんだもの、だつて何も他人が歸るのに私がいらない心配しなくてもいゝでないか、でも此間二十八日の朝此地に着くから、其夕方には必ず參上と書いてあつたんだもの、矢張り私は其を待つてるんだわ。

眞にまあ今日はあい惜くと、母樣は他家にご用があつて遲くなければお歸りがないし、其に女中は病氣で實家に行つてるし、私一人で困つてしまふわ、私は何故此間彼樣事言つてあげたらう。去年ご自分でも來年は歸らないと有仰つたし、其に彼方の母樣も此間伺つた時數夫も今年は歸らないと言つて越したと有仰つたのを知りつゝ『待つはたらちねのみにあらぬを』なんて、今更極りが惡いわ。然したら何と思つてか早速、二十七日に試驗がすむから、其日の夜行列車に乘つて二十八日の朝に歸るなんて。彼來るのは嬉しいが、何だか顔を見られるのが耻しいわ、もし彼來たら突掛け何と挨拶しやう、まさかお茶屋か何かでなし、彼來いともいへないわ、あゝ取次が居るといゝが其もなし、あゝ困つたなあ、如何したらいゝだらう。母樣はまだお歸りにならないか知ら、矢張り駄目十時過ぎなくては、ああ今夜は淋しいわ、でも丁度中島樣が彼來るからそれ

も少しの間だけども、さて被來たら如何なお話をしやう。無論東京の樣子を伺ふわ、だつて彼地は私の第二の故郷だもの、彼方もそれは私が始終なつかしがつてるのをご存じだもの、必定いろんなお話して下さるに極つてるわ、でも日頃無口で被居るから此方から問はなければ有仰るまい、何んて伺うか、何だか極りが惡いわ其から如何なお話しやう、まさか睨みくらも出來まいし、あゝ此樣時女中でも居ると何かとまぎらはされるけども、何てまあ、今日は折が惡いんだらう。

おや左樣でないか知ら……、まあよかつた行き過ぎてしまつたし、先から斯うして幾度びつくりするか知れやしない、其度に胸がどき／＼するわ。おやも此樣に暗くなつてるのに、私はまあ、何を茫然してるんだらう、誰が來たつて眞暗じや困るのに、どれランプでもつけませう、さうだまだ雨戸も閉めなくちや、おお星が澤山出てゐる、今に月も上るだらう、明日も必定良い天氣だわ、まだ少し早いが床でものべて置きませう、おゝそれがいゝわ。

ご免下さい。

は……はい。

玄關に出た。

あらお待ち申して居りましたわ。

とやう／＼しぼり出したが、吾ながらよく言つたこと……。

（評）前にも斯う云趣向のが有つたり。



釣　信濃　淑子

○日記の一節

京都　辻あい子

八月一日晴れ今日からは長い間夏の休みてある裏の青葉の木蔭にハンモックを釣つて古雜誌を出して順々に讀み始めたしかし今日に限つて親しい君子さんは如何したのか少しも姿を見せなかつた三日夕方から保養旁々岡崎の伯母の宅を訪問したすると奥の方から常に見馴れない丸髷のお嫁さんが出て來られてオヤ愛さんマアお上りと云はれた君子さんが義雄さんのお嫁さんとなつたかと思ふと可笑しくてならない。

新體詩

河井醉茗先生選評

二等

○晩鐘

德島市助任橋南詰坂田方　知惠子

西の大空、まくとぢて、
喪の長旗風にたなびきぬ。
日の葬ひの鐘鳴りて、
わがさすらへる寂寞の、
いたみ心の身にしみぬ。

あゝ亡國の冬の夜に、
昔しを偲び亡命の、
隱者あつまり未來を、
無我のさかひにあくがれて、
穢なき世なる醜どもの、
「欲」より脱れ去ぬといふ、
無限有情の喪心に、
願ぐは慰安に「靈性」の、
住はむ國を求むべく、
念法誦經ひたぶるに、
たゝき鉦して祈りする。

ああ鉦の音に相似たる、
ひゞきは吾に木精しぬ――。
あたかも病みつかれたる、
わが身苦痛のあるときに、
聲音たえ〴〵限りなき、
はるけきくにゝひかるるを、
疑がふまでの怖ろしさ、
香爐にけぶる白檀の、
前に進みし老僧が、
陰府のかど出の引導を、
今生ける身にきく如く――、
何とは知らず悲しびに、
わがさすらへる寂寞の、
いたみ心の身にしみて、
日の葬ひのかねきゝぬ――

哀音あり、技巧の妙、本誌上にも二三の匹儔あるのみ、「日の葬ひの鐘きゝぬ」はまことにかなしい心から出た一句てせう（醉茗）

三等

○神無月の一日

赤坂區青山南町五丁目九十六番地林内　大村翠葉

あゝ照りしらむ神無月、
午後の日かげのはなやかに。
稻田の畔にながるれば、
波とうち伏す八束穗は、
淸しき風の羽にゆれて、
さやさやとして鳴り戰ぎ、
命にあえぐ農人の、
力と汗の黃金の理、

またはわが野のはだか木の。
棗のみきにたゞよへば
性にしたがふくだものゝ、
春の惑なつの日の
おそれと憂さに得もかちて、
この日に結ぶあから實は
爛るゝまでに熟みはつれ、
ひとつびとつに見えばえぬ

朽木にかゝるつるくさの、
あをしなびたる實ざむさは

「核に昧なき怠りの、恥おほき世の相の價を」
か青きいろにまざ〳〵と、秋におくるゝ寂しさを
影に隱れてうら冷えの、夢まもるげのからすうり、
兹には小さきつぶら實は、荻をはしりて散りしさぬ

徽草が性の血にあゆる、
心はげしきなつはたゞ、
ひと、ゆふやみに足惱みて、
むなしきゆめの叡慧のまも
なほざりならずいそしめば、
かく定にいる運命かな

しづかに踏めば病葉は、
地のしめりに沈みいり
あふぎて立てば雲の瓣は、
澄める碧にかき消えぬ
ひさかた天のあたゝかき、
十月の日のかげ浴びて
みのりの野邊は歡樂の、いぶきに照てめまぐるし

秋の實りの讚美の歌、句々創意ありて、容易ならざる努力の痕は見えますが、少し癖があり過ぎて、一わたり何れの人にも感興を與へることは出來ないかも知れませぬ、勿論それでもかまひませぬが、餘り誇張に失しないやう、才人、才にあやまられぬやう、（醉茗）



散歩　信濃　楓月女史

額垂れぬ——あゝ軟風の
靜にせまりぬ、「樂欲」に
森なる花のあるしらず、

品川新宿五 下鈴木方　小林雪枝

香こそしめらへ、夕暮は
迴り足惱み、常盤木の
らうがはしくも八巷を
走りき、かくて胸迫る
いま黃昏のおとろへに
なへては寂し憂愁の
追懷さむき野邊に來ぬ。

林の奥にギヲロンの
吐息か、仄に靄の色、
番のみ寺ゆ、空遠く
鐘鳴る方を見かへれば
一列黑む牧が群、
罪の練足たづ〳〵と
呻吟びぬ——あはれわが心。

君はいづこに——花車
心も空も美くしき
さびしと思ふ面影の
薔薇の色のにほふごと

四等　○新月

うら悲しさを慰めむ
柑子のかをる里越へて
國へかゆきし今は將た
わが瞳にうつるこの夕

あゝ新月よ、草がくれ
なさけに潤む優眉目の
泣き濡れし頬にさしそひぬ。

心持のよい、涼しい作てす、詩、全體に新月のにほひが籠つてゐるのてせう（評者）

五等

○鐵槌の音

山梨　藤枝子

皐月ばれ熱き日なりき。太陽は照り渡る午さがり。靜なる大寺に。鐵槌の音ひゞくねぶたげに。はたもの憂げに。ひゞく其音はさながらに。奈落の底に苛嘖うく罪人のうめきと。暫時とだえて又ひゞく。罪業のあえぎと。なまぬるき風吹きて。溜水の香ぞせまる。石匠は骨格逞ましき。六尺有餘の大男の銅色の顔面に。みなぎるは汗の泉。太き腕に滿身の。力をこめて打つ鐵槌も。怪し獸の叫びかと。けたゝましき音たてゝ。大理石の角はつとゝれぬ。太古ながらの香して。あたりに飛び散る石の片。しばし見つめて何事か。つぶやき又も鐵槌を振る。

熱き日なりき。太陽は照り渡る午さがり。靜なる大寺に、鐵槌の音ひゞく物憂げに。だみたる聲の歌も交りて。

附記に依ると詩作はこれが初めとの事、若し實際とすれば驚くべき

奇才、草に埋まる才にあらず、願はくば自分をして此驚きを再びせしめよ。（評者）

秀逸

○破片

土佐　石川一堇女

日陰なり、屋後の、　陰濕に——ふめば
しく〳〵と、奇し音して、　足の裏、水氣めぐる
その日かげ、苔生へぬ。
（珍らかの、白き花咲く　藥の肉ぞ厚き
見るからに、毒々し、　毒草の、水の邊に。
ほてりがに、はや生ひぬ）。
それならで、此れはまた、　可憐しう、小石かこみて
しく〳〵と。生ひぬる、　花さえもいと小さう
淋しげに、開けり。
縁には、ふさはぬ色と、　寄りて見し、苔の中
錦地の、瓶の片、　意味ありげ、うづもれぬ。
（可憐しの、姿かな）。

瓶の片、陶器の缺などの草に埋もれたる、詩中の意味にもなるてせう、けれども元來が無意味に近いことですから、餘程感興を持つて居らないと、ものになりませぬ、幸い此作者は才氣がありますから、

惡に伴一つの感興を繼ぎ得ました。（醉茗）

○はつ秋

上總　ひさ子

おもひ出の、さむき夕べよ、
しば／＼を、ぬれては癖もつきにしか――
梳くにえ堪へぬ、額髮の、さはわなゝぎて
しどまこそ、指にまつはれ。

さびしさを胸に問ひつゝ、おばしまの
既往をおつる、湖の音に、
あゝ夢こひし、――みんなみや
誰に翔けゆく、燕の、羽も疲るらし。

うなだれて、灯をも呼び得ぬ、
あさましの、思ひのつかれ、――血は冷えて
指こそふるへ、くらがりに
おちぬ細櫛、――かすかなる、さは秋の韻。

抒情詩としては、實に今一歩で完璧となります、近時、此の如く醇乎たる情の詩に接する機會が少くなりましたので、一層此詩の姿をなつかしく思ひます。（醉茗）

○君が心

埼玉　淺見なみ子

いと廣やかの海なれば、百千の船を入るゝとも
何處の岸に泊るらん、我が眼にそれと見えわかぬ
よし風ふくも雨ふるも、君がみ胸は波たゝぬ
（いと廣やかの海なれば）、乙女ごゝろの悲しさは
あまりに闊きみ心の　計りかねてぞたゆたはる。

此詩も海の底なる眞珠貝の如し、小さくとも光があります（醉茗）

○晝顏

長野縣　山田くに子

夏草に、まつわりて、ひよろ／＼と遠のびし
晝顏の細き蔓、戯につと引けば
花蕊に醉ひし蝶の　恐怖ざまに飛び去りて
かたむきし花陰に衰の手は迫りぬれ＝
（春十八の憧憬や、若人心燃えし身の
和魂つなぐ奇しの糸、神戯に引きませば
あな脆きもの人の子の、命の戀は破られて、
運命と＝辛くふり拂ふ、涙のしめり乾ぬひまに
若き血汐は冷えてゆく＝）
運命の糸がらみ、我に似し花なりと
其かみの追憶に、擬れにし花冠晃
そゞろ氣に正しては、寂しらの我魂を
なだめみし若き愁。

神が引く晝顏の蔓に、蝶の驚くを破れた戀に喩へたものでせうが、少し苦しいやうです、却つて、結尾の、正されたる魂の寂しさを感ずるは、實にや若き人の愁ひてあらうと感じました（醉茗）

○海蛇

麹町　神谷ふさ

終夜暴れにし怒濤が、　うちあげし藻草の枝に
絡みたる細き海蛇、　小さき目の光寒きよ。
海底の宮殿や衛る、　背に動く紅き奇し珠。
汝はそもいづちより來し。
昨宵一夜その荒濤を、　防ぎえて窟に繁茂る
海藻も吹きちぎられて、　はてしらに汝や漂ふ

海蛇が藻草と共にうちあげられたなどは滅多にない詩材です、惜い哉、今二三聯歌ふ事があるてせうに（醉茗）

○愛の鳥

仙臺市　秋保きくの

愛の鳥さなくとき、　百鳥の胸の宮殿に
ほがらかの歡聲つたひ、　うれしさに華やぐこゝろ
睡みの春は覺めけり
わがうたは愛より愛に、　夢の世をほゝゑみてらす
なやみある常世の光明、　おん聖の華相いだきて
てる夏も愛の鳥鳴く

前聯よし、後聯よからず（醉茗）

○食卓

麹町　淺井千鳥子

あらき木目のてーぶるは、　代赭の色にそめられて
まだ褪めやらぬ木の香り、　奇しくも室にしみわたる。
やはく載せたる乳いろの、　花形なせる美し皿
赤き甘露やこぼれなむ、　高く盛りたる杏子の實。
こ手をかざすと倚りし時、　熟みし二つは手をそれて
ゆかにまろびて碎けたり、　刹那よ胸はおのゝきぬ。

自分は果實は一切食べない代り、果實の詩は大好き（醉茗）

○見果てぬ夢

麹町　園田愛子

水無月の朝や、椽に佇めば、
夢にも木葉と、糠雨に、顫ふおもひは
昨のかげ、地に引延へて、あとかたも
白みて消ぬれ、日のかげを。見果てぬ夢を、
靑空に見惚けてあれば、白雲は
西南へ穏どかに、かすみなびきぬ。
いましばし、梧桐の廣葉もさゆらがず、
ものみなべて、色、形、貴に端しき
浮彫の、不動の姿、寂光土。——

叢葉がくれゆ、重らかに露ぞしたゝる、
はた、落ちぬ、――静心なく刻みゆく
時の律の緒合せに。はた静心なく
ずとほりぬ、見果てぬ夢のきえがてに。

才氣が勝ち過ぎて、少し上すべりの氣味があります、與は充分に乘つてゐるらしい(酔茗)

○氷山

四谷 河野槇子

あした朝日の輝きに、
七彩萬朶の華装ひ
巌によせては鞺鞳と、
朱玉碎きて躍る潮

ゆふべ夕日のはなやかに、
射透す光消えゆけば
月に嘯く白熊の
しろがねの門守るなる

いにしへ白衣の仙媛が、
こゝをとはなる我領と、
魔神の征矢をのがれきて
水晶殿を築きしか

大わだつみの極にして、
氷にとざす幾千里
詩の聖境にそゝりたち、
北斗をつらぬく二萬尺

田植がへり　近江　彦田けい子



猛きをほこるアイヌ等も、恐怖れて遠く仰ぐなる
崇き姿よとこしへに、天地の神秘をつゝむらむ。

壯大です、けれども未だ創意を認めません、想像は自由にあるやうですが、更に、人の言はないやうな事を言つて見やうと心がけて御覧なさい、出て來る考を、くづし、くづして、幾度でも考へを立てかへるのです、而して人の言はない處を考へ出すのです(酔茗)

○機織

信濃 芳子

赤き青き黄に紫の
縦の絲、梭のゆきかひに、
あやなされ織られし布よ
かくて社會に殘らん歴史。

絹かはた木綿か瓦斯か
艶めきし色こそ映ゆれ
もつれては筬も動かず
たはやすく織りこそ得せね。

わかすべき世の業の
よろこびもこれや其の糸
苦しきもはた悲しきも
永劫の機となるなれ。

聞け人の子よ筬の響を、
よろこびの聲悶えの叫び
かくて世をきざむ歴史は、
錦なす綾にこそあれ。

詩は斯くの如く理窟でかためるべきものではありませんが、餘程苦心なされたやうに見えますから、其點は賞讃します、けれども此んな風にばかり詩を作らうと思ひ込むと、間違つた方向へ行きますから御注意（醉茗）

○夕立

神戸市　平林たつ

美はしき紅の色して、　咲き出でし花の薫や、
音も無くそよろと下りし　瑠璃鳥の夢の眞姿。
池水の濃青の面に、　若葉越し色を競ふて。
我影と得てそ知らめや、　水面の艶に覗惚けぬ。
身を逆に枝を移れば、　影も亦花を散らして。
是は天津雅乙女か、　罔象女の異化粧か、
すさまじきものゝ響き、　空ゆるぎ身の毛よだゝす、
眞黒雲蔽ひ擴ごり、　はら〳〵と降るは涙か、
あら奇し影は薄れて、　ゆら〳〵と水面に漂ふ。
是は如何に、君よ戀しの、　我をしも捨てゝ去ぬるや。
嗚呼空し影は消え果て、　殘れるは濡れたる小鳥、
無き影に憧れつゝも、　何時來てか夢覺むるらん。

題の平凡なるに似合はず内容は奇喩です（醉茗）

○夢なりし

芝　大沼象江

時は眞夏、日は午下り　天地は光にあふれ
草の香は風にたゞよふ、
銀杏樹のこゞむ枝かげ、　ちぎれ〳〵さす日影を
繁りあふ葉越しにさけて、　ほろ〳〵と高き調べの
蜩のせはしなく聲、　牧童は夢路を辿る、
日は落ちぬ銀杏のかげに、　かへり見る野路はかすみて
ふとさめぬ、美しの夢、　銀杏樹のこゞむ葉影に
物みなは夢と消えけり、　歩毎に今、闇ぞ添ふ

原作の如き神秘的冥想をうつすに、此境、此年は伴ひません、改作は唯牧童の夢に止りますけれど、又一個の聯想があるでせう（醉茗）

○朝顔を歌へる

名古屋　小木曾女

限りなく美しき夢ゆ　目覺めたり口惜き哉、
何夢とわくるを知らず　戀ひわびて再び寢れど
眼はさえて眠りはならず　そと起ちて庭を逍遙ふ。
瑞葉をもれし水滴、　凝りては殘んの月か
幻とかゝるも尊く、　緑り葉に置き添ふ露の
かゞやきて瓔珞の如、　若々し夏の朝なり。
おゝ彼方籬をかざる　朝顔の露より美しき、
想慕こそ夢路にはせぬ　枕邊に立ちし女神の
人知れず賜ひしものか　とり〳〵に咲きそへる。

今一息と云ふところ（醉茗）

○孔雀の賦

茨城縣　嫁　榮子

虹のみ國に生れたる、黄金白銀ちりばめし
孔雀彩羽の嬌艶や、元よりとりの王なれば
花輪玉車に身はをさて、
白と紅との群鳥に
金絲のつなをとらせつゝ、
あやの羽衣春風に
さながら鎧の若武者と、
清きやさ眉ふかせつゝ
時ならぬ花ほこれども、
愚や人にかはれては
天姫の情もなき身かな、
春の日うらゝ羽ばたけば
おつるよ戀の白玉椿

初めから人に飼はれて居る孔雀だろうと思ひました、あとで愚になつたのは氣の毒です（評者）

○子供の日に

麴町　椿　友子

いそぎ入りくる小供らに、師の君たちはほゝゑみぬ
美し百合は聖段に、高うならびぬ一とゆらぎ
あやめ小菊の間には、名知らぬ花もまじりたれ、
よろこばしげに面上げて、牧師の君のいのるとき
いと静やかにのどやかに、み堂をめぐる風清し
幼き子等も首垂れぬ

邪氣の無い、無邪氣な、全く子供の日に歌つてよいやうな詩です（評者）

十五夜　京都　堂本とく子



○夢に母となりて

岩代　根本松江

青葉、葉櫻茂り合ふ　苑は十坪に足られども、
自然の慰安寛大くして　母子二人に溢れたり。
五ッ束ねし晝顔の　床に埋まり眠る兒は、
夢に影なき父人の　詩讀む膝にやすがるらん。
十九の母の若くして　乳房は丸くふくらかに、
人目に恥ぢて抱き上げ　さと迸る乳の泉。
生れて一月絶たぬ兒に　乳齒の白く仄見えて、
玉の乳房は碎かれぬ、と見て寢醒めぬ枕邊に、
花晝顔は殘れども　屑揚げ深き吾をしも、
母と呼ばりし可愛兒よ　面影花に殘し置きて、
其父親と何國に遊ぶ。

○哀詞

高取　あさ子

姉がやまひを訪ひよれば　手活の桃もはや散りて
小窓に春く日はひくし　げにも淋しき痩がほかな
何とはなしに姉上の　貝摺小箱ふたとれば
若き男の寫眞の　薄葉ふかく包まれし、
思ひぞあたる母君が　召せの仰せを傳へし夜

おはてかくして此箱に　恨みこめしか姉上は、
ひさしのつまを見上ぐれば　かごの緋房も長けれど
今日もうぐひす聲なくて　餌はそのまゝにやつれたり、
若き憂のつらくとも　わが姉上の慰藉に
うたへうぐひす聲あげて　春をいたみの歌なりと、
さば姉上はうつゝなの　おもひの闇にくれ乍ら
その寫眞の聲かとも　ききて淋しうほゝゑまん

名古屋　原田琴子

○はぢらひ

初めて結びし島田髷、　たゞはぢらひてうつむけば
とみに頭の重うして、　似るか似ぬかの物なやみ。
「女らし」とて母様の、　何も化粧を強ひませば
臙脂さゝれど紅の　熱き血しほは頬をそむる。
今宵彼の君きましなば　ふさはずとてや笑みますか
かくして我は何とせん　またあたらしきなやみかな。

愛媛　紅百合女

○姫が原

天つ乙女の天降りまし　羽衣かけし枝やこれ
千歳を經たる老松は　我世今とぞ榮ゆなる。
琴の音通ふ松風に　合せて歌や唄ひけん
礒の皷のれを聞きて　平和の樂や奏てけん。
名さへ床しき姫が原　有明月の影淡く
霞こめたる島山の　彼方に遠く消ゆけば。
紅色絹の靡ばしき　天の帳の落落ちて
海に希望の光みち　金波銀波のしたひよる。

福井縣　片山千里

○農夫の唄

稻の間に、　白穗が見ゆる。
白穗出來たは、　螟虫が來て
お米になる汁、　吸て居るからよ。
早くぬき取り、　燒き捨てなけりや
反に三俵も、　取れはせぬ。

上毛　大沼なみ子

○夏の夕

松の葉の青きしづくに、　月きらゝ光りわけて
何處よりか鳩の啼く音の、　魂さそふ——夏の夕。
華美好きて市の乙女は、　湯上りの長き袂を
輕らかにうち振りはへて、　團扇手に螢追ふなり。
風青く草をわたりて、　くし光る葉末の露を
搖り落す低きしらべに、　耳よせて人はほゝ笑む。
こは同じ夕の思ひに、　憧憬るゝ人のすさびや
しめやかの山の麓を、　笛の音の辿り行くかな。

下野　鈴木雪子

○夕風

薄靄したる山路の　白樺林に風ゆらぐ
なかに君あり美し香を　吹きこすなりと野の風や
夕窓明けてあえかにも　ゆらげ灯火に映ゆる香が
おぼろの影をなつかしみ見ぬ。
伶人あまた髪なびけ　舞ふとし想ふ樹がくれを
恋ならぬ香の夕響く　暗に仄めく白百合の——

現世もろき人の子の
儚なき戀をゆめ見ては
若人幸を祈るとき
木立の暗にしめやかに
悲しき瞳みうるませて
夕べの窓にそと倚りて
野を吹き來るそよ風の
小草の道を忍び行く

○濱の夕

豐後 仙女

沙の滿ち來て置き去りし、
寄り藻の中に玉得んと
とにはあられど心なく
散らし行く子に夕榮えや
襟の白きに憂き見せて
そゞろ歩みの足の上
乘りて寄るゝ砂の數
嗟其の數の思ひ哉

○海の賓

名古屋 稜盆子

ひた／＼と眞砂に岩に、
小濵の音こそよけれ
薔薇だつ花のよそほひ、
香ぞせまる戀の海原
眞白手にくまば諸共、
丹の色と光りに染まん
底つ國無限や遠き、
瑠璃扉ゆれもらす、息吹きか
靈光は水面に昇る、
ならざりし戀なし恨み、
永劫に覺めぬ想慕の、
血こもりて珠と榮ゆらん、
そは昔、美しき少女の
世を拗ねて水泡と消えし
熱情に冷き髑髏の
龍姫のおはす宮殿
桂門をかざる蔭中に、
幸を秘む亡びながらに、
燦びかの花冠こそ
珊瑚こそ海の寶よ。

みどり　京都　辻愛子



○平和のひかり

秋田 ふさ子

朝の牧場をなみな子の、
群るゝ羊を身に和ごし
柔毛を刈りて夜の窓に、
終夜消えぬともし影。
弱手を舒べていとぐるま、
紡錘採る指のほそくとも
その細布に家人の、
衣裳ぞうるはしき。
或るは端山の夕づく日、
衛嶺島にかげ落ちて
土を培ひぬく鍬の齒に、
新月ひかりちらふまで。
終日操業いそしめば、
收穫時の糧に滿ち、
瑞々し兄に老に子に
團欒の庭の睦あまき。

○神秘

山陽 李花女史

あゝ妹よ貝摺の、
歌留多の箱は低くとも、
暫しはゆめを結べかし。
春の夜雨の小枕に、
げに美しき汝が面の、
幅の小町もぬけ出てゝ、
寢息かすかに漏るとき。
天の園生にみちびかん。

さらば黄金の蒔繪櫛、
星の花園紅綠、
もしその聲のひくゝして、
濃き虹溶きし盃を、

○夕韻

若き命の塔へかたく、
あつく眞白くやはらかき、
ならの小枝に舞ふまを、
からく古巣を立ち歸り、
げにや鳩にも似たるべき、
世の憂きふしを去げなく、
行く雲遠き物思ひ、
只額たれて扉によるを、
なげきにふるふ聲くきに、
われとまどひよ去りながら、

○罪の子

詩の御神や作りたる、
世のうき事をつゆ知らぬ、
戀知りそめし十六を、
巷のちりにそまりては、
かなわぬ望み願ひては、

天の河原に打捨てゝ、
共に匂をとり欲はずや。
花の吹雪にまぎれなば、
春の精ともふくめかし。

備前　萩　鷺子

笛をしとれば辱の、
ものを尊ぬる風情あり。
痛傷を負ひし雛鳩が、
よし其征矢はぬけりとも。
我身の運命を慕なめど、
袖につゝみて夕ぐれは。
なにとは知らず悲しきに
女の道と人はいふ。
つげの小櫛の滑りては、
笛ふき洗ふわが涙。

小　草　子

春花多きよき村に
清き少女と生れしが
花の都に立ち出てゝ
昔の姿今いづこ
父母うらむあさましの

心となりぬわれは今、

○病床吟

佐保姫花をかい抱き、
今年ばかりの春くれぬ。
山吹散りて藤落ちて、
吾や病のまさるべき。
はなやぎたりし日の影は、
青葉ぞ戰ぐ夕まぐれ。
若き下僕の手をかりて、
秋待ちがてぬ吾身なり。
いたつき癒ゆる日もしらに、
秋になりても咲匂はざれ。

○戀

歎ひ女の秋小さく
くれなゐとけて
ほつれを結ぶと
絽かやのゆめや
庭のさまよひ
紫陽花つみて
落つるをわぶる
雲むらさきなりけり

○夏の午

龜裂れし旱魃地に
微風に百合も香らず
影消えて行方もとめず
青草の影もなければ
母羊の乳もしぼれず
彩あせて光ぞふりぬ。

あゝ罪の子となりにけり。

信濃　山浦　みどり子

青葉に入りて我が眼には、
庭の牡丹の花咲けば、
灰色雲にかくろいて、
夕顔棚をつくるにも、
小庭に植ゆる秋草の、

上總　堀口あき子

戀の諸の
我がかみの
短夜の
夢を追ふ
つゆ重き
さしくしの
此日の

むさし　さわらび

花園の花はしほれて
いとし蝶愛し鶯も
牧場の羊は痩せて
小羊の柔毛のつやの

短篇小說

廣津柳浪先生選評

二等

○船路

上總國市原郡鶴舞町　ひさ子

上

つと彼方をお向きになつた、蝶の行方を見るのであらう。品のよい丸髷が二すぢ三筋みだれて、細そりとした撫肩、浴衣の袖が半ば萩の花に蔽はれて居る。

（あら秋海棠が咲きましたよ）いつの間に咲いたらう私は思はず獨言のやうに言て、お母樣を見返つた。が矢張り彼方を御覽になつてる。（お母樣）矢張り御返辭がない。（あらお母樣は如何かなすつて）驚いて下から御顏を覗くやうにして見ると、まあ何時の間にか艶々しいお顏の色が變つて眼をうるませて居らしやる、お唇が微に顫へて居るやうだ。（何處かお惡うございますか）と伺つてもそれにはお答へがなくて（もう歸りませうよ）と被仰る。何だかおど〳〵しながら御隨き申して、庭石傳ひに萩の間を座敷の方へ引返すと、これはまた什麼したといふのでせう一歩々々お母樣と私とは遠ざかつて來るぢやございませんか、急いでも急いでも既う段々遠くなつて了ふ。

と今まではお庭だと計り思つて居たのが、廣い〳〵淋しい野で、遠い〳〵其野末には灰色の雲が低く下り重つて、漸々と此方へ壓して來るかのやう、私は聲限り（お母樣！お母樣！）と呼むで見たけれども、黑い小さい後ろ影は遂々その中へ隱れてしまつた。あゝもう什麼したら好いだらう、不思議にも足がすくむで體が動かなくなつた。

日は既う暮れたかして四邊は漸々暗くなつてくる、初秋の風が冷う身にしみて寂しいこと寂しいこと、涙がひとりで縷のやうに頰を傳ふ。あゝ私は什麼なることだらう、お母樣はなぜお獨りで行らしたのだらう——もう悲しくて身も心も消え入りさう、私はそこへ泣きくずれて了つたのです。

什麼してかくまで深い印象を殘すのでせう、あゝ實にお懐しい、たとひ母樣は私をすてゝ行らしたからとて、私は少しも恨まない、漸々物知りそめた七つ八つから、他家樣のお子を見ては私はまあ甚麼に戀ひ慕つた事でせう、花の朝、月の夕せめては一度お逢ひ申して、そのみ袖に縋りたくて聖壇のみ前に神樣の御力を願つたのも幾度てしたろう……

吁今は何處にどうして居られるのか、御兩親ともお揃ひ遊ばして居らしやるのか、よもや私の事は御存じあるまいに……。

牧師の君は今度教會の御用で、しばらく佛國へ歸朝られる、私も同伴にと連れられたのでございますあゝ今航くのは何處の海だろう、私は夢の跡をくり返し

下

夢は心の迷ひだとか、然し私はどうしてこんな夢を見たのだろう。氣がついて見ると矢張りほの暗い船室の臥床に横つて居りますので、靜かに神のみ名をとなへながら胸の動悸をしづめて、さて汗を拭いて起き直つて見ますと師の君はなほしづかにお眠つて居られる樣子、私はほつと安心して、また深いおもひてに沈むのでした。

それにしても何といふ不思議な夢でせう、あの怖しかつた雲の氣色――私が牧師のお手に拾ひあげられたのは寂しい雪催ひの夜であつたとか、恰度あんな空ではなかつたろうか。私は世にも儚い、捨て子なので、吁あの懐しいお母樣の、それはお顔も知らない、名も知らない、矢張り想像に描いた面影の



繰返し、なほ解き難いその謎に、またさびしい涙が流

れるのでした。

夢に見しは在りてなき母、現に歸れば捨てられて捨てられぬ身、夢やまこと、うつゝやそら、萬波洋々たる海上の一船室に、寂しい、涙を流す人は、蓋し小說中の人物である、敢て自然派と言はない、敢て技巧とも言はない、其內觀的描寫の機微、人を動かすものあるを以て、本欄の最高位に置く(選者評)

四等　○夜啼烏

秋田縣平鹿郡角間川町
役場道路明野周吉方　明野久子

雨が強く降るので、不圖目を覺まして見たら添乳して居る我が子は昨日剃つた眉附の仇氣なく、括り枕の間に小さな手を見せて眠つてゐる、神のやうな面には、有明の燈が斜にさしてゐる。幽に半鐘が聞える。數へると一つ、二つ。一つ二つ。一つ二つ。「おや二つ半鐘だね」。初めて嫁いで來た當座は、一つ半鐘にも驚いて騷いで、笑はれた事もあつたが、矢張馴れるとづるくもなるものか、もう二つ位では中々起きない。一つ二つ、一つ……一つ……。「おや一つになつたよ。」是は彌々遠いものと思ふ、殊にはまだ雨戶の覗き硝子も白まないやうであるし、道理こそ枕時計は漸つと二時少し廻つた頃。「寢ませう、〱」、その儘眼を瞑つては見たが、雨の音、時計の音、何所かではもう起きて遠く共用栓から汲出す水の響き。また自から眼が開く。我が子を見るとちよんびりとした鼻。是で大きくなつたら高くならうかと思ふ、また一つ半鐘が鳴つた。遠いがまだ火は消えないと見える。だけれどもまた、萬一近かつたらどうしやう、とは言ふものゝ、この雨では、とても燃え廣がりはしないと思ひ返す。さういへば民樣の家！　この春は近火であつた。新婚の樂しさに民樣は、旦那樣と何所へかの緣日へ行つた後に、あの近火であつたので、慌てゝ取亂すといふ事はなかつたけれども、それと聞いて驚いて歸つて見ると、家の手前から非常線の爲めに入る事は出來なかつたとやら、さぞまあ心配だつたらうねえ。心配といへば民樣の病氣も心臟を起して、一時實家の方で養生をしたお居てのが、多少重くなつて病院へ行つてお居でとの事、實家に尋ねたきり、見舞つては上げないが、あの方の姉樣が入らしつてのお話、大した事はないとの事。然う、不斷丈夫な民樣、大丈夫よ、屹度直に癒つて仕舞ふ。民樣とは本に仲好しのお友達であつた。同じ町內で產れた同じ齡で、隣合つてゐるもんだから、抱かれた頃からお友達、學校だけは違つても、長唄の稽古は一所に行つて、田中樣のお浚ひの時にはお揃の裾模樣で、一所

に花見踊を唄つた事もあつたつけ。あの時にも、皆髮ても何でもお揃ひて、着更へにした友仙の二枚下着、然う〳〵、あの友仙で江の島へ一所に行つた事がある。初めての旅にあんな面白かつた事はなく、片瀬の砂山を越して、海邊を通りながら、此所の濱に貝が幾つあるでせう、皆拾つて家へ持つて行きたいわ、と二人で言つて、大勢に笑はれた時もあり。あの棧橋の怖かつた事、歩くとぐら〳〵と足元が搖いて、どう〳〵つと來る浪が下を通る。白い泡、蒼い水。お怖と大きな聲を出して、供の爺やに縋り付いた時、民樣も一所に爺やの傍へ寄つた事もある。此所ん所は深いの？と聞くと、――今から思へば威かされたのね――お孃樣達がお轉婆をなさると爺やがこの深い海の中へ落しますと言ふ。可わ、お轉婆はしないけども、死ぬんなら民樣と一所に死ぬからと言つた事もある。

十五の時よ、民樣の家へ遊びに行つて、大きくなつたらどういふ家に住みたいかと、民樣の姉樣が仰つた。私はその時から返事をした。「あのどんな家でも可ござんすから、民樣と一所に、いつまでも〳〵居るのに、お庭だけを廣くして、毎日々々摘み草をしたり、花を見たりして居たい」つて姉樣は氣樂な事をと言つて笑つて入らつしやる。本當にあの時は氣樂だつた。民樣は新婚の、夢のやうな間に今度の病氣になつたのだけれども、もう此頃ぢやずつと私の方が地味になつて、あの實家へ行つた時、民樣の我家ぢや、青物を何所でお取りなの？つて聞いて、まあ大層大人たお話ねと言つて是も姉樣達に笑はれて仕舞ふ。笑ふ、〳〵。不圖見ると何を夢見てか我が子が笑ひ顏。小さな口元に、片頰の笑靨。あゝ民樣にも、早く小さいのが一人欲しいわ。そんな事を考へるともなしに考へる內、枕時計が鈴虫のやうに三時を打つ。戶外に例の雨は強く、風さへ加つて、中庭の玉椿の葉が鳴る。「また今日も雨だね」と思はず呟く時、西向きの窓近く、何として烏が、まあけたゝましい啼きやう。あの笑ひ顏をしてゐた子も、終に怯えて泣き出す。まあ否な烏、まだ夜も明けないのに。舊弊な人の家は、兎角に氣を揉むこの夜啼烏。だけれども私は、決して氣にはかけない積り……「あれまあ啼く聲の忌々しい。叱、坊が怯えるから彼方へ行つておくれ」言つてもみてもなほ烈しく啼く。自分は乾度床の上に起き直つて、しかと我が子を抱く。

あゝ啼烏！私はどうしても氣にかけぬつもりでゐる。

自分には二人となない民様は、決して〳〵、あの位の病氣に堪へ得ぬ方てはない！早く癒つたらば、對の束髪にして、差しませうねと贈つておいた白菫の造り花。あゝ、そのお揃ひに翳して樂むのも、もう今からは間のない事。

夜烏を氣にかけまい〳〵として、氣にかける神經質の新夫人、寐られぬ夜の煩悶の情、こもこも胸に浮んて來る、其間に深夜の景致も添へた作者の手腕は侮る可からず、細緻の人。最も小説を書くに適して居る（選者評）

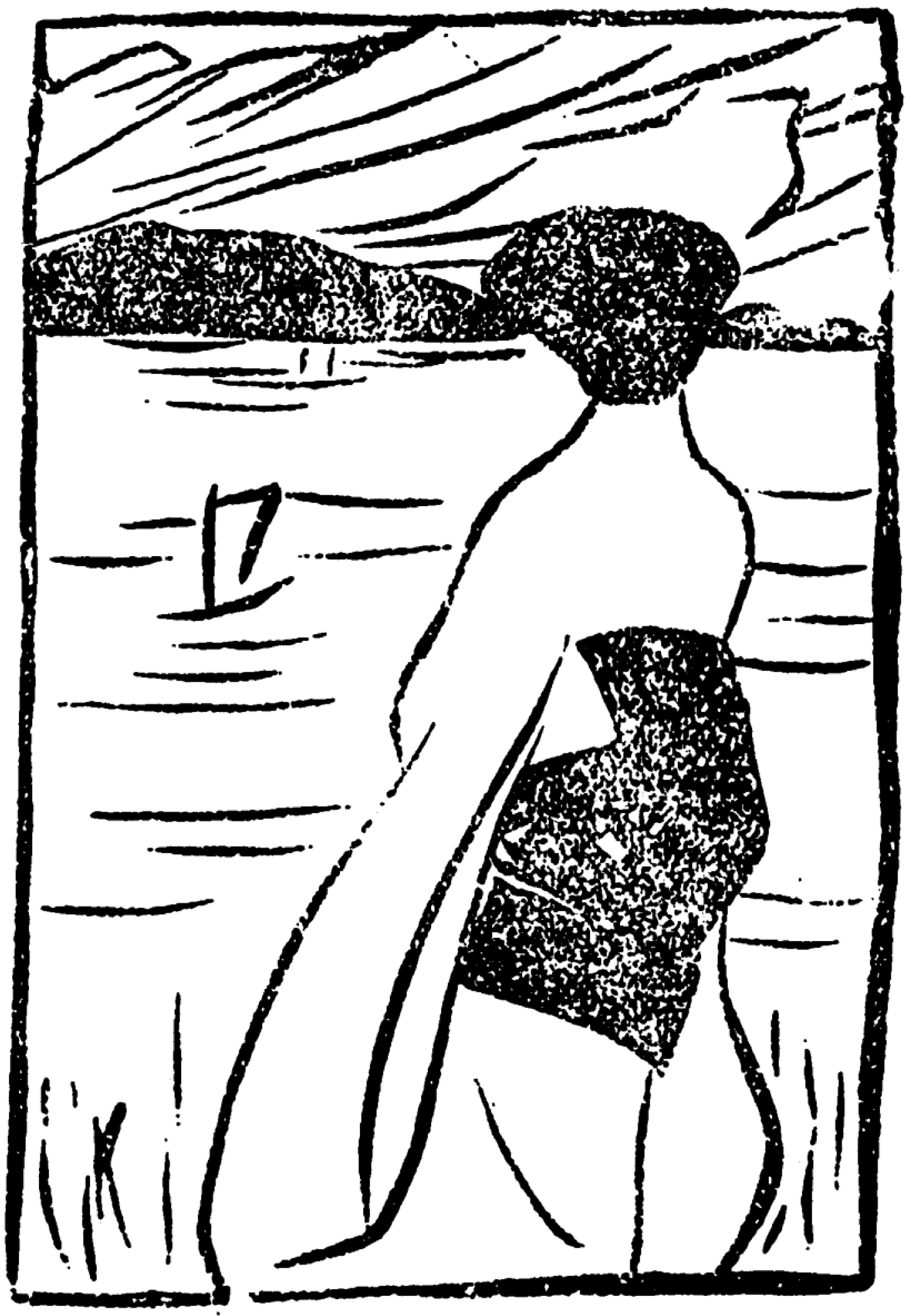
五等

○土産物

徳島縣勝浦郡高鉾村大字傍示村棚田勘三郎様方
紫　濃　子

『姉、姉、早う行かうよ』

弟の鶴吉が叔母の土産に貰つた燈籠を嬉し想に携げて待つて居るのです。『今行くは』と云つたものゝ、叔母の珍らしい市の有様や、商賣の事、など父に話して居るのを面白く聞いて居た。



朝はれ　鳥取　由谷品子

『姉』再び弟の頓驚な聲に澁々庭に下りて掃取つて螢取の御供に出かけました。一躰此叔母と云ふのはお父さんの義理の姉て、お福さんと云つて、若い時分には、隨分我儘て勝氣な人て心も非常に强固して居た想て、此様な草深い田舎に引込んて破れ家かぶつて、百姓するのを厭つて、何でも十八とかの年に單獨て市へ飛出して、大膽にも只の八十二錢を資本として花賣から商賣を初め、それが運よくもうまくいつて今では中町の福屋と云つたら市へ出る者は皆知つて居ると云ふ大きな八百商となつた。私の近在では女てこの位出世した者はまあ無いと云はれて居るし、財産の上から見ても年の上から云つても、樂隠居で煙草でも呑んで物見遊山に暮してもよい身分ですが、若い時からかういふ、一風變つた人てすから、仲仲其様な事せずに。今ても店の帳面は皆自分がして、

會て番頭は元より其良人にも任せないのてあります。て叔母は帳つけに年が年中眼がまふ程多忙しいのて、實家即ち私の宅へも年に只の一度來るだけてす。然も其來る時は盆ても無ければ正月ても無く又產土祭の日ても無い、常例も舊曆五月の骨繼ぎの時に限つて居るのてす。

今日も私の家ては六日間もかゝつた田植も濟んて村の習慣の通り骨繼ぎと云つて、雜飯をこしらへ、餅をつき下魚物などして近所へ配り、家内一同お酒吸んて一日休んて居るのてす例によつて叔母は來て居るのてす。所が此叔母が來るのを家内から雇人までが非常に待つのてす。何故かと云ふと叔母は屹度今日來る時雇人に至るまて皆それ相當した土產物をうんと車に積んて持つて來てくれるのて、年年本年は何だらう、如何なもんか、誰は何だらうかとそれが嬉しくて嬉しくて、皆腰の骨が折れる程痛くつてもがまんして、半日でも骨繼が早かれと一生懸命になつて田植するのてす。今待ちに待つた叔母は來て、お父さんには八百物の種々、お母さんには針仙の單衣、私には張込んだつて上布の單衣と厚板の帶、お春さんには洋傘と下駄、作藏さんにはお春さんと同じく洋傘と夏シャツ、弟はお菓子に水てつぽうに、麥藁帽子に螢籠、其螢籠は未だ持つた事がないので非常に喜んて、「昨夜まて紙に包んて居たに今夜から籠だ籠だ」と大喜びて夕飯が濟むか濟まむかに、例の澤に行かうと私を呼んて居たのてす。其夜大凡そ八十疋程の螢取りました。弟の喜びつたら例へ樣がない程て、臭が大變だからと云ふのも聞かないて、螢籠を床の中に入れて、抱いて寢ました。

深く賞榮する程の作てもない、只、地方的特色の能く表はれた作て、此點ては近頃の投稿中に爲渡見ない、此叔母さんと云ふ人も、田舍にはありさうな人物て、皆土產物はあてにするなど地方の或る一族の情が自然に活きて居る（選者評）

秀逸

○紅羽の蝶　　土佐　深瀨ます子

深い〳〵山の中に世の始つから今日迄嘗て乾いた事のない大きい瀧があります、それを大空から落ちかゝつて來るものとばかり、山も谷もとゞろきゆるがす響がいたします。瀧をこめたその飛沫は不思議にあたり一面七色の光をはなつて、目も覺むるばかりの美しさ、その近邊の雜木の綠葉もきら〳〵としてこの世の物とも思はれませぬ。

この瀧は何處から來て居るのてしやう、いまだ誰もそ

の蓊鬱をした人の有るとも聞きませぬが、奥山の苔の下露が落ち合ひ、落ちあひして來たのでしやうか、それとも谷の間に盡きぬ泉があるのでしやうか、それもよくわかりませぬ。

その美しい瀧は一度瀧壺に落ちますと、清い水は、まう濁つてしまひました上に、小砂を交へて流れ、谷川の嶮しき岩にせかれ、やう／＼里に出ますと、芥を泛え、塵を浮べ、あらゆる地上のきたないものを洗ひ流して、終りのはては大海に入ります。

ある長閑な日その瀧へ薄紅の蝶が何所からともしれずふら／＼と飛んで參りましたが、その瀧を見ますと、

「あゝ何て美しいでしやう」

と申まして、彩羽をかへして舞ひながら、低いすゞしい聲で歌などうたつて居ました、所が何所ともなく其の歌にあはせて、うたふ聲がするのです、ふと見ましたら何時の間にか、瀧のかなたに大い眞白の蝶が、七色の飛沫の見るもまぶしい中にさもよろこばしく舞つて居るのです。

「何て美しいだらう」

と彼方の蝶も申ました。

何でもない雜木の綠葉でさへ、この沫飛がかゝれば、並ならず見えますので、眞白な蝶や、薄紅の蝶には、かたみにどれ程迄美しく見えたでしやう、互に知らぬ蝶々でしたけれども、何かはしらずなつかしくて、白い蝶はさも思ひ入る樣にまた、

「何ていゝだらう」

といひました。

これがたゞ美しい霧ばかりであらば、互に手を取てと思ひましたでしやうけれども、そこらは大きい瀧を隔てゝ居るのですから、白い蝶はさも悲し相な聲を出して一人ごこの樣に、

「あゝ仕樣がない、あゝ仕樣がない」

といひました、それを聞きました紅の蝶は、

「どう遊して」

ときゝましたら白い蝶のいひますのに、

「私はあなたの樣な美しい方お見る事はありませぬ、あなたは何の神樣のお使でしやう」

といひました。

「私もあなたの樣にお美しい方を見上る事はありませぬ」

といひましたら白い蝶は、

「あなたは私の爲の神樣ですと思ひます、私は心の中

にいつもいふていはれぬ悲しみを持て居ます、だけども今其の樣な事は申ますまひとなつかし相に口をつぐみました。

紅の蝶はあはれなるものを見たりといふ樣にやさしく、

「何なりとも私に伺はせて頂戴」

と申ました白い蝶はうれしくて、

「なら申ますけれども、こゝからは申されませぬ」といひ〳〵今は瀧の有る事も忘れて、飛び込まうとしました。

紅の蝶は驚きました。

「およし遊ばせあなたが、ほんとこゝへいらつしやるなら、其の瀧を横ぎる事は出來ませぬ、それそこを廻つて入つしやらなければなりませぬ、だけれど私一寸歸りまして、母樣に其の事を申してまた明日參りましてよ」

と少し心おくれのした樣に、左樣申ました、白い蝶は急にけしきをかへて、

「あゝあなたは私をおだましなすつた、よろしい、私はこれきり歸ります、また再あなたの樣なお美しい方に物は申ませぬ」

といひますから紅の蝶はおそろしく悲しく、

「決しておだまし申はいたしませぬ」

とやむを得ず私しらず申しましたら、

「きつと」

と念を押しますから、

「えゝきつと」

といひました、それを聞きますが早いか白い蝶は、ひらりと瀧の眞中へ飛んだと思ふや否や、眞逆樣に落ちました。紅の蝶は色を失つて見て居ますと、今度瀧壺より浮き上つた時は、まう羽は碎けて居ました、それよりは岩にはゞまれ濁にまじり遠く〳〵行きます、しばらく見て居ました紅の蝶は、世にも世にもいひ甲斐なくあさましくよゝいたく悲しくて、生きた心地もなく、ふら〳〵と歸りましたが、それからは陰氣なてふてふになつてしまひまして、再その美しい瀧のほとりへ參りませぬのみか、春秋の花野にも薄紅の蝶は、見る事が出來なくなつてしまひました。

此れはお伽噺に屬するものであらう、小說として見ることは出來ない、けれども話が面白く、文章も上品に、誰が讀んでも好い物語だから茲に登載す（選者評）

〇本意ない別れ　牛込　光子

「お孃樣、もし秋野のお孃樣では御座いませんか」紫

矢絣に白茶の帶すらりとして、色白なるまだ廿歳を越えざるべき令嬢の今し停車場内に入らんとする後より呼ぶ聲に、ふと振りかへれば、辨慶縞の派出なゆかたに、赤い帶長い襟足、これ見よがしのつきゑり、廿一二の茶屋風の女どこやら見たやうなと考へて居れば「あれお孃樣此の杉をお忘れなさいましたのか、あんまりで御座んする、私は忘れやうとても忘れられませぬに」と怨み顔するにあゝそう〳〵杉だつたね、まあどうしてこんな所へ、私は見忘れてしまつたよ、あんまり變つたので」といひわけすれば「そうそう、そうて御座んせう、あんまりな變り樣、お懐かしさに夢中で飛んできたものゝ、ほんに私はお目にかゝれる服裝では御座んせんでしたに」オホゝと輕そうに笑へど聲はうちしめれり「まあ杉、お前どうしてこんな遠くへきたの今は何處に居るの、私はあんまり思ひがけない所であふのでびつくりしてしまつたよ」と御孃樣のお尋ねに「ハイ去年の春からあの角のアレ、アレ、あそこに見えまする」と杉はおもてを指さしつゝ「あの吉野屋へ勤めて居りまする、御孃樣こそどうして此所へ、あゝ神戸の伯母樣の所へあゝそうで御座んすか、私はほんに思ひがけなくお目にかゝつて嬉しくて〳〵お話も咽喉につかへてか、ちつとも出て參りませぬ」とお杉は矢張り昔の樣に、圓い目を情に輝かしてお孃樣を見上げつ思ひ出せしやうに指を折りて「もうお別れ申してからまる六年になりまする、もう女學校も御卒業で御座んせう、今は何處へ、あ、音樂學校で御座んすか、結構で御座いまする、もう一度御孃樣のお琴の音が伺ひたう御座いまする」と懐かしそうに云ひて、旦那樣も奥樣もお變りはなくてかと尋ねぬ、お前の脚氣はどんなときけば「此頃は足がむくんで動悸がして、ほんにお客の多い日は泣きたいやうで御座んする、けれど一寸でも休みますると、朋輩の口がうるさう御座ん

夜の學業　麴町　淺井千鳥子



すから、胸が割れるやうに動悸がしても、歯をくひしばつて働らいてやりまする、皆がびつくりした顏を見ると、胸がすくやうでこんないゝ氣持は御座んせぬ、けれど夜になりますと晝間の無理がこたへて、もう死ぬのかと思はれる程苦しい事がお座んする、もう私ばかりならとつくに杉は死んで居りますが、母が居りますから」と語は切れたり「御母さんはこちらなの」「いゝえ東京に殘して參りました、叔母の所へ厄介になつて居りますが、時々の手紙でみれば隨分辛そうな樣子、私もそれを思ひますと、こうやつて居るのも氣が氣では御座んせぬ」とうち萎るゝに「兄さんはどうして」「兄て御座んすか」と目をみはつて「兄は去年の冬母といさかひをして出ましたきり、今はどうして居りますやら、兄さへ居ればこんな苦勞は致しませぬ」と涙聲になりぬ「まあ何といふ兄さんだらう、兄さんが居なくては嘸心細からう」と云へばほろ〳〵と涙を膝にこぼしぬ「一寸お杉さん、うちぢやお客樣で目がまはる程忙がしいのに、何してるのだねえ、早く歸つてきとくれ、おかみさんがさつきからどなつてるぢやないか」目のつり上つた意地の惡そうな三十位のが、お孃樣の方を横目でじろ〳〵見ながら、かみつきそうに云ひぬ。

お杉は「惡かつてね、今歸るよ、ではお孃樣」と胸の思ひを目で云はせて「ではもうお別れ申しまする、隨分御機嫌よく」話尻は涙にかすれぬ、令孃も涙ぐみて「杉何より身體が大切だからね」手にした緋の絹半カチを握らせて「涙がついてるよ」とさゝやけば、杉はいきなり其の手にひしととりすがりつ、「ホラおかみさんが呼んでるぢやないか、ほんとに氣のいゝ人だねえ、さあ歸るんだよ」グン〳〵手を引きてつれ去りぬ、令孃はじつと立ち止まりて、其の哀れなる後姿を見送れり、目にはあふるゝ涙をたゝへて。

何處の停車場か分らない、何れ東京ではなからうけれど、分るやうにした方がよい、地の文は下手であるが、會話には情趣もあり、活躍もあり（選者評）

○夏姿

淺草　登美子

「――草の葉に宿りし月も小夜風に、憎くや溢れてははらはらと、露が雫か雫が露か、濡れて色增す野邊の色――今し方何所かで十一うつた時計の音が、稍寂れ行く河面を辷つて遠方の櫓の音に紛れ入ると、川沿のとある階上から洩るゝ一節、冴えた三味の音につれて玉を轉ばす樣な聲。「あゝ好い咽喉だ」と階下を風にゆられながら、薄闇をすつきりと染め拔いた仇な人影、

是も座敷の歸りと見えて、薄鼠の絽の裾模樣を寶石輝く左手に輕く褄取つて、小萩模樣織出の厚板帶と、銀透の富貴織に二十金で蘭を透彫にした帶止との間に、緋縮緬の帛に包んだ撥を一寸挾むだ樣、流石幾年か柳橋に腕を鳴らしただけ、意氣に物馴れた姿、額の波を見ればもう四十路に近いらしいのに、瑞々した潰島田に結んだ葛引もあつさりと、薄化粧さへ施したも此商賣の習慣か、拔かゝる平打を直す手に、ハラリと頰にかゝる毛を搔上げながら、媚ある眼に階上を見上げた。少し後れて來るのは芳紀十四位、水色地絽縮緬の友染、白鹽瀨に紅の霞染綿の花丸の刺繡紋をした帶に、紋羽二重を匹田に絞つた紅の帶上映り好く、秋草を縫取つた白絽縑の帶止きうと締つて、手に持つは手拭に包んだ儘の舞扇、丸う結んだ唐人髷に掛けた鹿子も燃ゆるやう、蒔繪した簪に同じやうな揷櫛、ふつくり取つた前髮の下を鮮な眉の邊迄切り下げたのが、そよ風

お話　大坂　伊藤あさ子



にや、亂れて、涼し眼ざしは御空の星の如、愛嬌溢るゝ口元には臙脂さへ含むで、誠美しさと愛らしさに老の心も若返らせる花の姿。「姐樣足元が……」と云ふのは先刻から踉めくお歌の足元を氣遣つて居た箱丁の源吉。「いゝえ八重ちやんが居るから」と言ふ中も、浮足に河風の煽りを受けて踉めく身體を八重子の肩に支へたが、振返つてホゝと笑ふた。「さあ姐樣、冗談ぢやあ有りません、早く歩いて上げないと八重ちやんが困りますよ。」と源吉は八重子の方を氣の毒さうに打眺める。「まあ私つては餘り好い心地なのでねえ八重ちやん手を引いてくれ」と肩に手を掛ければ、「あら厭な、急にお婆樣に成つて」と笑ひながら優しく其の手を取つて行く。露が降りてシツトりした道の、行先には淡く靄がこめて滲んだ樣な遠近の燈火。八重子に恍惚として袂を風に任せた儘、表面は姐樣と呼ぶものゝ懷しい母の傍、縋らんばかりに寄添ふて歩む向から、橋を下

りて音も無く護謨輪の車の、提灯のみ宙に浮いて、流れるやうに走つて來たので、八重子はつと身を除け樣に何心無く透し見たが、主の姿見覺えあるやう、二尺の袖を抱へた儘「あら、姉樣」と、露を除けた透骨の幌から半身出して見返つたは、品の好い見るからに初々しい奥樣風、人違かと面はゆげに白い顔をポッと染めて俯いた姿の、思ひなしか別れた姉に爪二つ。闇に消え行く車を同じ想に見送るお歌。「お露も彼樣に成つたら嬉しいが、親妹迄見捨てゝ行く薄情者、罰だけても……」と源吉の手前、涙を呑んだが眼に持つ露、八重子も堪へ難い胸の苦しさを覺えたが「あゝ姉樣も今に彼樣に立派に成つてお歸りであらう」富貴を羨ふて家出した姉を、又斯う思ひ返して我と我が心を慰めたが、ふと、深い悲の色を帶びた、窶れた母の横顔を見ると今更に心細く成つて來て、涼しい目からは止度なく涙が溢れるのである。

女子文壇には少し佻つぽ過ぎるかも知れないが、小說の事であるから容赦する、偖て風流夏姿のよそほひ場所と云ひ、人物と云ひ、巧者なうつし方、花やかな底に悲みを持たせた作者の心がまへは、此作の描寫と共に味をやつたものだ（選者評）

○親友

山口縣　泉月女

「孝さん〳〵」と呼んだのは歳の頃は十二か三か、色白て黑眼がちの眼、通つた鼻筋、髮はヲサゲて、巾の廣いリボンを懸け、矢絣の單衣に、老海茶の袴、何處となく優しい愛のある孃さん、「マア藤永の君子樣、」と振り向たのは、同じ歳頃の娘で、彼所此所を繕ふた棒縞の衣物を着て、帶はシゴキの細いのをグル〳〵まき、義母の云付か横目も振らずに畑を耕て居たが、君子を見ると鍬を置て、さも懐かしさうにかけ寄つた此の間まで同じ學校に通ふて居た友達の内でも一番の親友て、村長さんの娘は「孝さん久しく見ませんねえ、私ほんとうに逢たかつたよ、近頃は學校へも出校なさらないし、それに昨日は退校届が出たと聞て、私驚いたよ」、孝子はうつむいたまゝ返言がない、「小學校を終るまでは孝さんと一緒に遊ばれると思つて居たのに、突然退校と聞たら、わたし心配で心配でならないから、今日は日曜だし逢て樣子を聞うと思つて來たのよ」、「マア貴女わざ〳〵ね」、「昨日もねえ何故退校なさるのかと吉村先生にたづねたら、屆には只家事上の都合に依てとあるさうねえ」、「……」、吉村先生もさう仰有たよ、これは必然、父上樣は急に亡くなられるし、義母樣もあまり優しい方でもないさうだからつて、而し

あの通り克く勉強る子をつてねえ、たいへんおしがられたよやはり義母様が……酷いのね」、と稍々ためらいながら小聲で問た、孝子はそれには答へず、「私は堪忍もしますが、もう半年もしたら高等科は卒む兄様を退校さするのが氣の毒でならないよ、兄様も出校いてとは山々だけど、やつぱり」、と後は云ひ兼ねて下を向たが、目には涙が溢るゝばかりてある、「では一郎さんも退校なさるのね」、君子は何となくさめてよいかこれもたゞ同情の涙を浮べ、暫時の間は互に無言であつたが、やがて君子は顔を上げ、「あたしねえ、宅の父上様に話して、一郎さんだけはどうかして出校なさる樣に、父上樣から心配して上てくさだいつて頼んで見ますからねえ、孝さんもと云ひたいけれど」、孝子は淋しい顔を上げたゝ、「そうねダケド」とどこまでも義母の氣を兼ねた有樣、「ねえ、いゝてしよ私はやく歸て、」と立ち上つたがまた、「孝さん學校は退校たつて親友は親友なのねえ、忘れてはいやてすよ、また遊びに來ますからねえ」、孝子は、先きから君子が、溫い同情のある言葉を聞て、ほんとうに君樣は、優しい方だと、感極まつて泣き出した、暫時して、「君子樣、あたしもう逢へないようになるかも知れませんよ」、「エ、逢ないつて、なぜですの」、「私ねえ、都合によると、遠くへ兒守に行くやら知ないから」、「何ですつてね、兒守奉公に」と鈴の如き眼を見張りしが、遂に二女は堪へ得ないで兩袖を顔にあてた、小さき二女の胸はいかに燃たてあろう、殊に孝子は、君子が、父上樣〳〵と言ふのを聞ては、自分も今尚ほ、父上樣がお居てなされたなら、こんな悲しい事はあるまひと、亡き父を慕ふ念は益々胸を騷拶らるゝ樣であた。折しも、「孝さん〳〵何をグツ〳〵してお居でなの、其小さい畑がまだ濟ないの」、と癇走つた義母聲に二女は思はず顔見合した。



うば車　豊橋　菅沼實枝

少女の悲哀とも言ふべく、全篇少女らしい氣が充ちて居て大人が書いては、斯う可憐には出來まいと思ふ、別にこみいつた筋でもないから少女にでも書ける丈にしても他の諸嬢も材を諸嬢の直接の身の廻りから取ると此作の樣に存外無擧な作が出來るだらう（選者評）

和歌

佐々木信綱先生選評

一等

伊豆國田方郡中大見村柳瀬　杉山艶子

杜鵑被衣の人のしのびゆく
嵯峨野のおくの三日月の影

三等

豊後　花葉子

萬物の我をまつごと思はれて
風なつかしきふるさとの村

五等

福山　工藤以津

もやふかき朝戸によりて白百合の
さゝやききくかうつゝなの人

秀逸

○伊勢　みどり子

つれ／＼に古き歌反古取出てゝ繰返し見る五月雨の窓

○筑前　花田くら

聖者逝きし秋の夕をちぎれ雲御座つくると北へと流る

○千葉縣　鈴木かね子

眺厭で折ん折じのたゆたひに胡蝶とまりぬ其花の上に

○淺草　關口幸子

寺の門くゞりて入れば雲晴れて一山ひろく蟬の諸聲

○日本橋　杉山春榮

我思ひ胸にのみ秘め事なしと今日も印ぬ五月雨の日記

○千葉縣　脇田時子

薄がすみゆるう流れて川添ひの桃さく寺に朝の鐘鳴る

○磐城　村岡けい子

像刻む佛師が鑿の音さえて眞晝靜かにざくろ花散る

○をぐさ子

初夏や木々の濃みどりうす綠みどりよそがす黎明の風

○上總　山田沖子

人おもへば心は馴よる春の日の大河百里の川しもの國

○群馬縣　吉田きみ子

強くいひて別れし人よ今何處かたみの笛のたゞ恨しき

○下野　栗原くに子

御像彫る老いし匠が槌おきて耳すましたる鵑子哉

○上總　ひさ子

母に似る人やおはすと佇みぬ萩の花さく野はづれの家

○下總　綾野蝶子

君嫁く日大天地に一人在る寂しさ思ひ涙こぼれぬ

○花ひらく音にうすれて朝ぎりの人の影うむ白はすの池　駿河　石神喜惠子

○江の島や貝細工うる街々の店美しき青すだれかな　麹町　淺井千鳥子

○しげりあふ森の木がくれつりどこの涼しき風ゆめ結びけり　下谷　渡邊もり子

○五月雨になやみゐたりし花菖蒲けさ山僧に手折られにけり　河内　松露

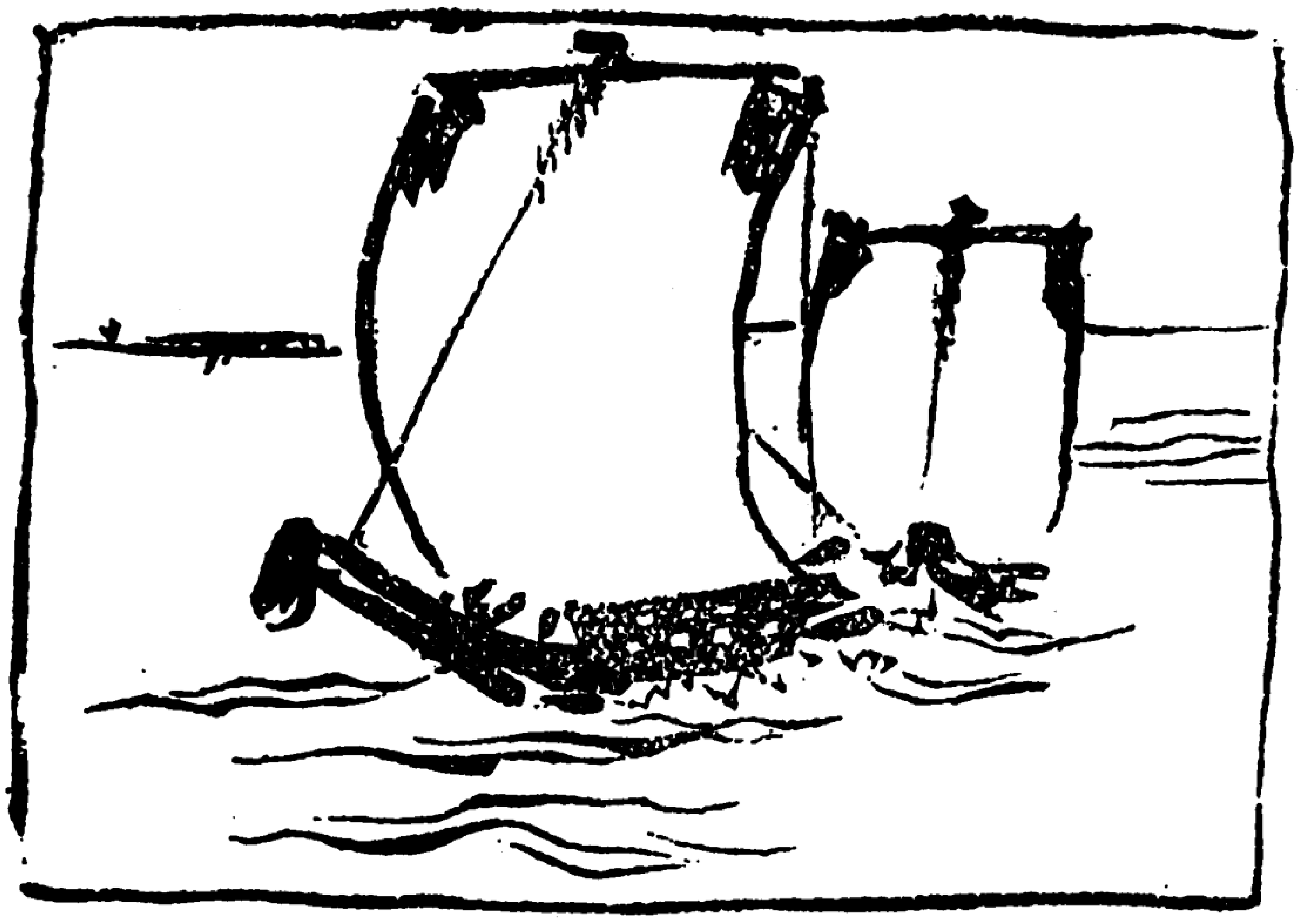
○虫なくや秋おもしろし草庵のあかり細めてきく月夜かな　備中　菅森紫水子

○朝の雨馬草刈るなる少女等のよき唄きゝて再寝しにけり　小石川　町田すみ子

○夏の山薄闇なれば嫉もつ姫のやうにも百合は咲くかな　尾張　奥田久江子

○螢籠の灯暗らく更け行きて渓間遙るかに時鳥泣く　美濃　臼井安子

和船　京都市　島田千代子



○裏山の木の下闇に仄白く見えて美し山百合の花　駿河　土屋ます子

○杣人のゆきゝも今はたえはてゝ渓の岩橋苔むしにけり　伊勢　本田文子

○ほとゝぎす啼きて渡りし朝月に橋かゝる土器師の家　山田市　常盤木花子

○夕雨や眞菰こぼるゝ湖岸に順禮乗せし舟一つ着く　磐城　村岡紅子

○風きよき岸の松かげ柳かげいづれに舟をよせてすゞまん　羽前　米野芳江

○賤が男が牛ひきつれてかへりくる垣根に白し夕顔の花　千葉縣　東てる子

○漁師町夕月さしぬ縁臺に涼むと黒き肌ならびけり　下總　川奈部ゑい子

○古城址の松の梢に月落ちて明方さむく杜鵑なきすぐ　備中　大西好子

○なき母の膝のあたりに抱かれて髪なでられし夢を見し哉　千葉縣　鈴木かれ子

○むつまじき隣りの人と立ちながら月に語らふ夕顔の垣　横須賀　柏原美奈子

○かけ茶屋によしず殘れと人はなく青葉の堤五月雨の降る　扇城　やま川

○馬つゞく都へちかき巷の道にほひもあへず薑食まれぬ　京都市　田島瀧

○朝あけの空にたゞよふ紅のくもの羽袖の色ぞ艶なる　和歌山　須磨子

○かくれすむ深山をいでゝほとゝぎすいうきかなしさをともに歌はたむ　呉市　桑原清子

○花間陰若殿原の武者振りや朝日朝風絲幾句ふ　備後　さくら子

○悩むてふ君をみとりの夢醒めて寐られぬ夜半の袖ぞ露けき　下野　百合子

○青梅の落ちて靜けき山寺の若葉の庭に山鳩のなく　三河　伊藤りき子

○悲みの胸に光明の仄めくよ君がやさしき情思へば　西多摩　永田夕風

○朝の館八重に霧立つ五條橋ありとしもせで渡りつる哉　茨城　矢口はつ子

○金烏の風呼ぶらしき雲ちりて夕日するなり薔薇色の海　高岡市　梶川露子

○美しき影にも似たる我思ひわれとうたがふわが心かな　備後　二子山

○低う飛ぶ虫追ふとさびしき野ひとり旅する秋の暮哉　京都　露勢直子

○折々に背戸よりひゞく梭の音は乳母が添寐の歌ともきいぬ　横須賀　吉川香都子

○若葉もる稲妻光りに谷深き百合をはなるゝ黒き蝶かな　福山　工藤以津

○稚子も憎うまゐの夢やつゞくらん心靜けき此五月雨に　長野縣　仙子

○時鳥卯の花がくれ鳴く宵なひとしほ君の戀しうなりぬ　下毛　福富清子

○菊折つて行く人遠くなりにけり初時雨降る野へのほそみち　長生郡　石井ゆき子

○涼しくも月のかげさす樓にして昔かたりに夜を更かしけり　下野　渡邊くら子

○花陰に歌反古埋めてこの夕春暮れてゆく鐘をきく哉　福島縣　森千代子

○白百合に宿せる露の麗はしさ清き我が胸かくやあるらむ　福岡縣　金子

○ほたるがり逝の花見ゆふすゞみ夏をうれしきものとおもひぬ　土佐　ますす子

○潮の香袖にひたして小佐の姉訪ひまさん歌を給へよ　富山縣　仙女

○こちなうと思ふ清水も萩咲きて水汲む小道露もいとはぬ　西多摩　森田なか子

○みし夢のなにとはなしに慕はれてふと笑みて見ぬ五月雨の朝　熊本縣　田山作子

○雲近う草風たちて夏野路を我袖重く湖に入るかな　伊賀　中林むめ子

○鳥啼けどきかざるかごと蝶舞へど見ざるがごとし扉に凭るをとめ　千葉縣　飯塚笑起子

○水のなき池に草生ひ砌には葵花咲く寺の跡かな　丹後　高柴小靜

○あさ露のすゞしき夏の野の景色見よやゝ霧の晴れて行くらん　佐賀縣　松林靜子

○けふは猶ありし昔の忍ばれて又もやぬるゝ袖の五月雨　滿洲　千代子

○島はずれ白帆の走る朝なぎを磯の館に病む君と見る　熊本縣　田山作子

○草刈りの塩が負へる八千草の中に一本月見草かな　南品川　風岡蘭露

○桐の花ほのかににほふ夕闇にひとりよみなる國思ひゐぬ　四谷　なか子

○そことなく千鳥群れ立聲はして吹雪に暮るゝ志賀の辛崎　上毛　董芝女史

○
初旅に道ふみまよひ行くれぬ桃の花さく十戸の村に　備中　ふみ子
○
夕暮に野邊の細路をたどり行く小腕涼しき夏の夜の風　備後　荒木光子
○
なよ竹のたかき一節とりそへて松の緑の色まさりけり　中谷　近藤くら子
○
かへり見る彼方の峰のくまおしの梢にかゝる沖の釣船　上總　あやめ草
○
かたみにとたまひし御笛胸にあて歌しする夜を春雨ゆるうしぬ　羽後　菊池りう子
○
死ぬべくばこゝに常住の國ありと導くごとき夕の露かな　越中　若葉
○
そゞろにも胸の思ひをもらしけり人にないひそしら百合の花　羽前　米野芳江
○
歌思二日かくてかくして入興の歌もならずにゆりの花散る　土佐　石川澄子
○
今日買ひし螢のかごをたづさへて川添へ下れば遠水雞なく　伊勢坂　西野
○
棹させり宵に手つきしてわかな妻の何語るらむ大川の朝　日本橋　杉山孝子
○
姉妹ひゝな〳〵をもちわけてこのみ〳〵の花捧る　上總　四之宮浪子
○
夕されば螢を見てもなき母のみ星のひかり今ぞきらめく　上毛　青木もり子
○
松の樹に馬つなぎ置きて馬子二人青葉の蔭に語り合ふかな　茨城縣　小堀みどり
○
夕風に君が片身の笛取りて泣く日ぞ多し青葉が宿に　下總國　相川みよ
○
うとうとゝひるのつかれにまどろめば世に亡き人のおもかげ見ゆる　群馬縣　星野すみれ子
○
影を追ひてこゝに二萬里しかもなほ行手遙けく身は疲れたり　駿河　白衣雀
○
足柄や青葉み坂に行き暮れて萩の小枝に水雨そぼふる　茨城　矢口波津子
○
我死なば香りゆかしき白ばらに姿かわりて咲かほるらん　麻布　福谷以智子
○
めざめては物皆われに美くしき綠野をめぐる晨夏國原　小濱　山中薫子
○
いさご白きはまべに立ちて涼みおれば松の葉ごしに月出でにけり　奈良縣　晴登子
○
姉上の逝きし其日に似たるかな庭の楓にせみの聲して　紀伊　室谷忠子
○
千鳥飛ぶ金色そみし波の上夕日斜に白帆來る見ゆ　上毛　金井春子
○
山里の冬をさびしと人はいへど君しゐませば淋しくもあらず　千葉縣　飯塚美穗
○
なき母の昔しの寫眞手にとりて涙だにおへしすゝはらい哉　北見　氏橋つる子
○
すみわたる水をかゞみにてらしみてこゝろのくもりきえうせにけり　石川縣　かしく
○
へだてなく見るにも涼しあしの葉に風吹き渡る夏の夜の月　大森驛　平尾有秋
○
亡き姉の柩を送る船の中玄海灘の浪おそろしき　小石川　山崎陽
○
さすらひて暫し身をゝく柴の扉をやすくもたゝく軒の青柳　伊豆　尾崎そひや
○
晴るゝかと思へば曇りて定なく降るや梅雨のさだめなるらん　信濃　桐原梅香女
○
五月雨の晴ぬ雲井にほとゝぎす闇にまぎれて聲ぞふりぬる　横須賀　大西園子
○
笹船の泡にゆられつ流れ行く菖蒲咲く根ぞ小川なりける　愛知縣　永田舞鶴子

○　備中　大西好子
枕邊のともしうすれて秋風のあまど叩たきて夜を明しけり
○　沼津　渡邊とよを
夜もすがら明日の煙りの代にとて小舟漕身と知るか月影
○　水戸　君子
山中の清き小沼に藤の花かげさす見えて小鳥なくこゑ
○　常陸　豐島皝子
栞にうつりて匂ふかり衣あすもきて見む野邊のすみれを
○　紀伊　尾上子
さみだれの空はれてにそりのこの夕軒ばに月のおぼろにてらす
○　下總　內藤秀子
みどりなる芝生の上に少女子がながき春日を遊び暮せる
○　埼玉縣　淺見なみ子
白兎あまた子兎つれ出てしさまして飛びぬ秩父嶺の雲
○　伊豆　白露
さらぬだにしめりがちなるこの頃なましてや君のたよりなければ
○　備中　遠藤芳子
かぐはしきみどりの草原我領とおごりてはゆる鬼薊かな
○　日本橋　小林里子
繪姿に亡き人戀ふる寂しみを鈴虫鳴きて細き灯ふくる
○　東京　さくら子
幾度も小窓によりて眺むれど誰れも訪ひ來ず今日は暮れたり
○　上毛　女文子
祝餅せめて招きし人さりて空しき小屋に五月雨ぞ降る
○　越後　野董子
夕日影峯の松には見へながら野路には騷ぐ夕立のあめ
○　筑前　青葉女史
國の爲め奥城の露と消し君の勳わ千代に語り傳へん
○　岐阜縣　松井秀枝
植へ果てゝ家路に歸へる早苗田に夕風吹いて月ほの見へぬ
○　下野　三香淵月

波の邊はうす墨色にくれ行きてかしこもこゝも笛の音する
○　岐阜縣　大西英子
塵多き都を捨てゝ只ひとり住みても見たき野の小家かな
○　岡山市　橋本芳子
三千人の姬化粧して高殿に居ならぶさまに雛げしの咲く
○　丹波　和田しげ子
うせし子のうゑのこしたるいとはぎの今をさかりと咲きみだるかな
○　名古屋　淺野米子
山の寺無住の庭に松老いてひとり得顏の蟬時雨かな
○　奈良縣　芳野浪子
朝月の桁に濡れて霞晴れてよしの川瀨に歌人
○　下谷　宇津木櫻花子
世は入れず世に入れられず先の世に如何なる罪や吾犯しけん
○　神田　勝原榮子
尺八の音ながれよる窓の戸に小簾は涼し月の影ちる
○　赤坂　森英子
三井寺の鐘のひゞきにあらそひてともし火つくる夏虫のかげ
○　加賀　あけぼの
月出てぬ誰が雅人のかたみぞや眞紅の絹に露おきあまる
○　近江　西村悅子
世をすれて渡るもよしや難波江の蘆間のかにを友垣にして
○　熊本縣　桑原露子
病む母のみ腰もむ夜の灯はうすれ涙ながらに時鳥きく
○　下總　秋山花響子
羽ずれしてとびゆく鳥をながめては君戀ふおもひいよゝ增りぬ
○　伊豫　曉子
たゞならぬ香さへあしたにたゞよひて夕月白しくちなしの花
○　水戸　重子
ふわ〳〵と螢とびかふ夏の川海士の子等の四ッ手あみひく
○　和泉　白ばら女史
あきらめむ事もや得せず卯の花の垣根に立ちて君思ふかな

○ 丹波　野原百合子
うるはしゝ水枝さし添ふ我庭の梅の青葉に朝風ぞ吹く
○ 若松町　秋子
五月雨に色まさりける青柳も誰見かへるや秋の夕べに
○ 大阪　はる子
露もてる月見の草に風たちてなく音とゞめ雨蛙かな
○ 醉田　佐藤柳子
長老の酒に興ある作り垣昔のまゝの黄菊白菊
○ 須津　芳子
たのしみも苦もうちすてゝ父と子がはなれ小島に月を見るかな
○ 羽前　梅津琴和女
黄昏の黄色樺色とりどりに声まに映る夏の夕暮
○ 北多摩　無名子
いざきませ千本松の夕涼み波のつゞみに松の響きく
○ 阿波　西野恒子
時も時ほのかに聞ゆ笛のねにこその今宵ぞいとなつかしき
○ 信濃　山字真綠女
湧き出づる清水に影をみがかせて靜かに淀む夏の夜の月
○ 周防、吳　津子
涼しさや心ありげに散らる螢の路を我一人行く
○ 筑前　綠葉女史
啼く蟬の聲靜まりし夕暮に月待つ陸の庭の涼しき
○ 小倉　田山つる子
見ぬ戀をかこつ涙か否あらず病にやせし君をしのびて
○ 山形縣　やまぶき子



更衣　のぶへ

大御代をなにうしとてかこゑたてゝなきわたるらむ山ほとゝぎす
○ 羽後　伊藤咲子
最上川水の流れのきよければこゝろとむらん夏の夜の月
○ 橫濱　野崎かつ子
風死して入日の影の赤々と殘る古城の松に懸れる
○ 陸前　松井岩子
漕ぎ迷ふ身は難波江の捨小舟あしのかた葉に物思ふ哉
○ 秋田縣　富子女史
伯母が庭に小鉢片手に花植ゆる人の袂のながう地にひく
○ 對馬　菫桂子
鄙すまい妹は雨戸をそとくりて髮くしけづる卯の花月夜
○ 信濃　露月子
惜しと思ふ秋に別れし袖よりや時雨のあめはふりそめにけん
○ 德島縣　町　菫子
消き谷流れは深き夏草に光るや落つや螢とびかふ
○ 大阪市　眞田芳子
溪添ひの十戸の小村夏たけてまひる靜に百合のはな散る
○ 山形縣　鈴木とく子
古る里のはぎのはなつまひもときてかへるをいつと待ちにまつらん
○ 神田　松本多美子
しめり土少しもたげて筍やわが初戀のかたちと生ひぬ
○ 靜岡縣　志らぎく
さみだれに糸くる昔しのばれてそゞろ戀しき故鄕の空
○ 常陸　西野はる
村少女草かる堤湖に近く朝月さして夏の夜あけぬ

○千葉　勁子
少女子が里の溝川堰き止むる早苗は植ゑし餘りなるらん

○福島縣　今井きくの
五月雨の空うらゝかに晴れて木々によろこび泣くせみの聲

○鹿兒島　山本さち子
五月雨のやみて小川のやなぎかげ夕風すゞしほたるとびこふ

○成田　きさえ
落つ瀧津せをりつ姫が植ゑにけん岩間に根ざす白百合の花

○麹町　野村光子
星月夜涼風かほる欄干に匂ひゆかしき京の舞姫

○龍紋　少女
山畑に雲かと見ゑて梨の花今を盛りと咲にけるかな

○豐後　富來つれ
五月雨の降る度毎に我思ひ故郷の田植戀しかりけり

○秋田縣　いちじゆく
さだめなり恨もあらず罪もなしはかなきすぐせ獨りうたはん

○鹿兒島　小牧若江
何げなく空飛ぶ鳥にうかされて思はずはまる水のたまりに

○横濱　藤彩あき
川すゞみなつかし人と欄に凭り闇に消えたる螢を思ふ

○下野　梅澤哲子
羅の君は玉簾をあげて金魚よぶ紺の若人召す京の街

○和歌山　木下美香女史
菫咲くまろき小丘に林たてゝ松原越しの海を眺むる

○靜岡縣　森下富士子
渡し呼ぶ聲もかすかに京の子の姿やさしく紫陽の花

○羽前　杉葉女史
色褪せし庭の白薔薇散り初めて見慣れぬ鳥の枝に鳴くかな

○山形縣　樋口かれ子
春は來つ庭の千草も咲き初めぬ笑む梅ヶ枝に鶯ぞ啼く

○靜岡縣　石原時子
はたく／＼と柴の戸おとづる雨の音を現心に亡母來しと聞ぬ

○宮城縣　惠津子
奧山に假の夢路を辿る身の心細さよ谷川の水

○伊勢　藤月女史
のうをやみて打ふすまどの春雨にまだひるながら夕こゝちして

○熊本　島永雙
ものうきを誰に語らんよしもなき今日此の頃の五月雨の空

○廣島　影山笑枝
聲きかばとひても見まし杜鵑待たるゝ身にも恨ありやと

○下野　和田あや子
思ひきや若葉涼しき木のもとにさへたる月を君と見んとは

○松山市　齋藤春子
さらぬだにくもりがちなる我やどに涙添ふるな五月雨の空

○神戸　安達絹枝
西を行く雲見る毎に思ふかなわかれし君の上や如何にと

○米澤　樋口夏月
菖蒲草かひなく沼に繁る網引く人もなき五月雨の空

○三河　瀧口さい
鶉のこゑもきこえて水車めぐる川べに秋風ぞ吹く

○愛知縣　初枝
なつかしき君と別れてはや三年聞え暮すや荒磯の夏

○丹後　朧の子
故里の花にそむきてこゝに四年そゞろに戀し柿赤き村

○高取　あさ子
ふる郷に病知らする雁おきてうつゝ心に虫の聲きく

○三河　まつ子
思はずも螢る狩る子に笑はれてまれしひなうた瀧に外らしつ

○鹿兒島　小牧流星
五月雨の降りしく夕に一人旅いづこにたのむ宿とてもなく

○淡路　國分董星子
ぬば玉のゆめに相見しその日よりむれの思ひはいやまさりけり

○ 栃木縣　宇賀神　くに子

夕立ちの空はあとなく打はれて月影うかぶ池の靜面に

○ 尾張　長司春子

繪日傘は都大路の夏たけぬ櫻散りたる夕日の窓も

○ 佐世保　蒼　生　子

此の歌も此の水跡もとこしへに君がかたみとなりにけるかな

○ 福江　中村しづ子

夕暗にあたり消々しき白百合を塵のこの世の光りとぞ見る

○ 神田　み　む　ろ

なき妹と十年の昔わかれ來し思出多き村はづれかな

○ 淺草　よ　し　江　女

洛外や繪日傘二つ並び行く柳の堤夏霞して

○ 安房　靜　子

手に取れば風もなつかし唐團扇此絹織りし人は誰が子ぞ

○ 沼津　飛　奈　久　枝

山水に入れるかた田の苗代に秋のみのわを祈る賤かな

○ 神戸　非崎なを子

大洋や人居るらしき小さき船の浪にしろ／＼浮いて居ぬ

○ 遠江　鈴木三榮子

夜雲に月出入りするまたゝく間草生ひ枯れぬ人生れ死しぬ

○ 若狹　内田榮代子

我歌よ燒かば人見ぬ蝶となりて君が君が今宵の夢に舞ひ入れ

○ 大和　よ　し　の

深山路の楠にせみの聲たえて巡禮ひとりかれたゝき行く

○ 本所　松本晴子

寂しくも暮るゝ御堂の鐘の音に樹下の闇へ子今たちあがる

○ 岐阜　篠田とみ子

幼な子に昔語りてふと見れば鏡のうちにほゝえみてけり

○ 武藏　東　虹　女史

うすくこき野邊のみどりの若草にあとまで見ゆる雪のむらぎえ

○ 紀伊　翠　子

夏の夜ははかなくあくるものながらひとりねる夜ぞ明かしかねぬる

○ 京都　玉津女史

相似たる運命と泣きし人の子にせめて行く末神幸たまへ

○ 陸前　安　子

姉君の愛にし薔咲きそめぬ去年は髻に今日は御墓に

○ 牛込　紅　薔　薇

越へて山幾重の遠に在る君よさびしかるらし我も淋しき

○ 筑前　撫　子

高く飛び低くなりては露の上にたのしき夢を結ぶ蝴蝶は

○ 佐渡　谷川桂月子

薔花異地の春のみ里へと蝴蝶をのせて流れ行く哉

○ 根津　木檜好子

嫉しみて咀ふ惡魔か小嵐か惜しき香奪ふ消き怨や

○ 福島　白　菊　女

むつびあいし昔忘るな撫子よ八重の雲山立ちへだつ共

○ 茨城　矢口波津子

姉君の病みます窓に春立ちて池の藻の花雨にみだるゝ

○ 讃岐　香川くに子

夏としも思はぬばかり涼しきは秋をいつわるのきの松風

○ 芝　増田秀子

ゆくりなく君と相見て面はゆみ螢もとらで家にかへれり

○ 岩代　三河入重子

またしても歌なきやめて籠の鳥鳴呼悲しげに空見つめたる

○ 豐前　花　の　や

みち汐の遠音の響や磯なれ松海の女神ぞ春の曲舞へ

○ 越後　村山けん子

牧童の草ぶえ遠く野末暮れてはやたそがれの鐘なり渡る

○ 新潟　齋川幸

諸共に見し世の人の影無くて高殿淋し秋の夜の月

○ 伊勢　三輪葉津惠

あらゝぎや赤城平のあさばれを蟬の音とほき宵嵐かな

○　　盛岡　佐々木幸子

咲く花は昨日の夢となりはてゝ青葉のかげに杜鵑なく

○　　大和　受田さくら子

下くゞる石間の清水せき入れてむすぶ袂に秋風ぞかよへる

○　　濱松　大橋益子

白百合の花も萎みしたそがれに五月雨晴れてほとゝぎす鳴く

○　　兵庫縣　中野美波子

蚊やり火の烟の故とまぎらしぬ胸に秘めたる熱き涙を

○　　宮崎町　垂水かをる子

末ながく戀をさゝやく野の水に白薔薇ちりて日は暮れんとす

○　　大阪　室谷ひさ

はなれ家の障子のかげのひとやたれ糸くりうたのふしのゆかしさ

○　　京都府　あや子

妹とゝ木植え石おき二坪の少さき庭に月をまつかな

○　　神戸市　なみ子

大般の背にまたがりて月明り笛ふきわたる野の百里かな

○　　北海道　藤本島羽子

それとなく君がたよりのきゝたさに叔母のみもとをたづれても見つ

○　　靜岡　しらぎく

さみだれに来くるむかししのばれてそゞろ戀しき故郷の空

○　　後志　大塚良子

舟人の舟をはなれて涼みけり黒潮めぐる島の高樓

○　　長野縣　藤波子

たそがれてほのかにほう夕顔の棚の下なる二人の清き

○　　近江　三井つき代

君います島は何處と漕ぎ行けば藻の花白き姫が島かな

○　　神戸　たや子

五月雨にゆりとなてしこさきまじりやれたる垣も夏けしきなる

○　　札幌　安彦千代子

水の面のうつれる影は青柳のいろをふかむるしるしなりけり

○　　若狭　内田藤代子

花あやめ盛りの色もうつろひて亡き人思ふ五月雨の空

○　　奈良　園垣鈴子

月清き鎮守の森の齋をばそゞろに偲ふ梭を止めて

○　　上總　四之宮りやう子

枯れて立つ楢の林を白雲は北へ流れて富士見ゆるかな

○　　信濃　杜の少女

夕闇路野薔薇香の床しさに笑む頬れすれて螢ひかりぬ

○　　下野　菅谷とく子

藥びんならぶさびしき枕べに月かげさえて虫の音あはれ

○　　筑前　安部不二子

柳多き野の一つ家暮れ初めて鐘の音ゆるふ村に迫りぬ

○　　下野　鈴木雪子

牛吼ゆる赤城の裾野射干の花風にみだれぬ初夏の朝

○　　長野　古澤あき子

たをやめの薄紅にほう染めてはぢらふ風情はちす花咲く

○　　岐阜　白梅子

湯上りの人美しき夕庭を靜に渡るみどりの風よ

○　　丹後　鹽見千代子

洗ひ髪の雫滴る若き人小簾ごしに宵の月見る

○　　靜岡　牧野入重

一度は散らではならん櫻花散りてぞ後に歌はれんとぞ

○　　金澤　大池波子

御母の眞白き乳の乳房よりたりし乳汁かも雪の下咲く

○　　南葛飾　牧野松操子

朝夕に祈る我より病む父は身をばさかるゝ思ひこそせめ

○　　下總　渡邊やす子

瀧水の響幽かに夏の夜にかり寝の夢にいと更にける

○　　若狭　山田蕃子

鳴る鐘の響うすれて聞ゆなり小川の邊に虫啼く夕べ

○　　千葉　林楓江子

秋の風古昔に似たるうまや路の十戸を吹きぬ不二を彼方に

○ 錢函 金澤靜枝
淋しくも窓にこさめの音のしてゆきにし人を思ふ夜半哉
○ 出雲 白藥子
悲しげに五月雨の降るたそがれも嬉しくなりぬ君が文見て
○ 秋田縣 美沙尾女
かしこにや今宵はてん白雲の絶間に見ゆる沖の島山
○ 藤澤 泰子
なつかしき君ます國にかへりゆく雁のあとをば追ひてゆかんか
○ 下總 岩井しろ子
染盡す紅葉うつろふ青淵も紅深き秋の山川
○ 群馬縣 飯塚みどり
おもふことなしと人にはいひはすれど君とひまさば何とこたへん
○ 熊本縣 黒肥地雪子
鐘の音のおぼろになりて背の夢神にひかれて詩の境にいる
○ 岩代 宮原靜子
やよ花の君と別るゝ月影に散りし哀れのかゝ薔薇の花
○ 筑前 あさつゆ
胡蝶おふ乙女が袖のふれもあへずつゆこぼれけり山吹の花
○ 小石川 大谷幸子
絲やまだ朝顔の芽のせずと日記見てありぬさみだれの家
○ 上野 小暮雲雀子
夕立の雲現はれし旅の路や心細さに空仰ぎ見ぬ
○ 大三島 田村ため
百船の夕しほかぜに眞帆かけてかへるすがたのおもしろきかな
○ 若狹 早水その子
青葉影滑りて出てぬ眞清水の涼しき音に鈴虫のなく
○ 石見 秋山靜子



社頭 茨城縣 小堀みどり

雲間より見へつかくれつゆく月のむかしを忍ぶなの夜半哉
○ 福岡市 始子
色あせしあぢさいの花手折り來ておなじ運命に泣く日雨ふる
○ 備中 菅森翠水子
萩さくやその上みこひしあき風の家になかれし人をしぞ思ふ
○ 福岡縣 田中夢窓
雨晴れて釣りするなる遠方の島美しき初夏の海
○ 長崎 春聲子
初夏や草の笛ふき夕川の小舟にありぬわが思ふ君
○ 豊前 小草子
はなれ家にやくせし人も來給はて一人詩かく五月雨のよひ
○ 佐賀縣 鍋久米子
ゆく年のかたみに摘まむ花もなしあわれ淋しき冬枯の野べ
○ 横濱市 赤羽ひさ
夜た重れ待てどかひなき時鳥むなしき空に有明の月
○ 山梨 藤枝子
雨あがり淺間の山も眠が峯もうす衣かづく初夏の朝
○ 東京 秀子
音問はん人もなければほとゝぎすなく音を夜半の友とこそ聞け
○ 紀伊 池見澄香
いつかきし橋のたもとの夕月に亡き父戀ひてまたも泣くかな
○ 和歌山 白菊
少女子の辻占召せと淋しげに裏町通り西に折れゆく
○ 岐阜縣 白梅子
姫君のふりの歌のくずをれぬ白百合かほる夕の庭に
○ 下野 廣子

五月雨うす化粧ひせし紫陽花の露にはふにかむ姿美し
紀伊　美那子
○
雛鶴は一日〳〵に生ひたちぬ白椿散る雨の晨を
波島　白蘋
○
三日月は波にゆらめき涼たどる人漁艇の櫓の如くして
小石川　米成女史
○
友にかよふ我心こそ友がまた我にかよはす心なりけれ
信濃　世良田ゆう子
○
楠の花落つるを数ふ梅雨のまど雞のうたひれむげに聞ゆ
下總　神田みち子
○
白鷺は春日の宮の巫女のさま眉粲ひかぬ清らかさ哉
長崎市　平山きさ子
○
七草の花の雫か萩のせて紅葉浮べて流れ行く水
下野　栗原くに子
○
紅の襷をかけて田植する乙女の唄を可笑と聞きぬ
秋田市　郭公子
○
物おもひ獨りまどろむ夜もすがられやもる月の影さやかなり
鹿入の里　蝶子
○
夏月や畦道傳へ辿り行けば稲葉末の露のサラ〳〵と散る
長崎市　峯時子
○
曇れども心ばかりは晴にけりあつさ流るゝ夕立のあめ
長野縣　山田くに子
○
方十里日は赫燿と照りつきて背みどろはく水銹沼かな
筑前　權藤つる子
○
歌反古の積りし数は幾拾枚歌稿は成らず夜は更けにけり
秋田縣　佐々木貞子
○
山かげの千五百の槻の枝ごとにゆするか思とふ蟬の聲かな
千葉縣　渡邊汀子
○
たかやして歸る夕べに月仰ぐ川ぞいの道螢飛び散る
上總　ひさ子
○
うなだれて秋の花さく夕野路をかへり見がちに行きにし人よ
深川　篠崎澄子
○
ほとゝぎすなく音淋しき夕空にかすかにひゞく山寺のかれ
八王寺　細流女
○
心なく嫁ぐ身かなし雨の夜に王昭君の琵琶歌をきく
下野　紅波女史
○
風こもる蟲がふせやの軒端にも涼しく出る夏の夜の月
宮城縣　野川富智子
○
草の香に更けゆく里の夢守りて月うすき夜を螢とびかふ
群馬縣　芳山常盤子
○
美しき今朝咲き出てし朝顔のなどつかの間にうちしぼむらむ
茨城縣　橋本小繁
○
美しき夕日の光り背におびて我が屋を急ぐ子待つ若うば
下野　藤田艶子
○
今日もまたつとめ終りて歌をよむ小松かこみて團欒せる家
我孫子　林君子
○
十五夜の月みる毎に偲ろゝ都の君や如何にませしと
遠江　戸塚千歳
○
五月まつ月はあやめにとさゝれておぼつかなくも鳴く時鳥
埼玉　はなぞの
○
夕立の降りし其あとなつかしやいとゞ涼しき日暮の聲
上總　能城美代子
○
愛らしき蝶の翼にわれ乘りて天つみ園に行きしは夢や
南湖院　相樂きみ子
○
幾度かむかししのびて我なきぬ春は花さく岡のほとりに
河原　幾子
○
たれ人のすさびの笛か遠方に靜に消えぬ淡月の今日
鳥取市　由谷品子
○
新緑に荒れし古城の見へ隱れて思ひ出多し古里の水
安房　雲翠女史
○
牡丹咲く玉の椅子あり思ふ友夜毎に來れわが夢の宮
伊豆　原上ゆき子

友もなく遠きみ寺に鳴る鐘の音も淋びしき旅の夕暮
○　岩代　瀧谷てつ子

露深き深山の奥に秋立ちて水の實をあさるましらなくなり
○　芝　武林朝子

刀打つ小鍛冶が家に咲きそめし夜目にも寒き寒梅の花
○　山形縣　やまぶき子

なにをしもさゝやぎつらむ糸やなぎきよけき水にかげをうつして
○　盛岡　千葉はま

慕はしき友に別れし我心知るや知らずやほとゝきすなく
○　宮城縣　紫子

朝な〳〵露踏み分くる嬉しさよ日頃愛ぬる小牛ひきゐて
○　周防　くちば女

こゝのみは人なき渓と思ひしを思はぬかたに鶯のこゑする
○　奈良縣　中富よしみ

渡し舟とはにおはじと別れたる君をふと見て胸はをどりぬ
○　清水町　大倉光代

南風夏野の小道日は照りて町の少女の帯赤う行く
○　福井縣　片山千里

夕暮と雨の降る日は殊更に逝かれし母の思ひ出さるゝ
○　遠江　すゑ子

柔らかき月の光りに夕涼み殊に涼しき川の月かな
○　仙臺　三好まさる

歌思ふ京の歌人歌ならず十戸の漁村たゞ涙のこゑ
○　大和　栗山英子



田植　岡山　久岡安子

今宵よりいづくに泣かん忍音を芭蕉葉枯らて小雨そぼふる
○　遠江　又平蝶子

月影もやどらぬ庭の木がくれを照す螢の光り涼しも
○　豐後　山茶花女

一時とて思ひ忘るゝ暇もなき吾故郷の兩親の墓
○　大分縣　小野いち子

ほとゝぎす鳴音をもらす五月雨のおちに聞ゆる馬のいなゝき
○　神田　吉田たつ子

春逝きて庭面淋しうなりにけりましろきばらの獨り匂ひて
○　鳥取市　山根綾江

います方立ち行く鳥のそれまでもいとなつかしき思のなしぬ
○　小田原　白麗子

なき魂の來る夜ときけばなつかしきかたらむ事の數もつもれば
○　福岡縣　白露子

師の君の御墓詣での歸るさに夕暮れごろをほとゝぎすの鳴く
○　遠江　林　正衛

若草の流るゝ小川夕日さし見えてかくれて赤き蜻蛉の
○　鹿兒島　犬飼たき子

むし暑き血の香もほのに豐熟の穗の匂りよ山百合の風
○　清水町　松永ふみ子

山川は昔のまゝに變られど朝に變る人の身の上
○　伊勢　濱　子

清水涌く木蔭若草蓐して童の華背に遊びぬ夢に
○　京橋　今泉磯千鳥

夕立に甦りたる緑葉の嬉びおどる雨晴れの月　鶴　入直子

○

たのみつる今宵の月は雲がくれ何見て忍ばむ共にみし夜を　豐橋市　いち子

○

いつの間に秋や來にけむ庭の面にさびしく落つる桐一葉哉　京都　芝田正子

○

入相の鐘の音長き旋繰れば鐘樓降り行く若僧の影　大分町　姫百合

○

いさり火は島山かげになりぬれど向きこゆめり海士の歌聲　遠江　松本綾子

○

蟲きくや母が昔の思ひ出をもらひ泣きしぬ少女心に　弘前市　諏方みよ子

○

沖につなぐ大船ほゆる曉や船を西して鳥啼き渡る　京都　島田千代

○

その名さえ聞くだにゆかし玉垣の露ににほへる夏の白菊　長崎市　常岡百壽

○

さよふけて雲間になのる杜鵑ねざめの床に聲ぞきこゆる　長門　伊東明星

○

かしましき蛙の聲も靜まりて庭の青葉に五月雨の降る　名古屋　原田琴子

○

ねたみもつばらのそしりにおん腕のみ寵さめて牡丹くづれぬ　大阪府　寺部君子

○

さのみにも思はて立ちし故郷の戀しをまさる秋の夜のそら　美濃　佐島みゆき

○

須磨の浦松の木の間に灯もりてよき人住めり葵吹きの家　土浦町　多歌子

○

音にきく琵琶の湖水のきよくすみ渡りけり秋の夜の月　小石川町　田さと

○

ほろ／＼と牡丹くづれぬ夕雨に何となき身も愁うなりぬ　麴町　孤蓬女史

○

月おかく薔薇經き出ばしまに君とりし香ぞ戀しき　鹿兒島　犬飼たき子

○

霧の富士都の空をながしめに山のかなたに思ひいろかな　神戸市　平林たつ

○

亡き母が優し御手に我髮を撫づと目覺めぬ曉方の雨　岡山縣　孝忠機美子

○

蟬の聲靜かに聞けば松が枝に鳴く音涼しき夕暮の雨　橫濱　坂本幸枝

○

青柳の靜かにゆれて池の面に寫りし影の美はしきかな　麴町　淺井千鳥子

○

ほろ／＼と杏子花ちる雨の宿君がうなじのあゝ美しき　本郷　きく子

○

あな戀し故郷戀し亡き父がとはに眠れる青桐の下　越後　月見草女

○

あめすぎて露ふきはらふ草村のかせにかげちる夏の夜の月　弘前　福井松江

○

亡き妹の魂か今宵も星二つ朽ちし歌樓戀ふるけはひし　牛込　梧葉

○

羽あらば飛びてもゆかむなうつせみの世の人なれば飛びゆきがたし　相模　野島さと子

○

三とせぶり乳母を訪はんとしいられて山路三里を妹つれて行く　岡山縣　萩霙子

○

夕立のはれゆくもりの下つゆにこぼれて涼し蟬のもろ聲　西多摩　森田なか子

○

母逝きて我にまつはる幼兒の亦きりホヽに淚落ちけり　群馬縣　芳山わか子

○

すゞみする夜の小川のやぶかげにかづをみたして螢とぶ見ゆ　越前　黒川好久

○

五月雨のはれて嬉しき朝日こそ厭ふ暑さの始めなりけれ　京都　山内彩子

○

君がぬらす袖の淚にやどりけりこゝろありげの月のおも影　越後　藤澤親郁子

戀夜を夫や待つらん窓もやらず油障子に灯かげ小さき
○上總　原　たき子

つはらかき秋の夕日を背におびて行きけるすがたの美しき君
○石狩　緒澤　源子

夕立の名殘の露のちる見えて涼しく掛る窓の夜の月
○茨城縣　永井　誠子

學び屋にかよう朝々まちあひて打つれゆきし追分のもと
○濱田　三明ちどり

涼しさに夕が岡の白樺のうつろに鳴きぬるこゝのふくろふ
○若狹　長谷川美尾

師の君の病いえしときゝてよりうれしく通ふまなびやの道
○越後　河内　米子

子等集ふ老木の櫻今散りて露に殘す匂ひこそよき
○豐南　藤の家　瑠璃子

蚊の聲もきこへずなりて朝戸出に青田一里の風心地よき
○横濱　壺間　秀影

たそがれのものしめやかや梅雨ちかき庭ちら／＼と卯の花ちりて
○珠　簾　子

君なげく柳が下に我も泣くうききぬ／＼や橋のたもとの
○淺草　とみ子

荒れ庵も物がたりめく心地しぬ萩ほの白き夕月の頃
○備中　篠原しげ子

終夜父の苦む枕邊に侍りて絶へず五月雨の降る
○越後　山口しげ子

明け暮れに戀しきものは古里のたらちね思ふ心なりけり
○下谷　區の子



かきもの　夬劍氏

沖の方大雨來せし黑雲は我父のせる舟を包みぬ
○大分縣　首藤　撫子

君が代のめぐみの露のうるほへる色香めでたき大和撫子
○大阪　大阪　露子

日毎／＼君を戀ふると書く日記のすへよいかにかならんとすらん
○上總　堀口　あき子

美しき石の一つと思ふ間に波たはむれにかくし去りぬる
○日向　野々上　佐和子

そゞろにも亡き母しのぶ此夕べ月はおぼろに夜はふけわたる
○千葉縣　多田　方子

ゆくすゑに榮ある君がいでたちになぞやわかれのかくは淋しき
○相模　北島　銀子

さ庭べをさまよふ程に雨降りて蝶はかくれぬ花びらのかげ
○和歌山　さき子

琵琶法師小雨する日を琵琶抱きて何とはなしに鬢の亂だるゝ
○東濃　野村　秀子

梓弓引きかへすべきすべもなし昔を忍ぶ古きうつしゑ
○水戸　島田小露子

花かほるゆうべ夏野に御手とりて君と相見る美しき虹
○小澤千島子

我やどの庭の白百合咲きにけり一枝手折りて母に送らん
○茨城縣　佐藤　隆子

光り行く都の方をながむれば唯なつかしや星の尾のあと
○神戸　東川　笑女

夕日さす瀧の小徑を分け行けば百合艶にして涼風ぞ吹く

文藝遊戯

涼み會（課題）

▲口上掛　涼み會開會の辭を述べたいと申込まれた方は都合五十八名ありました、發起人は一々其お言葉を聞きましたが若しそれを一々述べて頂くとすると開會の辭だけて一晩や二晩はかゝりますから止むなく、一方だけ出て頂くことにいたしました、そこて岐阜縣の白梅子さんの開會の辭がありますから皆さんに御謹聽を願ひます

開會の辭　岐阜縣　白梅子

今宵月姫御上覽の下に涼み會を催したいと存じまして女子文壇愛讀者諸孃へ申し傳ゑました處皆樣が一齊に御賛成下さいまして百里千里の道を遠しともせず定刻までに斯くも多人數御集合下さいました其嬉しさは迚も言葉では言ひつくせませんもう二分ばかりで開會致しまして色々面白い餘興を一々順を追ふてやりますから何卒御愉快に御見聞遊ばされん事を希望いたします。

【談話】

▲口上掛　これから演說、旅行談、見聞談の事もふあります、別々に口上を申上るほどの事もありませんから次ぎ〳〵に登壇していたゞきます

失敗せよ　美濃　臼井安子

私は皆樣に失敗をなさいとおすゝめするので御座います、失敗はどんな者であるかと言う其味をお嘗めなさらないでは眞の成功を說くべきてありません、世の中には一度や二度の失敗に落膽して、處世難を言ふお人がありますが、此お方達に至つては、到底將來の大成功を觀る事が出來ないのであります、御覽なさいあの桐畠に立つて居る桐はどうてありましよう、鋭い刄物で切られ削られて、幾多の苦しみを重れて、そして遂に眞の良木となるのではありませんか。（ヒヤ〳〵）

團結なる哉　紀州　美邢子

『タツタ一人て針を拵へると一日にやつと十本しか出來ないが十人寄合つて一部宛を受持て拵へると一日に四萬八千本出來る』とはアダム、スミスといふ經濟學者が著『富國論』の中に書いてあるそうで御座ゐます、皆さん寄りつ寄られつした力といふものは斯樣に恐ろしいもので御座ゐます、團結しませう團結しませう『團結』でなければ何事もダメてす。

何處の子守　長岡　秀子

一昨年の事て御座いました、二週間ばかり海岸へ友達と自炊て海水浴に參りました、其時毎日毎日汐を浴みるので、色が眞黑になつて、海士の子と見違へる樣になりました、其れに筒袖て戸端へ米搗に行きますから、或る日、近所の人達が私を見て、不思議さうに、御館さんどこの子守だれ、見た事のない人だが何時こつちへ來ただかれと云はれましたのには、何とも返事が出來ず、そこ〳〵にして歸へつて來ましたがいまだに一とつ話しにして居ります。

結構すぎて　川越　佐久間白堇

私が六月一日に日光へ旅行した時の事てす、麴町の西尾子爵と召使の女中と三人てした、殿樣のおかげで常人に拜見を許されない奥殿まで參りましたのは結構てしたが、一番困りましたのは、廊下を通ります時に、そこは朱塗りてぴか〳〵光つて居りますので、足がツル〳〵とすべりさう、もし轉んでは大變と思ひましてなみには步かれないのですもの、ほんとうに困りました。

女子の職業　あやめ女史

涼み會の席上をかりまして、皆さんに一言女子職業に就て、私の意見がお話致したう御座います、私は今日の日本婦人として、身分相當の職業を修めるのが、社會の最大急務かと思ひますと云ふて決して獨身論や、男女同權等を稱へるのてはありません、只萬一の塲合、或は家政を助けてゆくにも是非必要だと思ふのてす、そうして女子も社會の一員となつたなら、從來の樣に、女子を玩弄物として、奴隷視する男子もなくなるだらうと思ひます、が皆さんの御意見はどうですか、御一答をわづらはし度う御座います。

眞の涼しさ　日向　濱砂まさよ

野仕事して汗びつしよりになつてから、苔の生

へた麓から流出る玉の様な清水を飲んで、水陸の栄の上に座をしめる、そして四方の景色を眺めながら、涼しい風に吹かれて食事をします時こそ眞の涼さを感じます、舟よ團扇よとあこがれる人の決して及ばない涼しさてございませう。

心掛よき商人　攝津　芳子

私がこの涼み會へ出まして、皆さんに聞ていただきたいと存じます事柄は、元來私方は商人て有りまして、商賣上、四方から行商人が參ります、或る時、たしか上野の國の人てしたが參りまして色々な品物を仕入ました其時、商人の持參致し居る仕入帳なり、手控帳なりの裏表に、忍耐と言ふ字が記して有りました、私は其時よき教へを受けました、なぜなれば此商人にしても方々の商家へ參りますから、其中には先方が無理な事言ふ人も有るでしよし、又氣みじかな人も有るでしよ、其時の用意と存じます、男女にかゝわらず、一つの成功を祈る人は、此忍耐が無ければ成功するものでは有りませんと思ひます、不肖をもかへりみず斯は述べました次第てす。（謹聴）

柳芝生　西多摩　森田なか子

涼み會のお笑ひぐさに一寸申しあげますが、私の土地ては近頃秋蠶のためにおぼんは九月一日にのびたのてす、がやはり踊りは例のやふに水門側の柳芝生て催すのてあります、何處ても彼處ても白繭をうづ高く積んで、待ちもうけた九月一日には村中の若い娘が四五十人、赤い薔薇の簪に、白地の裕衣のお揃ひて、桃色の襷を房と結んで、例の柳芝生に集るのです、やがて各自の順取りも出來て、手ばたきの調子もよくにこやかに無邪氣な口よりもれる歌聲は、静かな水音に和して「加茂や笠城は山家でごーざるなーぜに山家に舟がつく、よさこい／＼」其ときに川風は桃色襷にひら／＼と、觸れて簪の花は今にも散るかと思はれるやうてあります。

（當選一等）満場拍手喝采

【お伽噺】

▲口上掛　唯今は盆踊のお話て誠に面白く聞きました、偖て次にはお伽噺をして頂きます、是も長いのが澤山あるのですが、時間がありませんので、二三人の方にお願ひ申しました。

形見のなでしこ　丹波　難波愛能

今年女學校の二年生の衣子孃のお手箱の中で或日談話會が開かれました、先づ、會長リボン孃の開會の辭が濟んで、簪孃や櫛孃その他二三の人の談話が拍手の内に終ると五番目に演壇に上つたのは造花の撫子てございました。

「諸孃‥‥」と優くお辭儀をしてさて話出す様「ご存じてしよふが皆さんに初めてご懇意になり掛けましたのは去年の冬丁度水仙の花が咲き初めた頃でした。其時迄私は玆から三里計距れた百合子さんと云ふお孃さまのお家に居ましたのです、其方は今の孃さまの、お妹さんて、それは／＼お優しい方てした、それに何故其お手許を離れたと思し召す‥‥私はお話しするも悲しくて耐ません。丁度去年は、菊花が萎れて了つた頃、そのお優い孃さまが、ふとご病氣になられました。だん／＼ご病氣は重る計りです。遂々その冬お好きな水仙が香り初めたのさへ見殘されて天國へ旅立たれました、其時私をセツブンなさつて「撫子さん私は今から遠いお國へ行んてすよ、あなたや姉さんに別れるのは悲しいてすが、彼方には、父さまや母さまが待てらつしやるから私ば、どうしても、行かればなりません、あなたは明日から、姉さんのお側へ行つて姉さんを慰さめて上げて頂だい」つて其ままにがつくりなつて了われました。涙を拭き乍ら壇を降ると、其まゝ席に泣き伏した。皆も同じく首垂れて、拍手する勇氣もない。そして皆は思つた。「撫子さんが、一番孃さまの、お氣に入つてるのは其筈だ」。と。‥‥‥‥

蟇　南多摩　中島縫子

或る日の夕暮れ、山寺のお小僧が一人庭を掃いて居ると、箒が急に重くなつた「什麼したのだ

らう」と克く〳〵みると、箒の先に一匹の大きな蠅が目をぱちつかせて居た。意地惡のお小僧だから、早速箒を拂子に代えて「エヘン、汝元來何物を得んとして此處へ來りしぞ」と鹿爪らしく蠅に聞いたが、蠅は目をつむつて答えそうにもしない、お小僧は少しムッとして「偖は汝釋迦牟尼が数外別傳を氣取るか、よしさらば、乃公が怪力無双の如意を喰え」と、あわや箒を以て蠅を打たんとする處へ寺の住持が出て來た「コリヤ信覺(お小僧の名)佛子の身でありながら、五戒を破らんとするは何事だ」と大喝一聲、助かつたのは蠅、その慮傍の卯の花垣の下へノサリ〳〵……。

翌日の晩、住持が椽先で蚊遣火を焚いて居るとすぐ側へ例の蠅が來て丁寧に頭を下げた、そして寺厨から追出された蚊を、一匹づゝパクリ、パクリと取つて喰ひました、大慈大悲の住持に御恩返しをしたのでせう。

助けた螢　水戸重子

お湯から上がつて來て、一人で蚊遣火をたいて、えんの端に涼みながら、お庭をながめて居ますと、垣の外の方からふわり〳〵一疋の螢が飛んでまゐりました、取らうと思つて追かけましたら、不思議、其聲が蚊の鳴くやうな聲で、賢女お願ひですから私を可愛さうと思召すなら何か取らないで下さい、とかう云ふてのす、何故ですかときゝましたら、私は毎夜〳〵掃や何かで打たれたり、つかれたりして、身躰がいたくてたまりません、これから貴女のお庭で光りますから助けて頂きますとかう云つてホロ〳〵泣いて居ます、私も何だか可愛そうに思つて、それからは螢を取りません、此螢は毎晩花壇の中の鐵砲百合の上に光つて居ります。(當選二等)

大鳴来

團扇の話　京橋　今泉磯千鳥

或る都の或る家に圓い團扇の團子と、四角な澁團扇の角次と言ふ二つの團扇がありました。團子は毎日〳〵お孃樣に可愛がられて居りますが、四角な澁團扇の角次は毎日手荒い女中達に使れて竈や七輪の火を起して居ります、そして「私は不幸なものだ」とか「あの團子樣の樣にお孃樣に使はれて見たいものだ」等と獨て言つて居ります又團子は團子で「あの角次樣は本當に不幸な人だわ、私は身代して上げたいが」と澁團扇の辛さを同情つて居ります。

話が變つて或る日のこと、團子と角次は何か相談しました、そして團子は臺所に行きました、角次は中間に行つたのです、猪角次の身代をして上げ樣と思つて行つた團子は餘り女中達が亂暴に使ふので「あゝいたい！そんなに使つては私の骨が折れてしまふわ」と有ん限りの聲を出して叫びました、が、女中はいくら搧いても火が起らないので怒つて中室へほうり投げました、投げられた團子は不思議！お孃樣の膝の上に乘つかりました、お孃樣は今「暑い〳〵」と言つて澁團扇を使つて居りましたが何うも思う樣に風が來ないので、ほう〳〵を見廻して居つたのです、そこへ今の團扇が飛んで來たので大喜で早速使ひ初めました、「妾何うしても此の團扇の方がいゝわ」と團子に接吻しました。

傍に居た澁團扇の角次は其を見て「あゝ僕はお孃樣に愛さるゝ事を望んで居つたが心得違であつた、僕は女中達に愛されゝば宜のだ、いざや職務の火起しを勵げまふ」。と言つて臺所へ歸りました。それから後と言ふものは團子はお孃樣に角次は女中達に可愛がられて居りますと、さゝめでたしめでたし。

花子さん　南葛飾　中里さん子

盆の樣な月が昇つたので花子さんは一人で散歩に出かけました、川岸へ行きますと水が月の流い光りを碎いて何んとも言へぬ眺であります、花子さんは、あゝいゝ事、私月の樣な心になり

たいわ、あゝ月の世界へ行きたいなアと獨言して居りますと後の方で孃さん、そんなに月の世界へ行きたいのと聲がしますからふりかへると雪の樣な髪をした、お婆さんが立つてますから、花子さんは怖い樣な心地がして逃ようとすると、お婆さんはやさしく何もしませんよ、月の世界へ行きたくば連て行つてあげますよと、言ふから花ちやんは安心して、それては私を月樣の所へ連て行つて下すつて、えゝさあ私とゐらつしやい、花さんはお婆さんと參りますと、まあ何とも言へぬ音樂が聞えて花さんは暫く夢心地で居りますと、いつか月樣の前へ參りました、おじぎをしますと月の神樣はおゝ可愛い花子よ、そちのほしい物を取らせろ何なりとも望めと仰せられました、花子さんは私はたゞお月樣の美しい御心が頂き度うございますとお答へしますとなゝ其の心を忘れず勉めよとのお言葉お花さんは氣がつくと夢でありましたそれから花さんは一心に勉强して今は名高い女子文壇涼み會の會長になりましたとさ。（當選三等）

めでたし〳〵

【朗　讀】

▲口上掛　今度は涼み會の爲に新作された唱歌と和歌の朗讀でござゐます

唱　歌

鳥取市　上山千重子

ひとむらしげる
芝生むしろに
木の葉流るゝ
夏な忘れて

合歡の木陰の
少女はむつぶ
涼しの小歌
風に洩らしぬ

五人の心

奈良縣　中富よしみ

私は小說中の人物を取つて五人の心を歌によんで見ませう

節省の日　兵庫縣　藤榮女



我かおもひ愛の泉やとこしえに涌くらん富の山に住まばや（お宮）

やる瀨なきおもひに堪へぬ世を捨てゝ黄泉の里に君を待たばや（浪子）

十とせ餘りもだえも實にや夢なりき再び愛の波にうかびて（環）

淸き香にわれ醉ひたりき愛の花とはに薫れよ友がみ園に（初野）

かたみ多きえにしの糸はきれ果てぬ若き力はとはにつゞかて（綮）

○　安房　農夫女子

美しき友よ仰ぎて口ふれむいま初夏の空みどりなり

○　熊本　つゆ子

ゆら〳〵と若葉のゆらぎ樂して冷氣身にしむ瀧の音かな

○　近藤　登久子

夏しらぬ涼しき宿をおとづれてともがたりする今日ぞうれしき

○　德島縣　若槻淑子

すゞみ會女子文壇に開かれてリボンの蝶は席に滿ちけり

【滑　稽　談】

▲口上掛　歌は皆さんが眞面目にお聞き下さいましたから入代りまして至極をかしいお話、お笑ひぐさをお聞き下さい

窓をしめよ

攝津　森井せい子

これは近頃に有つたお話ですよ、私が電車で神戶へ行つた時の事てすがれ、足屋村から乘つたお婆さん、もう六十五六てしよう、そのうしろのガラス越しに日が射し込んで來るので、頭をあちらへやつたり、こちらへ傾けたりして、窓を閉める事を知らぬのてしよう、そばの人も聞

めてあげる方はありませんし、私も場所が遠いので閉めて上げたかつたけれど控へてました、するとお婆さんはたまらなくなつたと見えてそろそろ蝙蝠傘を開げかけたのです、皆くすくす笑ひ出しましてね、でもまだ閉めてあげる方がないのですよ、お婆さんは一向平氣でとうとう傘をさしたのです、車掌はびつくりして飛んで來ました「お婆さん傘を閉めますからどうぞ傘をすぼめて下さい」と笑ひながら閉めて行きました、お婆さんはすましたもので傘をすぼめて「ヤレヤレ助つた」、私あんな可笑しかつた事はありませんでした。（當選五等）

大笑ひ

まちがひ　福井縣　片山千里

妾は至つて話が下手なんでございまして、諸嬢さんの様に面白可笑しくお話しする事は出來ませんから、妾の大失策談をお話し致しませふ、丁度妾が女學校へ入學致しましてから二月目、博物の時間に、先生が教室へ行つて秋の席にあるピンセットを取りて來て呉れよ、と云はれまして田舍より出た當座で、英語などは知りませんから、ピンヘットと許り思ひまして、先生ピンヘットは有りませんでした、ヒーローしかと煙草を出しまして、大いに笑はれました。

電話のかけ初め　静岡縣　鈴木たかみ

私が上京して間もなく電話のかけ方を習ひました、稽古の爲だから天金へかけろと云はれここはながら電話の前に立ました、チリンチリンとならしたはいゝが、さて胸がドキドキする、耳がグワングワンして來る、やがて何番といふ聲が胸に聞えた處が、番號を忘れた、考へてる中に交換局からは、頻りに何番を連發する、そこで大まごつきにまごついたものだから、うつかり天ぷらを二人前と云てしまつた、後に大笑ひされました。

ちやうづ　石狩　繪澤源子

私が今春留萌見物に行つたかへり、天鹽山中の或る宿屋へ宿りました、翌朝起きてから何時迄たつても顔洗水も何も汲んでくれません、仕方がないから「早くちやうづをまわして呉れ」と言ひました、暫くすると頭の長い番頭が一人、私の前へ來てしきりに頭をふりまわして居る、私は何が何だか少しもわからず、おかしくつてたまらないのです、亭主を呼んて事の由を尋ねると、私がちやうづをまわしてくれと言つた言葉がわからない爲め、近所の學者の所へいつて聞いたら、ちやうづとは長頭と書く故、長い頭をまわせとの事だらうと思つて家中一番頭の長い者を選んでまわさせたとの事でした。

（當選四等）滿場笑聲起る

【福引】

▲口上掛　さきほどお渡しいたしました福引は澤山ありますけれど、當る人は五人だけですから、五本だけ私が代つて讀みあげます

○榊　（これはかゝみの前にさすと云ふて品物は「かんざし」です）

○トンネル澤山の峠　（品物は「夏のリボン」、うすひゝと云ふのださうです）

以上二つ出題者丹波の難波愛能

○遠くて近きは　（男女の道ではなうて「郵便切手」お分りでせう）

出題者は四多摩の森田喜代子

○本年の旅行先　（「白地の扇子」白扇さかしまにかゝるて富士の山です）

出題者はぎゑ

○日本婦人の歩き方　（うちはです、即ち團扇一本です、品は上等ですよ）

出題者京都市本郷しな子

【閉會】

▲口上掛　大分時刻も移りましたから、未だいろいろ澤山にお話もあるのですが、殘念ながら一先づこれで閉會する事といたします、閉會の辭を申込まれた方も多數でございましたけれど、此れも愛知の紫雲女さんにお願ひいたしました、お聞き取りの上は何ゝかお靜かに散會をねがひます。

閉會の辭　愛知　紫雲女

思ひ掛もない盛會で暑さもすつかり忘れて仕舞升た、皆様も嘸かし御同様と存升、誠に殘り惜い事てすが時間が來ましたのと場所が狹いので御入れ申す餘地がなくなつたので遺憾ながらこれて閉會致し升、皆様まだお暑い時てすからお互に御用心あそばせ。

涼み會萬歳！

愛讀者萬歳！

抒情文

文學士沼波瓊音先生選評

二等

○蚊やり火

岩代　服部水仙子

「疊たゝいてこちの人……」吃驚して擧げた顏を、ちらとご覽なされて其まゝごろりとお横に、珍らしくはないけれども、あゝまたかとばかり思はず胸迫るのを去り氣なく枕進めて、蚊遣りの火を掻きたてた。

「私しや悋氣でなけれども……一人でさした傘なれば……片袖濡れやう筈がない……」奥ではまだ母様がお寐みなさらぬのにと、ハラ〳〵しながらも私にはそれをお止め申す勇氣は無い。家を外にしてのお遊びも、皆妻たる私が至らぬ故と諦めて、千鳥足に夜半の門を叩く夫を迎へて、私は決して悪い顏一つしたことがなかつた。けれども夫は却てそれを喜ばぬ……やう見受けられる。今の唄……これとても決して偶然にお口にのぼつたのではないのだ。いつか恁う仰言つたことがある、愛すればこそ嫉妬といふものが生ずるのだと。夫は私の愛をひやゝかなものと思つてゐらつしやるのだ。私だとて、私だとて女だもの、つめたき閨を淋しく一人守りあかした曉、熟柿臭い息吹きかけられて、それて氣持ちの宜いといふことがあらうか、たゞ私は、家庭の團欒に飽くことが出來ないで、外に於いて慰樂を求められるのを、夫を充分に樂しましめることの出來ない妻の身として、假にも嫉妬がましいことが言はれようか、と常に謹んでゐるのに。成るべくならばと思ふ心から、如何したならば夫の意に叶ふかと、氣に氣を付けるが却てお氣に障るかして、鼻息を窺ふの、兢々としてるのは嫌いだのと、時折のお小言、伴ふ母様のお不興は素より覺悟の前乍ら、つれ添ふ夫のつれなさに、人知れず袖濡らしては、結ぼるゝ思に、おのづと閉ぢ籠り勝ちの、是また快活を好きます夫のお氣には召さぬのであらう。何も彼も知り抜き乍ら、心引きたゝぬ我身の意久地なさ、辛らき口に泛ぶ笑みの、むしろ悄らしい。嫉妬！女の弱點と戒められて居る嫉妬！それも今の我身にくらべて見れば、穂に出る程の嫉妬を喜ぶ弱點を

男の持つて居る以上、それ相當に必要なものではなからうか？それともこんな弱點を持つて居るのは、我夫ばかりなのであらうか？あゝ同窓廿八名の友、今は皆大方は人の妻である。會つて見たい。會つてお互にそれぞれの、不平、意見、夫に對する仕向けなどを、聞きもし語りもし、思ふさま泣いて見たい！さう昨日は我母校に同窓會があつた筈、それにしても出席した人達は、誰と誰れてあつたやら。あゝ世の荒磯の汐干の濱邊に、荒浪知らで遊んだ昔が懷かしい、戀しい。

それと氣付いてさゝふる間もなく、いつか頰を傳はつた一雫は、ぽとりと灰に小さな穴を穿つた。積んでは崩し、頽しては積みして居た炭に、燒けた火箸は指先にあつく、我に反つて思より覺めた。

「貴夫！ラムネ召し上りますか？」團扇をもつて靜かに風を送りながち、にじり寄つて顏さし覗けば、いつの間にやらすや〳〵と夢に入つて居らつしやる。稍々くつろげた裕かな其お胸に、私といふものはどれだけ席をとつてゐるのやら。蚊遣りの煙りは這うて亂れて青葉を渡る風サラ〳〵、軒の聲は高うなつた。

（評）緑雨の小說を讀む心地す。

三等　○靈まつり

京都　てう子

今日は要ちやんの新盆です。

要ちやんは私にはたつた一人の大事の〳〵弟でしたがあゝ、こんなにみ靈祭をせられるやうになつてしまひましたもの、何が悲しいとてこれほど悲しいことがありませうか。

彼の薔薇の頰、大きい眸、雷のやうな唇元、年は五つの可愛いゝ盛りて、其又賢かつた事つたら、よく人が死ぬる子はみめよしと申しますが、ほんに是を思へばみめよくは生れぬものでございます。病み着いたのは一月後の夕方で、其翌日は早……私が使の者に驚かされて、夢心地に學校から歸つた時は、あゝ早や……呼んで答へず叫んで聞えず、私は斯うと知つたらいかに試驗中とは云へ學校へは行かなかつたものを。

ですが彼の他愛もなく眠つて居るやうな姿がどうして死んだ要ちやんと思へませう、現に其前日までは、腕白大將となつて騷いで居たてはありませぬか、私はどうしても死んだ者――再びかへつて來ぬ者とは思へませんてした、小さい棺に入れられた時私は、要ちやんは死んでは居ない、乾度元の要ちやんにかへるから、せめて今晚だけでも家に置いてと泣いて母様に迫つたのです、あゝ夢になりとも斯うなるものならよかつたらうに。

要ちやんの枕元へは、日頃好んだおもちやから、帽やサーベルまでいつぱいつまつた。そして夜に入つてか

らとう／＼お山へ…………。
それでも私の夢は醒めませぬ、四五日經つても同じ事、毎日ご飯時が來れば、ちよこ／＼とあの門からはいつて來さうに思ふ、夕方になれば向ふの小川の處から叫んで來さうなと待たれる。十日たつてもまだ醒めませぬ、風が吹けばお山の松がごーつと云ふ、さうしたら要ちやんは夢を覺ますであらう、雨がふればしみこんだ一滴の水が夢を破るのではあるまいか、醒めたら嘸苦しからう、もがいて居やう、飛んで行つて見やうか、夜になつたら地の下から呼ぶ聲がよく聞こえさうな、直ぐにも行つて見ねばならぬ、とこんなことを云つては幾度母樣を泣かせましたか、二十日たつても此疑は晴れませぬ、或時は門へ出て待つて見る、或夕は薄暗い家の內を廻つて何處かの角からフイと出て來さうに思ふては呼んで見る、けれどもかつて、彼の愛らしい姿の幻のやうにも見えた事とてはなく玉を轉ばすやうな聲のついぞ一度も現に響いた事はないとは。斯うして三十日をへた今日は舊七月十五日で要ちやんの新盆を迎へたのです。母樣が要は子供だから却つて此方を喜ぶであらうと、燈籠のかはりに提灯を點じました、佛檀には日頃要ちやんの好いたものを捧げましたけれども生前彼程喜んだお菓子だとて決して減りはしませぬ。私の夢も漸う醒め初めました。



おそろひ　大坂　越尾とみ子

母樣は、もう極樂へ行つて居るのだと被仰います。要ちやんは彼んないゝ子だから彼の世でもやつぱり皆に可愛がられるであらうが、それにしてもどんなに遠い處であらう、よく道を迷はずに行つたのでせうか、生前より要ちやんを可愛がつて下された、私と仲好の竹さん處の婆樣が、やつぱり要ちやんのやうにお山へ行つてしまつたのですが、其時母樣もさう云つて頼んだと仰いました「要も行つて居るからどうぞ面倒を見てやつて下され。」と

六道の辻は非常に廣いと聞いて居る要ちやんはいくら賢いとて子供だもの、屹度迷うたに違ひない、困つて泣いて居たらば、後から行つた婆樣がこちらへ／＼とオイデ／＼をして招いて下さつたであらう、賽の川原は大變大きいと聞いて居る、だから婆樣が、あぶない／＼と手を引いて渡して下されたであらう、ほんとにどれ程遠い處であらうか、こんな處へ行

つてしまつたのですもの、要ちやんはとても歸りはしますまい、あゝ、要ちやんは。

（評）一字一涙製りし文には非ず棺中に夢の破れむを思ふ迷は余も嘗て抱けり死別のいたみを知らざる人は思にも思はむか。

四等　○いぢらしきもの

土佐國吾川郡弘岡上村　深瀬ます子

朝な朝な露白くして野には綠の色もなき中にたゞ一本の紫美しく咲き殘りたる野菊の花

老いほゝけたる山賤や漁翁などのゆくりなくかしこき御あたりより御言葉賜りぬなどの事傳へ聞くだに涙さしぐまれて

雀の雛四つ五つ籠に入れ軒端にかけて外なる親鳥にはぐゝまする折しも性悪猫のそれに飛びつきてあはやと思ふとたん親雀がけたゝましくなきさけぶ聲

幼き時の友を尋ねしに其人の夫巡査を勤むるがいつのまにか裏口より御茶菓子など求めて來られしを見し時美しからぬ乙女子の癖ある髪も淸げにとりあげ白きもの薄らかにしたる

乘りつけの車夫の此間は戯き過ぎて居ましたなどいひながら憐なる金入よりそこばくの金とり出して返さんとする

きのふか地赤に襠美しく嫁ぎ來しと噂さゝし花嫁の今日ははや白手拭目深に野良に出て人と共に鋤鍬とりていそしむ樣を見る時

春の日柴取る人に從ひて山深く入りしが草むらの中に雉の巣あり母鳥は小さき雛幾つかを守りて身動きもせずにさも憐を求むる樣なる風してこなたを見詰めたる取らば取らるゝ程なれどなか／＼に手を下されず

我が娘をうひ奉公に出すとて母なる人の自ら行き、ならぬ中より新しき下駄など求め來りてはかするを見たる時

まだあどけなき幼子の公衆の前に出てゝさりげなき樣に物讀み話などしたる見れば涙流るゝこそわりなけれ

三十男の鬚美しきが國元の母とも見ゆるを電車の中の人中にて手をとり指さし示して優しくそれは何これは何と敎へ示す

友の嫁く日其人の妹にてまだ十二三なるが片隅にあるを見出でぬ我れも手持不沙汰に近寄りて何心なくお姉樣がいらしつてはあなたも御淋しくおなり遊してねといふにこらへ兼ねてやありけむわつと泣き出したりあゝよしなき事してけりと思ひぬ

（評）よく物の哀を知る人ならでは。

秀逸

○わが愛猫

南越 錦月女史

わが家に飼ひ養ふふじてふ牝猫は、いとさがしく、またかはりたる猫にぞある。

先に、我家に飼ひし牝猫は、白きとふじとの牝猫二疋を生みて育てあげ、まもなく急に失せしが、白は程近き家に貰はれしかば、ふじは我家に飼ふことゝなしぬ。ふじまだ小さき頃より、鼠を捕ふることいと巧みにて、親猫にも劣らず、我家のみか、隣家の鼠をも捕ふること度々あり、さて鼠を捕ふや、直におのれあるは我家のものゝ、あしもとにくはへて歸り、ほこりがほに鳴き叫び、己れらの頭をなでなどして、しばしほめやらずば、喰はむともせず、まいて夜半などみな寝ね靜まりたる後などにても、枕邊にくはへて歸り、いとかしましく鳴き叫び、誰か起き出でゝほめやらずば、一口だも食はず、これふじのさがしく又かはりたるその一なり。

ものいふことわりえも知らぬ獸は、すべて、牝と牡、牝と牡はそのなかいとあしく、よく爭ひせめぐものなめれども、此のふじは、同じ腹に生れたる、同じ牝なる白といとなかよく、程近きものから、つねに往き來するたびごと、白ふじの飯などをくらはゞ、ふじがたへにあとあるは背、あるは頭などをねぶりなし、ふじのもとに行けば、白亦同じ、まいてある年の事にてありけり、白もふじも、同じ頃子を産みたりしが、白の子は長へしも、ふじの子は間もなく死に失せけり、それよりふじは、日に〳〵白の許に通ひ、白と向ひ合ひて、白の子猫を抱き、其れを見ること我子の如く、共に樂み、ともによろこび、いと丈夫に育てあげたり、此ふじのさがしき、また變りたる其の二なり。

ふじ其のはらからと、仲良き事とて、其の子を愛しみ育つる事、いと厚く、他の猫などはその子少しく大きくならば、いとひてすげなくなすものなるに、此のふじはしからず、いと大きうなる迄で、良く愛しみ育てける、此れふじのさがしきかはりたる其三。

憐れふじは、ことはりわきまへぬ獸にてありながら其の行の正しき、其の情の厚き事よ、我等よろづの長たるものとても、其の行の邪しまなる上、其の情の薄きもの多きぞ、今の世の有樣なる、あはれ此のふじに鑑みてあるべき。

（評）よく國文の體を得たり。

○夏の夕方

周防 澄江子

美しい夕榮が水に映つて、まだ短い稻葉の尖きには玉の樣な露が昇つて居る、其間から涼しい夕風は湧いて來て浴衣の袖に一寸戲れて、そしてあちらの青葉山の

方へ小走りに渡つて行く。

翡翠が目玉をくる〳〵さして柳の枝にとまつて居るのを書いた、わたしの好きな絹團扇、たゝけばカン〳〵と音するのを拍子に取つて「一夕風涼し出ても涼まん」を小聲に唄つて靑田の中の徑をさまようて居るとわたしの足は殆んど自働的に、いつしか思出多き鎮守様の鳥居の下を越して居た。

忝しく禮拜をして、拜殿の椽に腰を卸すと、恐ろしい様な老杉の隙から少々暮色のにぢんだ紺靑の海の彼方に、まだ光りのない金色の月がとぼけた様に浮いて居る、最前からお百度詣をして居る女の子が小さな音てパチ〳〵と拍手し拜んで行く、十歳にでもなつたであらうか、無邪氣さうな目元に何處か憂愁の色を浮べて首うなだれて行くいぢらしさ、抱いてもやりたい様、わたしは彼の女に就いて色々想像して見た、お父さんの病氣？お母さん？

わたしは不圖、悲しかつたわたしの五年前を想ひ出した、お母ア様の爲めに、丁度あの子の様に毎晩お百度をしたので、そして或晩いつもの通りお百度をしてそしてお灯をあげて拜んで居ると風もないのにお燈明がブッと消えた、わたしは何なに愁しかつたでせうあゝ神様も遂に妾を助けて下さらないと思つて、わたしは息が切れる程泣いた、案して、あゝ其晩、木枯すさぶ夜半のころをお母ア様は他界の人とおなりなさつた。いつぞや學校で其話しをしたら河野さんなどは迷信だつて非常に笑はれたけれど、わたしはたしかに神様の「お蔭」と云ふ事を信じて居る、あゝげに、迷信とかなんとかけなして居る人こそ、苦も悲しみも知らぬ人だ、「お蔭」を知らぬ人こそ幸福な人なんで。

小さい楓葉の様な手から洩れる拍手の音が妾を冥想から呼び覺した、お可憐のあの子の後姿、妾あの子を抱いて抱きしめて、吾々の悲しい運命を二人して足る程ど泣きたうござんす。

膝に落ちた老杉の影が次第にあざやかになつて、風がひいやりと身に泌んで來た。

（評）作者の人となりを思ふ。

○歸省

佐賀吉子

昔に變らぬ千年の川名もなつかしい綠山に迎へられて私しは今故鄕の停車塲についた窓から外を眺めて私はまつたく失望してしまつた幾十の人はさつ〳〵と通り過ぎてしまふ誰一人見かへつて吳れる者もない又私も言葉掛くべき人を知らぬのである。今までのうれしさもなづかしさも何となく消えて元の沈欝な氣にかへつてしまつた丁度暗い穴にでもつき落された様な氣がして肩をすぼめてプラットホームを辿る。

父母なき身の故鄕に歸つたとて樂しみのある筈はない

よろこんで迎へて呉れる人のある筈はない私はとくに承知して居る承知して不運とあきらめて居ればこそ三年も故郷をかへり見なかつたけれども數ゐる友と云ふ友は皆歸省する面白い話しうれしさうな顔を見るにつけ聞くにつけ私はこらへきれなくなつた。三年かへり見ない故郷の記憶をおぼろに辿つて見ると何となくなつかしいのどかな山うるはしい川に接したならば幾分か慰められる樣な感じがしきりに湧て來る。かくて私しは三年ぶりの歸省を思ひ立つたのであつた少しの荷と共に汽車の人となつて都を離れた時さすがにうれしかつた。汽車にさへのつて居ればかぎりなく樂しい所へ行ける樣な氣がした。併し故郷に近づくにしたがつてたのしい望みが次第々々に薄くなり少くなつて故郷の地を踏むと共にあとなく消えて私しは蒼くなつてしまつた。空想からさめると今更都をはなれたのが口惜しくてならぬ心弱かつたのが殘念でたへられぬ私しは悲しみをくり返した歸省したのであらうか。

こんな思ひを浮べて停車場を去り町へ行つた車夫のうるさくつきまとふのを避けて私しは父母の墓まで疲れ切つた足を運んだ。

三年の間夢見た父母の墓今目のあたりあらはれた私しは其前へに跪く事が出來た。

胸のあふれは涙より外にないお父さまお母さま私しを早く御そばに御召し下さい私しのねがひは只これだけである。



お料理　田中舒江

二三日を身よりの家にすごして再び汽車の人となつた私が歸省してかんじたのは孤子のかなしさであつた益々ひとり子のさびしさを味つたに過ぎない。

（評）詩人的の所、所々に在り。

○夕の思

たま子

私は四月より戀しい故郷を去つて淋しい片山里の小學校に奉職して居ります、いくら國のためとは言へ誰一人知る人もない山里に來て居るのですもの古里ばかり戀しくつてなりません、雨降る時も風吹く時も父母はどうして居られるだらう可愛妹は何して遊んで居るだらうなど考へるともう〳〵家に歸りたくつていつそやめて歸つてしまはうかと思ふ時がたび〳〵有ます。けれどもいつ迄子供でもあるまいしと思ひ返して居りましたがこんな

に入梅で降つてばかり居るので考へまいと思つてもやッぱり古里が考へ出されてなりません此な雨降る夕暮はとしちやんをなぶつて淋しい歌を歌つてはねむらせて家に歸ッてお母さんにほめられるのが例であつたけがもう今夜はとしちやんはねたらうかそれともまはらぬ舌でおしやべりして皆に笑はれて居るだらうかなぞ思つて居るとふと。

をゝもり子守はつらいもの——雨風吹いても宿はないお母さんにしかられ子にやなかれ——人の軒ばで日を暮す——と淋しい細い聲が雨の中から聞えた、あれも戀しい親の元をはなれて他人の家につかはれて居る身さぞつらい悲しいと思つて一人夜具をかぶつて泣く事も有だらうなぞ思ふとあつい／＼涙が頰をつたはつてとめどがない私しはいつまでも／＼軒に立つて居て日が暮れたのを知らなかつた。

（評）子守歌聞くが如し。

○運命　　大坂　和田順子

草深い田舍で一生牛追ひや、馬追ひと一所にかうして鋤や鍬と馴染んで暮らすのかと思ふと、何だか殘念で人樣の身が羨ましうて、日々の勤めも手に着かず怠り勝ちなるを、これでは年取られた阿母さんの自分ばかりを杖とも柱とも賴つて居らるゝのに、這麼氣の弱い事では不幸と言ふもの、もう既に自分の一身は阿母さんに捧げてあるのではないか、それに暗に物をさぐる樣な、果敢ない名利を追ふ事を止めて、心だけなと穢れない神の國へ住はせたいと祈つたてはないかそれだのに這麼考を起すなどとは神の呵責が恐ろしいとは言へ、人樣の都へ遊學のやれ音樂の御稽古のと、羨ましい出郷、樂しげな歸郷を見るにつけ、聞くにつけ、流石自分も世が世ならばと人知れず袖に顏を押しあてゝ泣いたのも幾度か、二年三年は愚か唯だ一日のそれさへ思ひよらぬ薄倖の身、これが幾ら運命の神の仕業とは言へ、餘りに不公平ではあるまいか、同じ田舍で同じ清流をくんで、同じ清涼な空氣に浴して、同じく長じた者が何處に何の違ひがある、噫、これでも小學校に居た時分には試驗每に必らず人樣から羨まれ教師からは賞讃を受けて、小さな自分の胸の奥には、絕えず、暗夜の裡の燈火をかき立てた樣な希望と功名の火焰が漲つてゐた、それも、ほんの瞬く間、不運の冷たい烈風にかき消されて、今では沸騰してゐた熱湯が冷却したやうに、胸の奥の奥まで氷の樣な冷血が絕えず通つてゐるやうに思はれる、これが運命の神の、さばきかと思へばおぞましい、想へば／＼、學も才も確かに自分より劣つて居た誰れ彼れは、恐ろしい魔風などは夢にも知らないで平和な海を何の苦もなく航して居るのだもの、自分が運命の神にもてあそばれて居る間に、疾くに追ひつめて仕舞つた、けれども／＼自分は運命

の神の仕業を怨むまい、怒るまい、そして纖弱き小腕のつゞく限り、櫂も、棹も、折れはてるまで運命の魔風や怒濤と奮闘して見せう、若しも勝ち得ぬ事が無いとも限るまい。

それにしても、こんな所で取り留めもない空想にふけつて居らるゝ自分では無いと、斯う思ふにつけて、急に阿母さんの事から、小牛の青草の事までが、譬へば波紋のやうに、幾重の輪となつて胸に描かれて來るので、一刻もと家路を急いで來ると『オャ!!』と何處にか覺えのある聲、ふと振り返ると聲の主は車上の美くしい乙女、お懷かしい昔の友。積まれた行李や、澤山の荷物は、樂しい歸省のしるしてはあるまいかと、そゞろに今昔の感に堪へず、尚自分の身の恥かしさに、穴へでも入りたい樣な氣がして『マア』と唯だ一言、他に續く言葉もなかつたが『晩方に入らつしやいよ』と自分を顧みてはや森影の彼方にかくれた、どれ程烈風が荒むとも、どれほど巨浪が狂ふとも、運命に打ち勝たねば止まぬと言ふ。一念が又もやむらむらと湧いた。歸る道々も斯う思ひ續けて、やつと吾が門に草籠を下ろすと、さも懷かしさうに小牛が一聲モーと鳴いた。

（評）よく情を盡せり。



鮎つり　南多摩　中島縫子

○旅中の空想　小石川　山崎富士江

友を赤羽の鐵橋畔に訪うたのは六月最終の日曜であつた、一天羽毛程の雲もなく丁度藍を流したやうな日であつた、吾が家からは約二里で汽車は通つて居るが運動のためと今日は徒歩ときめた、そして道を田端にとつて行つた。

一

青々と植ゑられた稻苗の波うたせて音も無く吹いて來る風の涼しいこと胸の中まで透き通るやう、下宿屋の四疊半にくらして居る人のゆめにも知らぬ心地よさ、アヽ去る年病を得て豆州の海邊に轉養した時となり座敷に居つた稻村の君と手をとりて田甫の畔道を散歩した時の事を思ひ起して徐々に豆州の戀しくて、想

ひは早や彼の地を馳け廻つて居る。

二

あゝけふは理科の質問會へ行くのである、さて光學の公式では困るが、もし質問されたらどうしよう熟學ならよいがと想ひは早や理學の事にうつッて來る。

三

行けどゆけど王子の町はまだ見えない、二丁三丁が程は無言無想のまゝ歩を運んで居ると、フト胸に浮んだのが人生問題である、ア、人は何が爲めに生くる……見よ富豪たらんとして働く人を、博士たらんとして學ぶ人を、おもへば淺墓な想。人生僅かに五十年死せば一介の土となるではないか、茲に至れば富豪も博士も貧兒も無學者も皆同一の土となるではないか、ア、これを想へば學問も要らず、金も欲しくない噫われくはどうして此の夢のやうな浮世に日夜苦んで學問をするのであらう、誠に自分ながら不思議でならぬ。

四

突然エッくと云ふ車屋の聲に漸く吾れに歸つたのである、いつしか王子町を横斷して十條村の銃砲製造所の側まで來た時、足が疲れたのを覺えたからすぐ先きの富士神社の石段へ腰を下ろして暫し休んだ、時計を見たら十時二十五分、前途はまだ三十丁ある、やをら身を起して又歩き初めた時、川口鐵工所より牽いて來たのであらう厚い鐵板を積んだ荷車をエンヤラホイ、エンヤラホイと五十五六の背の低い瘠せこけた男が流汗淋漓曳いて行つた、是れをみると又も空想は憐れなる渠れが身の上に及んだ、ア、妾は有難い實に有難い、木綿ながらも新らしい着物を着て小遣錢を貰つて、毎日學校へ行くことが出來る、ある時は苦しい事もあるが渠が樣に此の炎天に汗水を流すやうなことをしなくとも宜いのである、彼れが如き薄運兒は見るも氣の毒な次第である、さりとて乞食にあらねば僅かの金もやることが出來ぬ、と吾れは人知れず泪にむせんだのである。

五

たゆまず行くほどに二里の道も歩みつくして、友の家が遙かに稲葉の上に突き立つて居る、あな嬉しやなと足を早めて行つた、ア、來月の中旬から卒業試驗であるが、どうかうまくやりたい、そして錦を着て故郷の父母兄妹に相見えたい、その時はどの位嬉しからうなど空想をつゞけ來つて漸く友を訪うた。

（評）全く空想は徒歩の一得なり。

俳句

巖谷小波先生選評

二等

夕山や栗の花散る笠の上　和泉國泉北郡横山村　天堀はな

（評）栗の花なる難題を詠じて、未だかくまで新しく、而も大なる句あるを見ず。

三等

一灣の波白うして青嵐　水戸市上市西町　君子

（評）一誦炎熱を忘れ、再誦俗塵を洗ひ了す。

四等

夏菊に花屋が門の埃かな　高知市升形　高橋龜樹

（評）兎角詠じ難き夏菊の風情を、巧に叙し得て新趣あり。

五等

梶枕島の花火の響くかな　越後國中頸城郡寺野村　藤原信子

（評）心地好き句なり。

秀逸

白百合の一本涼し草の月　千葉縣青萍女史

兵止んで夏草ひとり野を領す　千葉縣東輝子

滿潮を望海樓に涼みけり　伊勢　浪子

峰つくる雲紅に夕日かな　讃岐　蘋子女史

薄月の小夜の中山蛙なく　島根　よし子

よき家のよき子二人や金魚鉢　靜岡縣佐野峯子

夏書する座に日の遠し釣荵　千葉　艶子

浦の月洋書を蟵の重石かな　紀伊　室井美那子

世を忍ぶ眞田が宿の幟かな　芝　武林朝子

河鹿鳴く加波の流れや夏の朝　安房　三瓶ぎん子

鮎燒いて父待つ頃や月細し　横濱　秋香子

紫陽花や此處北殿の壼の雨　安房　金木文子

繪扇に夕日かざすや京美人　淺草　花園たか

ほたる狩りなき姉偲ぶ橋の上　奈良縣　泉井弘子

湯上りの姿見えけり靑すだれ　小田原　白露子

夕顔に夫待た人や杣の家　横濱　中村かす枝

小牛里をまはり道する鵜飼かな　美濃　傍島敏子

靑梅を二升くれたる隣かな　埼玉縣　淺見なみ子

夜からすも啼でさびしや朧月　山口　指月

夕立て風なまぐさき漁村かな　山田市　常盤木花子

降り初めた日も忘れけり五月雨　相模　中川かね女

對岸は松の並木や風薫る　大坂市　生田花梳女

夕やけや螢とびかふいさゝ川　大分町　姫百合

葉柳や舟待つ日傘二三人　横濱　阿久津雨村

嵐やみて峯に月澄む鹿の聲　神田　中島靜月

時鳥如意輪堂の夜明けかな　扇城　やま川

木がくれに賤が笹屋の幟かな　長崎市　古川きち子

なきいだす宵の蛙や雨模樣　靜岡縣　青木靜山

端居して涼しき風に吹れけり　下野　栗原くに子
雨過ぎて湖上に涼し三日月　筑前　安部不二子
涼風や刈り殘されし紅き花　神戸　井崎なを子
七夕に歌の列者の罷りけり　小田原　よし江女
取り出す袋の琵琶に風薫る　越前　草の舎夏子
閑古鳥もなかで淋しき宮居哉　小千谷町　瀧澤みつ子
永き日や釣を見て居る橋の人　京都　愛華
松が枝につりどこかけて涼み哉　君津郡　原たき子
桐一葉南院の池水さびぬ　下總　錦衣子女史
詩思頓に動いて雨の石菖哉　下谷　橋本波子
夜惜しみて門掃く夏の月夜哉　信濃　山浦翠女史
朝顔や花眺めつゝ深呼吸　櫻葉子
踊ろうとすればまた鳴る花火かな　沼津　桑原絹子
鯉躍る茶園の池や杜若　三河　永田舞鶴子
秋月や古堂に坐して笛を吹く　伊豆　尾崎そひや
食過ぎて寢返る伯父や夏の月　上野　利根乙女
猪や月さやかなり萩の床　西多摩　森田喜代子
涼しさや松の梢の釣りともし　越後　きよの子
うたゝねや窓にさし込む夏の月　京都府　菊花女史
紅絹のハンケチ洗ふ清水かな　鹿兒島　犬飼たき子
草の戸や蚊遣りにけぶる夏の月　京橋　市橋こと子
乙島や脱かせて見たき市女笠　埼玉縣　淺見なみ子
草籠に苺つるして戻りけり　相模　野島さと子
蚊柱や閼伽桶ならぶ寺の庭　駿河　池田なみ子
炭釜の煙も高し今朝の春　遠江　又平蝶子
洗濯を柹の葉背におちにけり　埼玉縣　中村勝子
ゆく秋をぶらりと蚊帳のつり手かな　青木たか子
夏の雨大磯小磯洗ひけり　遠江　松本綾子
葉櫻や雨に寂しき三井の寺　下總　川奈部ゑい子
秋の月鹿も眺て水鏡　羽前　梅津琴和女史
家毎に衣干すなり五月晴れ　岡山市　橋本芳子

見たと云ふ人もまれなり閑古鳥　千葉　千代子女
旅人の荷物をおろす茂りかな　神田　吉田たつ子
青田二里夕の微風に戰ぎけり　奈良縣　崎山麻子
よき人と乘合舟の夏の月　靜岡縣　深谷いわ子
朽船に柳の枝や月かゝる　備中　大西好子
涼しさの竹揺れそめし書院哉　山城　松田綾子
下駄のまゝ渉る女や夏の川　後志　大塚良子
うたゝ寢の主人起すや涼み臺　芝區　大芝まつ子
沙漠ゆく行商隊や雲の峰　伊勢　三輪葉津喜
月きよき五月の小村や夕かやり　常陸　西野はる
人形の帶解いてやる暑さかな　横須賀　柏原美奈子
浦涼し月は郷を出でにけり　京都市　北田紫翠
絹張りの窓に薔がくや月の竹　新潟縣　高梨志づはる
蕃人の毒矢射込みし茂りかな　下總　錦江女史
江を北に笛ふき行くや朧ろ月　筑前　花田うらの
寢よき雨降るや夜すがら啼蛙　栃木縣　酒井清波子
川柳の間をわたる日がさかな　兵庫縣　山本碧水
月は三五としは二八の踊かな　駿河　羽草
靈廟の庭靜かなり苔の花　水戸　少女
道問へば汗ぬぐひけり畑の人　愛知縣　近藤重子
夜をこめて秋蠶かいけり姉妹　長野縣　相原梅香子
朝月や川上遠く水鷄なく　伊勢　坂西野
見送れば見返す笠も霞みけり　尾張　竹谷春波子
夏の庭南南と茂りけり　麻布　松崎みどり
涼しさや湯浴みして來て髪梳れ　上總　能城美代子
大雨のはれて涼しや青すだれ　青森　村林やす
五月雨にぬれつゝ遊ぶ家鴨かな　上野　金井春子
見せに來て手の開かれぬ螢かな　栃木縣　青木たか子
夕立や跣てかける男の子　埼玉縣　淺見まき
秋近く隣の人を送りけり　佐世保　岡すが子
蚊の聲の中にいさかふ夫婦哉　石見　秋山靜子

書簡文

文學士沼波瓊音先生選評

三等

○妹に遣はす文

千葉縣　多田方子

今朝御手紙幷に小包着、母上はじめ、皆々機嫌よく御過しの由、安心いたし候。あまりの無沙汰ゆゑ御心配とのこと、母上に申上げては又々御心配なされ候と存じ、別にお知らせも申上げず候ひしが、實は先月の二十日ごろよりふと風邪の心地に候ひしも、ナニ格別のこともあるまいと存じ、打ち捨て置き候ひしところ、げに油斷は大敵に候ふかな、月の初めの二三日は、御承知の持病の咳、さながら頭も破れんばかりに候て胸もと只くるしう堪へ難く、學校の方も四日程やすみ候が、幸にきのふけふ全く快癒いたし候間御安心下され度候。尙このことは決して母上には申上げなさるまじく、只々何とか取り繕ろひ、よろしく申上げ下されたく候。

お前さまのお手縫に候や、薄衣の着心地よさ、ありがたく存じ候。久しく掃はざりし机もけさは名殘なく拭ひ淸められ候。花瓶には隣の伯母さんより貰ひし夏菊を活けて、その前に端座してお手紙を繰りかへし候、手跡も近來メキ／＼と上達いたせしやう見受けられ候書は人の品性を現はすとか申し候、殊に女子は、そのなだらかにとゞこほり無きやうに筆のはこびてこそめでたく候へば、尙ます／＼お努めなさるべく候。

武夫の手はまことに惡しく候。手習はするほど上達するものに候へば、復習の餘暇、懈たりなく習ふべきやう御傳へ下されたく候。

杏は表庭の十文字に候ふべし、枇杷は畑に御前さまと武夫として取りくれしものとや、この味いつも／＼忘れず候ひしを、ありがたく存し候。町ではもう杏此頃は御座なく候。

例月の少年世界、女子文壇、昨夜本屋より持ち歸り、今朝早々郵送仕るべく筈に候ところ御催促にあづかり恐れ入り候、實は今回は些と到着が遲かりし由に候決して姉がうッちやッて置いたのには無之候。

別封リボン三組、昨夜本屋よりの歸途、例の勸工塲にて購ひしに候、何分代目のことゝて、色はちとヂミだか存じ申さず候へども、まアこれにて御不承なさるべく候。

暑さの砌り、母上様はじめお前様、武夫も精々御いとひなさるべく候。

（評）はでやかならずして情十分に現はるよく書簡文の躰を得たり。

四等　○歸省中の妹に

芙　蓉　子

なつかしき御文に接しそゞろに故郷の偲ばれて歸心やる方なきを覺候、この暑さ烈しくて不順勝ちなるけふ此の頃に國許御二方様の御機嫌益々御麗はしきを碓め得たるを喜び候、御許様には入學以來始めての御歸省父母君の御膝下にて如何に嬉しき事ならんと推し候ひてよ、されど餘りのうれしさに復習をな怠り給ひそ。姉も此の度は必ず歸宅致してと思ひ居りしも進級後間もなく病氣のため心ならずも一ヶ月餘を欠席致したる事とて學科もいたく後れかくては來春の卒業も如何にかと案じられて、此の一ヶ月は一しほ勉強と決心は致したるも、下宿屋の二階にて暑さと戰ひてはなか／＼に勉强も思ふやうには出來ず、何故歸らざりしかと今となりては却りてくやしう存じ居り候よ、先はあらあらお返しかた／＼末筆ながら御父母君によろしく御傳へ下されたくかしこ。

（評）さら／＼として氣持よし。

五等　○故郷の友に

麹町區下二ノ五　孤　菫　女　史

來る夏は共に手を取り沼田の堤に月を賞し、阿武の川邊に螢追はんと誓ひしは仇、變遷多き妾の身は、又も三百里の山海を跋渉して、ことしの夏を玆紅塵萬丈の都巷に送らんとは、さても怨めしの限りに候。實に世は様々なるものかな、釜中にも似たらん都の炎暑に堪へかねて、殊更に夏をよそなる海邊に山里に、暑さ避けますあて人のありと思へば、又其靜凉の山水をあとに、わざ／＼出でゝやくが如き紅塵都中の人とならざるべからざる妾如きも有之候、一掬の水をむすばん泉水もなく、露を宿すべき草むらもなき、無味乾燥の今の住居、一しほ故郷の忍ばれて候、今頃は露さんが袂だすきに端折りして、お池に入りて魚あさらるゝに、君が側の敷石に水打つて、其上に長椅子持ち出し、腰下ろして讀まるゝはハイネの詩集か、さもなくば御得意のハーモニカの妙音か、あゝ飛んで行きたう候、君よ、御しがたき妾が望郷の念、あはれと思召さば、擾

かしのしのぶの露に筆そめさせられて、君が近頃の御起居知らせ給ひてよ、待ち〳〵先は右御したはしさのあまり、しどろもどろの筆の跡をも顧みず遥に故園の空をのぞんでかくの如くに候、かしく。

（評）いひまはしが御上手。

秀逸

○兵營の兄へ

埼玉縣 新藤慶子

度々營内の模樣等委しく御知らせ下され水馬演習など泳ぎ好きの兄樣定めて御愉快の事と察し候亦其上に色が黒くなりてはと母と心配致居候、春蠶はいつまでも母の手傳ばかりではと思ひ本年は母の後見で初より妾が飼育し隣の晴雄さんに休み起の工合を見て貰ひ四眠起になりましたら思ひの外殖えまして忙しくてならぬので前のお增さんを雇ひ上簇をしました時は非常に草臥て翌朝起きられませんでした房を相手に繭搔を終り上等の繭が十一貫八百匁玉繭が一貫二十匁下等の繭も半籠斗り昨日から糸繰りを始め能くたつので隣の晴雄さんが歸らぬ内に參升片付候田植の方も兄樣の分を小作に入れましたのと男優りの房に大吉が能く働くので村でも第二番目に濟みました大麥は少しくせがしたので去年より貳俵斗り少ないと申ます母上樣も年に似合ぬ達者で小作の受付やら人の應接やら庭の梅非常なちがひで僅かに九升斗りにしかなりませんうしろの馬が迯て來たので朝貌を四鉢破られ母は力を落しました田肥は大豆粕と過燐酸を施させました本月下旬は信一が暑中休暇で歸省しますから樂で居ります此靴下房や大吉が仕事の連れになつて編み上げた不出來の上に柄の配合の惡い處は御笑い下され度先はあら〳〵かしく。

（評）目前に郷里を見る如く思はしむ。

一ぷく 三河 近田つみ



○郷里の友へ

石狩 綸澤源子

お郁さん其後お替りはありませんか、永いこと便りを致しませんでどうぞ勘忍して頂戴ね、妾早くから出そう〳〵と思つて居りましたのですがね、農業が多忙し

くなつて來てほんとに出す暇がなかつたのよ。
北海道々々と皆々が地獄の樣に云つて居つたから、どんな處かと思つて來て見ればやはり內地と澤山はかはりませんのよ、今では水田も出來澤山お米も取れますですがね、　お郁さん雪の澤山降るのにほんとに驚いちまうのよ、九月の末になると、ちら〳〵ふり始めて正月の頃は五尺も積つて吹雪の日などは道も何もわからなくなるの、そして冬中妾等は仕事は一ヶ年中の被服類を縫ひます、男は俵をあみ又木材運搬を致します、さうして雪の解けるのを待つて居ます、內地で梅や櫻の花の咲く時分も當方は未だ雪の三尺位あるのです五月始めになつてやつと雪が解け、雪が解けると男等は馬耕器械で畑を起こします、そして妾等が蒔くのです六月の始めになると、梅や櫻の花が咲くのです、此時の景色はとても內地等では見る事が出來ません、東の方の高い山には消え殘りの雪が眞白、南の方の野邊には櫻花眞盛り、夕方西の山の上に月の出た時は一目に雪月花の景色を眺める事が出來るのよ、此時計りは、お郁さんに見せたいと思ひますよ。
それから九月の中頃になると、もう農産收穫にかゝるの、僅か四ヶ月位の間に一作取るのですから仲々多忙しくて日曜も何もないのです。
お郁さんと內地に居つた時噂をしたアイヌ人種は澤山居りますの、モー〳〵とひげを生やして熊の樣な顏をして居るの、ですが仲々アイヌだとて馬鹿には出來ません、今では日本人種と同じに交際もすれば子供等も學校へ通はせて居り、又大きな牧塲を持つて居る者も澤山ありますのよ、當地の狀況は是れて止めにして置いて又後からどし〳〵お知らせ申します妾も義兄も壯健ですから安心して頂戴ね、お父つさんやお母さんにも宜敷申上げて下さいさよなら。
（評）石狩の風光睹るが如し、言葉使ひを氣取らぬ樣注意ありたし。

○姉さんへ

福井縣　片山千里

姉えさんやがて暑中休暇ですね、今年は講習會なんかはいつちやいやよ、去年の休みにね美いちやんが、姉えちやんが踊つたつて赤い簪を持つて來てお呉れてね、春ちやんの姉えさんお踊へりなさらぬの、いゝわあたしんどこへ毎日遊びにお出てゝ姉えさんに人形こさえて貰らつてまゝごとして遊びませう、て云ひましたけれどあたし一日も行かなかつたの、なほ〳〵けなるくなるといけないと思つて、今度はねお母さんもちい姉さんも、毎日〳〵指折つて待ちて居なさるんですから一日も早く、芳子さんの樣に二百三高地に結つて美つくしいリボンかけて、花籠持つて踊つてくださいよ、そしてあたしに美いちやんのよりもつともつと上

等の人形さへて頂戴、美いちやんに見せてあげるんですから、よ姉えさん。

（評）口語體の手紙も斯う云無邪氣なのは宜し。

○出張先の父へ

鳥取市　よ　み　子

御父さん悦んで下さい、今朝赤ちやんが出來ました、私は女の樣に可愛らしいですが、なか〳〵元氣です。妹が善いと云ひましたけれど、赤ちやんが出來て見ますれば、妹でなくつても善う御座いますは。御父さん早う歸つて頂戴な、御母さんは待つてらつしやいますよ、赤ちやんも私も。赤ちやんの名は、御父さんが歸られてからつけるのですつて、御母さんが被仰いました、早う歸つて赤ちやんの名をつけて下さい、私は何んだか早う名を呼んで見たう御座いますは。

（評）始めて姉となりし心持。

○かるた會に招かれし返し

三重縣　長井漣月子

（三卷第五號山田秋葉樣の文を見て）

八重むぐらしげれる宿の淋しきに、ひとり君が御面影を偲び居り候折柄、なつかしき御玉章に接し、未だ文も見ぬ内よりいと〳〵嬉しく、開く間遲しと拜し參らせ候へば、今宵御宅にてかるたの會ひらかるゝよし親しき友との逢阪の關はこれを措いて他になく、殊にまつとしきかば、浪花江のあしのかりねのそれならぬ一夜のかるた會、身をつくしても是非に參上致すべく候嘆きつゝひとりぬる夜のそれならで、喜びつゝ日の暮れるを待つ間、如何に久しきものに候よ。積る話は、あひ見ての後に、夜をこめて申しあぐべく候、つらぬき止めぬ亂れがきも、喜びを忍ぶる事の筆の狂ひとゆるし給ひてよ、かしく。

（評）此人才の人なり。



門づけ　遠江　宮城梅子

○姉妹と誓ひし友に

長野縣　小　蝶

姉さん……只今の御手紙私は嬉しくて〳〵泣きました姉樣!!! こんな妹でも是程までに思つて下さいますの其御心は私決して忘れやいたしません私だつても眞に賴りに思ふのは只一人姉さん許りなんですもの如何して

一時だつて忘れられませう毎日夕方になると東の空を眺めては泣きますのほんとに此後いつになッたら姉様に御目にかゝれるのか知らんと思へば只姉さんが懐かしくて／＼思ひはすぐ寄宿舎の垣に走ります。……姉様：　私は此頃一日も心安く暮した日はありませんのいつかも御話いたしました通り私はこんな不幸な境遇に生れても身内の者とては天にも地にも只叔母様一人なんですし此春は私の望んだ女學校さへ卒業させて下すたんですから私は少したりとも叔母様の御手助が出來れば嬉しいと思ッて出來るだけ力の續く限り御氣の召やうに／＼と働いて居りますの、されども……叔母様は此頃兎角御機嫌がよくありません私は其顔を見る度に今更に我身の不束がなさけ無くてすぐに胸は一ばいになり目は曇りますの夕べもね……あゝ申しますまい御氣の弱い姉様は私の爲に泣いて下さるでせう……イヱ決して／＼叔母様は私を憎う思召のでは御ざいませんん是も皆私が不束な爲です私は身を粉に砕いても叔母様の御機嫌ヶ治しますそれが爲にはどんな苦勞も厭ひません。

姉様此事は必ず誰にも被仰ッて下さいますな又決して御心配遊ばしますないつかはきッと私の心にも春は參ります。

おや叔母様の御聲がお勝手に聞えますから行きますよ片時さへも忘れられぬ私が思ひを此愛らしき忘れな草にて懐かしい姉様の御許へ。

（評）訴へむとして訴へずそこに美しきつゝましさを見る。

○友の洋行を送る

牛込　土居優子

落葉にしぐるゝ雨の音、わびしく聞きつゝ今朝小暗き窓の下に、なつかしの御玉章、うれしく開き／＼、心ならぬ御無沙汰致し候へば、御怨みのお言葉にもと存じ候ひしに、思も掛けぬ御便り、たど／＼夢の様に思はれ候。兼てより級中の秀才とたゝへられ給ひ、師の君にも輕からず。御望をかけられ給ひし御身、況して例の御氣象にては、よしや如何に母君の御許戀しとて其まゝには、朽ちさせ給ふまじ、など、誰かれ、御噂は致し居り候ひしも、此秋とは餘りに早き御思付にて候かな、卒業式に惜しき袂、分ち參らせてよりは、しみじみと、御目にかゝり語らふ折もなく、空しく拙き筆に思の千分の一を、やう／＼に、通はするのみに候ひしなれば、誠に御名殘惜しく存ぜられ候。良き御運は候ふとても、米國とし云へば三千里の波濤を、越えての彼方、人情も風俗も趣味も、よろづに事かはりし地にて候を。よく／＼御身を御大切に、餘り強き御心に驅られ給ひて、御無理の御勉强遊ばさぬ樣、念じ上候四年の後故里に、再び美しき錦を、飾り給ふ折は私は

小さき庵の下を、都とも天地とも、思ひて、くすぶり居る頃に候はむ、されば四年の春秋、同じ家に文机併べて朝な夕な、かたみにはげましつはげまされつる、事ども忘れ給はずば、折に付け美しき御水莖の跡、見せ給ふべく、必ず行く雁歸る雁に、空しき怨の思をなさせ給ひぞ。目出度き御鹿島立ちには、餘りお恥かしき此品に候へど、深き志を汲給ひて御行李の底になど、納め給はゞ、喜しきは妾のみに候ふまじ、先づは取急ぎ御返しばかりを、積るお話は、御目もじの上に、ゆづりおき候。かしこ。

お盛所 若狹 長谷川英尾

（評）美しき書きぶりなり



○姉に婚姻を勸む

無名子

云へば尙早しと云ひて否むべき御年にも候はず。殊に裁縫の道も近來いたく上達なされ候由。又料理茶の湯花の道迄も深く立入り給ひしとか。さすればもはや縁づきなされ候てもよろしき頃と存じ候。さすれば弟勝次も疾く妻を迎へて父上母上ともに思ふ事なき眞の御隱居となり給ふべく候。さりながら露御心にそまぬを强ひてとはすゝめ申さず候へばよく／＼御考への上御心定められたく候。とにかく子のことにのみ煩ひ給へる親の情けの有がたさに落つる涙を硯にうけてかくなん、かしこ。

（評）簡明。

○友の許へ

伊豆 杉山野菊

流しつる三つの笹舟三つながら砕けてゆかむものならば君

とは吾従兄君の三歳昔の詠にて候ひしか。調べの高きひくきはてゝに言はじ。光長閑けき里の小川に、笹舟浮かべては、うち興ぜしとゝせの昔……。岸の藻草にふれては、はかなく砕けし小笹舟……をかしと眺め口惜しと見し、かりそめ事の其笹舟が運命の、十歳の後の妾が身の上に似たりしとは、神かけても思はざりし元よりさゝやけき小笹舟。よしや事無くてゆけばとて大海原の荒き潮路に漂ひつべく、あまりにかよわき性に候へば、かゝらむ事は露願はず候へ共、せめては砕けず破れず、友舟の後へに尾して覺束なくも行かましかば……の願は切なるを。さりとは果敢なき宿世にも候かな。世に幸なくて生れてし身の、あはれ青春の期を空しく

片山里に朽ちはてんの儚さは、既に々々あきらめ居り候へど、せめて好める道のみは、と愁ひに心よせし事こそ、却々に物思ひの種にて候ひしか。瀨を早み岩にせかれては、沈みはてなん折々を、君が賜ひし情の絆を頼みに過ぎこし年月、幸なりしと言はゞいはんか。國語學べの厚き御言葉、身にしみて嬉しく、御言葉に從ひまつらんと願へりしものを……噫。身のなりはひ如何に忙しくとも、勉めて勵まんとせし心も空しく候ひし。知ろし召さるゝ如く今し蠶飼は眞盛り、師が御許より歸りては、母を助けて勤むに、やがて晝は、こも又それよこれよと追ひまはされて文讀まんの餘暇も無之候加之祖母は一昨日より、ふと床に就かれ候、重患とにはあらねど惱みはやゝに烈しう成りゆくが如くわきて八十七歲の老軀、起伏にも人手を待ち給ふに、あゝ如何にかすべき。やがて雨晴れなば麥もいりつべし、田植も始りつべし、嘗ては炊事の折も猶詩集手にせし身には侍れど、目も廻らん計りなる麥秋、田植時書物手にせんなど思ひもよらず候。かゝらんには徒に師の君のみ手煩はす事のみ多くひいては君の御勉强の妨げともなりつべく、わきて不敏の身には、得る處も少かるべくと存候。

元より國語の素養なき身の、勉强の必要は疾より感じ居り候へど、さりとて亦如何ともいたしがたく、兎やせん角やせんと思ひ煩ひ居り候。今となりて御情に背きまつり候はんは、心苦しく且師の君に對しまつりても、なめげなる仕打ちには侍れど、妾の身上おぼしめし給ひて、師の君へもよきに御とりなし下され候樣、切に願ひあげ候。

あはれ幸無き身は此儘に朽ちぬ共、光滿ちたる君が御ゆくては、み心つくしの効いちゞるう、いよゝ御上達遊ばされ候樣祈上候。

かしこ。

（評）ひねらずに書き給へ。

選者曰く、書簡文この頃振はぬやうなり、一層奮勵ありたし、書簡文は可成は候文にせられたしこの方おとなしくて品よく且つ趣味多し口語體になれば下品になり易し十分注意し給へ「のよ」「のね」「なくつて」など云語はいかに親友の間にても決して書簡文には挿むべからず、又「父上や母上の額の皺は取る年を意味して居りますよ」とか「貴孃の記憶の中に私の姓名が殘つて居るでせうか」など云下手な壯士芝居の臺詞めきたる文句は成るべく避けたし、總じて、ひねらず、いつはらず、いやに飾らず、思ふ儘をすら〳〵と品よく書き流したるが上乘の文なり、こは書簡文のみのとにも非ず



新歌謡

編輯局選評

二等

おはしますやら蕾のなかに百合のかぐやと申す方

相摸津久井郡川尻郡弁津　加藤婦美子

竹取物語、新式に化す

三等

戀にこがれた十五夜月はすゝき花咲く武藏野に

府下西多摩郡福生村　森田志満子

風韻絶佳

四等

田草とります故郷の父母の上に影せよ夏の雲

伊賀上野池町　山村りやう

情の醇化

五等

咲いたお花に心があれば一度聞きたい花言葉

大和宇智郡五條　栗山英子

いやみなし

秀逸

◎　長野　加藤よし子

わしは信濃の諏訪湖のほとり舟はあれども未だのらぬ

◎　茨城縣　橋本いわ子

野分吹くなよ草花ちるよ秋はか弱い花ばかり

◎　奈良縣　中富よしみ

光る稲妻暫くとめて雲の宮居を覗きたい

◎　信濃　玉百合

山てかてんだ此伊那窪も鰻死ぬ様な夏がある

◎　周防　熊野縫子

親は無うても私しはまめな御飯たべたり遊んだり

◎　茨城　民子

村の名物片葉のよしは君を慕ふて西向いた

◎　福井縣　片山千里

秋が來たやら柳の下葉桐の下葉が落ち初めた

◎　麹町　淺井千鳥子

私しや京都の加茂川そだち水で代へますおしろいに

◎　金澤市　大地波子

直夏眞晝の萎れた草が雲を吐いたか大野原

◎　北海道　三宅花園子

わしが所は鰊の漁場よモッコ背負ふて沖揚に

◎　南品川　風間康子

母が死んだと云ふ様な姿白い蝶々が紫陽花に

◎　石狩　給澤源子

北に聳える石狩岳は花の盛りも雪を着る

○　神奈川縣　清水富美子
わたしや甲州山中そだち海や汽船はまだしらぬ
○　備中　木山よし子
奥の深山の木挽てさえも鋸なくよな眞似をする
○　羽前　巻坂信子
天津少女と交際結び渡りたいのは虹の橋
○　和歌山市　淑子
山の百合姫露の花纈ひて水に思をのせてくる
○　兵庫縣　富士田幸子
天津乙女の化粧の水に濡れて咲いたか百合の花
○　秋田縣　佐々木圓子
瑞枝若葉の生垣刈れば窓に見えたる富士の山
○　三重縣　長井溪月子
鐵道線路のそば咲く菫汽車が來る度ゆれてゐる
○　美濃　彷島みゆき
戀もさめては果かないものよ人にふまれたつぼすみれ
○　遠江　松本綾子
沖の小島にお茶屋を建てゝ上り下りの船を呼ぶ
○　羽後　なつ女
白い山百合蝶々にのせて送りたいぞへ妹に
○　若狹　長谷川英尾
蝶よまへ〳〵小鳥ようたへ私しやひきます春の曲
○　豐前　小草女
愛御緣にゆくのはいやよもつとゆきたい學校に
○　宮城縣　丸山香花
變るものだよ深山の奥も今は開けて桑ばたけ
○　丹後　鹽見千代子
國が富むとて田畑も山も丹後は桑の苗ばかり
○　秋田縣　YS子
結のりボンに海老茶のはかま共に手を取り學校に
○　山城　松田綾子
朝顔見たさについ寢亂れの姿見られし黄な胡蝶
○　福岡　安部不二子
鐘が響いて日が入り初めてかへる興作の鍬光る
○　下野　鈴木露江子
咲ひて散らない渡良瀬河のころ〳〵流れる礫石
○　越後　乙川ふじの
店の前にて團扇を選るは何處の姉やら妹やら
○　岩代　三河入重子
姉のはた織る羽二重よりも妾しや美事に絲をとる
○　明石　鈴蘭
花の鳥なれば飽かれはすまじほんになりたや白百合に
○　筑前　花田うらの
京の女に衣裨着せて連れて行きたい御茶つみに
○　岡山縣　靜子
わたしや毎日さなだのくみ子ためたお金は母上に
○　千葉縣　松ヶ枝浪江
福の神様賴むは無益稼ぐ其の身は福の神
○　淺草　宮本はま子
月をながめて松原行けば船の腹うつ浪の音
○　福島縣　今井きくの
いやだきらひだ病院ずまゐ見るは苦しい顏ばかり
○　鹿兒島市　山本さち子
友は白百合おにはの前にわたしやあら野の百合の花
○　水戸　中山道江
可愛妹に別れてからは私涙で日を暮す
○　近江　西村悅子
家内揃ふて夕げの膳につけば平和の風が吹く
○　熊本　桑原香美女
田舍乙女の心を見せた芋の葉に置朝の露
○　廣島縣　影山美枝
汽車は病に雲雀は空に妾の心は西東

評論文

文學士沼波瓊音先生選評

○對象と連想

三等

上總千代田村　山田沖子

我等が文藝に對して生ずる感情は、ヂーテュアの假象其物よりの感じと、その假象の或連想に由りて生じたる實象よりの感じとの總和にして、自然主義者は假象より生ずる美感のみを認めて、總べての物はさながらにして美なりと主張し、理想主義者は或實象よりの感じを重んじて、一切の文藝は何等かの意味を包含せざるべからずと說く。

思ふ、文藝製作者は自己の製作せる文藝が、其賞翫者が對して起す連想に關して殆んど何等の責任を有せざるを。則ち彼等は大聖を描き得るが如く又巨盜を描き得べし。貞女を寫し得るが如く又姦婦を寫し得べし。美人と醜夫と壯男と老病者と共に其の對象となすを得べく、梅が香にのつと日の出る山路の美と、大德の糞ひりおはす枯野の美と共に歌ひ得るの自由を有す。

されど又ひそかに思ふ、玆に文藝の製作者が、自己の作物が、其賞翫者の連想に關し、責任を有する二つの場合あるを、庶幾くば說かむ。

第一は、一般士女即審美的趣味に乏しき者が、文藝に對して生ずる連想也。凡ての時代凡ての國を通じて審美的趣味を有せざる士女が、文藝に對する態度は殆んど常に一定して、恰も實世界に對すると同一の態度を取るもの丶如し。換言すれば、ヂーテュアの假象其物より美感をうくることなくして、單に其の假象の或る連想に由りて生じたる實象よりの感じあるのみなるを常とす。

我等の見地よりすれば、美的趣味に乏しき一般士女は、文藝に對して實世界にのぞむ態度を取るが故に、或種の文藝は社會の爲め文藝それ自身の爲め、その賞翫を禁ずるを正當とす。

蓋し先覺者の既に論ぜし如く、文藝製作家は自己製作物に對して何等の制限を受くる義務を有せず、藝術的良心に訴へて審美的對象となし得と思惟せしものは、何等の制肘を加へらる丶ことなくして、之を製作して可也。

然れ共、その作物を世に發表するに當りては、之れ既に「社會の人」としての事業にして、社會的に或る制裁を受くるは當然の責任也。尤も道學者流が一派の文藝製作者を目して社會の仇、道德の敵と樣に考へ、此等の文藝をして社會的生存を絶たしめんとするが如きは、偏狹笑ふべきの態度也。

斯の如き文藝に對して或る社會的制限を加ふるの必要あるは、寧ろ其の社會の不完全なるが爲めにして、若し一般士女の美的趣味高く、文藝を文藝とし世界の假象として味ひ得るの素養あらば、決して或る制限を用ゐるを要せず。社會を患ふるの士、道德を論ずるの士は、文藝を目して社會道德の仇敵となさんよりは、寧ろ一般人士の美的趣味を養成する手段を講ずる責任を有す、と雖も、現代の不完全なる社會にありては、文藝製作者が其の神聖なる作物に對して或種の制限を受くる、亦止むを得ざる事情也と觀念するの、寧ろ穩當なるを信ずる也。

第二の塲合は、賞翫者が必ず其の連想を惹起すべきことを、製作者自身豫想したる塲合也。總べて傾向主義、敎訓主義の文藝は、乃此の塲合に相當す。我等は必ずしも此種の文藝を排する者に非ずと雖も、これ等の作物が動もすれば其主義を傳ふるが爲めに急にして、文藝的眞趣味を發揮する餘地なきは、往々我等の實驗する所也。

傾向主義、敎訓主義の文藝は、賞翫者が作物に對する連想を利用したるものとなすを得べし。反之、製作者自身豫想したる連想を亂用して以て自己作物の、審美的價値の絶無なるを蔽はんとする一派あり。名けて際物文學者と稱す。則その時代に於て、實際的に社會人士の興味を起しつゝある問題を捉らへて、自己作物の材料とし、その問題自身よりの快感を賴みて自己技量の拙劣を蔽はんとするもの是れ也。則ち製作者に、何等の文藝製作的良心なく、たゞ連想よりの美感を豫想して、一般社會に阿るもの我等の所謂際物文學也。

際物文學が一般社會に阿るに反し、强ひて普通の思想に反對し、人に奇を好む性質あるを亂用して、自家の作物の美的價値の少きを蔽はんとする者あり。かの有名なる「君死に給ふこと勿れ」の歌は、同胞の眞情を寫し出さんとしたるものにして、詩歌の材料として決して非難すべきものに非ず。たゞ怪む、殆んど肉感的の思想をも尙詩化し得る手腕を有する鬼才詩人にして、何が故に彼の一篇のみ露骨極まる語句を用ゐしか、我等をして想像を逞しうせしめば、これ或は普通平凡の思想に反對すとの快感を豫想し、爲めに對象の美化、語句の習練、詩人がなすべき必然の本務を忘却せる者

にあらざるなきか。

要するに我等の文藝に對する主義は、自然主義にあらず理想主義にあらず、製作者の藝術的良心によりて作られ、我等の美感を滿足せしむる總べての文藝を歡迎す、我等の主義は斯くて極めて簡單也。

（評）一辭亂れず堂々の論と謂つべし。

五等

○蕣亭漫筆

愛知 近藤重子

私が名古屋京町に寓居してゐましたころ、年舊く此附近數町の間に出稼する芋屋がありました、少きは五厘から多くとも三四錢までの顧客を引いて、日々の活計を維いでゐました、今茲の春偶々一人の團子細工屋飄然と何處よりか來て、石町の辻角に居を占め、紅白青黄の色附團子を捏りて、巧に花鳥魚類蔬菜等の模形を製します、團子固より營養物にあらず又其味の甘美なるでもありません、唯其着色の美は小兒の目を喜ばし、其模造の巧は珍しきもの好の子供心を怡ばすに足る、朝早くから余も余もと團子屋の荷を取圍んで、終日喧囂を極め宛も施行物を受くるに似てゐます、之に反してかの芋屋は依然辻々を賣り廻りますけれども、顧客舊に似ず寂寥たる有樣である、彼はホッコリの聲を連呼しても、兒童の耳には聞えません蒸桶の笛を續けざまに鳴せども、頓着せられないのである、遂に彼は骨折損の疲勞儲にならんことを恐れて其職業を休むこととさへ數々であつた、斯くして、月餘を過した、一日かの團子屋警邏中の巡查に注目せられ、其着色の原料に衛生上有害のものあるを看破され、諄々說諭を受けた後、再び此附近に來てはいけないとの嚴命に接した、さらぬだに小供心の漸く厭倦に傾かんとする頃なるに、警官の叱責を受けたのを見ては、翌日から團子屋の來ないのを、惜むものはない、相携へて芋屋の店に向ひ芋屋の繁昌元より大したものであつた私は之を見て芋屋の爲に祝し又竊に失笑に堪へなかつた。



すしに辨當　大和 晴登子

思へば文學上の製作物に於ても亦か〻る觀ないこともない、今夫れ讀書眼の幼稚なる時代にあつては、人心の弱點に投合せる作物の、多數の隨喜者を有すること

は、自然の愛である、淫靡卑猥な小説は婦女子の歡迎を博するに足る、而も社會の制裁なるものあり識者の鑑定なるものあつて、早晩是等の不健全分子を文壇より拋棄する時が至るでせう、其壽命の短きも怪むに足りません、蓋私をして誤解なからしめたならば、千萬年に渉つても最後の勝利を得るものは、必ず健全忠實な作物にありと斷言します。

（評）字屋と團子屋の話何の事かと讀んで行くと最後に文壇作家に對する大警鐘が響いた始は處女の如く終は脫兎の如き文。

秀　逸

○理性と感情

愛知縣　永田舞鶴子

男子何が故に强きぞ。女子何が故に弱きぞ。女子のよく笑ひ、よく泣き、よく悲み、よく憂ふるに反して、男子の喜怒哀樂に動かされずして平然たるは何ぞや。是其一般の通有性が概して男子は理性的にして、女子は感情的なれば也。然り理性と感情とのよりて然らしむる所也。理性は人生の行路を照す光明なり。感情は人性をして暖かならしめ生活を滑らかならしむる油の如きものなり。故に理性的にして感情的ならざるべからず。感情的にして理性的ならざるべからず。然れ共、人の性癖はとかく完全なるものにあらず、缺點なき能はず。或は理性に偏し、或は感情に傾く者世俗一般に然り。其理性の極端に走るに至りては血なく淚なく愛なく同情なき冷血動物となり。其感情の極端に流るゝに及んでは盲目となり遂に救ふべからざる深淵に沈淪する者それ幾何ぞ。冷酷的なる男子に比して發狂的盲目的の女子多きも是がためならん也。要するに理性は主として敎育によつて養はれ、感情は寧ろ人工を加へず自然に放任するによりて高潔に發達する者なり。人は之を以て理性を尊しとし、感情を卑となす、敎育は感情の人を捨てゝ理性の人を造らんとす、何ぞ誤れるの甚だしきや。何ぞ知らん、多くの蠻行、多くの僞善、多くの詐欺は却て文明國に行はれつゝあるを。於是か吾人は思ふ、社會の文明と道德とが反比例をなすは、又この理性と感情とが權衡を失するより來れるなき歟と。見よ多少敎育ある者の「何故に孝行すべきか如何なれば博愛すべきか」と之を皮想的に觀察し、科學的に分解し遂には道德を妨げ、宗敎を害する者多き也。誠に苦々しき哉。吾人は迷信を好む者にあらずと雖も、何故になど解釋を施さず、理由をたゞさずして不言不語の間に行はるゝ、寧ろ智に乏しく情に脆き感情的の人物を希ふ者也、ナイチンゲールをして赤十字社を創建せしめ、小ナイチンゲール奥村五百子をして愛國婦人會を組織するの美擧を致さしめし動機は皆情の然ら

しむる所なり。「博愛」以外に敢て何故などの理由の存するあらんや。嗟吁美しき哉感情や。又理性は詩的趣味を沒却するものなり、「鳥部山の煙、仇志野の露」之を理性的の科學的見解を下したらんには誠に無味乾燥なるもの也。之を感情的に眺めて始めて無限の詩趣、無限の意味は味はるゝもの也。實に理性的の詩は無味乾燥にして水を飲む如く砂を咬む如し。感情的の詩は絢爛にして花の如く甘きこと蜜の如し。是古の詩の勝りて今の詩の劣る所以なるべし。吾人はかくいへばとて、決して理性を排する者にあらず、何れに重きを置く者にあらず、兩者の平均を望む者也。然れ共兩つを得ずんば寧ろ感情をとらんのみ。

（評）云ひ足らざる所あり。

○良心について

石見　千代延操

良心は靈の原質なり、眞理の源泉なり、綜合なり、思想の根底なり、道徳の憲法なり、實行の基本なり、人間の神性なり、一卷のバイブルなり、宗敎の起點也。良心の外に眞理なく、道徳なく、正義なし。明の陳公甫曰く「一片の虚靈に萬象存ず」と、實に良心は一の天地なり。一の宇宙なり。肉眼以て見るべからざる、神の象に造られたる良心、眞に之を離れて、人間なるもの非ず。誰か之れ有りといふ、之れ有りといふものあらば、世を惑はさんとする、世を毒せんとする、世を汚さんとする、人の光榮を墮さんとする、

彼の唯物論者？

純且粹なる良心の思ふ處淸、考ふる處誠、守る處理、言ふ處實、語る處信、行ふ處愛、踏む處正、立つ處道、動く處義、而して人を思ふ處切實に、國家に盡すこと最も深く、行くも、留るも、一言、一行、一擧、一動、唯神のコールに是れ從ふ者即ち眞に Holy heart demands the true being. なるものなり。

是れ人の眞相なり。人の人たる處、唯だ此所にあり、萬有の制宰者たる處、亦眞に此處にあり。

（評）今少し深く語られたし。

紋遺火　周防　亦松つれ



早晩と荻の葉向けの片よりにそゝや秋とぞ風もきこゆる

敷妙の枕のうへにすぎぬなり露をたづぬる秋の初風

武藏野やゆけ共秋の果ぞなきいかなる風の末に吹くらむ

新古今集

短文

編輯局選評

二等　○たなばた

羽後　さゆり子

私には姉妹が五人あります、そして毎年八月七日には五色の糸をわくにうつすのに姉樣は白、私は紫、次は萠黄、次は黄、いちばん末の妹は赤と云ふ樣に定まつて居ります、それから切下髪の御母樣が御家流で短冊にお書きなさると叔母樣が宵の頃にたなばたの出をおひきなさいます。

貼信箋浮世繪五人女。

三等　○朝顔

青森縣八戸町下組町　山田てる

ほの〴〵と閨の中明くなるに、ふと眼を覺せば、萠黄の蚊帳に薄白くゆらぐものあり。あやしみて、よく見るに、あゝそは、逝きにし妹が此春、植ゑし朝顔の鉢に開ける眞白の姿なるよ、懷うも妹の靈籠る心地して。

靈去つて朝顔萎む。

四等　○私の願ひ

相模　長塚よし子

私は天地の間に親身とては一人の父上のみであります、お情け深きお母樣、お優しい姉樣、愛らしいお妹子等をお持ちなさるお孃樣方が羨ましう御座います、お神樣よ、此憐れな女の上に深きお恵みをたれさせて、老いなる父の身を永久にお守り下さいませ。

高潔。

五等　○雷獸

陸奥七戸町三浦方　佐々木げん子

鬼の拳のような雲の塊が八幡山の頂上にあらはれると、空一面墨を流したよう、鳴るだろうと思ふて蚊帳を釣つて入るとゴロゴロガラ〳〵…、はつと打伏す枕元へどつしり落ちたものがある「姉さん雷獸よ」と妹が叫んだので、あらッと愕くと猫が書棚から落ちたのであつた。

早く雷獸をとりこにせよ

秀逸

○重患　淺草　看護女

最後の手段として切解手術をほどこした受持の患者、終日終夜心盡しての看護の甲斐も見えて、驗溫表の朱筆は上に上にと熱を高く書ねばならぬ心元なさ、今夜は手術して恰も八日目、額に垂る氷嚢の水ぬぐはんとすれば杜鵑一聲。

魂を待たず。

○五種のばら

山城　しらむめ子

私宅の花壇には五種の薔薇がきれいに咲いてゐます、黄色の大輪のは父樣が東京から取寄られたの、又薄黄色のは兄樣が緣日で買つてとゐらしたの、そして深紅のは妹がお友達の宅て、薄紅色と白のよい香のするのとは私が時子樣のお宅から頂いてかへりましたの、私は每日そのよい香をかぐのが一番うれしいのよ。

さうびの壷。

○お寺の白壁

神戸市　櫻町子

每月五日十五日二十五日說敎と書た張り紙、次は活動寫眞の廣告紙それから後は樂書と幾年月を雨や風に洒れた白壁とはほんの名のみ。三本足の犬の繪、へのへのもへのが木村先生の肖像畫、釘それの樣ないろは、相合傘、汽車も書てあれば兵士もある。

草木國土悉皆成佛。



汽車　周防　谷美津子

○吾が村

越ノ國　滿子

私の所は神明村といふ小さな村で戶數は十一戶、人口三十二人、時計は一つ、學生は我一人、軍人は五人、高等小學卒へたるは四人、新聞雜誌取るは一家、金鵄勳章は四人、汽車や汽船を見ない人は貳拾人、只此の十一戶は一家の如く老者を敬ひ少者を愛し常に春風吹く。

一村に一個の時計、ドンよりも貴し。

○十八

和歌山市　神保須磨子

私の母が初產したのが十八、姉さんが御嫁入りしたのも十八、私は來年十八になるのですが何をしてゐるてせう。

今年と同じことてせう。

○秋田

秋田縣　佐々木園子

秋田は日本で有名な米國てどこもかしこも田地ばかりです。夏になると靑田は二十里も三十里もつゞいて奧

には姿の富士に似た鳥海山は高かう。そのあひだにはたゞ田草取の菅笠あちこちにみゆるばかりてある。

奥の細道、細道ならず。

○白燕　丹後　鹽見千代子

近江の某家に、白燕が五羽孵化て、初の内は隱してゐたが、先日一時に巣立したので、村中の評判になつたと、新聞で見まして、ちやうど去年お隣にも、それと同事があつて其家の主は、糸で大儲をしられた事を思出しすぐ近江へ知した幸福の前兆故安心遊ばせと。

儲けずともよし。

○海と山　豐前　小草子

妾は山家に十一年、海邊に七年居りました、山里の友には心から詩を愛する人が多く、海濱の友には名のために詩歌をもてあそぶ人が多くございました。妾は海邊に住んで山家の友と交りたいと思ひます。

投書地理の參考。

○薮が花畑　京都　千代

私の家の背戸に小さい薮があります、昨年の夏傳染病に罹り、秋の暮には一本の竹も殘らず枯れて、今年は子は出ず、雜草が一面に生へました、竹は六十一年目には必ずジネンコと云ふ此病に犯されて、十年程は再生ないそうてすから、私は菊や草花を植ゑて薮を花畑に致しました。

十年後には筍と花との雜居。

○彌榮神社　長野市　小蝶

一昨日は當市の彌榮神社のお祭りてした、此お祭りには面白い習慣があります、それは小學校位ゐの小供が奉納彌榮神社御祭禮と書いて社の前の木へ投上げるのてす、上の枝へかゝッた者程字が上手になると云ひ傳へて居ります、私も四五年前迄は毎年投げましたけれども一寸も上達しません。

ありさうな風俗。

○お祭　伊豆　上原雪子

お麥はとりてみ田植は濟んで、農家は一先休みになりました、下女下男から主人に及ぶまて此の日は一樣に休みますが、農家ては國家の大祭には休まないから農休みが大祭のかはりてありましよ、雨のふる日は日曜てす、私しは文學に熱心の爲め大祭日曜は更にありませむ。

農家日記。

○いさなとり　函館　山本たけ子

私しの海水浴のお友達は、漁師の子供等てす、今日も私しを取まいて、砂の上には顏も背も日にやけて黒くなつた八ッ九ッの子供が八人許り寢そべッて居ります

貴君方は大人になつて何になるのと聞きましたら、皆一齊にキマツテラー俺ら魚取りになるんだー。

漁師の子は漁師。

○白罌粟　上總　ひさ子

見渡す野は一面に白罌粟の花に蔽はれて、恰も雪でも降つたやう、さら／＼と月を碎いた白銀の水が、花にあらはれ花に消えて流れて居る。若しや、白雲の中ゆく天の河はこんなではあるまいか。私はこの花の實が食べられるとは思ひませんでした。

天の花、地の星。

○繭搔き　長野縣　古澤あき子

私の内では、今、繭搔きの眞最中です。夏の空氣が、人の働を鈍らす事と、仕事が單調なので、皆欠伸ばツかりして居ますが、新屋の良樣と、内の姉樣とは、時々顏を見合せてはにこ／＼笑つて居ます。何が可笑しいのでしよう？良樣は好い人です、今に、私の兄樣になるのですつて。

姉の戀。

○手　和歌山縣　美香女史

可愛らしいのは子供の手、可哀さうなのはかたは者の手、白くて細いのは美くしい人の手、ちつとの暇にも八字髭をひねるのは旦那樣の手、太いのはお角力さんの手、細いのは肺病患者の手、名譽なのは癈兵の手、不名譽なのは長い手。

此文の評に曰く、かゆい處へ手がとゞく。

○桔梗　信濃　木下壽惠子

一昨年の夏山へ遊びに行つた時、何氣なく根放にして持つて來た桔梗、庭に植ゑて置いたら、去年の秋は丈けが二尺位で花が二十五付いた、只今は丈けが三尺五寸にも成つて枝が澤山に出ました、やがて來ん秋の花咲く頃は五十位咲くでせう。

紫水晶の宮。

○瀧　近江　林まさゑ

痩むさうな夏の日に涼しさうな瀧の音、近寄れば雲の下りた樣な霧の中に水の音が岩をも碎きさうに物すごい。折から谷を渡る汽車がごう／＼。

瀧の響、汽車の響。

○わが書齋　麹町　淺井千鳥子

私の書齋には兄樣が書いた水彩畫の額、美術學校生徒の筆になる西洋美人の油繪、繪葉書の額、スケッチ畫等澤山掛けてあります。床には夏菊が活けてあり、机上の一輪挿には凌霄花がさしてあります、私が茲に入る時は油畫美人、花、皆笑顏して迎へてくれます。

今一つ不足せるもの、日くオルガン。

○鷄と私　小石川　北澤ふさ子

朝起きてから鷄の小家を開け、朝飯を與へに行く。御晝も晩もこの通り、暗くなりかゝると鷄がコツ〳〵と鳴きながら小家へはいる。暫くして私が閉めに行けば嬉しそうに、又明日朝早く開けて下さいといはぬ計りの顔つき、そして鷄の世話がすむと翌朝の餌をこしらへて置く。

西洋の油繪にありさう。

○清水　信濃　世良田ゆう子

私の家の後に鎭守の社があります、その洗淨鉢には岩から樋を通つて清水が年中出て居るのであります、そして夏はそれは〳〵冷くありますから、旅人の絶間がなくて、賑かです、冬はお湯のように暖かで氷などすぐとけてしまひます。

冷泉、温泉、時に適ふ、誠に神泉なり

○衣　相模　加藤婦美子

雪より白い素絹を、紅、紫、朝顔の花の彩に摺つて二尺五寸の袂に裁つて、白百合の香をたきこめて、其をどの子に着せませう。銀鈴のやうな聲もつ子、明星のやうな瞳持つ子。

詩人の想像。

○茄子　大連市　林正子

朝夕學科の餘暇に妹と共に世話した畑の茄子が初ちぎりには皆で一ツ宛食べました、次の日には九ツ其翌日は十五と段々ふゑて此頃は毎朝三十位とります、朝日の出ない中に私は鋏、妹は籠を提げ露をふんで畑へ行き黒々とした茄子を見ると心が清々します。

支那の地、とうなすは如何。

○我家の紀念日　横濱　千秋子

來る吉日は我家中の最もめでたい紀念日であります、其祝儀は祖父母の金婚式と父母の銀婚式を合せて私の新婚式も擧げるとのお話にきまりました。

合せて三婚式。

○良人　福井縣　片山千里

妾の村には妾と同年の者が四人ありまして、各其良人の事を云ひ様が違ひます、お梅さんは常さんと云ひます、松枝さんはおわんさんと云ひます、敏子さんは旦那はんと云ひます、ハイカラのミツス久子はハーツバントと云ひます。

常さんは職人、旦那はんは商人、ハツバントの君は勤め人、おわんさんが分らない。

○渡しのお絹　下谷　橋本波子

流は淙々と爽やかなれど、河原に昇る陽炎の暑さ、風は微との音も起てぬ。と彼岸の蘆が搖れて、閃と棹に

日の輝、衝と蘆間を漕ぎ出たは、渡しのお絹が舟てあつた。水棹一つを命の柱、岸から岸へと舟を漕ぎ、纖弱い細腕で母を養ふ、渡しのお絹は村一番の別嬪よ。

女渡守と云へば小説を想ふ。

○和歌の浦　和歌山　岡崎さき子

船尻を燒いて居る、漁夫町を通り抜けて、葦部へ出ますと、廣い砂濱に晝顔の花が一面に咲いて涼しい風にそよいで居ます、昔はあの松並木のある對岸から滿潮のときは、田鶴が幾つとなく長い脛を現はして鳴きながら葦部さして渡つたそうてす。

和歌の神、なほ鎭座したまふ。

○茄子の花　伊賀　栗の花

昨日迄は花つぼ許りてあつたのに、今日は二つ咲いて居ます、紫色の可愛い〻花は頓て水々しい大きな實になつて、私共の食卓をどんなにか賑はす事てせう、茄子の花にはあだ花がなく咲きさへすれば實になる相てす、人間も斯くありたいと思ひました。



海水浴　麻布　松崎みどり

文章も花實兼備。

○眞ひる　南部　原たき子

汗をふきながら、千金丹賣が通やうつた後此の一二時間は絶えて人通りがない。時々きなこの樣な砂は、風に吹きまくられて、芋畑を被ふ。道ばたの柳へとまつた蟬は暑さうにジー〱鳴いて居る。

遠くにガタ馬車のラッパ響く。

○お上手な人　佐世保　いちじく女

本誌投書家でお上手な方は新體詩が山田くに子さん、小説が服部水仙子樣、短文が相原すみ子樣、敍事文が有賀まさ子樣、圖畫が乙幡もん子樣、俳句が長井漣月子樣、和歌が大和田湾子樣。

先づ當れるに近し。

○長閑　駿河　天野ふじ子

傾きかゝつた藁葺屋の前には紫陽花が眞盛り、日當のよい椽側には六十近いお媼さんが眠そうに蚤を捉つて居る、家の中は闃然として時々クヽと鷄の聲、「今日ア

」と這入つて來た肴屋、籃を卸してお婿さんと世間噺し、もう正午である。

寫生文式。

◎三人　茨城　民子

私の村で本誌を愛讀してます者は僅三人です其中一人は財産家の娘一人は小學教員の妹そしてもう一人は紅白粉や其他の小使を省いて買て居る私なのです。

◎子規　靜岡縣　越川まつ子

夏の夜の生温く寢てもねられず只一人書齋の机にもたれて見るともなく月空を眺め居たりしに電燈會社や樂器會社の煙突から盤のような黑煙を吐き立てく互に行くてを競ひつゝついに月を蔽いしに折しも一聲高くホトヽギスあゝ恨めしや姿は煙の陰にておりし。

◎田植　尾張　たか子

昨夕、來ましたときは、悉皆、植ゑてありませんでしたが、今晩はもう一面に植ゑてあります。田の面の水は、折からの吹くとも無く吹く風に、漣が立つて水の上へ、三四寸突き出てゐる稻の葉も、なよなよと動いて、誠に涼しい。

◎岩手の山　岩手縣　一方井白梅

いや高くかゝげし頭には、白金の冠を戴き、その神々しき、顏よりは、うるはしい微笑をもらして、いとも滑らかなる天然の美を、賞め居る如くなる、岩手山は、學び疲れし我等をなぐさめ、よくよく學の道にはげめよと、教ふるやうである、實に氣高きその姿や。

◎茄子摘み　羽後　國松紫汀

朝餉の御馳走に茄子を摘んで來うやと、爽やかな朝風に吹かれながら、草葉に置く白露を踏んで、裏の畑に出ました。見れば夜露に濡れた花や葉は生々として、濃い紫の茄子は美しくなつてゐる、摘みくしてゐる中に、餘から照げてるやうになりました。

◎人の噂　神田　吉田たつ子

私そんなにハイカラか知ら、何故て小川町の病院へ行くと、書生等が、ヤア甲賀町のハイカラ樣が來たていふのよ。此間もヤア頗るハイカラだ許止なんかしてといふと、又、一人がハイカラじやない煙草のスイカラだつて、私餘りだから知らない！と、耳を塞いて歸つて來たのよ。

◎妾の理想　丹波　乙女

私はこぞの夏一人の兄を得ました、それはそれは親切な方です、そして私をこよなう愛して下さいます、この人は父の友人の四男です、親のゆるしを得て二世をちぎりました、この女學校を卒業致しましたら式をあげます、そして清い家庭を作らうとこれが私の理想です。

◎外風呂　埼玉縣　中村紫香子

沈んで居ても彼方の道を通る人が能くみへる樣な私家の外風呂、立てば柿や柘榴の實が頭を撫てる。東京へ行ぬ前は平氣で入浴つたが今歸省してみると、何となく恥しくて、毎も一番終に、暗くなつてから入ります。

◎涙の種類　神田　須藤元子

學校から歸つてみたら茶の間でお祖母樣が涙を滋していらつしやる、どういふわけと問へば今日弟の學校の先生がこられて弟の事を學校では活潑で喧嘩もせず學課も頁く先生の云ふ事もよく聞くと、ほめなすつたそうな、それでお祖母樣の溢した涙の種類もわかつた。

◎姉さん　京都　芝田まさ

自慢ではありませんが私の姉さんは村で一番の美人なので村長の息子を初め方々から結婚を申込むでくるのですが姉さんは何時も不承知、で私が理由を尋ねると赤い顏して「胸にある」とはて？。

◎雉子　西多摩　森田喜代子

空高き雲雀の聲を聞きながら私は一生懸命に大豆挽きを致して居りますと、根元に雉子の卵が九ッ、何した事か孵化りかゝつた雛は皆な死て居ました、親鳥は何者に取られたか、餘りにおびたゞしく羽子が散つて居るのです、あゝ燒野の雉子夜の鶴。

◎東京土産　日向　濱砂まさよ

一番大き姉さんには近頃はやりの洋傘、二番の姉さんには美しい帶、私

には下駄の上等、弟の義ちやんには帽子と靴、次の花子さんには笛、鳴呼御父さんの見合せのよい事、幾ちやんが私に向つて御父さんが度々東京に行けばよいのに此度は屹度鐵砲と劍を手。

○教子　長門　雛桔梗子

或日雲井といふ兒が教室であまり行儀が悪るかつたのでつい叱つたところが泣出して懸然てたまらなかつた其晩雲井が突然退校した夢をみて、もしや……と大層氣になつて翌朝は仕度もそこそこに出勤すると『先生お早う』と眞先にとんで來たのが雲井でした、其時の嬉しかつた事、オヽ雲井さんと思はず抱きしめました。

○島の少女　豊後　さち子

此小さな島に生れ鄙ては同じ島に人の妻となり母と呼ばれてせち辛き浮世の味を知らずに終るのは何と床しい生涯ではあるまいかアヽ妾も寧ろコンナ處に生れたかつたと。坐ろ都戀しい夕べ磯辭りを喃々と笑ひさざめきながら行く娘達の後姿を眺めて斯うも思ひました。

○大黒さま　鳥取市　よみ子

私は火を焚く事が極く下手て有りますから、何時も部室は烟りて一ぱいになります。皆の者は烟たいと小言を云ひますが、神棚の大黒さまは一度も御怒りは無く、何時も笑つて許り居られるのです、何と云ふやさしい神様でしよう。

○水鶏の卵　上野　坂上香花

今日田の草取りに行つて水鶏の卵五つ見付たので祖父様に見せたら、俺が若い時分には水鶏が巣を作る様な稲を隨分作つたものだが若い者にやらせる様に成つてからしばらく作つた事はない、今年は米が取れたらう、と大變よろこばれました。

○望の一つ　秋田　野邊千草

私の望は三つあり升が其内の一つは産婆であり升私の地方てはまだ内務省の試驗を經た立派な産婆は一人も居りません人生の一大事とも云ふべきお産を無教育無學な老婆などに一任して置くほど危險な事はありませんてすから私は産婆にならうと思つて居りました。

○山住ひ　岐阜市　川出愛葦女

谷から登る、白雲の間に〻見える山合の、木ぐれに立つて居る一ッ家は、お母さんと、兄さんと、妾との詫しゐ住家であります、何分人里遠く、離れて居りますから、何かにつけ、誠に不自由てなりませんが、たゞ懸樋の美しい水ばかりは、思ふまゝになる、山住てあります。

○鷄飼　香川　元子

朝起きて直、赤い襷に、白い手拭姉樣冠りて、餌箱配れば、眞紅の雞冠振り蛩して、雛呼びながら後を追ひ來る愛らしさ、やがて産む卵も私が籠に收めるのてあります。

○歸り道　靜岡縣　近江くに子

午後五時にお裁縫をしまひ山里の道は友達もなく唯一人廣々とした野原の細道をたどつた、かあ〳〵と子供らしい烏の聲、あの烏も森に待ち居るお母さんの許へ行くので急ぐのてせう、妾もなつかしいお母様がお待兼かと思へば我知らず足の運びも早く家にかへるのであります。

○夏の日　茨城縣　永井誠

蟬の聲が八釜しく聞える風通の好い八疊でお爺さんが眼鏡をかけて新聞を見て居る向の林には愛らしい少女がハンモックの上に編物をして居る其傍の道を氷屋が氷を賣つて歩いて居る前の畔田から涼しい風と同時に燕が一疋飛んて來て家の中へ飛込んだ。

○まゆかき　陸中　山櫻花

今日は家のまゆかきなので數人の人を雇つて朝暗い中から大騒ぎして餅をつき神棚やまゆ棚などへずらりと並べそれから家族應人皆がかゝりてまゆをかきましたそして量つて見ましたら家のは五石八斗私のはたゞ七升てした。

○縞木綿　佐賀縣　島松しの子

老ひませる母の意に隨ひ此頃織りあげし縞木綿の單物は手織には似もやらずいと美しく一針毎に母の健康を祈りつゝ今は古けし先祖の遺物としてある簞笥の中に一人ゆかしく母の形見品と幾久しくかほるのてある。

○多作　京都府　綾子

今日母樣と祖母樣とが、野遊びの餅を搗いてゐますと向家の獨身者の多作どんが、突然に、聲高らかに、「隣り餅つく杵の音、餅は搗いても乃公には呉れぬ、呉れもせにや又誰も謂はぬ」と、怒鳴るので、母樣が三升一搗を贈りました、すると、すぐ多作どん、が先程は新形の歌歌つて思はぬご迷惑かけまして——。

◎〇九種の花束　相模　茂　子

けふはヨハネの日六月廿六日です、私は美しい九種の花束を作りました、正午の十二時それを戸口から家の中へ投げ込むと其夜の夢に未來の夫をみるとある雜誌に小波先生がお書なされたのを思ひ出しまして。

〇妾の家　讃岐　少　女

妾の家は極々淋しい片田舍で家内は妾しともで四人毎日たんぼ稼し學校とても高等科のみで我が思ふ學校もなく只毎月一册づゝの女子文壇がくるのを何よりの樂しみとして居ります。

〇土地の由來　群馬　美　津　子

昔から織物に名高い桐生の土地は其由來を聞きますと天平寶時の頃白瀧姫と申す帝に仕へ奉りて技の巧なる宮女が遙々東地へお下りになられ此里の少女子等に綾織る技をお授けなされましたそうでございますそれから世の進歩と共にかくも盛大となり只今では日本の里帚とも云はれる樣になりました。

〇田　舍　仙臺市　岩　田　よ　し　子

晝は鄕の聲にて晝をひもとくも少しも頭に入らずせめて夜なりと思ひて夜になるとあたりはしんとしてたゞ水の流の音ゴ——と何となく物すごく聞えて悲しくあまりさみしく考へるものもいやになります田舍はよいけれどなれないと誠にさびしくあります。

〇各々の花　大和　受　田　貴　美　惠

私しの方の家内は皆植物の栽培を第一の樂しみとして居ります、父樣は松と梅母樣は菊兄樣は櫻妹は朝顏私は秋海棠五人揃ふて朝夕に水をやります、今朝妹の花が二輪開きましたから寫眞を撮つて居ます。

〇散る花　播磨　三　輪　み　つ　ゑ

東京へ、行つてゐる姉樣が、病氣だと云ふので、父樣も、母樣もいらつして、私一人、御留守番、氣がふさいて、仕方がないので、少しは、氣もまぎれるかと、座敷の障子を開けて、花園を眺めてゐると、滿開の卯の花が、はら〳〵と散りかゝつた。

〇菊　紀伊　雪　子

私は菊の花が大層好きです、毎年五月頃に塗を切つて地にさし、朝夕水をかけます、そして新芽のくきがのびますと、またけをたて丹精します、秋になり大な美くしい花の咲のはこの上もなく樂しみです。

〇父の言　淡路　國　分　光　子

妾は只今看護婦養成所に入學してます妹は本年高等小學校卒業して女子師範へ入學するとて勉强してます弟は今年高等三年で未來は軍人になる目的ですいつも父は三人姉弟えらくなりくらして見よと申されます、だから妾は一番えらくなつて見やうと思ふ……。

〇濱松城　遠江　鈴　木　三　榮　子

昔濱松の御城は、家康公が、天下に覇たる基をつくらせ給ひし御由緒のある所、今は外濠中濠影絕えて内濠の跡僅かに殘るのみ、鎧掛けたりと云へる松の昔ながらにいと高うして、濠所は松杉楓など繁りもしたるに、今は人手に拂下げられて切開かれ、權現樣の面影漸くに絕んとす。

〇草　花　伊勢　藤　月　女

妾が幼い時に兄上から雨宮勸解由のお話を聞てから野に出て種々の草花や又時には眞實の野葡萄を物好きにも引いて來て之を植へて喜て居ましたが夫が習慣となつて今だに裁縫のひま〳〵に野邊を散歩してはいろんな草花を採集して栽培するのを無上の樂みにして居ます。

〇花の數　伊豆　時　子

私し宅の花は心まで美しう御座います、兄樣の御養ひなすつた朝顏は早咲して朝露をいましめ私の植た夏菊は暑い日をうけて奮發をいましめ姉樣の御育なすつた鉢の夕顏は命のみじかいと云事を三人に敎へます

〇母　犬　宮城縣　千　葉　い　わ　み

或晩私の家の椽の下で愛らしい小犬が生れましたからそのことを庄屋に

話しましたら丁稚がきて皆とつてなげてしまひました。すると其晩母犬が頻に啼きますので私もその犬の心を察し其悲しい聲をきいて犬でさへこれほど子を思ふかと思つて眠られませんでした。

○詞花集　加賀　あけぼの

私が先に高等小學一年から卒業迄の作文を集めて文の小栞と云ふのを編みましたが、今度今の學校へ入學當時からの作文を覚めて先生に何ぞ名をつけて下さいと、御願ひしましたら、詞花集と名づけて下さいました。

○かゞみ　南葛飾　中里さん子

母上が鏡をくもらせて置くと自分の心が曇ると申されましたから、私は毎日よく拭て置きますそして私は、清いやさしい心になる様心掛けて居ります。

○はらから　茨城縣　藤　子

四人の中で姉様は工學士の妻、兄様は醫科大學生、次の姉様は師範生、各々理想に向つて進んで居ります私は女學校へ通いつゝ着實なる主婦例へば英國流のそれになり度いと心掛けて一心に學びの道を勵んで居ります。

○第二の母　函館　藤本鳥羽子

今年四歳になる花子は、自分の愛するお人形を朝から晩迄、抱たりかゝへたり寝したり起したりして嬉て遊びます。あゝ女はどこ迄も子女を養育するのが天職と見えます、今に花子も第二の母となつて活た人形を抱くのでせう。其時私はもう祖母様と呼れるのです。

○勉强室　伊勢　森田敏子

私の家には勉强室が三つ、御父さんのは高尚で昔の書院の様、兄さんのはハイカラで西洋風、私と富美さんのは四疊半の茶の間、御父さんの机の上にはむつかしい本が積んである、兄さんの本たてには洋裝の本が飾つてある、鏡のあるのが私と富美さんの室。



スケッチ　芝　百々寧子

○朝仕事　上野　小暮たづ子

妾の家は、親子六人暮して朝仕事は、皆役割てきまつて居るのよ、野見廻りがお父さん、床かたづけがお母さんで、兄さんは草刈、姉さんはお掃除、弟は朝勉强、そうして妾は炊事係りなのです。

○海水浴　下谷　高田文子

私は夏休みに御父さんと大磯に行きました、丁度新橋を發車したのが朝の十時でした、速い汽車でもなんだか遅くつて、自分が走りたくなります、大磯に着いたのは十二時過ぎでした、海邊には金砂銀砂が光つてなかなか美しい景色です、さて家に歸りますと顔の黒いのが御土産になります。

○蟲を放ちて　淺草　とみ子

聲の枯れた籠の松蟲を、野邊に放して遣りました、けれども、まだ殘る此の物思ひ……暫く佇んで其の行方を見送りますと、おゝ、茂りの中に聲が千切れてゆきます、嗚呼鈴子の病は直るでせうかしら。

○晝すゞみ　下總　神田みち子

五合も這入る杓に酌立の水をなみ〳〵一盃、息もつがずに呑むで終ふとずーずつと五臓六腑が冷え渡る。今畠から切つて來た瓜を三本許り水桶の中へ浮かせて、さて風薫る李の木蔭の晝涼み。段々睡氣が襲つて來る。

○毎夜　茨城縣　石川ひさ子

妾の家では晝は忙しくて自分の事は何も出來ませんから夜になつてからするのですが、晝のつかれて机にかゝッたまゝ知らず〳〵寝てしまうのです、すると蚊がぶん〳〵と攻めて來る驚いて眼をさますと今度は母樣に早く寝よとしかられる、これが毎晩の勉めなのです。

○花壇の菊　京都府　安田千代

門を這入つて行くと玄關迄凡そ三間半右手には松竹梅の配合よく左には芭蕉南天其外盆栽が少々綺麗に並べ是又配合が好い玄關より乞へばいつに變らぬ田三子さんの笑顏！坐敷へ通つて見れば庭前の花壇には菊が爛開て白黄赤等が田三子さんと妾との樣に中好そう。

○金色夜叉　奈良縣　中富よしみ

涼しい月の明りに螢を追ひつゝ、こゝ溪川のほとりまで來ると、ふと妙な話し聲が耳にはいつた、見ればあやしげなる二ッの影法師が長く溪の面に。

おゝ熱海々岸の二の舞は太古の樣な我が山里にも演ぜられつゝある。

○避暑　日暮里　今村花枝

綠なす夏木立の影、美しう絹張の團扇に起る微風に幾何、浴衣の姿靨らせても此の極暑は凌げないもんですから、此の月の中旬に母さんと美ちやんと妾と三人で、目に餘る大平洋の潮風に吹かれて見ようと思て居ります、お顏の色は少し位い黑くなつたつてかまはないわ。

○可愛い松　大和　たよ子

私の家に、可愛い雌松が一本あります。これは昨年父樣が引いて、下すつたの、その時は、大そう小さかつたが、今年は丈も延び、幹も太つてきましたから、千代萬代迄も、榮へかしと祈つてゐます。

○夏の宵　麹町區　孤菫女史

浴も終へ晩餐もすまして、お池の側に涼臺を持ち出し、母上兄上姉上と、そして私と四人、其處に腰をおろして四方山の物語り、軒につるした岐阜提灯は、簾をすかしてゆら〳〵と、螢が一匹頭上に飛んだ。

○蜘蛛の巣　南多摩　金子信子

何遍取つてもいつも同じ場所へ、而もけさは何日もより網の細かな夫は夫は綺麗なのを作つた事、あゝ僅か五分に足らぬ虫、何たる忍耐力の强い蜘蛛だろう。

○お蠶の會議　飛彈　あやめ子

四眠してから三日目、餘りお蠶が集て居るので、ぢつと見て居ますと、その中の一ッが「諸君吾々の上簇期も愈々近づきました、就ては、最日數の間親切に、然も鄭重に、育てゝ下すつた、當家の厚意に對しても立派なる繭を造らなければなりません」と。

○冷たき光　安房　靜子

涼しい月の夜。隣りの露ちやんと二人靜な、むしろ淋しいやうな社の階段に腰を下して美しい夢を語つて、恥かしやわれしらず涙のつゆを袖に宿した事もあつた……あゝ故郷の天神の森！

○村の名物　越後　乙川ふじの

私の村には、五ッの名物があります、先づ、栗、柿、甘藷、お米、それから、村の人さま皆々朝寢ぎらひのこと、これが村の名物。

○百合　茨城　あさへ子

妾が昨年蕨狩りの歸りに向山でとつて來た山百合、今年蕾が四つ、一番下のは長さ一寸五分ばかりに延びたの毎朝夕、蝶が來て見舞せいか一瓣開き始めた、寫生して都の友に送らう。

○花競べ　下野　鈴木雪子

兄さんは遊蝶花を姉さんは矢車草を妾しは朝顏に孔雀草を、一坪ばかりの庭に植ゑました、て誰れのが一番美しき花を早く咲くだろふと、毎日樂しみ搭ふてゐましたら、妾しの孔雀草が一番早く美しく咲きました。

○花賣　京都　辻あい子

さつぱりした紺絣の着物に紺絣の前掛友仙縮緬のたすきそれに紺の甲掛白のきやはんわらじばきて端の赤い手拭を姉さん冠りにして百合夏菊榊番茶等を頭にいたゞき光々しい朝日をあび乍ら町へ花賣に出るのが毎日の仕事。

○嬉しくて悲しき時　廣島縣　影山美枝

小學校を卒へて都の女學校に入る時、御母さんに御分れして御嫁に行くとき、兄さんの戰死が名だたる新聞に二號活字でほめられた時、未だおさないとき美しちやんと武ちやんは妹背よと遊分杭に書かれた時などは嬉しくて悲しきものなり。

○芋の葉　下野　梅澤哲子

梅雨霽の月のよさにふと門を出ますと、前圃の芋の葉が、月樣のお宿を

して、そよ〳〵と吹く風の涼しさうにうなづいてゐる愛らしさといつたらありませむでした。

○古き日記　　鳥取　由谷品子

古い本箱の底を交ぜかへしてると、二三年前に書いた日記が出て來たので讀むで見ると、吾ながら妙な事が書いてあるので、獨りで笑つて居た、僅かに二三年の歲月は此樣に迄私の思想を變らしたものか知ら。

○裏の畑　　下總　板橋ただ子

雜誌も讀みつくしふと書齋を立て庭に降りそつと裏木戶を明けると、それは〳〵目もくらむばかりの胡瓜南瓜の花。

○二本の松　　三重縣　紅琴

宅のお庭に二本の松が有升一本は地に一本は鉢に此二本の松は同年で今年丁度十てす地のは凡六寸程で鉢のは三寸程てす今日私はふと同じ松でも小さい所にあると之程も違ふ者か知ら人だつて此通りだと思ひますと急に鉢の松が可愛想になりました。

○女俠客　　和歌山　坂口久子

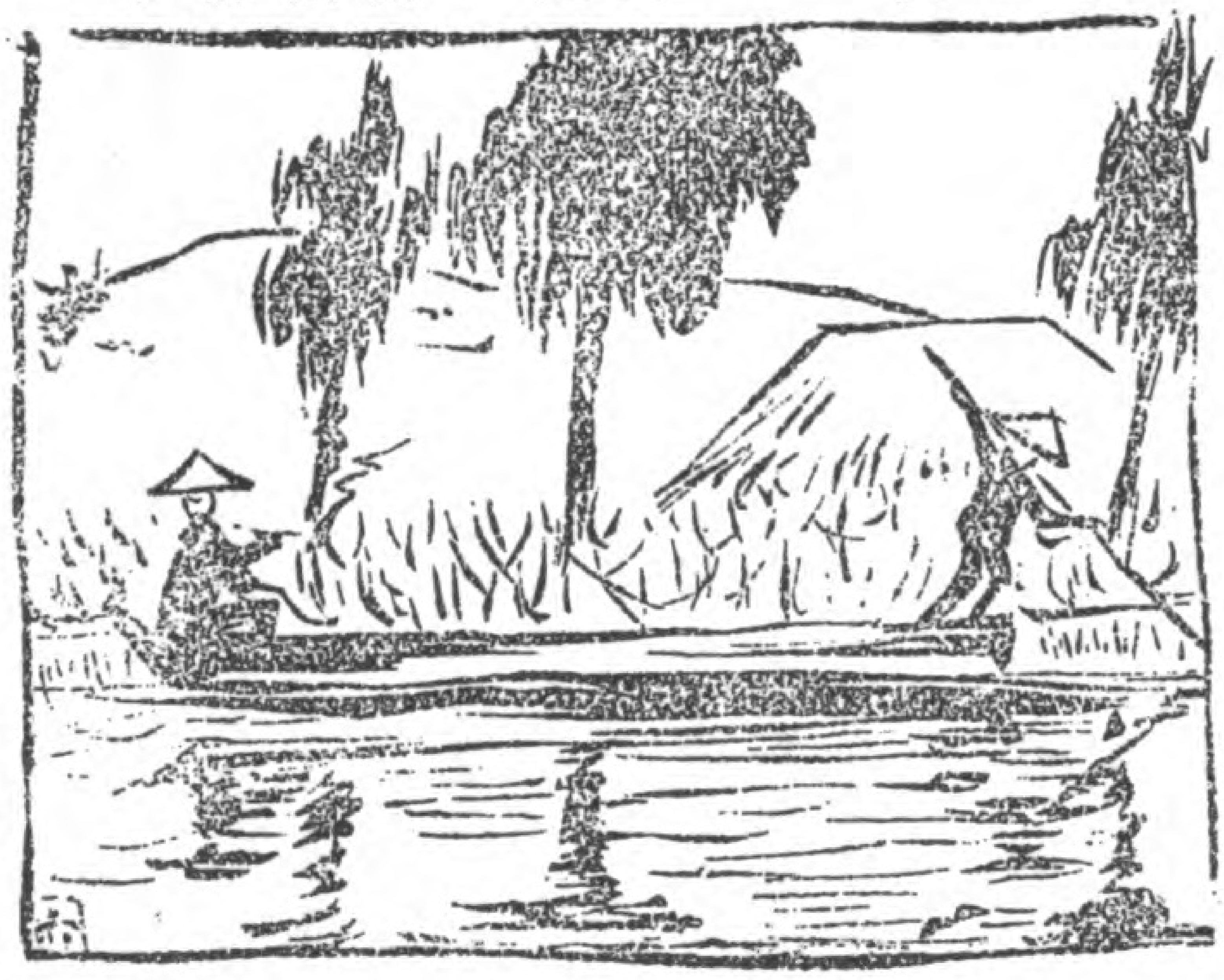
ホーイホーイと足輕が警固の聲午の日影ぎら〳〵と刑場を照して矢來の外は人いきれ草いきれ何處かで野茨の花の香今しも斷頭臺の下に立ちたる白衣の一婦人!! 裸馬上にすつくと立ちて(皆サンサヨナラ)と聲が凉しい幾千の見物は一時にワツト泣き出した。

○鳥集め　　上毛　綠笛女史

鸝眼兒は艷麗なる聲を發し、鶯は詩人を忍ばしめ香溢に花の香に優しく囀るは天來の女神‥‥雲雀と百鳥は好一對である、雲雀は唄女なもずは蓮葉娘を連想す、鴉と雀は親子の俤がある、山雀は藝妓である、雛は長閑に步み長閑に謠ふはまさしく子守役者であらふ‥‥。

○歸省　　愛知縣　小島幸子

「おゝそうだ木曾の渡舟、もう三年になるが、あゝまだあの六十路の坂を越した、見るから正直そうな渡守は待つてるだらうか」



里川　遠江　宮城梅子

○いとしのひな　　常陸　磯みい子

みぞに迷ひ込んで震えて居た雛鷄を救ひあげて、一生懸命に藁火をたいてやりましたが二時間もたつたと思ふ頃、細き〳〵聲をあげてピョ〳〵と二聲なき、遂にあの世へ逝つたのです、あゝかくて此ひなは最後に嘗て私に無限の禮を云つて安らけく眠つたのである。

○田草取　　越後　窪田登美子

妾の家の裏から見渡す限り靑々とした稻田でありますが方に五人こなたに四人一家總出で田草取りつゝ替る替る節面白く歌つて居るを微風の稻葉を辷らして妾の書齋を訪問る。

○四季　　佐世保　岡すが子

春を慈母とすれは夏は嚴父で秋は姑てある。姑は優しい中にもにがみがあつて、秋は凉しい中にも澁味がある、父は嚴格な中にも愛がこもりて夏は暑い中にも凉しさがある、慈母は優しくして春は暖かてある。

○三毛猫　　周防　熊野縫子

まあちやんとふうちやんとが三毛の尾へ手まりを付けてくる〳〵まはるのを見て手を打つてよろこんでをりますほんとうに罪のないものです。

○田植　　美濃　臼井宮子

夕月がほんのりと御空にかゝつて、凉しい風が袂をなぶる頃、やつと三段餘りの田植を終つて、家へ戾る道すがらお父樣は私を顧みなすつて、宮や今日は大變植ゑたのう、嘸勞れたたらう! とこう仰しやいました時、私わ言ひ知れぬ嬉れしさを感じました。

○朝　　福井縣　房子

晝なれば此あたり唯塵にて朦々たる中を急はしく往來する人馬の響きのみさすが朝なり小川を流るゝ水の特に淸しと云ふにはあらず道並の家の別に美しくなれりと云ふにもあられど唯何となく淸冷の氣あたりを占め身も心も洗はれし心地するはさすがに朝は朝なり。

新笑話　編輯局選

三等

○氣樂な下女　岩手　小枝子

女學生新參の下女に向ひ「明日は五時の汽車で歸省するのだからその積りでね」

下女「おや左樣でございますか、まあ妾は寢坊で御座いますから、明日は御目にかゝれないかも知れません。それでは隨分御機嫌よく、道中は御油斷なく入らつしやいませ」

四等

○無線電話　鹿兒島縣始良郡牧園村下中津川窪田方　犬飼たき子

子「お父さん無線電話が發明されたさうです」

父「そいじやうつかりないしよ咄も出來ないネ」

五等

○奥樣と女中　兵庫縣武庫郡住吉村字呉田濱　橋本賀壽尾

新奥樣「梅や、今朝來た新聞はどこにあるか知らないかえ？」

梅や「ハイ、あのー昨日御二階の机の上に御座いましたように存じて居りますが如何で御座いますか‥‥」

奥樣「そうかへ、それじやそれに違ひなからうよ」

○眼鏡　茨城縣　小泉さかえ

下女「まあ、お孃さんのお顏の大きいこと、此の眼鏡は妾にはゆる過ぎて、落ちてしまひますよ」

娘「あら妾の顏が大きいんぢやあないわ、お前の鼻が低いんだわ」

○鏡　越後　松山けん子

娘「詐り多き世とは云ひながら鏡まで眞を寫しません」母「なぜ」娘「先日から幾度か美顏水を付けましたが少しも顏を美しく寫しませんよ」

○産れぬ前の住家　麻布　福谷以智

母子供に向ひ「之はお前達の産れぬ前からある道具だよ」小供「私の産れぬ前の御家は何處」

○着物何枚　越中　ほたる子

甲女「貴女夏中に浴衣何枚着なさるの」乙女「はお汗取りと二枚着ます」

○晴雨計　愛媛縣　松田花子

客「おい船頭大分雨も烈しく成てきた樣だが此晴雨計は一寸も針が動かないが損じとるのかい」船頭「なアにこの位の雨に動く樣な安物ではない」

○格言　靜岡縣　靜山

父「（善は急げ）だ、今日から實行したがよかろう」息子「でも（せいては事を仕損ずる）と云ふ事がありますもの。」

○電氣　後志　花園子

生徒「先生雷は電氣の作用と申しますが私等の田舍には電氣がなくても鳴るわけは何でしよう」先生「それは所謂無線電氣でしよう」

○晴着　筑前　松本貞子

甲「貴孃小紋縮緬の着物お好私此度白木屋で小紋の二枚重と厚板の丸帶な新調致しました」乙「左樣ですか私は縮緬は好みません羽二重が好きで帶は綴れ織りを好みます先日三越が持つて參りましたが只今入用がないので斷つてきました」

○交換手　岡山縣　堤志加代

交換手交換局より歸らんとする後より小僧「モシ〳〵」交換手「何番へ‥‥‥‥」

○聞き違ひ　陸前　松井岩子

甲女「貴孃は英國の文學史を見ましたか」乙女「エー、まだ一人も見ません」

○奥樣　小千谷町　視都子

下女「御隣の山口さんの奥樣はゑらいものですね」主人「なぜか」下女「でも今度婦人に成りなされて會へ迄も出なされました」

讀友倶樂部



謝暑中見舞

愛讀の諸孃より或は美しい繪葉書で、或は叮重なるお手紙で、時に暑中のお見舞の言葉をたまはり、一同暑中執務の傍ら其厚意に感謝して居ります、一々おん返り言は申上ませんが、左に芳名を列擧して聊か謝意に代へます、洩れた方がありましたら深くお詫いたします。

○京都、岩淵國子○萩町、小國敏子○茨城縣中山道江○金澤、中泉みどり○西茨城、田村波津子○沼津、渡邊とよを○北海道、船津爽子○函館、角本かつ子○埼玉縣、戸張とめ子○京都市、片木民子○仙臺、蝶子、花子、みつ子、○阿波、鵜飼清子○仁川、紫○靜岡縣、紅薔薇○近江、夏本みよ子○備中、稻本千代惠○常陸、鷲島皝子○京都、白百合○靜岡縣永井清子○山田よれ○もと子○濱田、ちどり○神戸、安達絹枝○茨城、今泉桂花子○千葉、勢津子○岡山、坂東小須𮑔

文學顧問

問 私は新派の和歌を習ひたいのですが通信敎授てどこかよいところはありませんでせうか私は文學が大好きて色々作りたいと思ひますが年中家にばかり居りますものですから頁材料を得られませんがどうしたら材料をみつける事が出來るでせうか御手數ながら御敎示下さいまし(埼玉、さわらび)

答 新派和歌の通信敎授はありません、新派和歌の載つてゐる雜誌を御らんになるより外はありますまい。それから詩歌文章の材料は家の中でもみつける事は出來ます、もとより思想の產物てすから、詩歌の材料をみつけるには自分の頭腦の中を探すより外はないのです頭腦が空零なら材料も空零です、頭腦を充たす方法は讀書が第一、それから見聞をひろめるのです。

問 記者樣佐々木信綱先生内藤鳴雪先生沼波瓊音先生右御三人方の御住所を敎へて下さいませんか(S門生)

答 神田小川町一番地佐々木信綱、本鄕眞砂町十八番地内藤素行、本鄕西片町十番地にノ二十一號沼波武夫

問 まひる野(窪田空穗著)はいづこの書店の發行ですか、定價はなにほどですか、お敎へ下さい(下野、鈴木晨子)

答 『まひる野』は絕版になつてゐますから、今一寸本屋にはありますまい、何れ何處かて再版が出ることになるでせう

問 記者樣どうしたのか草花やいろ〳〵な花の名は少しも知りませんのてどうぞして覺えたいと思ひますが花の形狀や、色や名なぞ書いた本は御座いますまいか(函館、ユキ子)

答 植物學上のお尋れてなく、文學上からのお尋れだらうと思ひます、それなら少し舊いものですけれども、誰も使つてゐる馬琴の『俳諧歲時記栞草』と云ふ本を御覽なさい、四季の植物は勿論動物、人事、大抵はあります、俳句を作る人のみてなく一般の文藝家に好參考となるでせう、本は活字になつたもので、三四十錢も出せばあるでせう。

問 記者樣、私は頓て上京する身てすが敎育家て音樂趣味ある家庭に置いて頂きたいのですが、何う云ふお方がよろしいてせう、おたづねします(千葉縣、吉植すみ江)

答 これは實際問題てすから、貴孃が親しく傳手を求めて其方をお探しなさるが宜しいてせう、置いて貰う方にも、置く方にも、充分意志の疏通をはからればなりません、斯う云ふ事を餘り輕々に處置すると後て飛んだ間違や後悔が起りますから、充分大事を取つておかかりなさい。

問 記者樣津田梅子先生の英語の學校は何と申しますかそうして何處にありますかお伺ひ致します(波山薫子)

答 津田梅子先生の學校は女子英學塾と申しまして麴町區五番町にあります。

問 大家の作つた短篇小說集を發行所と共に五六種敎へて下さい(藤子)

答 短篇小說數種を集めたものは多數にありますが今思ひ當つたもの二三種を擧げませう『葉末集』(露伴著、春陽堂)『綠蔭集』(藤村著、仝上)『漾虛集』(漱石著、大倉書店)『運命』(獨步著、佐久良書房)『獨步集』(仝上、彩雲閣)『晴

小袖』（楠諸子著、隆文館）『田毎かゞみ』（鏡花著、春陽堂）『雛鳩』（春雨著、文淵堂）其外澤山あり。

○記者曰、福島白菊子として本欄に尋ねられたる事に就いては更に詳細なる事情と住所氏名を明記して本社編輯局宛に郵便を出して下さい

諸孃と記者

○記者樣お變りはありませぬか私も東京へ行きたいと思ひますお友達が高等師範へ行くといはれるともう飛んでも行きたいやうに思ひますわ、此月からお隣の濱子樣と一しよに投書いたしますからどうぞよろしくお願ひいたします、（ほとゝぎす）（記者曰、何れ御出京の機會もあるでせう、お隣りの濱子さんある以上はまだお話對手があつて淋しくないでせう）○記者樣方の御健康と女子文壇の隆盛と野口家の御繁榮とを神かけて朝夕祈るになん（よね子女史）（記者曰、諸孃より健康を祈られるお蔭で社は全體に皆健全です、多謝いたします）○記者樣私十五才よ短文何度出しても出ません四月から熱心に出してるの、姉樣方の樣につくれません今度是非出して頂戴な私の文は見込がないでせうか、御遠慮なく御答へを、私そうすると勉強しますからね（夏子）（記者曰、見込がないわけはありますまい、出ないのは外の方より一歩後れて居るからでせう、たゆまずお作りなさい、出る時がありませうから）○誌友倶樂部への通信は本誌の始にある繪葉書で致しますのですか（神戸市、平林たつ子）（記者曰、普通のハガキでも、原稿と同封の半紙へでも凡て御隨意）○記者樣初めてお目にかゝります私は尋常小學校を出たばかりの無學者ですが誌友の姉上樣たちが投書なさるのを見るたびに羨ましくてなりませんいくら出來ない者でも一心こめてならつたなら出來ない事はないと思つて今からどしどし投書致しますからよろしくおなをし下さいませ私は誌友として皆樣と御交際致したうございますから記者樣一寸紹介をねがひます（てる子）（記者曰、御熱心結構です、何かとお作りなさい、諸孃の交際の處へ出す代りに茲で諸孃にもてる子さんを紹介して置きます、御住所は靜岡縣磐田郡二俣町新町濱崎てる子です）○記者さま此北海道ですら家の中でも九十七度まで寒暖計がのぼりましたもの御地は定めしお暑いことでせうおさわりもありませんか、暑氣に負けずに一生懸命女子文壇のため私どものため御つとめ下さいまし末ながら御身お大切左樣なら（小樽、京橋きみ子）（記者曰、ありがたう幸ひ暑氣にもあたりませず健康です、東京では未だ九十度に上つた日はないやうですが、北海道で九十七度は少し受取れないやうです）○恥しさをしのんで記者樣に一寸御伺ひ申しますわの繪葉書で申し込んだならばこの書物を送るなどゝある時には一組で申し込むのでせうか一枚で申し込むのでせうか何卒御教下さいませ又繪葉書交換の時には一組で送るのでせうかどうするのでせう何卒々々御教示下さいませ（田舍の賤ヶ女）（記者曰、申込は普通一枚でよろしい、一組で申込んで欲しい人は一組と書いてあるでせう、繪ハガキ交換もさうです、普通は一枚づゝです）○記者樣や諸孃樣方暑さのお障りもありませんか定めて避暑にお出かけでありませうが思召のある方は私共の住んで居る諏訪へお出かけ下さい、湖もありますしお湯も澤山あり製糸場が澤山ある、一日諏訪湖へ舟を浮め面白く歌ふもいゝのね先日伏見宮樣がお出でなすつた時は町中大さわぎでしたほんとに避暑には一番よい所ですから是非々々お遊びに入らつしやい（信濃、諏訪女史）（記者曰、何れ參る時があるでせう、諏訪湖は涼しさうです、諸孃の中でも參られた方があるでせう）○靜岡の倭文女さん圖畫をハガキへ書いては困ります半紙でもよろしい外の薄い紙でもよろしい（記者）○投書するのは何と書いたら二錢で行くでせう（岩代ちよ子）（記者曰、封筒の表に「原稿」とお書きなさい、そして封をしてはいけません、こよりで結ぶのです）○宮城縣齋藤惠津子さん、然う云ふゆきちがひは何ともお氣の毒です、けれども攻撃されるほどの惡い事ではありません（記者）○初日出さんに答へます投書規則はそんなに變りません變りましたら變りましたと紙上の何處かで注意いたします（記者）○哀願子さんと仰る方の御申越は拜見いたしました、お尋ねの事は記者の力では何ともお答へいたしかねます、此家ならと御周旋申すには充分責任を以て申上ればならず今さしあたりそんな家はないからです（記者）○信濃の野ぎくさん、あなたのお尋ねも一寸答へかねます、ある事はいくらもありますけれど何處と指して申上られません（記者）○白胡枝子さんの仰る通り圖畫、繪葉書の只取りをする人間の姓名は追つて紙上で發表しませう、記者も成るべく注意して怪しいのは誌上に出さないやう

にして居ります(記者)○河內、みつ江。下野、猪瀨いれ子。播磨、中島一葉。三木町、正井愛。紀伊、西よね。仙臺、愛子。民子。牛込、芙美子。長崎市、秋山みれ子。秋田縣、胥よし子。白ばら。上總、渡邊汀子。賤の子。靜岡縣、時子。尾張、覚ゑつ。大塚けい。きみ。南多摩、白百合。淺草、ゆり子。京都、ふみ女。筑前、一葉子。尾道市、秋雨。芳子。東京、しら萩。美濃、小山殘香。北陸、喜代子。本郷、保延七草子。古登子。以上の諸孃から記者に一言されたことは皆拜見しました、一々御答へいたすまでもなく、仰せの通りでよろしい、なほ此上とも愛讀し、且投書して下さい(記者)

圖書換讀

○讀友の皆樣方私子不如歸、火の柱、和洋草花培養法、纘美辭寶典、二十五絃、夏廂、不如歸集、すみれ集、愛吟、小百合集、明治才媛新體詩第一集、女子文壇一卷十號より三卷九號迄、ハガキ文學第二卷全部、其他色々な本が不用になつて居りますので若し皆樣の中でラーチツド博士やケリー、アツキンソン、宮川經輝、田村直臣先生等の聖書註釋或は何かの歌集御不用の方御座いましたら御交換下さい、御交換下さる方御座いましたらハガキで一寸!(函館區旭町二百四十番地十二番屋敷小野ゆき)○愛讀の諸姉樣妾は貧しき爲女學校も退學して奉公同樣の身で書物など買へませぬ故お讀古しがあれば小說雜誌詩集教科書など破れ汚たのでもかまひませぬ御惠み下さいませ妾もお禮のしるしまでに小說、ハート袋、栞など二十名限さしあげます(大阪西區九條町百二十番屋敷鈴木菊治郎方鈴木ふさ)○妾の手許に金色夜叉の脚本、コブシ詩、中、良人の自白、火の柱、女學世界、女子敎育論、其の他美文、散文韻文小說の書二三十册藏書して居りますから他の書籍とでも何んとでも交換を望みます(群馬縣群馬郡長尾村大字吹屋村和泉方島不美子)○私もお仲間に入れて下さい、皆樣の中に不如歸(小說)御不用の御方樣がありましたら至急に御知らせ下さい成可く新らしいのを(信濃松本在桐原村桐原哲子)○私諸上で婦人世界御願致しました處數人の姉上樣より送つて頂きました皆それぞれ御禮は致しましたが一人消印で住所不明のと、又一人は東のゆめの世樣とやら三册も送つて頂きましたが何分住所がわかりませんので御禮を申上る事が出來ません、又他の諸姉樣御不用の方は昨年のを送つて下さいまし御禮は致します(信濃松本在入山邊村桐原撫子)○私に、言海。木下尙江著靈か肉か。久保天隨編明治百家文選。の不用なのが有ります諸氏の內で寬風戀風後編か紅葉全集第六編かを御持ち合せの御方は御交換下さい最も紅葉全集の御方には前記の內二册差上げます。尙絹あみ物、繪葉書の交換を願ひます私は昨年中の中學世界、中學秀才文壇や其の外の雜誌又は美しい繪葉書を返禮します(筑前國鞍手郡福地村字中泉加藤耕作內吉田千代子)○諸姉樣よ妾は田舍の不束者でありまして本年小學を終へ淋しく暮して居る者でありますから御手紙なり御寫眞を下さいきつと御返事は差し上げます尙私の許に小猫、長恨、闇の光明、櫻の御所、深山笑ん、自由結婚、其他數多の小說も雜誌もありますから寬風戀風、綠不線、金色夜叉、想夫憐、天うつ波、新聞賣子等御持の御方はどうぞ交換して下さいな相當の御禮はいたします(佐賀縣小城町字砥子町光岡つる)○私の手許に己が罪、良人の自白、京人形、妾の罪、美少年、片男浪、其他女學世界、新古文林がありますから皆樣の內で乳姉妹、不如歸、御持ちの方は交換して下さいまし(和歌山縣有田郡南廣村字井關西島新一方民子)○皆樣のうちで夏子乳姉妹御持ちの方は私の寬風戀風少女の煩悶女學生氣質にせ紫みだれ髮と御交換下さいませ御換へ下さる方には來月本紙に御住所御明記下さいさすれば當方より直接御願ひ致します(志賀姬百合)○諸孃樣の內に俳句入門俳句作法和歌入門黃菊白菊朝晴新潮をお持ちの方は妾の花籠金色夜叉女波男波ホトトギス文藝倶樂部和歌作法と交換下さひませんか先着三名のお方へは妾の寫眞にエハガキを添えて必ず差上ます(讚岐三豐郡觀音寺町下市十河花琴子)○讀友の姉樣方よ御手許に古雜誌や古本どんな者でも宜いのですから御送り下さいな御禮として背突絹栞又は相當の書物をさしあげます寫眞も有りますから御交換下さい(山口縣豐浦郡瀧部局區內高森泰定方深川綾江)○私の手許に縮入の言海と實綠陰先生著の作文活法とまだ新らしいのがありますが食道樂合本か春夏秋冬いづれか一部拔けてゐてもよろしいから新古をとはず御交換下さい又鵜谷外史著人類攻擊とハガキ文學今年の四月のと二つと第二輯の女子懸賞文集と御交換下さい誌上にて御一報願ひます(丹後國賤の子)○皆樣の內でハイネの詩集か又は須磨の曲をお持ちの方は私の食道樂朝はれ戀か夢か不如歸其他の雜誌とかお望の物と取りかへを願ひます何卒

誌上にてお答へを願ひます(下野梅月子)○皆樣の御内に、趣味、文藝倶樂部、文章世界、中學世界、中學生、小說筆子以上どれでも御不用なのがありますれば妾の「秀才文壇」と御交換願ひます(德島縣麻植郡上浦村上浦野しげ子)○皆樣方の内で花守、白羊宮、湖畔の悲歌、塔影、暮笛集、朝晴れ、破戒、思出の記の内何れか御不用でしたら私の不如歸、花がたみ、浦人ノ情、女學生訓、新體詩集、おだいどこ其他雜誌と御とりかへ下さいな(埼玉縣南埼玉郡百間村伊草あぐり)○親愛なる誌友諸孃よ書翰の交換を願ひます是非共婦人世界か繪はがきか小說不如歸を送りて下さいよ其御禮に繪葉書挿み四拾枚挿み貳個 名所繪はがきに面白き書翰それに私の寫眞を添へて御禮致します(佐賀縣杵島郡北方村流山綾子)○皆樣、大變御無沙汰致しました、御めん遊ばせ姉樣方のうちて唱歌、埴生の宿、御存じの方は下名まで御知らせください、急ぎますから先着の方には少女世界、秀才文壇、一册つゝ差上てよ、あとの方には、撰擇て御禮致しますからあしからず(赤坂區青山高木町十四高木春園)○皆樣の中で寬風戀風全部御不用の方が御ざいましたら私の富美子夫人、母の心、小猫行く衞、大阪每日新聞切拔、新小說三册以上と御交換を願ひます、御望みにより私の寫眞をそへますからどうぞ御交換下さいましな(丹波國桑田郡篠田野村柳原方草村秋子)○皆樣私の手許にある青春の夏の卷と皆樣の金色夜叉(初編)か無果花か思出の記の中どれかと交換して下さいませんか猶和文の眞人の自白お持ちの方は私の英文のとそれから德田秋聲の小說花束と皆さんの何か寫生文集か小說でもよろしいお持ちの方は取りかへて下さいましれお心のある方は先づ御一報をねがひます(岐阜市外加納町一丁目青沼信子)○妾方に中學罵倒論(青柳有美)、平家物語(博文館)新詩辭典、品性論(内外出版協會合本)、若き日、(平野萬里)、新古今集(博文館)みだれ髮(與謝野晶子)愁人(小川未明)、獨步集、近世美學(高山樗牛)男の聲(生田葵山)、寬風戀風(小杉天外)詩聲(國木田獨步)等有之候、御交換御志望の御方は相當のもの御送り下され度候、直ちに御望みのを送るべく候。(香川縣綾歌郡川西村香川政二方、藤村濱子)○皆樣の中にて寬風戀風血の淚想夫憐女學生(風葉著)破戒吉丁字にせ紫の小說お持合のお方は妾の國文字典和歌與竹集女男波の歌片男波美學大要韻文作法美文作法山水美論美文斷片の内二册宛と交換をお願ひしますお望みのお方は直接下名へお申越をそして御交換致しましよう(美濃國山縣郡谷合村北町臼井宮子)○諸孃の姉樣よ今私の處に婦人世界、日露平和實記及ひ伯爵夫人不用ですから御入用の御方は上等のエハがキにて申込み下さい然し私の寫眞と絹製の栞とがありますから先着二十五名だけは私の寫眞と名所エハがキとを添へて送りますから早く申込みなさい(長門瀧部局區内田耕村上大田中村しのぶ)○皆樣私の所には文藝倶樂部十一卷八號と九卷十五號と演劇脚本春日局烈女お藤其の外色々の雜誌あつてよもし皆さんの内で小說不用の御方は何んでもかまいませんからどうぞ交換して頂戴な(栃木縣芳賀郡水橋村大字西水沼千葉玉野)○皆さんの内に、女子雅文教範、少女手紙の文、娘と妻と母、良妻と佳人、結婚の秘訣、などの書物がありますなら、妾の化學講義、國文學小史、實用料理法、小說小寶の市、新古文林、女學世界等と交換して下さいな、或は又上等繪葉書にても代價にて差上ます(佐渡畑野村栗野江谷川桂月子)○諸姉樣おハがキ並に小說有がたう一々御返事差上ましたが和田〆ネ子小林まつ子松川竹子の三姉は宿所不明の爲め御知らせ下さい又小說は乳姉妹やほとゝぎす等の類を御送り下さい絹ハンケチの上等を進呈致します(橫濱市辨天通四丁目清水ふさ子)○皆樣の中で女子文壇の一卷の四號と六號と、それから二卷の八號と、一卷の懸賞文集等御不用の方は御送り下さい不如歸の歌、小公子、こぼれ月、現代婦人立志談、趣味、美麗なる繪端書などを、すぐお禮致します(牛込築土八幡町三十番地土居優子)○誌友の御姉樣よ互に不用の本を交換しては如何ですか妾手許には夏子、乳姉妹、同歌、富と愛、多情多恨、新夫人、新生涯、小華族何れも新らしい美本てすから皆樣の内に金色夜叉(前中)濱子、伯爵婦人、己が罪、心の波、不如歸、其他高尙の小說美文集をお持ちの方は何うぞ御取替下さいな(秋田縣河邊郡新屋町字上の坂相澤喜市内きち)○皆樣の内で金色夜叉全部六册御不用の方は私しの己が罪、筆子、源氏物語梗概、黃菊白菊、春の肩、と交換して下さい、つき次第倘雜誌數部にゑはがきを添へて差上げますから(北海道有珠郡伊達村東紋鼈村七七橫山モト子)○私の所に左の不用書があります、美妝繪ハガキ一組に申込のお方に順々に差上ます、佐々木信綱著日本女子用文章、日本謠藝大全第二編俳諧詞寄發

甸作法案內、三宅花圃著もとのしづく、本田信敎著人生の快樂、普通寳兒法、學生必携作文資料、寄の音、文部省音樂取調掛著唱歌帖、婦學叢錦、婦人嬌風雜誌、婦人新報、(石狩國雨龍郡北龍村和槓尾淚子)〇御したはしき誌友の諸姉樣！妾は南總の草深き庵りに其日々を過して何にもしらぬ不束者ですが、何とぞ皆樣御同樣に親しく御交りして下されませ。其れから皆樣の內で不用の新聲と明星の古いのが有りましたら、妾し所持の書籍雜誌と交換下さる方はありませんでしようか(千葉縣長生郡日吉村鵜谷渡邊汀子)〇新撰詩學活法、大日本地誌、日本地理問答、日本歷史問答、商事要項上中下等不用ですが皆樣の不用書の何にても交換し！下さいませんか、尙繪葉書の交換もお願ひします(下野國芳賀郡益子町城內日下田いち子)〇皆樣の中に左の本が不用に成つて居ましたら是非御惠んで下さい御禮は旅路、草わかば、失戀、百字文選叢菊白菊、花守、女學世界が十三冊、少女界が八冊、婦人世界が六冊の中お望の書てしますから、御送附を願ひたい本は、自然と人生、思ひ出の記、舞姬、草ぶち、白羊宮、雜木林、みだれ髮、不如歸、筆子、多情多恨、朝ばれ、溲露花、その他歌集小說どうぞ同情を寄せて下さいませ(高岡市通町三十一番地北本歌子)〇本年六七八と三ヶ月分女學世界(增刊不用)八月婦人世界男女の研究、婦人の日常生活法、健康大觀等御もちの人は御知せ下さい東京岡崎樣に一寸申上升先日早々返書出しましたら住所不明でもどりました(武藏川越石原町川岸旅館佐久間松代)〇皆樣私の手許に怪美人及び洋行奇談赤毛布を持つて居ますが何方か之に相應せる面白い小說お持の方は御送り下さいな私もきつと直に送りますよ(住所は久留米市原古賀町平井さだ子)〇私の手許に造花本三四冊諸雜誌などあります、繪葉書を封じて送り下さるか、寫眞を送り下さる方に送ります(函館區曙町七番地角本かつ子)〇皆々樣妾は極田舍者ですが多情の諸孃御憐み被下不用の小說女丈夫怪美人女學生女子判任官不如歸綠子青春等がありますから御望みの御方へ送りますから名所繪葉書を封入して御申込み下さい(肥前國杵島郡朝日村杉川たけ子)〇誌友の皆樣妾の手許に絹糸編花通信敎授書三冊思出の記、文章組立法、書翰文辭書、苦學案內、男女遊學案內、詠歌辭典、假名遣辭典、渡米案內、明治辭林に新辭林、美辭寶典不如歸の歌、空想病、和歌詞の千種、青海等不用でありえます皆樣、持合せのと交換下さい我子の惡德に美德、家庭敎師としての母、藤村操、女學世界、婦人世界、家庭小說はなんでも大好きよ男子の方には葉を添へて御禮しますわ(茨城縣眞壁郡關本郵便局區內藤谷杉山芳子)〇滿天下の御姉樣よ妾は「多情多恨」「十七八」「夏子」「ささ波」「叢菊白菊」「玉琴集」「女子美文斷片」「不如歸」の八冊不用になつて居ますから御望みの方は麗しの繪葉書か編物の栞にて御申越下さい(肥前國杵島郡橋下村松井三重子)〇諸姉樣の內で筆子、己が罪、思出記御持ちの方は私しの手許にある兩美人、妾の罪、金色夜叉、女學生訓、乳姉妹と取替下さいな私し寫眞を添へて差上ますはづかしいけれど(越後古志郡福道遠山樣方日下きよの子)〇誌友の諸姉樣私の所に蕪村句文集、俳句譚話、假名遣辭典、古今和歌集遠鏡、出鱈目の記、新古文林二十餘冊、發句調の栞等有りますから御入用の方は寫眞か編物附つきにて御申込下さい直に御送り致します先着五名へは私の寫眞を添へます又繪葉書の御交換を願ひます(安藝國賀茂郡竹原町樋口豐助內能勢曲水)〇誌友の皆樣に御願ひ致します本年四月發行の文藝倶樂部御持ちの方は私に御ゆづり下さいませんか、相當代價或は女學世界、女鑑なり二冊御禮に差上ます(埼玉縣葛飾郡吉川村山中繁子)〇誌友の皆樣、妾の手許に左の不用書がありますから相當の代價でおゆづりしたいのです女子懸賞文集、朝ばれ、婦人世界、少女界、女子文壇八冊、少女世界十冊だけありますからお申し下されば直にお送り致します。(東京府町田村宵野きん)〇皆さんの內に、想夫憐、涙痕集、多情多恨、夏小袖すゞりの露、御不用のお方は送つて下さいな、お禮には想夫憐には、淺瀨の波以下順次、伽羅枕、百人一首一夕話、深見笠桐一葉を必ず送り升よ、其他雜誌お望みなれば少女界、女學世界、女子文壇、秀才文壇、少女の仕事、女鑑の內冊數お仰せあればすぐお送り申します(京都府相樂郡笠置局區內松田綾子)〇皆樣方に本誌一卷一號より三卷二號まで及び三卷五七八號右の內もし御不用の分が有つたら御送り下さいませんか御禮には繪葉書か編物を返します(三重縣桑名郡古美村大字奥麗里見君子)〇皆樣方い中で中央新聞のホーム二より七まで十より四十まで時事新報文藝週報一號より四十七號まで五十一號より五十八號まで右の內何册でもよろしいが送つて下さる人は有ませんか御禮はスタンプの繪葉書を

送りますが（三重縣桑名郡野代村大字大島居佐野蠶花）○皆樣小說雜誌の交換を願ひます皆さんの中に琵琶歌究風戀風の二册を妾に御惠送下さい相當の御禮に政府發行の紀念スタンプ繪葉書を送ります（伊勢國桑名郡七取村平賀平野定子）○バイブルは御申込順に差上ましたが何分限りある部數てしたから皆樣の御望に應ずることが出來ませんてした、何卒他の方々は惡しからず（滋賀縣つゆ女）○諸孃御機嫌よう妾の小說所望の方は意外に多數（廿名）に上りまして杉山きみ子樣外四名に差上ました故左樣御承知願ひます住けい子樣には青春切實御めぐみ下され難有何卒御住所詳しく御知らせ下さい（三尾靜子）○記者先生や誌友の愛姉達！暑さの折柄御健在ですか？拙き私も主のみ翼のもとに樂しく神樣を讃美して自然の默旨に接しつゝあります：：：私大阪文壇二號を誰かに進じたく思ひます筆跡の美くしい人ならたゞの端書て申込まれましても早速お送り申ます（丹後加佐郡河守町字新二四八番戸鹽見落葉女）○妾しの所に錐子濱子己が罪乳姉妹（全部）女學生訓文の手ほどき等不用に成りて有りますから姉樣達の貴き御うつしゑに未使用の繪葉書添へて申し込まれし御方には一册御のぞみにより全部御送り致します（丹後國加佐郡神崎港河本綾子）

葉繪書交換

○妾を何卒妹とおぼしめして末永く／＼御交際のほどを願ひ升御繪はがきの御交換をもれえ先着二名の御方には耻しき妾の寫眞をさし上げます（神戸市旭町通五丁目百拾番細川樣方、中尾流子）○諸姉さんよろしく御交際を願ひますそれからスタンプ付繪葉書の交換を願ひます、着次第直ぐ御返事差上げますから（播磨揖保郡千本村本佐野內前田秀子）○諸姉樣妾も河內の方々の名所繪葉書あります諸國の名所繪葉書交換をして下されば先着十名に限り糸細工編物を差上ます又姉上樣よ寫眞も御惠下され私の寫眞と、はいからリボンをそえ御かへしいたします（河內南河內郡長野村大字西代奥田芳枝子樣方角の貴美子）○暑さ益加り候處姉樣方も定めて休暇にて御歸宅の事と存じ候此間宜しく繪はがき交換の程願上げ候（和歌山日高郡湯川村小松原高垣貞子）○諸姉樣繪葉書文章の交換を賴みます、私はたとへ如何なものでも皆樣の赤心を無に致しはしませんから何卒れ（能登輪島河井町坂本喜代子）○妾は至極不束な者てすが、繪はがきや玉章の交換が大好きてムいますから、何うか皆さん申込んて下さいな、只孬りなんかするやうな卑屈な妾ぢやありません、（茨城縣那珂石神村外宿一六一高邑森江）○北海のはてより繪葉書の交換も交際もねがひます（北海道夕張郡登川市街第六區濱江さく）○私はほんとうに繪はがきが好きて好きて二三百枚も持つて居ます、何うして皆さんにおわけしたら好いかと考へて居ます、兎に角に交換いたします、初めの七人の方には海軍紀念スタンプ付てお返しいたします（越後龜田浦町渡邊重太郎方たき子）○妾は今度米國より舶來繪葉書が參りましたのが四五十枚ありますそこで御孃樣の御許へ新刊の小說「何小說でも宜敷い」か編物か御持の方は御交換下さいれませんか尚「又永久に御交際を御願ひいたします一時的てなくつてよ（佐賀縣下高橋町宮地五十子）

○皆さん何卒玉章や粟繪葉書等の御交換を願ひます私は名所繪葉書や紀念スタンプ付繪葉書澤山ありますから先着二十名限りスタンプ付のを差上げます後のお方にはごく美しき繪葉書屹度差上げます（岐阜縣加茂郡和知村下牧野日置桃花子）○誌友のなつかしき姉上樣方私は學友間ても繪葉書狂人と云はれる程繪葉書の交換が好きですの何卒これから永久に繪葉書交換を一入御願ひ致しますなほ私は文章を作ることが此上もなく好きてすが悲しい事には作る丈の力がまだありませんて教へてやろうとの御情のある方には特別に御交際を願ひますそれから私今近江八景の繪葉書をたくさんと不如歸の小說を新體詩に作つたものをうつしたのをたくさんと持つてゐますから御望みの方は相當な繪葉書て御申越下さい（近江甲賀郡水口町天王町杉村玉野）○相變らず繪葉書や寫しゑの交換を私しは神かけて只取りはしません（越後古志郡福道四十一白葦子）○嶄新なる繪葉書交換して頂戴！、美麗なアルバムへ、はさんで永く保存してをくのですから：：：又お差しつかへなくば御寫眞御惠送し下さいな、先着五名の方だけには私のみにくいのも御送り致し升（淺草區北清島町三竹田光枝）○妾は繪葉書の趣味をかいしかれて居りました處姉が紙上て交換を願ひました所毎日幾通も參りますどれ程樂しきかと思ひました何卒皆樣御仲間いりをさして頂戴御返事は必らず致します（大阪西區靱中通三丁目島雄朝子）○私は長久手古戰場寫眞鑑並松、御旗山、家康公牀机石池田父子森公の墓等數組あり上等繪葉書にて御申込の御方に進呈致します又右の繪葉書もあり

ますから御交換を（愛知縣愛知郡東鄕村諸輪一九五近藤しげ）○皆さん美しい繪葉書たくさんお送り下さつてお有りがたう、末番のお方雑誌なかつたていけませんだれ、ゆるしてや、妾極めて賤しの女ですが見捨てずに末長く交換して頂戴よ、一度限りのお方いやよれ、日々葉書帖を繙いて無聲の音樂として樂しんでゐますわ、これから他のお方も御紹介して下さいな（山城國相樂郡高山村松田あや子）○誌友の諸孃方と紀念スタンプ繪葉書印影葉書の未使用のもの字を書かずに封筒に入れて交換を願ひます本月のハガキ文學スタンプ交換會の廣告を一寸見て下さい（伊勢國桑名郡香取村上宮遲）○誌友の諸姉樣よ妾はスタンプ葉書が非常に好きで澤山集めて居ります御有志の御方は神社佛閣幷に名物食物等のスタンプ紀念スタンプ等の有ろ繪葉書を御送り下さい妾よりは趣味ある種々の肉筆スケツチ繪端書を御送り致します（京都市衣棚通二條南野村案山子）○世の情け深き姉さん達よ妾の手許に海軍紀念日のスタンプ付が御座いますから送つて下さい返事は早速差上げます（丹後舞鶴町字寺内丹州時報社内錦織末子）○四方の諸姉樣よ田舍の不束ですが『繪はがき』や『玉手』の交換を願外繪はがきは可成紀念スタンプ付のを願升返禮には皇太子殿下山陰行啓のスタンプ付を差送り升又先着者五名樣には同スタンプ付のハンカチフを添へて乾度御返事差上升（丹後舞鶴町字引土七九竹原樣方竹原操子）○諸孃樣の內で大觀兵式紀念ゑはがき御持ちの御方は御送り下さい使用後でも宜しいから私しも必ず雑誌を添へて御返しいたしますから（北海道有珠郡伊達村東紋鼈村七十七横山モト子）○皆々樣其後お替りありませんか、相變らずどし〳〵各地名勝繪葉書の交換を願ふ（石狩國雨龍郡北龍村和繪澤源子）○皆樣先日は澤山切手をお送り被下誠にありがとう御座いました其節直ちに返禮致した筈でしたが其中に住所姓名の合點の行かない物が二三あり其方へは未だお禮致しませんから返事の屆かぬ方は大至急繪葉書にて請求なさい（長野縣下高井郡日野村字高遠西山ゑち子）○誌友の姉樣繪端書の交際を願ひます繪端書十枚御送り下さつた御方には面白き物を差上ます先着二名には羅物と「カード」を差上ます（大分縣北海郡大在村字政所中通り高橋榮代子）○記者樣の御厚情を持まして私名を御出し下されましてから御なさけ深き御姉樣から澤山美しき繪葉書下されましてありがとう御遠方からの御交換もありきのふに引かへ此頃の嬉しさ言葉につくせません今後とても御交換なして下され御返事云ずとも御返し致しますから頂戴ネ（大阪西區靱中通三町目島雄禎子）○繪葉書に趣味を有する友一名を求む一時的は御斷り申上候（東京日本橋區本石町二ノ十二杉本方米倉）○妾の一番好きなのは繪葉書の交換とぼた餅です何卒何時々々迄も御願申します又寫眞編物等御送り下さる方々には妾の寫眞及び乍不作編物自繪水彩畵其他繪葉書一組（五枚）御禮として先着五名樣に限り差上ます（伊勢國河藝郡明村大字楠原上町一〇六番地平尾こと方平尾とし子）○誌友の皆樣妾は今年當地のスクールを卒へて實家に居ります故繪葉書やレッターの御交換を願ひます御寫眞の御交換は大好きよ御寫眞や遣花を御送り下されし御方には妾の不出來な寫繪を送ります何卒永久的に（下野下都賀郡寺尾村尻內福富清子）○御慈愛深き姉君達妾は渥美の片田舍に只々淋しく世を送りつゝある不束の者ですが何卒繪葉書か寫眞を御送り下さい、決してとりがちには致しませんから、（愛知縣豊橋殿冶町大須賀なか方ひさ子）○誌友の諸孃樣妾は俳句が大好ですから美麗なエハガキに俳句三句以下を書てお送り下さい永久下さるお方には妾の寫眞に舶來のエハガキを添へて必ず御返しします（讃岐三豐郡觀音寺町下市區十河花琴子）○なつかしい女子文壇お友達樣よ種類の什麼を論ぜず繪葉書の交換を願います、安心してお出し下さい斷つて御返信は致しますから（山口縣大島郡蒲野村谷瑞子）○諸姉上樣妾はネ片山里に住む不束者ですが何卒寫眞や繪はがきの交換を永久に願ひます（羽前西置賜郡手ノ子巻坂信子）○誌友の皆樣私は昨年夏の頃から當地に來て居りますが只さむしくて困りますの每月本誌の發行と友人からの便りが何よりのたのしみです何卒皆樣地方の名所繪葉書を御交換下さいませんか先方のが着き次第きつとすぐに御返し致します（讃岐善通寺町大島病院內征矢野照子）○諸友姉樣よ妾に上等花の繪葉書を御惠ください、御送り下されし諸孃には、先着の方に秀才文壇、婦人畫報、一册づゝ差上ますあとの方には繪葉書て御禮致します（赤阪區青山高木町十四高木とめ子）○文月に入りて虫なく夕、時に繪端書の交換にて、お互の慰藉務めようてはありませんか返葉は確實に（大阪西成郡西中島高畑石原かよ子）○誌友の諸孃樣繪葉書の御交換を願ひます

御返しには自筆の繪葉書に和歌一首を書き添て差上ます若し短册御望の方は自筆のものを差上ますからその旨書き添え被下まし何卒御願ひ申します（岐阜縣加茂郡蹈地村(村役場東)市岡翠園子）○花か島か最もやさしい舶來の繪葉書御惠みのお方最先着七名を限り自製の編物とリボンを差し上げます普通の繪葉書はお斷りします（岐阜縣山縣郡北山村高原樂店内ひさ子）

編物寫眞交換

妾しは去る七月の本誌にて御交際を願ひました處四方の諸姉上樣から續々御交際を賜りその内三十五名の方へは皆私しの不束な寫眞を呈しました只今また〳〵三十五枚餘燒増をして貰ひましたから至急繪はがきか寫ものかて御交際をなし下されば必ず不束な寫眞一葉を呈します（岡山市内山下六五ノ二ノ八 相澤よし子）○みなさけ深き誌友の諸嬢樣方よ妾は草深き片田舍に住て居るものでありまして何も知らぬ者でありますが何卒編物を惠てくださる方はありませんでしようか何程古くてもよろしいのです、お手本に致しまして妾も習たいのでありますどうかお願申し上ます深銀貨入何でもよろしいのです（備中備田局區内隈村林湊之助内ふみ子）○私の手許にリンネル製輸出手巾が六枚ありますから御入用の方は上等のあみものと交換いたします（埼玉縣兒玉郡旭村新井二九境野茂登子） ○諸嬢よ寫眞の裏に撮影當時及び現今の年齡に在學の學校名を記して交換して下さいませんか又俳句の交換も（三重縣桑名郡古濱村力尾平田富子）○誌友の姉上樣方寫眞造花編物玉章の交換を願上升尙寫眞繪葉書御送りの方に私のみにくきめと繪葉書をそへて著次第必ず〳〵御返事します（長野縣下高井郡中野町上小田中町田みつ江）○皆さん、栞府突下さいな、下さつたお方には造花と云ふ本を、一册つゝ差上ます（大阪市西區さつまぼり裏町三一寺田千代子）○文壇の諸嬢樣方お寫眞の交換をして下さいお早い方五名だけは妾の寫眞あげますよ其外はありせんから他のものであつくお禮申します繪端書の交換もどしどしして下さい肉筆でお返しゝますよ（常陸高濱町東大橋酒葉つれ子樣方秋月しず子）

諸嬢の交際

諸姉樣方私は至つて淺學者でございますが御交際下さいまし寫眞や玉章の交換を御願ひ申ます私は常に世を悲觀しつゝあるものです何卒皆樣のお影で世の中のたのしいと云ふことを知らして下さいまし（相模三浦郡浦加町大ケ谷一四八小永井峰子）○諸姉上樣よ妾は丹後の山奥の不束者ですけれども何卒御見捨なく久々御交際下さいましな當地の風景繪葉書も御送り申し上ますから繪葉書や御手紙など御交換下さいなきつと御返事致しますわ（丹後國加茂郡由良町二二二番地大森かほる）○諸姉樣玉章編物の交換をねがひ上げます（陸前國登米郡登町仲町伊勢榮惠子）○永遠に御見捨なく御交さいを御願申ます（奈良市城戸町阿田正子）○私も新號にて皆樣と御目にかゝるが一等嬉しいのよどうか皆樣御文頂戴よ私は女學校へ行つてますのよ此頃はなつかしき故鄕に歸つてゐたゝかき父母の慈愛にたのしみ居りますのよ（岡山縣小田郡大井村守屋小萬龜）○誌友の諸姉君よ妾はほんとに身のいやしい者にて本年やう〳〵郡立高等女學校の三年級に通學して居る者です御うつしゑや繪葉書の御交換をして下さる御方には妾の見にくいのに當地名所の繪葉書や不束な栞等をそへて返禮致します其から妾はクリスチヤンですからバイブルの御交換も御願ひします（京都府加佐郡由良町八七五星野喜美子）○私のお父樣は木製何なりとも致ます故私は皆樣と交際並に交換を願ますに付てよ免を受けて居ます故御申込の御方へ木製と不用の物と交換して下さい文通もれ（大阪府南河內郡長野村字西代角野貴美子）○誌友の諸姉さん私親もなし姉さんもない一人ぼちて御座いますなにとぞ文の御交換なしください（千葉縣夷隅郡大原町矢野ろく）○誌友の御姉君樣よ妾は十六歳の淺學無智の田舍者ですが何卒妹と御思めし御見捨なく御交際下さい（能登輪島河井後町通り黑田みれ）○皆樣はじめてお目にかゝります田舍にさびしく暮して居ります皆樣妹と思召して繪葉書玉章の御交換を願ひます（北海道夕張郡登川村斜坑土百十號五十嵐しげ子）○私は安房の片田舍に住むで居る不幸の身の上ですが御ひまもあらば御見捨てなく御交際を願ひます（千葉縣安房郡八東村丹生七八梅永女史）○末永く繪端書や玉章の御交換を願ひます御返事は必ず〳〵致しますよ（岩代國安達郡本宮町安樂町畠山ふゆ子）○誌友の御姉樣方よ妾は片田舍に住んで居る不束者ですから何卒御交際を願ます（能登輪島字河井田町高森たま子）○私は下野國渡良瀨畔に住んでゐる者です誌友の皆樣ことに下野のお方はお手紙を下さいませんか（下野足利郡三重村五十部百〇八鈴木靜子）○私し諸實中て淋しいのよ、繪葉書でも、玉章でも交換

して下さい、麗しい美人のハガキでも送り下さった方にはつまらないけれど私の寫眞なさし上ます(靜岡縣磐田郡三ッ川村川會松山春枝)〇誌友の姉上樣よ拙なき妾の身も返り見ず自から好む文俳の好奇心に驅られて今度女子文壇の愛讀者と成りましたから永久に御見捨てなくして頂戴れ(大阪市西區靱北通二丁目二十三番地沖野英子)〇私も片田舍のお仲間です寫眞、玉づさ、繪ハガキと皆樣と同じやうな事を申して御交際も同じやうにねがひます(千葉縣東葛飾郡福田村字下三ヶ尻内藤秀子)〇誌友の皆樣よ御暑さの御さはりも御座いませんか御伺ひ申ます妾事は昨年末當文壇にて御交際を願いました處友情深き皆樣の御かげて非常な滿足を得る事が出來ましたのは誠に喜ばしい事て御座います此の度は都に物學ぶ身となつて參りましたから何卒昔の通り御交りを願ひ度存じます(東京麴町區九段中阪上和洋裁縫女學校内石なみ子)〇去る七月の末から八月の始めに御手紙を下された御方がありましたそうですが私は其時鎌倉の方に居まして三日の夜歸りました御手紙の參りました時には節悪しく主婦が生家に行かれて二三日御留守てしたのと女中が新規に來たので私の事を存ぜず御戻し申したとの事で失禮致しました惡しからず思召の上御變りなう御交際下さいませ(神田區錦町三の三尾竈ちと樣方寺尾多喜)〇私は九十九里の大東岬邊りから二里許りの片田舍に住みます不束者でありますが御見捨なく此後からレターやヒクチュアーポストカード等の交換なれ又九十九里の海水浴に御遊に御出でなさいな(千葉縣夷隅郡千町村荻原渡邊柳子)〇名古屋の諸孃樣始め地方の諸孃樣妾は妹もなく友もなく只一人遊びて日を淋しく暮す者よあはれなる妾を末長く文通の程願ひます(名古屋市上前津町二十二志水賤代)〇私は誌友の諸姉樣と御交際を願はん爲めに繪葉書や玉章の御交換を願ひます(和泉國泉北郡南池田村大字萬町高橋輝子)〇誌友の皆樣私は一昨年から本誌を愛讀致して居りますが御交際は今度初めてゞ御座います片田舍の不束者ですが何卒お手紙をお惠み下さい拙いながらきつとお返しは致します(埼玉縣入間郡仙波村船津千代子)〇誌友の諸姉樣何卒繪はがきや寫眞の御交換を願ます又小說も送つて下さい必ず御禮は致します(靜岡縣引佐郡金指町秋月はつ子)〇滿天下の誌友諸姉樣よ一時的でなく永久的に玉章繪葉書雜誌の交換を願ます私は男女の別は問ひません御返事は早速致しますから下名へ宛て御發送を願ひます(下野那須郡荒川村須藤翠陰)〇同胞の君よ私れえ文字を上手に、候文て繪葉書、玉章の交換を續けて見たいのよ、私に心から御賛成被下方は水魚の交りも口先て無く永久に願くば美しき水莖の跡續續給はらん日をば私の思て待てゐますよ、御返事は必ず致しますわ併し男子の方はお斷りよ(備後福山東町天野志那女)〇親愛なる諸姉孃樣からたくさんな玉章やゑはがき等御めぐみ下さいましてほんとうに有難うござりました此後も何卒繪葉書玉章寫眞の御交際を神かけ祈ります私きつと御返し致します(鹿兒島縣姶良郡山田村有馬榮子)

懸賞品發送報告

第九號(七月一日發行)の下記當選諸孃には八月八日それぐ所定の賞品をお送りしましたが、『發送未濟』の部に記名の方々は至急住所姓名を御通知下さい。

〇宮田はる子〇山田くに子〇有賀まさ子〇麗女史〇中富よしみ〇さき子〇大谷百枝子〇伊藤美代子〇藤枝子〇大和田靜子〇高屋ちよき〇下里翠波女〇濱砂まさよ〇伊藤とし子〇あかつき〇辰井はな子〇山下里子〇江副ちかつる〇高橋白ばら〇後藤よし子〇華子〇黃水子〇晝間秀影〇美代子〇大沼徽音子〇加藤よし子〇高橋龜壽〇倉橋よしえ〇堤登久子〇塩見千代子〇白井津奈子〇佐野貞子〇德久よれ子〇高柴小靜

▲發送未濟▼　〇大坂、滿壽美〇臺灣、志波梅子〇失名子〇佐賀、服部紫欄〇大坂、君子〇京都、南田千代子　〇上總、掬花女史〇軒の玉水〇山形、七三子〇陸奧ふみ子。

涼み會懸賞當選者

▲「柳芝生」(一等)　府下西多摩郡福生村　森田なか子
▲「助けた螢」(二等)　水戸　重子
▲「花子さん」(三等)　南葛飾郡瑞穂村中里源左衛門方　中里きん子
▲「ちやうづ」(四等)　石狩雨龍郡北龍村和　給澤源子
▲「窓をしめよ」(五等)　攝津西宮町　森井せい子

賞品は涼み會出題の福引に因みて一等「かんざし」(價格五十錢)二等「リボン」(四十錢)三等「三錢郵便切手十枚」(三十錢)四等「扇子」(二十錢)五等「團扇」(十錢)

新出版

▲『大農』(佐野天聲著) 都新聞の懸賞五百圓を得た新脚本です、凡て五幕十場、地を利根河畔に取り子は大農論者、父は小農論者、其衝突から悲劇を生むので人物は何れも一風變つて實に新しい時代の要求に應じて書いた脚本であらうと思はれます、別に當選の中幕もの豐公醍醐花見宴、修羅地獄の二作も添えてあります(定價五十錢金尾文淵堂發賣)

▲『少女の戀』(田山花袋著) 少女の戀と云ふのは一册の題で花袋氏の例の詩趣饒かなる短篇小説詩集の栞、わが船、野燈以下十三篇を集めた四六形の美しい本です小説を愛讀する人は欣んで見る近刊でせう(定價八十五錢京橋區南鍋町隆文館發兌)

▲『乾胡蝶』(村山鳥逕著) 小説家としては未だ新しい方でせうが一寸觀察の違つた處があつて淸新の氣の動いてある作物です最も此れも短篇八種をあつめてあるのです(定價五十五錢中橋和泉町祐文社發兌)

▲『桃園漫筆』(大村仁太郎遺著) 教育家として又獨逸語學者として功勞尠少ならざる故大村氏の著作集で殊に婦人に關する事が多い、女子教育家は勿論一般の婦女子も座右に具へて參考となる事が多いでせうクロース上製(定價一圓牛込矢來町精華書院發兌)

▲右の外左の通り寄贈を受けましたが紹介は次號にゆづります

▲世間(廣津柳浪)祐文社▲東海道線旅行圖繪(風葉花袋環音未醒)修文館▲支那思想史(山路愛山)不死の誓(佐野天聲)沉思錄(浩々洞同人)不知火(大倉桃郎)奈落(德田秋聲)岩淵弃(水谷不倒)藝術雜觀(瀧精一)以上金尾文淵堂

記者通信

文藝遊戲 灯火の影(懸賞課題)

秋寒く夜長の灯火の影に何を語りませう、例の文藝遊戲として此度は諸孃に歴史上の婦人になり代り、面白い物語をして頂きたい、其方法は左の通り

▲皆さんは馬琴の質屋の庫と云ふ小説を御覧になつたか知りませぬが、あれは樣々の道具に歴史上の人物の靈が乘り移つて物語るやうな趣向です▲今回の灯火の影もそれと大同小異で、何も道具を引出さなくてもよろしいけれど、昔の人物(女子に限る)になつて何でも一ツづゝ話してもらいたい▲上は神代に於ける伊弉册尊より下は明治の一葉女史に到るまで上下三千年、名を殘した婦人も少くはないでせう▲貴婦人、女武者、烈婦、女文學者、美女、賢女、才女、貞女など隨分あります▲歴史上の婦人の外、小説又は物語中の女、例へば源氏物語の夕顔とか、八犬傳の濱路とか忠臣藏のお輕とか、然う云ふ人間でもかまひません▲扨て其物語る事は何でもよろしく虚實は一切問ひませぬ、靜御前が舞踏論を初めやうと、加賀の千代が新派俳句を罵らうと、お夏が戀の歌を歌うと、八百屋お七が火事の寫生文を讀まうと、要するに面白くて、其人物が現れてさへ居れば優等です▲人物が當時の社會や境遇を物語ることに想像してもおもしろいでせう▲むつかしいやうで實は大膽にやれば、わけなく出來ます、試みに作つて御らんなさい、誰でも諸孃のおもふ歴史上の婦人になつて御覧▲文章は長くて十五行、十行内外が最もよろしい▲賞品は圖書切符、例の通り

▲〆切は九月二十日

雜報

▲女學校の始業。 夏期休暇も終り本月より各女學校とも學業を始めますが、大抵は十日前後より開校するでせう。

▲女子登岳會。 この花會と云ふ一團體は女子富士登山の爲に設けられたので本年は女學生五人、令孃二人、妻君三人、女教師四人、地方人二人、外三人で都合十九人、去る二十日富士登山に出發しました。

▲婦人繪畫展覽會。 柳原伯爵夫人を會長にした國香會女子部では今秋上野公園に珍畵展覽會を催ふすさうて出品點數は二百點に上ると。

▲東京市の結婚數。 東京市最近の統計に依ると全市の現住人口は百九十六萬九千八百八十三人一ヶ年間の結婚總數は一萬〇三百二十人です、其千分比例で最も多いのは本郷區です又月で云ふと五月は結婚數が最も多いのです。

▲本年の稻作。 各地とも概して氣候適順、此後大風雨さへなければ本年の稻作は平年以上收穫は疑なしとの事です。

▲慧星現はる。 全國各地は勿論、東京天文臺でも能く觀望し得られるさうて、慧星の現れる方向は正東より少しく北に偏し雙生兒星座より五度許り北に見えます、午前三時頃は最も好く見え肉眼でも見分がつきます。

▲大博覽會。 日本大博覽會は愈よ明治四十五年四月一日より同十月三十一日迄東京に開く事に確定しました、場所は大抵青山練兵場を中心とするらしいです。

strength during the summer.

A: Did you ask her to select poetry for you?

甲：詩を選擇して御貰ひになりましたか。

B: Here they are. She wrote them down for me before I asked her.

乙：此の通です．私から御願ひせぬ前に書いて下さいました。

A: Read them please.

甲：一寸御讀み下さい。

B: From Longfellow—
The Village Black Smith; The Arrow and the Song; The Psalm of Life; Excelsior.
From Tennyson—
Sweet and Low; Break, Break, Break; The Brook.

乙：ロングフエローからは，村の鍛冶屋，矢と歌，人生の詩歌，進行．
テニソンからは，守歌，碎浪，小川。

A: We have learned all of them. They are not new pieces.

甲：皆習つたの計ですね．新のではありません事ね。

B: But do you remember them?

乙：古いのですが，記臆して入來しやいまして？

A: Hardly.

甲：六ヶ敷ものです。

B: The teacher said that the best thing was to review the old pieces, because if we try a new one by ourselves, we mispronounce words and put emphases in wrong places.

乙：先生は，古のを復習するに過す事は無い，敎師なして新篇を獨りですると，發音を間違つたり，語勢を誤つたりして，却て良くないと仰やいましたよ。

A: May I copy the list?

甲：此を寫させて下さいね。

B: Yes, you may, but you must not study as your teacher said. Your brain has been over-tasked during the term while mine has been kept too lazy.

乙：サー何卒，併し先生の御命令に從つて，勉强なさつてはいけません．此學期中貴女は腦を使ひ過ぎなされたし，私は遊ばせ過ぎましたのですから。

burnished wings and crowing in the pride and gladness of his heart—sometimes tearing up the earth with his feet, and then calling his ever-hungry family of wives and children to enjoy the rich morsel which he had discovered.

(Selected)

居る．彼は時々足にて地を掻きたり彼の發見せし美味を分たんと，飽く事知らぬ妻子を聲いと高く呼んで居る

（スケッチブックヨリ拔萃）

After Examination

Part 2.

A: I thought the teacher would say that we should study some during the vacation.

B: What did she say to you?

A: Forget everything about grammar and dictation and play out of doors as much as possible.

B: She advised me to learn a few lines of easy poetry by heart every day. Why didn't she say that to you too, I wonder.

A: Perhaps she knows that I suffer from nervous prostration.

B: Of course she told me to get well rested mentally but at the same time she was very strongto exercise our physical

試驗後

其二

甲：私は先生が休中に勉强せよと仰しやるかと思ひました。

乙：先生は何と仰しやいまして？

甲：文法や書取等は一切忘れて仕舞つて，可成郊外運動を澤山にせいとの事です。

乙：私には毎日容易い詩を三四行位づゝ暗記する樣にと仰しやいました．何故貴女にも同じ事を御云ひなさらないのでしよう。

甲：多分，私が神經衰弱で惱む事を御存じだからでしよう。

乙：勿論私にも頭を可成休めておるがよいけれ共，夏には體力を使はなくてはならぬと，大相强く申上げました。

Ah, think of it, my little friends!

And when some pleasure flies,
Why, let it go, and still be glad
That you have ears and eyes.

(From National Reader)

嗚呼小さき友どち　思ひみよ，

去らば去らせよ　身の喜樂，
只己にうけし　賜物の
耳目のあるを　感謝せよ。

（ナショナルリーダヨリ抜萃）

A Farmhouse.

A great elm tree spread its broad branches over the house, at the foot of which bubbled up a spring of the softest and sweetest water, in a little well formed of a barrel, and then stole sparkling away through the grass to a neighboring brook, that babbled along among olders and dwarf willows. Hard by the farmhouse was a vast barn, every window and crevice of which seemed bursting forth with the treasures of the farm; the flail was busily resounding within it from morning to night; swallows skimmed twittering about the eaves; and rows of pigeons were enjoying the sunshine on the roof. A steady squadron of snowy geese were riding in a near pond; regiments of turkeys were gobbling through the farmyard. Before the barn door strutted the gallant cock, clapping his

農家

楡の大樹が家の上に枝を擴げて傲然たる其根元から，甘清水が空樽を框にした井戸の中に混々と湧き溢れて，草間を銀線で縫ひ終に近所の赤楊や丈短い川柳を戯弄しつゝ流れて居る小川に注ぎ込むで居る。母屋の傍に大な納屋があり，其中には田畑の産物が累々と推詰めてあるので，窓々隅々が，今にも破裂する様に見えるし，又其納屋の内で，朝から晩まで連枷の音が聞こゑて居る．燕は軒下に囀りつゝ飛遊し，家鳩は列をして屋根に日向負喧(ヒナタボッコ)をして居る．白鳥の雄々しき艦隊は程遠からぬ池中に浮動して，七面鳥の聯隊は園内に大聲を發し騒々しい．納屋の前に勇敢な雄鷄は光澤ある翼を羽撃き，揚々と濶歩して，滿心喜悦と覇氣とを音聲に表はし

英文（九）

津田梅子閲　河井道子述

Suppose.

How dreary would the meadow be
In the pleasant summer light,
Suppose there wasn't a bird to sing,
And suppose the grass was white!

And dreary would the garden be,
With all its flowery trees,
Suppose there were no butterflies,
And suppose there were no bees.

And what would all the beauty be,
And what the song that cheers,
Suppose we hadn't any eyes,
And suppose we hadn't ears?

For though the grass were gay and green,
And the song birds filled the glen,
And the air were purple with butterflies,
What good would they do us then?

想像

如何に牧場の　物憂けん
佳趣に富める　夏の日に，
歌ふ小鳥の　聲もなく
綠の草葉　白からば。

庭の淋さ　いや増さん
花咲く樹木は　ありとても
飛び通ふ小蝶の　影もなく
働く蜂の　なしとせば。

百々千々の美も　何かせん
妙なる調べも　用はなし
觀る眼聽く耳
なかりせば。

千草色よく　生ぬとも，
谷間に小鳥の　聲滿つも，
蝶は大空を　彩色るも，
盲聾の身には　何かせん。

明治三十七年十二月十九日第三種郵便物認可

（東京秀英舍印刷）